
23歳女子高生（本編）

MW

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

23歳女子高生（本編）

【Nコード】

N6070T

【作者名】

MW

【あらすじ】

恋愛以前に人付き合いが苦手な霧島真尋は、高校の時からろくに勉強もせず社長になる為に奮闘した。23歳になって社員に指摘され、ようやく青春時代の思い出が無いことに気づく。

そんな社長を気遣って、社員たちは再び高校生になって青春時代を取り戻す計画を立てるが、学業から離れて久しい真尋が入学できたのは不良が集まる馬鹿高校だけだった。

そこはカラフルな毛色をしたイケメン不良やヤクザの娘やギャル達のたまり場。

奴らは真尋のもっとも苦手な人種だった。

真尋は気配を殺して大人しく目立たず学校生活を送ろうと心に決めたはずなのに、何故か入学早々イケメン不良達になつかれて学校のギャル達を敵にまわすはめになる……。

登場人物（前書き）

本作品は『Odd Brain Project』にて公開済みの作品です。

サイトトップにてアンケートを行っております。

お時間あります方は、是非ご協力下さい！

登場人物

霧島 真尋（23） Mahiro Kirishima

本作の主人公。

年下には強気で口の悪いゲーム会社社長。

他人の目を気にしすぎる上に感受性の強い人。

そのおかげ（？）で、多少人の感情を察するのが上手い。

西條 靖親（17） Yasuchika Saijyo

嬢苑高校2年生。

そこら一帯を縄張りに行っている『炎華（Enka）』のトップ。
長めの赤髪と体中のピアスがトレードマーク。

吉良 泰造（17） Taizo Kiria

嬢苑高校2年生。靖親のタメで、『炎華（Enka）』のトップの
補佐。

長めの編み込んだ金髪に豹柄の剃り込みがトレードマーク。
お調子者だけど、意外と傷つきやすい繊細な男。

加藤 龍太郎（27） Ryutarō Kato

真尋の秘書。

本性は鬼畜で思った事もスパツと言うが、外面が良いため女にモテ
る。

真尋の才能に惚れこんで、起業からサポートしてきた。

仕事も勉強もスポーツもできるし顔も良い嫌な奴。

美保 珠美（16） Tamami Miho

クラスメイト。

のんびりした性格だけど、切れるとヤバイ。

その姿は偽りで、中身はほんまもののやくざの娘。

真下 啓太（16） Keita Mashimo
クラスメイト。

真尋に一目惚れして、何とか近づこうと頑張る犬の様な奴。

お調子者でクラスでは人気がある方。

前歯が1本欠けている。

永倉 浩輔（27） Kousuke Eikura
クラス担任。

牧（ ）の先輩。

あまり先生らしくないせいか、クラスの生徒に舐められまくってる。
嫁が大好きで、嫁自慢が始まると長い。

花田 レキ（17） Maki Hanada
靖親と泰造の走り仲間。

序章

「社長！ 社長なら絶対大丈夫ですよ！」

「そうですよ社長！ あのออฟフツ……お、鬼の様な勉強を乗り越えたんですもの……！ 加藤さんの！」

「帰ってきたらオヤツ用意してますからね。一緒に食べましょうね」

「社長これお守りです！ みんなでウフフツ……つ、作りました
つ……」

「……あ、ありがとう……みんな……」

ニヤニヤ顔を通り越して笑いを堪えようもしない社員に見送られ、私は入学試験を受けるべく嬢苑高校へと向かった。

私は霧島きりしま 真尋まひろ。

高校時代からゲーム会社起業の用意を始め、卒業と同時に仲間とゲーム会社を起ち上げた。

当時は学校もほとんど行かないで好きなことやってたし、凄く楽しくて毎日充実していたと間違いなく言えるものの、最近ではちょっと後悔している。

というのも、私が彼氏いない歴〃年齢だと社員にバレたからだ。

「何よ恋くらい……」とも言えず「社長も高校で恋をしてれば」-からかわれること早2年。

流されやすい私は「なんか恋しといた方がいいのかな」と流されつつあった。

年が近いって言うか……みんなほとんど年上なため、年下の私を思

いきり甘やかして可愛がってくれてる社員達。

最初は照れ臭いやらなんやらだったけど、いい加減鬱陶しくなってきた。

どうしたものかと思ってる時に現れた救い手は、ある意味悪魔のような男だった。

「社長。もう一度高校に行かれたらどうです？」

「はあ？」

彼は私の秘書の加藤 龍太郎。

いわゆる何でもできるオトコってやつだけど、その鬼畜な本性を知ってるのは数名だけ。

私の前では鬼の様な顔でトコトンいじめ倒す、高校時代から続く悪友の様な年上の男。

今では出会い頭に「そんなに社長になりたいなら手伝ってやるよ」「なんて言われた時点で、こいつの黒い部分に気付くべきだったと思っっている。

「龍、あんたいつから私に齒向かうようになったの？」

「心外ですね。社長を思ってたの発言だったので……ご不満でしょうか？」

よう言うわ。

そんな死んだ魚みたいな目えして。

「……あんた楽しんでるでしょう。私、23だけど？」

「我が社の宣伝の為です。女子高生社長って良いと思いませんか？
エンタテインメント性があつていいと思うのですが」

その一言にフロアにいた社員達が面白いほど喰いついた。
下げていた頭を一齐に上げた社員達の目がらんと輝いている。

「社長、童顔……お若いから制服いけますよ！」

「ちょっと待てえい！ 童顔つて……佐伯お前……！」

「あ、私、学校の資料取り寄せますね」

「じゃあ私も〜」

そう言うところ可愛い可愛い社員達は嬉々とした顔で、業務中に堂々と去っていった。

「龍！ 私が抜けて誰が会社を動かすつての！」

「社長がいなくても優秀な私と社員がいれば回りますよ」

「うそん……」

いや、実際そうだけども……
うちの会社もだいぶ安定したけどさ……
みんな本当に優秀だし……

「でもそんなゲームか漫画じゃあるまいし……」

「社長、ゲーム会社だからこそ、ですよ」

「……」

「社長自らネタ提供をよろしくお願い致します」

「……ネタ……って……でも馬鹿高校なら行く意味ないと思わない？
私は馬鹿だから……」

「そう思つたら勉強して下さいよ。あ、学校が終わつたら仕事戻って下さいね」

「はあ！？ 学生の楽しみは放課後にありだよ！？ いや、行かないけどね！？」

「はっ」

「……いや……あの…………行きます……」

かくして、私は再び学校へと入学するはめになった。

それが私の人生……どこるかポリシーまでをくつがえすことになる
うとは。

この時、誰が予測しただろうか。

少なくとも私は、まだ未来へのちょっとしたワクワクしか感じてい
なかった。

そう、私はちょっとだけとは言え、ワクワクしていた。
大きな問題が待ち構えてる事も忘れ、ワクワクしていたのだ
…。

* * * * *

「いや……社長……いくらなんでもいねは……」

「……」

「……ここまで馬鹿とは思いませんでした。初っ端から大問題発生だな……」

はあ、とため息をつく龍。

「……だって卒業して5年くらい経つじゃん」

「だからと言って忘れすぎですよ」

「しかも高校時代は学校行かないで独学で経済学やってたんだもん。龍のせいだ」

「そうやって人のせいにして。算数くらいまともに覚えてて下さい」

「あのねえ!?! 足し算引き算くらいできるよ!?!」

「分数はできないじゃないですか」

「……」

試しに、と社員が用意してくれた入試の過去問題。

私はほとんど30点代だった。数学にいたっては8点だ。

ドン引きする社員達が、自分達の用意していた入学願書をひっこめる。

どれも制服が可愛いと有名な名門女学院のものだ。

「社長。このままじゃアホみたいな高校にしか行けませんよ？ いいんですか？ アホ高校に通う社長なんて宣伝できませんよ？」

「……じゃ、じゃあ企画倒れってことで」

「駄目に決まってるじゃないですか！！」

突然大声を上げたのは、新婚さんの牧さんだった。

この人は長い長い社内恋愛の末、年下の旦那と結婚した。

「こーんな可愛い社長が野郎どもにやられちゃってもいいんですか！？ 馬鹿校？ ありえない！！」

「え！？ ヤっ……！！」

牧さんの大声にカツと顔に熱が集まる。

「ああ、可愛い…… 23歳にしてこんな初々しい反応…… 奇跡ですよ」

「化石の間違いだろ？」

フツと龍が小声で呟いて笑う。

この牧さんは龍の本性を知る数少ない人間だ。

ついでに言つと幼馴染らしい。

「とにかく、馬鹿校に通うくらいなら私は「牧さん」

牧さんの言葉をさえぎり、キラキラした目で今年入ったばかりの社員が牧さんをつつく。

「牧さん牧さん！ 馬鹿校なら牧さんの好きな不良×清純派美少女が……」

「……」

牧さんはしばらく考え込み、聖母の様な頬笑みで1冊の冊子を差し出した。

「社長、こちらなんかがお勧めです」

「ま、牧さん……あなた……」

彼女が持っていた冊子は、馬鹿高校もとい不良高校で有名な『嬢苑（嬢苑）高校』。

私の最も苦手とする人種が集まるところだった。

「いや、無理だから。この不良具合はオタクの女にはレベル高すぎ

るから」

「低いコミュニケーション能力を養う良い機会です。制服も可愛いですよ?」

「あら、ほんと……じゃなくて無理だつて」

「おい牧、さすがにここは……」

「龍! あんたたまには優しいじゃないの……!」

「あら、龍太郎。どうしてよ?」

「途中で嫌になって退学されては、会社のイメージダウンだろうが。ていうかこんなところ行く時点で世間には公表できねえよ」

感動を返せ。庇ってくれたと思ったあの感動を返せ。

「大丈夫よ。社長は根性あるから。ね? 社長。頑張れますよね? 馬鹿高校でもいいじゃないですか。私達は青春を忘れた社長に、あの甘酸っぱい想いを思い出してほしくて提案したんです!」

「そうですね! 学費は気にしないで下さい! 私達で何とかしますから」

「みんな……」

ジワつと目元がうるみ、優しい微笑みを浮かべる牧さんと佐伯を見つめる。

あ、佐伯が龍に耳打ちしてやがる。嫌な予感しかしねえ。

「でもやっぱり私、不良の集まる高校には「では1カ月後にテストを行いますよ」

「テストをクリアできなければ、条件付きで馬鹿高校へ行って頂きます」

龍……佐伯に何を言われたの……？

まるで元々牧さんの味方だったみたいな言い方して……

第一章 ことの始まり01

時が経つのは早い。

なんか仕事をするようになってからは特にそういう気がする。

ゲーム業界は状況変化がキツイ時があつて……まあ、大抵は収録前とかマスター前とかなんだけど、そういう時は時間が過ぎる早さつてのを体感する。

まあ、つまり物凄く忙しい時期がたまたま来てしまつて……

それがマスター前だったのはせめてもの救いなのだけ。

ていうか、別に言い訳じゃないんだけど。

そんなつもりではないのだけ。

つまり ……。

たいした勉強も出来ず、テストは惨敗だった。

集計してないけど、もしかしたら最初のテストの時の方がマシだったのかもしれないと言っくらいヤバかった。

そのせいで正座させられること1時間。

私は龍の怒りのせいで低くなつた声を聞きながら俯いていた。

「さて……ではまず1つめから」

「……はい」

「送り迎えは毎回私が行います。学校へは私から事情を説明しまし
よう」

「……はい」

「極力年齢の件は伏せて下さい。まあガキ臭いので問題ないと思
いますが」

「……はい」

「それと、いくら馬鹿でも単位は落とさないように」

「……はい」

「目立たないよう、ダサイ恰好をするように。ああでも真面目すぎ
てもいけません」

「……はい」

「それと、もう広報の宣伝はしませんので、純粹に楽しんで頂いて
結構です。その代わりガッツリ仕事は詰め込みますので、そのつも
りです」

「……はい」

「ああ、あと適度に馬鹿でいて下さい。いや、これも問題ないか」

「……はい」

「まあ、どれも入学できたらの話ですが」

「……はい」

「いいですか、社長。くれぐれも……くれぐれも、受かって下さいね？ 社員の気使いを無駄にしないように」

「………はい」

社長室で正座して延々と嫌味を聞かされる。

すりガラスの向こうに透けて見えているが、全社員がこっそりのぞいているのが見えた。

「ああ、それと……私が社長の保護者代わりになりますので」

「はー！ー！？ なんでよ！？」

「必要でしょう」

「いらんでしょう！！ 20歳超えてるのに！ しかも本当の親いるしー！」

「馬鹿ですか。何も体育祭とか参観日見に行くわけじゃないですよ。それにご両親に馬鹿高校に入ったことがバレてもいいんですか？」

「よくないけど参観日まで……え？ そうなの……？ 来ないの？」

そりゃ龍に來られても困るし、親にバレるのも嫌だけど……

「とにかく、社長は受かる事だけを考えて下さい」

「え、でも」いいですね？」

「……はい」

ギロリとおとがしそうなほど睨みつけられる。

ビクビクしながら外に出ると、パツと社員が散って行く。

こうして全社員に見送られながら、私は受験票を握りしめて嬢苑高校へと向かった。

* * * * *

受験からだいぶ日が経ったある日。

そして今日は平日で、私の受験結果発表日でもある。

私は一人公園のブランコに腰掛けて、電話をかけていた。

『お電話ありがとうごさいます』

「あ、もしもし龍？」

『なんだ社長ですか。結果は？ あ、ちょっと待って下さい』

「ん」

ピツと電子音が聞こえる。

『どござ』

「ああ、はいはい。受かったよ」

そう言った瞬間、割れんばかりの祝福の音が聞こえた。

「何、スピーカーフォンにしたの？」

『ええ、みなさん気になって仕事が手につかないようでしたので』

『社長おめでとございます〜！！！！ 経費でお寿司取っていいですか？』

『すー！』 『ピザ！ 俺、ピザがいいですー！！ あ、合格おめでとございますー！』

あんな馬鹿校受かっても嬉しくないっていうのに、私の顔はニヤニヤしていた。

『これで社長も女子高生ですね！』

『生足かあ〜』

『制服が可愛いんですけどよね！ 仕事は制服でお願い……あ、社長も可愛いですよ！』

次々と聞こえる祝福（？）の言葉に思わず笑った。

『社長』

「ん？」

『合格おめでと〜ございます』

「ありがとう、龍」

『それで午後の仕事ですが』

「え、そのまま家帰っていいって言ったじゃん……！」

『いえ、先方との会議が入りましたので戻って下さい』

「ええ〜……私……私服……ていうか面倒……」

『こちらで着替えて下さい。会議は14時からです。では』

そう言つと、龍はさつさと電話を切ってしまった。

「人使いが荒いなあ……」

ため息を吐くと、私は別の場所に電話をかける事にした。

「……あ、もしもし私」

スピーカーから流れるのは私の半身の声。

誰にも言つなとは言われてないし、まあコイツにはバレてもいい気がした。

面白いことが好きな彼女であれば、絶対面白がってくれるだろう。

「うん、うん……元気……うん、食べてるようっさいな。オカンがお前は」

電話をかけながら足元の砂を足でかき集め、小さな山を作った。電話をしていると、どうも落ち着きがなくなってしまう。特にこの人相手だと、見透かされたような気がする。

「あ、そうそう。言いたい事があって……ん？ いや違うし」

こんなこと言ったら驚くだろうな。

いや、呆れるか。

「いやー私さ、あ、親に言うなよ。高校受験して、来年から女子高生になるんだけど」

電話の向こうから聞こえてくる驚きの声。

「あはは！ マジでマジで！ いや、経緯は後で説明する……あ、もう戻らないと」

笑いを堪え切れず肩を揺らす。

その時、電話の向こうで小さく懐かしい声が聞こえた。

「……え、リュウちゃんいるの？」

うそ……！

リュウちゃんが来るとは……

この間まで「もうすぐ海外に行く」と言っていたので、てっきりもう当分会えないんだと思ってた。

「え、マジで？ 本当に！？ なんでうち来てるの？ え、あ……」

声が聞きたい。

馬鹿らしいと思うかもしれないけど、リュウちゃんがあると毎回こ
うだ。

「……え？ ……あ、ああ……うん……リュウの声……聞きたい……」

興奮して思わず顔面に熱が集まる。

「……」

その時、ふと龍太郎の方を思い出して顔が引きつるのが分かった。

(リュウつながりで嫌な顔を思い出してしまった……)

早く帰らないと怒られてしまう。

「いやいやいや……！ 早くっ……時間ないんだって」

電話の主は意地悪そうにじ焦らす。
時間が無いと言っているのに、なかなか強情な奴だ。
きっと私が焦ってるのを知っているのだろう。
相変わらず良い性格をしている。
イラついて、足元の砂山を蹴っ飛ばした。

「いいから早っ……」

交換を告げる声の後、ようやく聞けた懐かしい声。

「……………リュウちゃん……………久しぶり……………」

きつと、今、私の顔は世界で一番ゆるみきつた顔をしている。

* * * * *
* * * * *

「……さて、リュウちゃんの声も聞けたし、頑張つて戻るか！」

「おねーさん今の彼氏？」

「ふあああああ！？」

突然聞こえた声にびっくりして、ドリフのようにブランコから転げ落ちる。

「いつ……！？」

痛さと恥ずかしさと怒りで顔が赤くなり、涙が浮かぶ。

前方から聞こえてきたクスクスという笑い声に、余計怒りが増した。

「びっくりさせてごめんね？」

(ひいつ……！?)

目の前には……いや、正確には結構前にあるベンチなのだけど……そこには濃い赤色の長髪を鬱陶しそうにかき上げて横たわる不良がいた。

(こ、怖っ……！！ しかもイケメン……！！)

憎らしいくらい綺麗な肌。すつと通った鼻筋とシャープな目元。ボタンを開けズボンを腰ではいたようなだらしない制服が、何とも言えない色気を醸し出している。

どれをとっても芸能人ばりの格好よさだった。不良+イケメン、私の苦手な不良という人種の中で最も苦手な部類だ。

「ねえ」

「……………」

「電話の人……………彼氏？」

「……………」

なんで私こんな年下に気押されてるんだろう……………
これだから不良は……………

「……………無視？」

「すみません」

なんで年下に敬語で謝ってるんだろう……………
龍、迎えに来てくれないかな……………怖いな……………

「……………！」

横たわっていたたそいつは、ゆっくり起き上がって座り直す。こっちに来るのかと思い、思わず逃げる体勢を整えた。すると、再び不良がクスクス笑う。

「おねーさん、こんなところで何してんの？」

「……………あ……………いや……………今日、合格発表で……………」

「うん、知ってる。合格おめでとう」

「……………ありがとうございます」

「俺怖い？」

「……………え、いや……………」

「怖くないよ」

「はい、分かります……………」

聞かれてたのか。
気付かなかった……………いつからいたんだ。

ん……？ あれ、この制服……

「真尋」

「ふぁいつ！？」

龍だ……！ うわ、迎えに来た……！！
しかも超不機嫌そうな顔でこっちへ歩いてきてるし……！

「……戻りがおせえ」

「ごめん、あ、もう13時過ぎてる……ね。でもあの……龍……」

困った顔をしてチラチラ不良を見れば、龍はそちらを一瞥して鼻で笑った。

「またか」

「……龍、あの、でも」

「へー。その人がリュウ？」

「あ？」

イラついたように龍が顔を歪める。

うわ、怖っ！

龍、なんか容赦ないんだけど……！

「いや、別なんで……！ 違うんで……！」

焦ってそう言い、その場を去る為に龍の背を押すと、龍が舌打ちをした。

「お前……またあの犬畜生ところに電話してたのか……」

「いや違っ……家族への報告したらたまたまいて……ていうか犬畜生ってアンタ……」

「テメエ……自分の状況分かってんだろっな？」

「う、うん……！ もちろん！ だから行こう！ 早く行こう……！」

再び舌打ちが聞こえ、ビクビクしながらその場を去った。

去り際に後ろからバイバイと聞こえたのは無視した。

これ以上、龍の機嫌を損ねるのは得策じゃない。

……だって、私の頭に置かれた手の力がギシギシ強くなってる。

「あいつ嬢苑だろ」

「あいつ？ ああ……うん」

そう……あの制服、見覚えがあると思ったら、嬢苑の制服だったのだ。

「あんなビクついててどうすんだよ。これから行くんだろ？」

「……うん」

どうって……まあ、あんなばっかだっけ言いたいんだろうけど……

「でも、学校広いし。たぶんあんま会わないし。向こうもきっと忘れるし」

「……そうかよ。おめでてえやつ」

呆れたようなため息を聞きながら、私は投げつけられた会議用の資料を眺めた。

しかし、私は完璧に舐めていた。不良のしつこさってヤツを
…

第一章 ことの始まり02

時は流れ、入学式 ……。

『それではー……………えー……………以上です。ホームルームを行いますので教室へ……………』

マイクの声が聞き取りにくい。

誰も校長の挨拶なんて聞いていない。

ちらほらダサ……………真面目そうな生徒が聞いているフリをしてるくらいだ。

(金払ってんだから真面目にしるよ……………勿体ない……………)

どーせ勉強もしないんだろつな。

本当、お金が勿体ない。

これからの3年間に待受ける暗い未来を想像し、私は失意を胸に教室へと向かった。

退場の列に紛れてのろのろ歩く。

途中、まばらな保護者席に龍と牧さんのしかめっ面を見つけ、慌てて背筋を伸ばした。

もうホント、まさにその時。
まさにという言葉がピッタリな程の絶妙なタイミング。

空間を裂く様な悲鳴……と言うよりは「芸能人を見つけた」系の黄色い声……？

前方で女の子の塊が、何かを見つけ騒いでいる。

(あーめんどくさ……)

と思ったのもつかの間。
先生方が「何やっとなるかー！」と叫んで慌ただしくなり、私は一瞬にして興奮した。

(うおー！ ナニナニ！？ 祭り！？)

が……続く「2年は休みだと言っただろうが！」の怒声にシュンと
気持ちがへこむ。

(なんだ……くだらない……)

カツコイイとかヤバイとか聞こえる所を見ると、人気のある先輩で

もいたのだろう。

私には一生縁のない話だ。年下に興味ないし。私の高校生活はひたすら日陰で生きていくんだ。大人しく過ごしたい。

「お前ら初日くらい真面目にしろ!」

何度先生が怒鳴っただろう。

ホームルームなんて誰も聞いていない。

先生が時折優しい目で私を見つめるのは、決して見間違いない。そうさ。

(運悪いな……一番前のド真ん中か……)

逆に一番前のド真ん中は目立たないんだってのは誰が言った慰めだろうか。

しかし入学式にホームルームをやるとは思わなかった。

今の時代やるものなのだろうか……あ、いや、やった気がするな。

入学前にひたすら眺めた生徒手帳を読まされているけど、恐らく無意味だろう。

だって既に制服改造してる子がいるし。

(逆に私が浮くわ)

スカート丈は膝、きつちり1つにまとめた横分けポニーテールに黒ぶち眼鏡。
ぶ厚い真つ黒なタイツをはき、セーラー服のリボンもきちんと……
きちんと……
そう……可愛いと言われていた制服は廃止になり、セーラー服へと変わっていたのだ。

(詐欺だ……)

社員に「これはこれで……」と慰められたのは記憶に新しい。

「はー……もういい……お前ら帰れ。5分早いけど帰れ……」

呆れたように先生が言った瞬間、「やったー」と盛り上がる教室内。

(『やったー』じゃねえよガキ)

心中で悪態をつき、ため息を吐いた。

「あ!?! チカちゅーだ!?!」

窓側にいた子から叫び声が上がリ、一部の女子が一斉に窓際へ寄る。

その時の私は、呑気にも「ピカチュー」と何が違うんだくらいに思っていた。

「マヒローーーーっ!!」

ガタンと激しい音を立てて椅子から落ちる。窓の外に夢中で誰にも気づかれずにすんだ。

ただ1人、先生が「大丈夫か？」と焦ったように手を貸してくれる。

(い、今何か不穏な……)

「おーーーーーい！ マーヒローーーー！ いねーのかよーーーー!!」

「マヒロ!? マヒロって誰？ 女？ 男？」

窓際の男女が「知ってる?」「知らない」と騒ぎだす。

(知らない。私も知らない)

きっと別の『マヒロ』だろう。

うん、そつに違いない。だって本当に聞いたことない声だし。

「出てこねー。しょうがねえな。上行くぞチカ」

「お前ら帰れと言っただろうが!!」

「わ、やべえ! またバーコードだ!! 逃げるチカ!」

「誰がバーコードだ!!」

聞こえてきた先生と思われる怒声に、思わずクスツと笑う。

子供が付けるあだ名のなんと残酷な事か。見なくてもその人の姿が容易に想像できる。

(さて、問題が起こる前に帰ろう)

私はさっさと荷物をまとめ、教室を後にした。

(大体入学初日から問題が起こるなんてどういう……ん?)

「帰れと言っただろうが」……と言う事は、さっき騒がれたのはあいつらか。

となると今表から出るのは何となく危険な気がする。

キヤーキヤー言われてるからには女子に人気があると言いつつで、きつとギャルが群がっているんだろう。

ギャルとか不良とか嫌いな私としては、わざわざそのギャルの群れにつっこむような真似したくない。

(しょうがない……裏から出よう)

龍には裏から出ると電話すればいいだろう。

「そーしん！」

携帯をカチャカチャいじり、龍にメールを出そうとした。まさにその時だった。

「マヒロ」

「げっ」

はやっ

あいつらもう上に来たの！？ ていうか心なしか私に向かって言われた気が……

(いや、何言ってるの。落ちつけ……別に私がターゲットじゃないし)

しかも幸いな事に、群がる女子どもが道をふさいでくれる。
万が一……万が一私だとしても決して見つからないだろう。
なんかすごい聞き覚えのある声だったけど、きっと私じゃない。
だから振り向かない。

「おー！ あいつがマヒロか！！ 絶対聞こえてんのにお前無視さ
れてるし！」

「え、誰？ あいつ？」 「何あの女」 そう聞こえて、私は一気に走
りだした。

「あゝアイツ逃げやがった！ どーすんだよチカ！」

「追いかける」

悲鳴とか嬌声とか罵詈雑言とか…… もろもろ聞きながら私は必至で
逃げた。

あいつらの言う「マヒロ」は、どう考えても私の事だ。

だって、あの赤い頭が一瞬私の視界に入った見えた。 あんな色、忘
れるわけない。

私は、入学初日にして死刑宣告をされた気持ちになる。

どう考えても、私の立ち位置は好転しないだろう。

第一章 じとの始まり03 (前書き)

T a i z o
S i d e

第一章 ことの始まり03

今日は入学式だからよ、俺らは休みのはずだったんだ。
まあ、たまにサボるから今日が休みかどうかなんてあんま関係ねえ
んだけど。

「チカー今日ノブんとこ行こうぜー」

「俺、用事」

「は!?! なんだよ用事って! 女か!?!」

「女」

「嘘だろ!?!」

「マジ」

まあ、こいつ無駄にモテるし来るもの拒まず去るもの追わずだし……
って、そうじゃなくて。

「俺を1人にするなよ! 寂しいだろ!」

「……」

振り向いて薄っすら笑ったチカは、俺の方にヘルメットを放った。

「…………え？」

「……………」

ポケットに手をつっ込み、だるそうに歩きだすチカ。

「えー!? ……え? ついてっついていいのかよ」

「……………」

チカは俺を無視してバイクにまたがる。

「…………え？」

「来ねーのかよ」

いや、女と会うのにツレ誘う馬鹿がいるかよ。

「……………行っていいのかよ……………いや、駄目だろ」

「大丈夫」

「何が」

「そういうのじゃねえから」

そのまま訳も分からず自分のバイクにまたがり、俺はチカの後を追った。

「そう言つのじゃねえって何だ!？」

「たいちゅん、うるさい」

眉をしかめて一歩離れるチカ。

泰造って名前を可愛らしく「たいちゅん」なんて呼ぶのはコイツくらいだ。

あー、あと女どもが真似っ子して呼んでた気がするな。

「あ、まてよチカ!」

「たいちゅん、うるさい。声でかい」

「デフォルトだ! デフォルトでこの大きさなんだよ俺は!」

チカは1人ですったか歩いて行く。

「なーチカ、どこ行くだよー無視かよー」

「学校」

「は？ 今入学式中だぞ。女漁りか？」

「……………」

「…………え、マジで……………」

嘘だろ…………こいつ自分からそんなのしたこと無いくせに。

「…………ええ、マジで!?!」

「たいちゅん、うるせーよ」

「だーっってお前よ、お前が女漁りって…………ノブじゃあるまいし!」

学校へはあつという間に着く。溜まり場から結構近いんだ。
でもチカは校門から入らずに、裏へまわった。

「おーいどこ行くだよ！ 体育館の入り口そっちじゃねーぞ!」

「……………」

あいつまた無視しやがった。

どうもこいつ心の中で返事してるらしい。

どうせ思ってるくらいなら口に出せつつー話だよな。

「お前……どこ登ってんだよ……つか、よく知ってんなー……」

呆れながら壁を伝う……雨どい？ をよじ登るチ力を眺める。

「この間、冒険中に見つけた」

「……さよか」

後に続いて登る。

ついた先は、体育館を見渡せる2階部分だった。

ここは本来、中からしか入れない。

偶然窓が割れてたおかげで、外からも侵入できるってわけだ。

「あー疲れた！」

チ力の方を見れば、ニヤニヤしながら下を……っーか誰かを探していた。

「お前、本当に女漁りしに来たのな」

珍しい事もあるもんだ。

なんかあったのか？

「ま、いや。俺も可愛い子さーがそつ」

そう言っただけ見るが、案の定顔が見える奴なんてほとんどいやしねえ。見えても横顔。

これじゃあ可愛いかわかんねえじゃん。

なのに、横のチ力は一点を見つめるとニヤッと笑った。

「おつ、良いのいたか!？」

相変わらず俺を無視してフツと笑う。

……珍しい。一体何をそんなにご執心なんだこの男は。

「なんだよ教えるよ」

「マヒロ」

「マヒロ？　なんだ、知り合いかよ……つまんねえ」

「知らない」

「は？」

「この間公園にいた。嬢苑とか言ってたけど、本当にここだったんだなあ」

「……………」

何、どうした…………チカ、へんなの食ったのか？

「お前、そんな不確定な情報で……………」

「いや、あいつスゲー面白えの」

「いや、意味わかんねえ。会っただけなんだろう？」

『それでは…………え…………以上です……………』

ながーい説教が終わったらしい。
相変わらずなさけねー校長だ。

「まあ、いいや。さーて、こっからが本番だな」

帰る時は、俺らの足元の扉を通るはずだ。
つまり、顔を見放題。

可愛い女の子がいたら声でもかけるか。
と手すりに寄りかかった瞬間、女の子特有の耳に来る悲鳴が聞こえた。

「あーあ、センサーに見つかったらちまうだろー？」

「何やっとなるかー!!」

「ほら見つかった。おい、逃げんぞチカ……っていねえ!？」

あいつ……!!

俺の事置いていきやがった!

「降りて来い吉良……!!」

「降りるっつの!!」

「こっちにだ馬鹿!!」

馬鹿はおめーだ。そっちに行ったら捕まんだろっつが。俺は窓から出るぜ。

「てめ、チカ! 何一人で逃げてんだよ!! しかも逃げ足早えーし!!」

「……」

「無視すんじゃねえ！」

「たいちゅん」

「なんだよ！ 今俺が話してんだろ！」

「マヒロ呼んで。俺、声小せえからマヒロに聞こえない」

「はあ？」

「良いから早く」

こいつは……よくよく自分の事しか考えてねーな！

「お前、そのマヒロとやら相当面白い女なんだろうな」

「うん」

「ほー……面白くなかったらひでーからな！」

「大丈夫」

「マヒローーーーーっ！ー！」

俺はありったけの音量で、噂の女の名前を呼んだ。

窓から次々に顔が覗き、「チカちゅーだ!」と口々に叫ぶ。

「おーおー新入生まで知ってんのか! まあ、俺らワルだからな! がはは!」

「たいちゅんうるさい」

「悪くねえな! こつ言つのも悪くねえ! でも気安くチカちゅーつて呼ぶな! 俺は先輩様だ!」

「たいちゅんうるせーよ」

「おーーーい! マーヒローー! いねーのかよーー!」

なんだよ。マヒロ。

こんな呼んでんのに出てこねー。

聞こえてねえのか?

「出てこねー。しょうがねえな。上行くぞチカ」

「お前ら帰れと言っただろうが!」

「わ、やべえ! またバーコードだ!! 逃げるチカ!」

「誰がバーコードだ!」と言う怒鳴り声を聞きながら、俺らは校舎へ入った。

* * * * *

校舎の中は先程の呼びかけで大混乱になっていた。

「あーまずったな……これ見つかんのかあ？」

「……………」

群がる後輩どもを適当にあしらいつつピョンピョン跳ねる。

「チカ、見えるかー？ 俺は全然……って！ また！！」

いない……！！

いや、目の前をすったか歩いている。

「お前は……ほんと平気で俺を置いていくんだな！」

「ロムロム」

……「こりやまた珍しい。
あいつにしては大きい声で、女の名前を呼んだ。
でも振り向くような女はいない。」

「どこだよ」

「あれ」

「どれ？」

「あそこ。真面目くせえの」

指さす方にはだっせー恰好……っつーかお手本通りの格好をした女。

「おー！ あいつがマヒロかー！ 絶対聞こえてんのにお前無視されてるしー！」

つか、あいつあんなのが面白いつってんのか。
何が面白いんだ。
と思った瞬間、マヒロは猛ダッシュした。

「あゝアイツ逃げやがった！ どーすんだよチカ！」

「追いかける」

またまた珍しく、ていうかほんと初めてみたっつー勢いでチ力は走りだした。

つか……マヒロ早え……！！

「あんな細えのになんでこんな早えんだ！？ 男の俺らが全然追いつけねえ！ 『俺ら』って言うか主に『俺』な！」

ヒィヒィ言いながら遙か前方をチヨロチヨロ走りまわるのを見て、何故か気が遠くなっていった。

「あいつどんな筋肉してんだ！？ カモシカか！」

ハアハア息を切らして走る。

「……あいつ、面白えだろ」

ニヤツと笑ったチカは、一気にスピードを上げてマヒロへ迫って行く。

「はあ!?!」

あいつ……
あいつ……んな早く走れたのか……!!
ゴロゴロしてるだけじゃねえのかよ!
てっきり俺はお前は足が遅えのかと……

「なんなんだよお前ら!?!」

俺は走るのを放棄して、フラフラになりながら歩く。
どうせあの早さだとチカが捕まえんだろ。

「勝手にしろ! 俺は歩く事にする……!!」

と言った瞬間、廊下の向こうから「ギャー」と女らしくない声が聞こえてきた。

あーあ。

マヒロ、捕まったな。
ご愁傷さま。

第一章 ことの始まり04

「……っあ……はっ……」

心臓がバクバクする。

こんなに走ったのは龍に追いかけられた時以来だ。
足がガクガクする……

し、しかも……

「あ、あの……離して……下さい……」

ニヤニヤ笑う赤髪の男に手首掴まれてるし……

「マハロ、足早え」

「……え、ええ……まあ、逃げ足、だけは……」

「ふっ」

目の前の赤髪は噴き出すと、可笑しそうに体を揺らす。

「あの……離し「や」っと捕まえたか!!」

馬鹿でかい声が聞こえて体をビクつかせる。

「お前か！ お前がマヒロか！！ 無視しやがってテメエ！」

カッチーン。

礼儀をしない坊やだね。いっちょアタシが……

「俺に散々苦勞かけやがって。殴られてえのか？ あ？」

……すみません、調子乗りました……

あの、どうしてそんな睨むんでしょうか……

というか、苦勞ってなんでしょうか……

「にしても、すっげー普通の女だな！」

あの……一応傷つくんですけど……普通ってなんでしょうか……
そりゃたいして可愛くはないと思うけど、面と向かって普通で……

「お前名前は」

「真尋です……」

「そんなのは知ってたんだよ！ フルネームだフルネーム」

「……き」

待て。

そっぴゃこいつら年下じゃねーの。

なんで私がこんなヘコヘコしなきゃなんないの。

大体こんな追いかけてまわして、私の学園ライフめっちゃくちゃにしゃがって。

あげくこれが。この不躰な態度が。

「……ひ、人に名前聞く前に自分から名乗るのが礼儀ってもんじゃないんですかね」

「ああ？」

「すみません。霧島きりしまです。霧島きりしま 真尋まひろです」

ブハッと横で赤髪が笑った。

それを悔しい思いをしながら睨みつける。

「西條さいじょう 靖親やすちか」

「は？」

「俺の名前」

「はあ」

え、ああ……うん。そう。

「ははは！　すげー興味なさそうな顔！　ウケる！　チカ相手にこれだよ！」

声でけーなコイツ。

「俺、吉良^{きひら} 泰造^{たいぞう}な！」

「……はあ………帰っていいですか？」

「いや、駄目だろ。何考えてんだよ。何のために俺が追いかけたと思っただよ」

「なん、何でえ………」

「マヒロ、面白えなあ」

（私はちっとも面白かねーよ）

なんとか暴言を飲み込んで苦そうな顔を見ると、一瞬間をおいて二人は大爆笑した。

「いやーウケる！ お前面白えな！..」

先程からずーっとこの調子だ。全然面白くない。私はいつまで拘束されてるのだろうか。

あ、ちなみに「チカちゅー」ってのは靖親のチカとたいちゅんの合わせ技の事らしい。

で、「たいちゅん」ってのは泰造のあだ名だとか。

さつき金髪が自慢げに教えてくれた。

でも……ぶっちゃけそんな事これっぽっちも知らなくて良かった。

いや、マジで。

ぜんっぜん興味ないわ。

そんなん知らんがな。

早く帰りたいっ！

龍に怒られるっ！

「お前なにさつきからそわそわして……あ、便所「帰りたいんですけど」

何この状態。

左右でつかいのにはさまれてんだけど。

しかも、女子がさつきから私達の事ちらっちら見てんだけど。

あー……もっ……

聞きなれた携帯の着信音が鳴る。龍専用の着信音だ。

「うわ、はい……真尋です！ー！」

龍……！ お前はいつもタイミングが良いのか悪いのか……！！
慌てて出ると不機嫌マックスの声が聞こえてきた。

『もう牧、来てんぞ』

「……です、よね」

『学生もパラパラ帰ってんなあ？』

「……………はい」

『3分まってやる』

私はブツッと携帯が切れるのを確認する前に、猛ダッシュした。

「あ、おい！ 逃げんなー！」

「いやっ…………マジでそれどころじゃないんでー！」

「はあ？」

後ろから2人が追いかけてくる。

携帯の時計はすでに1分進んでいた。

や、ヤバイ……！！

正門まで遠すぎる。

ここ、何階だ……？

2階！？ 2……に……

(……よし、行ける……！ たぶん……！ 下はボイラー室よ、真尋！ 死にはしない！)

私は勢いよく窓を開けると、足をかけて外へと飛び出した。

「うおーいつー！！」

後ろから焦ったような声が聞こえる。

だけど、今はそんな事気にしている余裕がマジでない。

所詮2階だ。

怪我する事はないだろう。

幸いすぐ下にはボイラー室もあることだし、その後中庭の小高い丘に着地すればいい。

着地に思ったより衝撃があり、足が痛む。それに鞭打って下駄箱へ駆け込んだ。

この時点ですでに2分経過している。

(間に合うか……！)

ローファアを引きずり出すと、上履きを投げ込んでローファアを手に持って走った。

正門へ近づいた時、人だかりがあるのに気付く。
そしてその対象が何か分かった時、私は激しく脱力して座り込んでしまった。

「やく……ぞ……！」

「12秒遅刻ですよ」

光輝くGNZG50センチユリーの前に立つダークスーツ姿の龍は、
どうみてもやくざだった。

「なんでっ……そんな格好を……！！ さっきまで普通だったじゃ

ん！」

「牧さんに言われたので、着替えてきたのですが」

「何を……！」

「イケメン達に追いかけてたから、今後さぞかし学園ライフが辛かるうと」

つまり……やくざの娘っぽくしてれば辛くないと……
そう言いたいのか……？ そんなわけないじゃん……

しかも、なんで……そんな嬉しそうなの……？

「うおーい……マジか！」

うふー……

なんてタイミング……

駆けつけて息を切らす派手な2人は、顔をひきつらせていた。

あ、よく見たら金髪……じゃなくて吉良先輩ってば刈り上げの部分が豹柄になってる。

可愛いじゃん。

「……じゃなくて!!」

「なんです……お嬢」

「『お嬢』でもなくて!」

遠巻きながら人垣はどんどん増えていく。
これ以上騒ぎを大きくしたくなかった為、ニヤニヤしながらドアを
開ける龍に近づいた。

「龍……後で社長室」

「かしこまりました」

そう言って憎らしいくらいカッコイイ微笑みを浮かべ、龍はドアを
閉める。

ドアが閉まる瞬間、西條先輩が「バイバイ」と言った気がした。

車はゆっくり動きだす。

第一章 ことの始まり04・5(前書き)

Yasuchika side

第一章 ことの始まり04・5

「……あ、あいつってばやくざの娘、なのかよ……」

「……」

意外だ、と呟きたいちゅん。

そんなんじゃないよ。

あいつはただのツレ……っていつか多分主従関係だろ。で、マヒロが下。

親戚なのか何なのかはわかんねえけど、やくざじゃねえよ。たぶん。でもまあ、やくざの娘って思えば誰も手え出せねえってことだろ。

「……喧嘩売りやがった」

「は？」

「あのスーツ」

「え……いやいやいやい！ マジ止めとけな！？ 相手やくざだから買つなよ！？」

だからやくざじゃないんだって。

でもやくざじゃねえなら何なんだあいつ。

なんで睨むんだよ。

「…………筋トレでもするか」

「しても勝てねーよ!? お前喧嘩強いけどさすがに無理だったの!
数で来られたらお前なんて狼の前の子羊ちゃんだぜ!？」

「何なんだ。マヒロって」

「だからやくざの娘だろ」

「…………」

「…………はっ…………だんまりだよ!」

公園で会った時はもうちょっと今時っぽい格好をしていた。

メガネもしてなかったし、服も着崩していた。

少なくとも本気である制服の着方をするようなタイプには見えなかった気がする。

「お前らまだいたのかあゝ!?!」

「あ、やべ。またかよバーコード! しつかけ! あの残り毛のよ
うにしつかけ!」

慌てたようにたいちゅんが走りだすのを見て、ゆっくりバイクへ向かう。

「うおおお…………!」とか叫びながら2台のバイクを気合いで押して

くるたいちゅん。

こいつ、意外と面倒見がいいんだ。

……さて、どうやったらマヒロは俺と遊んでくれんのかな。
取り合えず、次会うまでに呼び名でも考えるか。

第一章 ことの始まり05

「なんであんな事するのっ!」

「ですからお嬢……社長の為を」思っ
てないっ!」

「嬉しそうだったっ!」

「……」

ハーツと深いため息を吐いて、すりガラスにつけられたブラインドを全部下ろす。

ブラインドが下がる度に、龍の周りを覆う空気の温度も下がって行った。……ヤバイ。

「……龍」

「……」

「……龍ちゃん」

「りゅ」「おい」

「すみません」

「真尋」

「……はい」

「お前自分の立場分かってんだろっな？」

「……」

「分かってんだろっな？」

「……すみません、分かってません……」

チツと盛大な舌打ちが返ってくる。

「テメエ……ただでさえ馬鹿校行ってんのにこれ以上問題起こす気か？」

「……」

「万が一虐められてみる。打たれ弱えお前が耐えられんのか？」

「……」

「言ったよな？ 退学されちゃ困るって」

……言っただよ。確かに言っただけど……

別の意味でいじめられそうじゃん！ やくざの娘なんて無視コースじゃん！

しかも変なの寄ってくるかもしれないじゃん！

「お前の為なんだ。な？」

……ずるい……そんな顔でそんなこと言うなんて……

……その顔の時に逆らったら……

私、絶対酷い目に合うじゃん……

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

次の日。

学校へ着いた瞬間から私はヒソヒソの的になっていた。

2割クラスメイトで……残りはその友人とかだろう。

龍の運転するGZG50センチユリーを興味深げな目で見てる人が多い。

時折畏怖の表情を浮かべる人や、明らかに挑発してくる人もいた。

（私は大人……私は大人……）

そう、彼らより少なくとも5歳は年上なのだ。

ぜーんぜん怒る事なんて……ご……5歳……？

（……5歳、かあ……）

……よく考えたら結構離れてるよね。

友達になったとしても、話題とか合わないよね。

ハブられる心配とかいらなかったじゃんね。

そう……。

だから例えクラスで1人ボツチになったとしても、私は傷つかなくていい。

「いや、3年間は辛くね!？」

「何があ？」

「っ!？」

独り言に返ってきた返事。

声の方を向けば、いつの間にか女の子が立っていた。

よく……言えば、今時な。悪く言えば果てしなく頭の悪そーな子。

「……………え？」

「何が『3年間は辛い』のお？」

「……………あ、あ……………ははっ……………えー……………」

ちよ、ちよつと……………!

私のコミュニケーション能力の低さを舐めんよ!

社長とは言え、私のコミュニケーション能力は恐ろしく低かった。いや、これでもだいたいマシになった方なんだけど……………たぶん……………

「え〜？ だって噂になるよお」

「なぜ」

「1年の前で追いかけてたでしょお？ チカちゅー先輩が人気あるもん」

「なぜ」

「だって『炎華^{えんか}』の頭だし？ イケメンだし？」

いや、答えになってないわ。

ていうかエンカってなんだ。演歌か。

なんだそのダツサイ名前。

「兄弟姉妹で入学してる人とか、あとは友達から広がったんじゃないかな」

文末に「」がつく話し方ってどんな？ なんて思ってけど、今分かった。

凄く楽しそう。

そりゃもういつそのこと殺意が沸くくらいに。

「3年間大変そうだねえ。あ、でも芸能人張りに人気があるってわけじゃないから、学校中の人とか校外の人が知ってる訳じゃないし〜！ あくまでチカちゅー先輩の熱狂的なファンが知ってるくらい

だよ
「

「ははは、それが一番ヤバいんじゃないかな」

そして何故かこの子はズーっと私の横について歩いてくる。

この子いったい何の目的で………と思ったら、クラスメイトだったらしい。

「ええ〜覚えてないのお!？」

知らんがな。

入学式は昨日だ。

一部で変に有名になった私の事を知ってる人は多いかもしれないけど、私はまだ誰も知らない。

「私、美保^{みほ} 珠美^{たまみ}って言うのお」

「え、ああ、どうも。私は霧島 真尋です」

「うんうん、知ってる〜！ ねえ、名前で呼んでいい？ 私も名前で呼んでえ?」

「ええ、構いませんよ。珠美ちゃん」

「タマでいいよ〜。猫みたいで可愛いでしょ？ あ、メアド交換しよおね」

何が。しかもメアド交換早くね？今はみんなこんなものなの？

「ヒロちゃんってなんで敬語使うのお？あ、長いからヒロちゃんって呼んでいい？」

「……構いませんよ。あと知りあって日が浅いので敬語だけです」

「でも本当は男っばいでしょう？」

「へ？」

「昨日窓から飛び降りてたし、たまに男言葉使ってるよお？」

「あ、あ……」

「なんでそんなダサイ恰好してるのお？」

「ダサ……」

「あ、ごめん！そういう意味じゃないのっ」

そう言って焦ったように顔の前で手を振る。

「……いや、いっしょですけど……」

「私には気を使わなくていいよお！ 名前教えたらトモダチでしょ！ それに ……」

にっこり天使のように微笑んだ珠美ちゃんは、急に絶対零度の笑顔で微笑んだ。

「あたし、本当のヤクザの娘だから」

「……あ、うん、わか、分かったよ……タマ」

「んふっ」

え？ え？

どうしよう ……。

龍、私、本物のヤクザの娘に絡まれてる……

「表の顔ってさ、あると便利だよね」

「……そうだね」

「でもずーっとそれじゃ疲れるよね」

「……そうだね」

「ねえ、ヒロちゃん」

「はい」

「私、怖い？」

怖えよ。

「やくざの娘怖い？」

「……いや……やくざ、が、ていつか……」

ちなみに私が本物でないことは分かってるらしい。

「大丈夫だって！ お友達には優しいから」

「いや、だからその笑顔やめて。やくざがって言うよりタマが怖い……！」

「んふっ」

それにしてもこの子、どうして私に近づいたんだろうか。

いくら本物のやくざの娘じゃないとはいえ、あの騒動を見て近づくと物好きなものだ。

だてほら……クラス中がめっちゃ避けてる……

「んふっ　ヒロちゃん人気者じゃ〜ん」

「どこが……」

タマはその後もずっと……本当にずっと話しかけてきた。それは授業中とか関係なしに。

やくざの娘とカミングアウトしてからは、話し方も普通に帰ってるし。

ていうか、入学早々授業があるとは思わなかった。馬鹿校だからと舐めていたらこれだ。

もう、中学上がりの子と比べてブランクがヤバすぎる。

まず、一次方程式ってどんな呪文だっけ？　っていうところからだ。時折オリエンテーションとかはさむらしいけど、これはさすがにキツイ。

「ヒロちゃ〜ん！　次先輩方との交流会だつてえ」

……オリエンテーションって交流会だつたんだ……最悪……

「楽しみだねえ！　カッコイイ先輩いるかなあ？」

いてもいなくてもいいよ。
帰っちゃ駄目かな。

「……………ヒロちゃん」

「ん」

「ヒロちゃんは帰らないよっ」

「……………うん」

言い方は可愛いのに、目が全然笑ってなかった。

(恐るべし……………やくざの娘……………)

「お前ら移動開始時間過ぎてんだろー！！ 何やってんだ！」

そう言って焦ったように先生(名前は永倉浩輔らしい)が怒鳴る。
甘い声で「化粧が終わってない」という女子生徒たちを次々叩いていた。
若いせいかさっそく『エイちゃん』とか『コウちゃん』と呼ばれ、
親しまれている。

「まったく……………真面目に頑張ってくれんのはお前だけだよ霧島……………」

「酷い！ タマも頑張ってるもーん！」

「そうだな、頑張ってるな。エライな」

ハアとため息を吐いて遠い目をする。

入学式の時の真面目さが未だに嬉しかったらしく、微妙に距離が近くなっていた。

(同情するよ先生……)

社員を100名ほど抱えてなんとか管理しているけど、それでもこのたった35名のクラスをまとめるのは無理だと思う。

秘密にはなっているが、一応先生方は私が企業の社長で23歳だと知っている。

距離が近いのはそのせいもあるかもしれない。

「……なあ、霧島。後で委員会決めるから、お前学級委員やってくれよ」

「嫌ですよ」

先生は「即答かよ。冷てえなあ」と呟いて教室を出て行った。

第一章 ことの始まり06

オリエンテーションと呼ばれる合コン……交流会は、波乱の幕開けだった。

いや、私にとってなんだけど。

入った瞬間、一部の女子（それでも結構広範囲）が「チカちゅーは？」と言ってキョロキョロ。

先輩方も「どれが噂のやくざの娘？」と言ってキョロキョロ。のっけからざわつきが収まらず、先生方の怒声が聞こえていた。

「ヒロちゃん人気者でいいなあ」

「よくないよ変わるうか？」

あははと笑うタマを尻目に、指定されている席へ座る。

「……タマ、席違う」

「ええ？」

タマは堂々と私の隣の席に座っているが、そこは宮城さんって子の席だ。

恐らく宮城さんと思われる気の弱そうな女の子がうつろしている。

「あ、貴女『宮城さん』？」

「う、あ、ハイ！」

声をかけられビクビクする宮城さん。

まあ、ギャルに声かけられたらビビるわな。

「私の席あそこ」

「……え？」

「だーからー！ 私の席あそこだからあっち行って？ タマって書いてあるから」

あんだ馬鹿？

「タマ……我が儘言っちゃ駄目」

「え〜！ でもタマ、ヒロちゃんの横がいい〜」

「……あの、私、向こう行きます……」

……ああ……宮城さん……

タマ、私、仲良くされるのは嬉しい。

求められるのも素直に嬉しい。

でも……ツレシヨン仲間にはなりたくない。

「宮城さん、行かなくていいよ」

「……え、でも」

「……なんで？」

……怖っ……タマ、何その顔……！

「だ、だってタマの席は向こうでしようが」

「……ヒロちゃん友達でしょう？ 私と座りたくないの？」

「友達だからだよ」

「意味分かんない！ みんなバラバラで座ってるじゃん！」

「キチンとしなきゃ駄目なの！ ルールは守る！ うちのうち、他人は他人！」

「何それ、かたーい」

「友達だからでしょ！ 友達だから世間に出て恥かかないように躡けてんの！」

……大丈夫かな……私。

* * * * *

意に反してタマは周りの子と仲良くしていた。

(よかったよかった)

コミュニケーション能力のない私と言えば、ボツチだ。
よくまあ社長になれたものだと思われるかもしれないが、100%
龍がいたおかげだ。

逃げて逃げてここまで来た。

そろそろ、私は勇気を出す時なのかもしれない……。

「あゝ！ いた！」

……前言撤回。

駄目かもしれない……

「探したぜマヒロ」

「ど、どちら様でしたっけ……」

「あ？」

「嘘ですよ覚えてますよ、吉良先輩。睨まないで下さいよ」

「おう」

周りが騒がしい。多くがやつかみだ。

「おーまえ入学早々大変なことになってんのな」

主にお前らのせいだな。

「て言うか『吉良先輩』ってやめろよ」

「じゃあどうすればいいんですか……」

「『たいちゅん』って呼んでいいぞ。特別に！」

頼む。頼むからこれ以上敵を増やすような真似はやめてくれ……
キミ達の人気は十分理解してるつもりなんだ……
あ！ 何笑ってやがる……！
コイツ自分がモテてるの知ってるんだ！

「わざとですよ？ わざと私を ……」

「お前、それよかこれ見ろって！ マジ可愛くねえ？ 刈り上げ豹柄！ 触る？」

こいつは本当に何にも分かってない。
そもそも何でこいつに目を付けられたんだろう。

「あ、今日チカはいねーの。たぶん寝坊。後で来んじゃねえかな？」

私は特に目立ったことはしてないはずだ。

「つか、お前運動神経いいのな！ 足早えし2階から飛び降りるし」

強いて言えば公園で西條先輩と会ったくらいで……

「お前さー無視かよ？ チカとそっくりだな。あ、メガネ取れメガネ。その方が可愛い」

そう言うとスツとメガネに手をかける。
私はそれをサツと避けると、吉良先輩を睨みつけた。

「吉良先輩、迷惑なんですけど！ 2年生の席、向こうなんですけどー！」

「あ？」

「すみません」

「たいちゅん」

「……は？」

「たいちゅん。あと敬語も止める。次言ったら殴る。女だろうが容赦しねえ」

呼び名のこと？

そんな……ここでそんな呼び方したら私の命がないじゃん。
タメ口とかもありえないし。

ていうか殴るって……え、マジで言ってるの？

「……おい、無視すんな。お前マジで殴るからな」

「たいちゅん先輩、帰って」

「いやだね」

(こっ、こいつ……!!)

この冷え切った空気が分らないのか……！
せっかく迫力に負けてタメ口であだ名まで呼んであげたのに……！
ていうか、宮城さんの席盗ってるし。宮城さんまたうるうるしてるし。

「ちょっと！ 背中に手え回すな!!」

「いやだね」

「なーお前さあ……なんでそんなダセエ恰好してるの？」

「決まりだから」

「は？ キチンと守ってるのかよ？ マジで？」

「当たり前でしょう」

「つつてもよーマヒロ。本当は優等生じゃないだろ」

「そっね」

「それでも守るの？」

「決まりだから」

「変なの」

オリエンテーションが始まってからも、吉良……たいちゅん先輩は話し続けた。

しかも普通の音量で。

だから周りの女子生徒からの視線が痛い。

先生方は呆れた顔をするだけで、もはや注意すらしない。

『
』

場違いな携帯の着うたが鳴る。

「お、俺だ」

「ちよっ……先輩せめてバイブに……」

「いーのいーの」

よかねえよ。

「チカ？ 今どこにいんだよ」

しかも電話かよ。出るのかよ。

「はあ？ だから体育館だって……あーいたいた！ こっちだこっち！」

馬鹿でかい声に肩をすくませて耳をふさげば、横でギャハハと笑う声が出た。

式をしてるってのを忘れてるんだろうか。
段々と近づく足音を聞きながら、私は胃を痛めていた。

「椅子、ちょうだい？」

私の隣に座ってたギャルが「えっえっ」って言いながらどく。
西條先輩は「ありがと」と言っただけで背もたれをまたいで椅子に座った。

「西條先輩……メイン……私達なんですけど……」

「うん、入学おめでとう」

「ありがとございます……でもそうじゃなくて……席……」

「譲ってくれた」

「貴方が頼みましたからね……」

もういいや……

ハアとため息を吐けば、可笑しそうにたいちゅん先輩が笑った。

「お前のせいでマヒロがいじめられてんだって」

「はあ？ そんなこと言っていない！」

「お前気付いてないの？ さっきからめっちゃ言われてんじゃない」

気付いてるよ馬鹿。

気付いてないわけじゃないじゃん。

ていうか誰のせいだと……

「ヒュー」

私、これから学校生活どうなるんだろう……

なんか2、3年の先輩も睨んでるし……

「ヒュー」

ツンツンと肩をつつかれて、ようやく自分が呼ばれてるのだと気付

いた。

「ヒー？」

「マヒロのヒー。嫌？ ていうか、なんでたいちゅんにタメ口？」

「嫌って言うか……」

「え〜！？ あだ名！？ だっせ！ じゃあ俺もヒーって呼ば」

「テメエは呼ぶな」

お前も呼ぶな。

「何だよ！ ケチケチすんなよ！ なあ、お前は何か良い？」

「……何でもいい」

「はあ？ 適当な奴だなお前」

「たいちゅん先輩が決めてくれたら何でも嬉しい」

「心にもねえこと言うんじゃない。マヒロってどついでいう漢字？」

「真実の真に尋ねる」

片眉を上げて「たいちゅん先輩？」と不思議そつな西條先輩。

「おう、俺のあだ名。あ、お前、今日から『真尋』な。オーソドックスに」

「ヒー、俺は？」

「え？ 何ですか？」

「俺のあだ名。あと、俺にも敬語使つの駄目」

「……」

面倒くせー……！！

何この子！

最近の高校生ってこんな面倒くさいの！？

「なんだって良いじゃないですか……」

「決めて」

「……」

「早く」

「……チカ、先ぱ「先輩はいらぬい。呼び捨てか……せいぜい『くん』」

チカくんはニコッと笑って、私の頭を撫でた。
その瞬間、「きゃあ！」とそこかしこで小さく悲鳴が上がる。

「今度から敬語なしな」

「……分かった……私、ちょっとトイレ……」

年下に敬語使うのはちょっと不思議な感じがしてたとは言え、私は調子に乗っていた。

こんなに男の子に話しかけられるのが初めてだから、調子に乗ったんだと思う。

だから、分かったはずなのに、ここまで調子に乗ってしまったんだ。

第一章 ことの始まり07

「ねー貴女が霧島？」

トイレでいきなり話しかけられる。しかもいきなり呼び捨てで。

「ちょっと話があるんだけど」

行かないや駄目なんだろうか……

「来いっつってんの」

ガツと1本結びの髪を引っ張られ、引きずられる。その瞬間、外で群れてた女の子達から笑い声が聞えた。

……あんま大人を舐めんなよ。

(大人の怖さ、教えてやるわよ)

だいたいこの呼び出しってのは体験してみたかったんだ。
私、現役の時はずっごい地味な子だったから、経験したことないし。
私のちよつと前をノロノロ歩く先輩。

後ろから来る人にはちよいちよい上履きを踏まれている。

ふと顔を上げれば、だいぶ向こうでタマがびっくりしたような顔を
して立っていた。

へらつと笑えば、そのまま何事も無かったかのように去っていく。

(無視かい)

躰けと言ったのを怒ってるんだろうか。

「ねえ、あんたさー」

急に止まった先輩と思われる女が振り向く。

私はボーっとしてる間に外に出ていたらしい……んだけど……
なんか……

(何この人数……!!)

ざっと10人以上いるんじゃないだろうか。

え、ていうかマジで？

呼び出して言っても3人くらいじゃないの？
こんなに相手はできねーよ？
いや、正直3人でも駄目なんだけどね？

「やくざの娘だかなんだか知らないけど、目立ちすぎ」

さっきまでの私の勢いはすっかり消え去っていた。
高校生のくせに随分迫力のある子達だ。

「何？ あだ名で呼んでタメ口？ ありえないんだけど」

「しかもあだ名付けられて喜んでるし」

いや、喜んではない。

「あたしの彼氏、やくざと付き合いがあるの」

だから？

「痛い目みたくないでしょ？」

私が本物のやくざの娘だとしたら、その脅しは通用しないのでは……

なんて甘いこと思ってたら、バシッと頬に衝撃が走った。

「無視してんじゃねえよ」

無視してる訳じゃねーよ。

いつも心の中ではツッコミ大会開催しまくりなんだよ。オタク舐めんな。

ほっぺた痛えよ。

「悔しいんですか？ なら先輩方もあだ名決めてもらって、タメ口

きけばいいですよ」

「……………ああ？」

ひゃあっ……………！

怖い……………！

で、でも負けないっ！ 大人だもんっ！

「ブスがちょっと仲良くしてもらったからって調子乗ってんじゃね

えよ
「よ」

そう言われながら、私はベタなまでに攻められていた。
どっからそんな重い物を、とか相手が死ぬ可能性は考えないの？
とかチラッと考える。

目の前に近づくコンクリの杭を避ける気はない。
なのに、ガツッと鈍い音がして杭は吹っ飛ぶ。

「ヒロちゃん避ける気ない」

甘ったるい語尾の伸びた話し方。

困ったように笑うタマを見て、私はため息を吐いた。

「タマ……足で蹴り落とすとは思わなかった……」

「どーして避けないのぉ？」

「刑事事件に持ちこめばあるいはと……」

「ええ〜？ 超物騒なんですけどぉ！ 捨て身！？ その思想が怖
いんだけどぉ」

物騒なのはこれのお姉様方だよ……

「ていうかタマ怒ってるんだと思ったんだけど」

「何でえ？ 怒ってないよお」

「テメエ……出てくんじゃねえよ！！」

コソクリを持っていた先輩はようやく手のしびれから解放されたのか、怒鳴り出した。

「だあってえ……お友達助けなきや」

「タマ……！！」

タマ、ギャル嫌だなんて思っでごめんね！
あと、笑顔が怖いって思っでごめん！

「ねえ私、先輩呼ばなかったよお。エライ？」

「うん、偉い！ 超偉い！ ありがとう」

呼んだら余計なことが起こりそうだと
ていうか、あいつらが助けてくれるなんて思っ
てないけど。
万が一……万が一来た場合、女どもは納
得しないだろ。

「ねえねえヒロちゃん。どうやって決着付けるのお」

「……………」

うーん。貴女が出てきたから予定が狂ったかな。

……とか強がったりしちゃってね。

いやいやいや、調子乗るのは昔から何だけど、俄然テンション上がってきたわ。

「ガチ喧嘩？ 殴り合い？ しちゃおうかなー」

「ああ！？」

周りを取り囲む先輩方のテンションが上がり、タマは大爆笑し始めた。

「ウケる〜」

こちらに1人の般若の様な顔をした先輩が近づいてきた時、先生が現れた。

「何してんだお前ら！！」

タマが「別の人呼んじやったあ」と嬉しそうに笑う。
舌打ちしながら散り散りになる先輩方。

「お前……なあ……」

やって来たのはコウちゃん先生だった。
ため息をつく、「ちよつと来い」と歩き出す。

「美保、お前は来るな」

「ええ!？」

そう言ってチラッと私を見ると、「お前だお前!」と言って再び歩き出した。

* * * * *

「タバコ吸っていいか？」

「……はい」

職員室にはほとんど誰もいない。

オリエンテーション真っ最中だから当たり前と言えは当たり前だ。

「はー……」

ため息つきたいのはこっちだ。

……いや、先生か。

「……お前いくつだっけ？」

「23です」

「俺と4つ違いかー……」

気まずい沈黙が続く。

「お前なー」

「……はい」

「腹立つのは分かるけど、相手は年下なんだから」

「……」

何それ。

私だけが悪い訳じゃないんだけど。

「変なのに好かれて変なことに巻き込まれてんのも分かるけど」

「……」

「ま、大人だからグツと我慢して堪える。な？」

じゃああなたは聖人君子のように怒らずにいられるのか。

生徒がいくらヤバくてもニコニコ我慢して接することができるのか。
テメエが出来ねえことを他人に押し付けんな。

「……いや分かるけどよ？」

急に焦ったような声を出しながら眉をしかめる。

「まあ、今のはアレだ。先生としての真面目ーなお言葉な」

「……」

「だから止めろってその顔……！！ 怖えよー！」

どんな顔だ。
なんでそんな怯える。

「お前凄く極悪な目えしてんぞ……！」

「睨んでるつもりはありませんが」

「睨んでるなんて言っただけよ！ 濁った目だ……！ 余計怖いわ」

わざと可愛らしく「ばっかっ！」と言ったのを聞いて、ちよつと笑った。

安心したような顔で頭を撫でる先生。

「ま、今度飲みにも行くこつや」

「生徒誘うのやめて下さいよ」

「知るか」

へんつと笑うとタバコを灰皿に押し付ける。

グリグリしながらちよつと困った顔をするコウちゃん先生。

「あのさー……お前さー……」

「はい？」

「……………マジでやくざの娘なの？」

やだ……………信じてるんですか先生……………

「ち、違いますけど……………ただの社長ですけど」

「だよ、な……………ははっ」

まあ、演出しすぎたよね。

あの車どっから持ってきたってくらい凄かったよね。

聞けば社員の私物だし。

やたら龍が頻繁に電話してると思ったら、そんなくだらないことで社員を使っていたなんて。

あいつ「会社の物は俺の物。俺の物も俺の物」ってリアルで言いやがったしなあ……………

「ま、まあいいや。お前戻らないだろ？　ちょっと話してけよ。オッサンの話聞け」

そう言いながらお茶を出してきて、私達は完璧にサボり組になった。

第一章 ことの始まり08

それから「教室戻れ」って言われたのは、オリエンテーションが終わった時間だった。

ずーっと先生に怒られてたんだと勘違いされたのは、ある意味凄く良か……

(あれ、もしかして先生わざと……?)

そう思っつて先生を見上げれば、横を歩いてた先生は「ん？」と言っつて笑った。

「先生つて良い男ですね」

「はっ……だろうな。嫁がいんのにモテてしょうがねえ。惚れんなよ」

「それはない」

「即答すんな！ ちつたあ悩む素振りを見せる！」

階段に差し掛かった時だった。

「あーいた！ 真尋、てめえ便所なげーよ！」

「吉良あー……お前、自分のせいでコイツがいじめられてんの知ってんだろ？」

「まあな」

「じゃあ余計なちよっかい出すな」

「いやだね。俺はいじめられてる真尋を見んのが好きなんだよ」

「ヒーいじめられてんの？」

「知らなかったの……！？
ある意味尊敬するよ……」

「西條……お前は相変わらずマイペースな……」

コウちゃん先生が呆れながら鼻で笑う。

「誰？」

「え？」

「誰がいじめてんの？」

「いや……別に……」

「やめろ西條。事を荒げんな」

バシンと出席簿でチカくんの頭を叩くと、「行くぞ霧島あ」と言いつて歩き出した。

チカくん達に頭を下げて後に行く。

教室に戻ると、タマが私の席で待っていた。

「遅い」

「いやーこつてり絞られてた」

「こつてり絞ってやったぜ。おら、座れお前ら」

コウちゃん先生は先生にしては口が悪いと思う。

そこが親近感を抱き、舐められるのだろう。

生徒は全然着席しない。

席に座ろうとした時、後ろの子に椅子を引かれた。

まる見えだったものだから足で椅子を引きなおして腰掛ければ、舌打ちが聞こえる。

(古典的すぎるだろ)

あー席変えしたいな。

窓側の一番後ろが良い。

そうすれば私だってもうちよっど……

「霧島ー……さん」

クラスの男の子の控えめな呼びかけ。
何事かと思って見れば、窓の外と私を交互に見ながら指を指していた。

「あの一……たぶん……お迎え……」

「!?!?」

慌てて窓際に行つて外を見た瞬間、私は血の気が引いた。

(やくざが増えてる……)

あの恐ろしくガタイの良い男は、恐らく牧さんの旦那だ……

(ノリノリだし……!)

サングラスをかけてニヤニヤしながら、車にもたれかかっていた。

「……取り合えずホールムルム終るまで待つてもらえ」

コウちゃん先生の呆れた声に軽く頷く。

横を通る時、小さく「後で電話入れる」とつぶやく。

「……え？」

「知らねえの？ 牧、俺の後輩」

「……知りませんよ」

ていつか……牧が後輩っただけで龍を止められるわけないじゃん……社長の私ですら舐められてるというのに……

「なるべく早く終わらすから」

「……すみません」

「おっ」

宣言通り、というか最初っから生徒が参加する気のないホールムルム。

あっという間に終わり、それぞれフライング気味に教室を飛び出していった。

私もさっさと帰ろうと思いつつ「ばいばい」と声をかけて教室を出た。

「霧島あー……さん！」

振り向けば、先程の男の子が慌てて駆けてくるのが見えた。

「呼び捨てでいいよ」

「えー？ あ、あゝゴメン、でも……」

「いいよ……誰も怒って襲ったりしないから」

「そう？」

そう言いながら物凄い不安そうな顔をする。

この子の名前は何だったかな……

「あ、俺、真下ましま 啓太けいた！」

「うん、よろしく。霧島 真尋です」

自己紹介すれば、真下くんはニコッと照れたように笑っ……

前歯ない！ 1本ない！

あんたどこやったの……！？

「え、えーと……それで何の用かな？」

「霧島、今俺の前歯見ただろ！」

「いや、見たけど……」

「これなー喧嘩して無くなったの！」

エへへと自慢げに笑う。

「そうなんだ……」

「おう。俺の親マジ強え」

「親！？」

子供との喧嘩で歯を折る親ってなんなの……！？
ていうか子供と喧嘩って……

「じゃなくて……！ 用事ってなあに？」

「あ、そうだった……」

ちよつと緊張したような顔をした後、急にカーツと赤くなりだす真下くん。

「あの一……さあ……」

「……うん」

「……あの一」

煮え切らない態度に業を煮やし、チラツと時計を見た。
それで焦ったような表情になり、真下くんがエヘンッと咳をする。

「名前で呼んでいい！？」

「い、いいよ……」

ガツと肩をつかまれ、急接近。

思わずビクついて何度も頷いた。

ニコッと嬉しそうな真下くんをみて、やはり抜けた歯が気になった。

「えーと……そ、それだけ？　かな……じゃ……じゃあ、私帰るね。待たせてるから」

「おう！　真尋、また明日な！」

呼び捨てかーい。

営業で身につけた完璧な営業スマイルでかわし、私は教室を後にした。

「お帰りなさいお嬢」

「おい、牧。テメエ何やってんだよ」

「おいおいおーい口が悪いぞ……！？　社長！」

殴りかかろうとした私の手をかわしながら、牧が笑う。

「龍さんが『来るか？』って言うからさあ」

「仕事はどうした。お前のライン明日マスターだろうが」

「息抜きだよ息抜き！　ったく、頭固いな社長は」

「牧、殴るか？ どこがいい？ 腹か？ グーでいいのか？ いいな」

「待て待て待て！」

エッヘツへと笑って私をたしなめる。
プツと短くクラクションを鳴らされなかったら、確実に殴っていた
だろ。

「あ、社長。今日の収録、先方の都合で版元は来れないそうです」

「まーじーでー！？ ディレクションどうすんの……！！」

「勝手にやっついていいそうです」

「……ああ、そうかよ……台本刷っちゃったよ」

「版元に来られるよりマシでしょう」

「そうだけど……それは言っちゃ駄目だよ……」

「社長ーアイス食いたい」

「牧は黙っててくれるかな」

私とタメだからって舐めすぎだ。

だいたい龍だっているのに。せいぜい龍に怒られるがいい。

「よし31寄ね。社長の奢りだ」

……龍……

第一章 ことの始まり08 5 | a (前書き)

Keita Side

入学式。

桜の舞う下を歩く彼女を見て一目惚れした。

一目惚れなんてあるのかよって思ってたけど、目が離せなかった。規律通りのだっせー恰好なのに、なぜかそれが凄く綺麗に見える。ちよっとうつむいて歩く彼女は、酷くはかなげに見えた。

「けーちゃん誰見てんの？」

「……え、あ、いやっ」

修太郎に言われて慌てて目をそらす。

「何あいつダサッ！ いじめコースまっしぐらだな」

「ダサイって言うな！」

「お前知らないだろうけどスゲエ可愛いんだよ！」

「いや、知られても困るけど！」

「その後もずーっと目が離せなくて、入学式が終わってもずーっと見てた。」

「たまに茶化すような声が聞こえたけど、それすら上の空。」

「ようやく声をかけようかと思ったのに、あの騒動ですっかりビビってしまった。」

(まさかやくざの娘だとはなー……)

怖すぎるだろ。障害多いだろう。

ただでさえあのチカちゅーに目つけられてるんだ。

ていうか、あれは霧島のが好きなのか？

俺にしとけばあんな目にあわせないのに……って思ってたけど……

(……霧島いじめられてるの気付いてる……?)

あいつ、何されてもまるで反応しない。

ニコリともしないし、感情があるのかどうか分からないやつだ。

まわりもちよいちよいその異常さに気付いてきたらしい。

霧島は感情はおろか、痛みも感じない。

そんな噂が流れたのは、オリエンテーション後だった。

なんでもコンクリの杭で腹殴られたのに、ニヤニヤ笑ってたとかなんとか。

マジかよって思ったけど、その後心配で様子見たら殴られてはなさそうでした。

でも……

(あいつなんで美保と仲良いんだ?)

美保は確かヤバイ噂がいつぱいある奴だ。
そんなのと真面目を型押ししたようなあいつが付き合ってるなんて、
意外すぎる。

でもウマが合うらしく、笑いはしないものの楽しそうに談笑している。

「まーさが美保とくつつくとはなー」

「な、意外」

「……ていうかお前、霧島好きなの?」

「……ええ!?!」

「分かりやすっ」

マジか……分かりやすいのか……

女と付き合ったことはあるけど、本気になったことなかったからな。
そうか……本気になると分かりやすいのか。俺。
まずいな……

「……声、かければ？」

「……え、い、いや……」

「……マジかよ……お前、そんな純朴キャラだっけ……？」

そう言うな。俺が一番とまどってんだから。……でも、声かけないと始まらないよな。

「霧島ー……さん」

第一章 じとの始まり08・5―6 (前書き)

T a m a m i S i d e

自分で言うのもあれだけど、ヤバイ噂がありまくる私。避けたい子珍しいなーと思って調べさせたら、23歳ってことが分かった。

ありえない？ 何しに来たの？

最初は純粹にチカちゅー先輩達系の騒動で興味を持った。

私が近づいても何も言わないし、いじめられても何も感じてなく見える。

ていうか……いじめられてるの気付いてるのかな？

学生事情とか知らないからかもしれないけど、行動が規格外。

大人からしたらガキくせーって思っただけ無関心なのかも。

だったらなんで高校来たんだろうって、余計不思議に思った。

一番びつくりしたのは、私に口ごたえしたこと。

あ、もちろん悪い意味じゃなくてね？

ほら、普通女の子って関係気にして言わないでしょ？

特にああいう空気読めないことって。

……まあ、空気読めてないのは私の方なんですけど。

それにしても言っただけビクビクするし、本性見せてもビクビクするし。

チキンなんだけどやる時はやるって感じ。

ちよーっと私の周りにはいないタイプ。

大人な時もあるけど、ほとんどはガキくさいままだし。

なんか変な子。

あ、私が23歳だって気付いてるのナイショにしなきゃ！

だって本人が言わないんだもんね。

まあ、たいした意味はないだろうけど、一応、ね。

やくざの娘だってバラしても、そっち方面の意味ではビビってないみたいだし？

平然と「笑顔が怖い」って言ったけど。

そう言えば私が「やくざの娘じゃないでしょ？」って言った時の顔。おっきな目もつと大きくして驚いてたっけ。

あの子、素材はいいのにメイクとかしないんだもん。違う意味で大人ぶっちゃってさ。

今度一緒に買い物でも行こうかな？

第一章 ことの始まり 08 | c (前書き)

K O S U K E S i d e

まったく教師ってのは辛いよなあ。

どんなにムカついてても生徒殴れないし。

殴った瞬間お縄だもんな。

しょうがないから冗談のフリして殴ってるけど。

あと生徒の質！

まーまったくどうやったたらあんなガラ悪いのが集まんだ……って……

まあ、この高校じゃしょうがないか。

質と言えば、本物のやくざの娘が1人いたな。

23歳のあいつは本物なのか……？　と名簿調べたら色々びっくり。

ま、後輩の牧から電話が来た時点で知ってたけど。

なんでもゲーム会社の社長さん？　資料まともに見てねえから知ら

なかったわ。

にしても経費で学費出すとか余裕だよなー。

社長とは言えいいのかよ？　って思えば、どうやら宣伝らしいし。

校長も許可出すなよって話だけど……つか、この馬鹿校で広告になるのか？

実際会ってみれば、まあ、それなりに社会を経験したかなってレベルの子。

桁違いのガキくせーことは言わないし、身なりもお手本通り。

ちょっと周りからういてるけど、それはしょうがないだろう。

……って思ってたんだけどなあ、先生。

まさかあんな喧嘩っ早いとは思わなかった。

やくざの娘……あー美保だ。美保が呼びに来た時は驚いた。
「あいつが？」って感じだわ。

行ってみりゃ本当に喧嘩してるし。
叱ってみりゃ変な顔するし。

それ見て思ったんだけど……こいつ、別の意味でそこらのガキより
やばいだろ。

職業柄人間によく合うけど……良い歳してあんな濁った目してる奴、
久しぶりに見たぞ。

勘が間違いじゃなけりゃあいつは ……。

第二章 不良Ⅱ怖い01

これからいじめがエスカレートするのかなーなんて思ってたけど、
そうでもなかった。

あの後本当に先生から電話があったらしくて、電話口で牧がへこへ
こしてた。

ていうか……佐伯の奴、牧が先生の後輩で、嬢苑にいるって知って
たんだ。

あの耳うちはそう言うわけか、と今さらながらに気付く。

(まあ、問題はそれを知った龍が何を企んでるかなんだけど……)

全然話は変わるけど、今は体育の授業中。

老体に鞭打ってマラソンタイムだ。

相変わらずきちんと走ってるのは数名の生徒のみ。

先生も特に気にしていないようで、ベンチに座ってボーっとしてい
る。

後ろからあきらかに転ばせようとしてくる気配を感じて立ち止まる。
ガツと足を蹴られた。

(やること小ざっ)

そうそう。

こういう地味ーにくるのは未だに続いている。

一度タマに「いじめられてるの気付いてる？」って言われて頷いた

ら笑われた。

「つーかーれーたあー」

「タマうるさいよ。真面目に走って」

あ、それから、真下くとちょっと仲良くなった。

あの子は馬鹿犬っぽくて話しやすい。

まあ、それも気に食わないって人がいるみたいだけど……

とにかく私のやることなすこと気に食わないんだろうから、気にするのはやめた。

学生時代はあんなに気にしていたいじめ。

実際この年になって学生になると、なんてくだらない悩みだったんだと思う。

「……………」

社会にはコイツらよりずっと陰湿なことをする奴が沢山いる。

それに比べたら、こんなのガキのお遊びだ。

(まー学生には分からないだろうなあー…………締め切り前に連絡つかなくなる恐怖が)

あっちの方がよほど傷つく…………

あれだけは本当に止めてほしい……

「ヒロちゃん何週目？ タマもう走れないよお」

「ぶりっ子やめて」

小さく言えば舌打ちが返ってくる。

「ねえ、なんで真面目に走るの？」

「お金払って授業受けてるから。勿体ないでしょ」

「ふーん？」

心底不思議、と言った表情をするタマ。

なんか昔を思い出してフツと笑えば、怪訝そうな顔をされた。

「真尋」

満面の笑みで走り寄ってくる真下くん。

男子もマラソンらしく、汗をかきながら近寄って来た。

「入学早々マラソンとかついてねーよなあ」

「確かに……」

「……ねえねえヒロちゃんってさあ〜どんな子が好きなの？」

「何いきなり」

どうした。

そういうのは修学旅行でやるんじゃないの？
夜のお楽しみなんじゃないの？

「いいじゃん！ 暇なんだもん」

「だもん……って言われても」

「いいからいいから！ 教えてよあ〜真下くんも知りたいつて」

「ええ！？ 俺……？」

ははあ。なるほどな。

私だって23だ。そこまで疎くない。

なんとなく〜真下くんが私に好意を持ってってくれることくらい分かる。

くっつけようとしてんな。こいつ。

「あ、待って！」

「え？」

「前聞いた……えーと……なんだっけ……ああ、言わないでねっ！」

うーんうーんと困った顔で悩むタマ。

でもこの手の話、私はした覚えが……

「思い出したー！」

パツと明るくなる真下くんの顔。

「年上だ！ タメと年下は全然駄目なんだよねえ オジ様萌えつてやつ？」

怖っ……！！ こいつ……全然くっつけようとしてない……！！
逆だ……！！

「当たり前？」

「え、あ……ああ……」

確実に真下くんを排除しようとしてる。
だって目がマジだ。取り持つ気なんてこれっぽっちもない。
案の定真下くんは「そっかー」って言いながらフラフラと走り去っていった。

「…………あの」

「たまには私も役立つでしょ?」

「…………あの、怖いんですけど」

「怖いのはヒロちゃんでしょうが。興味ないって丸分かりなんだけど」

「え、うそ?」

「目が据わってた」

ええ…………?

そうかな…………?

「まーでも良く隠してるんじゃない? 同じ様な経験ある人にしか分からないと思うし」

「え?」

それってどういう……

「でもよかったじゃん。好きになれる前に排除できて」

「排除って……そもそも私のこと好きかどうかもはっきりしないじゃん」

「本気で思ってたの？」

「……」

「ねえ」

「何？」

「ヒロちゃん私に嘘ついてるでしょっ？」

え……？

「嘘って言うか……黙ってること？」

え……！？

「例えばあ……ヒロちゃんの「真尋」！」

黄色い悲鳴が上がって……というか、その声に聞き覚えがありすぎて顔がひきつる。

「ラブコールでかっ……うぎっ」

「タマって私と2人の時すっごい本性出るよね。あの2人カッコイイと思わないの？」

「思うだけ。好きじゃない。てか、私も本性出すからヒロちゃんのも知りたいなあ」

「それとこれとは話が別だ。しかも頼んでないし」

「やーん意地悪っ」

「ぶりっ子やめて」

「おい、無視すんじゃないやねえよ真尋！……」

そう言っ腕をガッツリつかむ。

走ってたもんだから、思わず転びそうになった。

「たいちゅん……授業中なんだけど」

「知ってるよ。俺もだ」

「先輩サボってていいんですかあ？」

「あ？ いいのいいの。ブタの目の解剖なんだよ。怖えよ」

ああ、うん……

いや、確かに真面目に授業してる所は想像できないけどさ……

「ヒー……ヒーちゃん」

「ああ、チカくんも来たの……」

なんかまたこんな目立つことしちゃって……

こいつら私がいじめられようが関係ないんだろっな。

「ヒーちゃん、アイス食う？」

「いらないし。食べかけじゃん。ていうかサボりすぎ」

「ぎゃはは！ ふられてるし……って痛えな！」

チカくんに殴られてキレるたいちゅん。

もう恐ろしく目立ってる。

だいぶ前に目立たないことを諦めたとはいえ、穩便に過ごしたくな

いわけではない。

「たいちゅん先輩はこんなサボってて留年しないの？」

「計算してつから……大丈夫、だつつの。……あ、と、先輩は、つけなくていい」

変な計算してんじゃないつつの。

「おお、そうだ！俺らは……そんなくだらねえ話……しにきたんじゃ、ねえんだよ」

「はあ……」

「お前、さ、お土産何が良い？　っは……ていうか、一旦走るの止めろ！！」

ありがたい言葉に立ち止まる……けど、現役のくせに体力なさすぎじゃない？

「お土産……って何の？」

「お前、全然……ツハ〜！　い、息切れてねえのな。ムカツク……！」

「そう見えるだけで死にそうなんだけど。で、お土産って何？」

「修学旅行」

ボソツとチカくんが言うと、たまたま近くを走ってた女の子が凄い顔をした。

そしてそのままバーツと仲間の所に駆けて行く。

「……………修学旅行早いだね」

「6月だ6月」

チラツと見れば、向こうで女の子たちが阿修羅の様な顔でこちらを睨みつけていた。

「まだ5月入ったばかりだけど」

「いーじゃねえか」

「センパイ！ それ私も貰えるんですかあ？」

「あ？ お前は駄目だ」

「えゝずるーい！」

タマがそう言つと、たいちゅんが嬉しそうな顔をして私の耳元に口を寄せる。

「お前だけ……特別だ」

小さく女子の悲鳴が上がる。

「あははは！先輩ヒロちゃん落とし入れるの上手すぎ了！！」

「んあ？なんだお前は分かつてんのか」

「分かりますよ」

「つまんねえな」

「たいちゅん」

「あ？」

振り向いてチカくんの顔を見た瞬間、たいちゅんは盛大に顔をひきつらせた。

「たいちゅん、お前近え」

「……あ、ああ……悪い」

「え！？ やだ！ 西條先輩本気モード？ うっそ〜こんな子相手に〜？」

こんな子って……
ていうか本気も何も……
ていうか女子どもの目が……

「来て」

そう言うとチカくんは私の手を引いて歩きだした。
後ろから「ええ〜！？ うっそっそっそ！」と言つタマの叫び声がある。

「……」

「……」

手を引かれたまま校庭の隅にあるベンチに座らされる。

「……」

「お土産、何が良い？」

「いや……知らない」

「何で？」

何でって……あんた状況見えてないの？ 覗き込むのやめて？

「いじめられるから？」

「……」

「じゃあこっそり渡す」

こんだけ大胆に来といてこっそりも何もねーよ。

「……知らないよ」

「絶対？」

「……」

「分かった」

立ちあがって去って行く後姿を見て、ちょっとだけ申し訳なく思っ
てしまった。
いつの間にかたいちゅんはいなくなっていて、赤い髪が1人ポツン

と校庭で揺れる。

(な、なんだろう……この罪悪感……)

「あーあ」

「うわぁー!？」

「断ったりしちゃってえ」

「……だって」

「年上ならもっとと上手くかわせばいいのに」

「……え？」

「ん？」

「年上……って……?」

「……」

「あ、あぁーチカくんがね。いやー年上の考えてることはちょっと違うでしょ」

「……いや、何のことか」

「23歳」

「……………」

な、なぜ……………」

「パパが調べちゃったあゝ」

「……………」

マジ……………かよ……………」

学校には口止めしたのに……………やくざ怖すぎだよ……………
深い深いため息を吐いて、深くベンチに腰掛ける……………っっていうか崩
れ込む。

「……………言わないですよ。言うな」

「……………うん、誰にも言っていないし、言わない」

「……………」

「あははは！　ほんとほんとー！」

いやでも、と笑いながら言って、滲んだ涙をぬぐうタマ。

「どっち付かずは止めた方が良いよ」

「……どう言つて？」

「誰も傷つかないようにするのは無理ってこと」

「……」

「先輩側に付くか、女の子側に付くか」

「そんな子供みたいなこと……」

「それが子供のルールだよ？ まあ、大人もそう言うのあるだろうけど」

「そうだね。どこ行ってもガキ臭い人はいるし、全く持ってその通りだ。」

でも、私は ……。

「ああ、でも先輩側は難しいかもよ？ あの2人、めっちゃ飽きっぽいから」

その一言で、何故かズキンと胸が痛んだ。

(別に……傷つくほど仲良くなつたつもりはない……)

そう思えば思うほどへこむ。

「どっちに転んでも傷つく結果になりそうだけど」

「……タマ……性格悪いね」

「あはは！ 嫌でも、ホント。あの2人、マジで優しくくないよ？」

「……」

「今は優しく見えるだけだから。今度見せてあげる」

何を。

「あの2人……喧嘩すごく強いんだから」

……そう。

でも、そんなの見たくない。

だって、私は不良が大嫌いなんだもの。

「ねえ、放課後デートしない？」

「……放課後は忙しいから」

「会社？」

「……」

「やだ、ちよつとごめんって！ そんな警戒しないで？ 今のは適当に言った」

「警戒ではない」

「……ふーん？」

なんだろう……急にタマがやじづらくなった。子供相手に怒らなくても良いのに。

第二章 不良〃怖い02

「早く早くー！」

……しかも結局放課後デートしてるし……

(龍も龍だよな……何いきなり優しくなってるの)

まさか、あの龍があんな優しい言葉を投げかけてくるとは思わなかった。

めっちゃうちゃタイミング悪いけど。

『週1回来て頂ければ、後はメール見るだけでいいですから。他はこちらで処理します』

正直、へこんでるから会社行った方が良かったんだけどなあ。

放課後ライフ云々言ったのは私だけど……龍は空気読めないなあ。

「……ほらー！へこんでてもしょうがないじゃん！」

「へこんでないし」

「ふーん？」

「ちょ……ちょっとさ、その『ふーん』っての止めてくれる……?」

「何で?」

だってなんか嫌な予感しかしない。

なんだ「ふーん」って。見透かされてるのか私は。

「……まあ、いいや。ちょっと付いてきて」

「……どこ行くの」

「……んふっ」

「行かない!」

「駄目」

「行かない! 絶対行かない!」

「は?」

「……行きます……」

連れてこられたのは美容院で……タマの行きつけらしいそのはキラキラしていた。

歌舞伎町のだ真ん中。

そーいう店のお嬢さん方が行くような毒々しい内装の美容院。

「この子お願い」

「何この子ダッサー！」

「……」

あれ……私……一応お客さんのはずなんだけどな……

「でも元は良いから化けそうね。恰好はダッサイけど」

「それカモフラージュだから！ ヒロちゃん変装してるつもりだからー！」

そう言っつて爆笑するタマを見て、店員は不思議そうな顔をしていた。

「じゃあ、また来るー！」

手を振ってさっさと出て行くタマ。

「た、タマあ……」

呼びかけた声は聞こえてないのか無視したのか、タマは一度も振り向かなかった。

「さーてお嬢さん。どんな風がいい？」

「……何でもいいです……タマが好きそうなので……」

「貴女、主体性ないのねー」

だって美容院苦手だし、貴女達みたいなキラキラな人種苦手なんだもん……

失礼だけど、できるだけ会話とか避けたいんだもん……

「しょーがないわね……お任せコースDXにするか！」

「なんですかその不安なネーミング」

「あはは」

あはは、じゃねえよ。

……どうなるんだよ、私……

* * * * *

はい完成しましたー……

「いいじゃんいいじゃん！ さっすが私！ あのイモっ子が美人になっただわね！」

自画自賛する店員。

鏡の中の私は、完璧にギャルになっていた。でも激しくギャルではない。付けまつ毛が付いて髪がクルクルしてるくらいだ。

「貴女、16の割には大人っぽい顔してたのねえ」

「はは……」

23歳ですから。童顔とは言え23歳ですからね。

「ただーい……わあっー！ー！」

「あ、タマちゃんお帰りー！ どうよー!？」

「凄い凄ーい！！ 超可愛くなってるじゃん！」

「……あ、ありがとう。ていつかタマいつの間にも私服に……」

「照れんな照れんな」

いや、照れる……お世辞でも嬉しい。

「ヒロちゃん、本当は自分が可愛いって分かってんでしょ？」

「いやー実はよく言われるんだよね」

「調子乗らないで」

「すみません」

「会計2万ね！」

「たっか！！！！！」

「友達紹介＋初回で15,000にまけたげる！」

絶対ホってる……！！ それとも美容院ってのはそういうものなの！？
だってこの人、メイクとヘアメイクしかしてないけど……！？
最後に美容院行ったの何年前か忘れたから、値段設定とかよく分からない。

「5,000にしてよ」

「ええ!？」

何言ってるんだこの子……!

いや、確かに高いけど5,000で……!
まかねえだろ……!

「いや……さすがに5,000はないでしょ……一応仕事なんだけど?」

「と思いますよ私も……いいよこれでも金だけはあるから」

「ヒロちゃん黙っててね」

「はい」

そう言つと店員さんを裏に連れて行ってしまった。

やくざ的な交渉をするんだろうか。

お姉さんボッコボコになって出てきたりするんだろうか。
もし……

「おまた〜」

「……っ! お帰りい〜……」

ぼ、ボコボコではなかった……！
でも笑顔が引きつってる……！

「無料でいいって」

無料……！？

お姉さん、勉強しすぎだよ……！
一体裏で何が……

「……聞く？」

「いいです」

タマはニコッと笑って、「だよね？」と言って私の頭を撫でた。

「さ、これに着替えて」

「……これは？」

「プレゼント」

紙袋を覗き込むと、可愛らし……くて露出の高い服が入っていた。

「頼むよタマあ〜……歳考えてえ〜……」

「着ろよ」

「はい」

「そつだよね……せつかく買ってきてくれたんだもんね。
あ、お金……」

「お金いいから」

「え、でも」

「仲良くなった記念！」

「……じゃあ今度私も何かプレゼントする。仲良くなった記念」

「そう言つて笑つと、驚いたような顔をされた。
そしてすぐに頬を染めて照れた顔をする。」

「楽しみにしてる……」

「可愛いじゃん。」

そうしてると年相応の女の子に見える。
私もニコツと笑って、貰った服を抱いてトイレへ着替えに行った。

* * * * *

「…………ふっ」

ジユディオング（分かるだろうか？）みたいな袖のトップスに短パン…………

足の露出が高え…………トレンカかレギンス欲しい…………

「タマあ…………やっぱり…………」

「いいじゃん！」

「足が…………」

「いいじゃん！」

「トレンカとか欲しいんだけど…………」

「いいじゃん！　ね？」

「……はい」

「ね？」と言った瞬間瞳孔が開いた気がした。
まあ、貰ったプレゼントにケチばっかつけるのは大人気ないな……
ここは腹をくくって……
っていつか……

「タマ」

「何？」

「靴とかアクセサリーまでありがとう」

「だってローファーはく気？」

タマは素直じゃないなあ。

「タマ、ありがとう。嬉しい」

「……」

フンッと鼻で笑うタマ。
小さく「行くよ」と言っって店を出た。

後を追おうとして立ち止まり財布を出す。

「お会計」

「あーいいのいいの！ 冗談だからさ」

「私、こう見えて社会人なので、お金取っていいですよ？」

「はあ！？ なんか衝撃的なこと聞いた気がするけど、とにかく気にしないで」

お姉さんは私をグイグイ押すと、「また来てね！ 次は金取るよ！」
と言って笑った。

私は軽く会釈をして、「ごめんけど、二度と来ない」と心の中で言う。

「おっそーい！」

「あ、ごめんごめん」

ブツブツ愚痴を言いながら、タマはすったか歩きだす。

「どこ行くの？」

「ん？ イイト」

どこだよ。

……クラブ的なのは勘弁してね。
ほんと寿命縮んじゃうから。

いや、マジで。

……本当に。

………タマちゃんマジだからね？
なんかクラブの方に近寄ってっつてない？
た、タマ？ タマちゃん。

「ちょっと待った！……！」

「痛っ………！ 何!？」

「どこ行くの!? クラブ!? 未成年は禁止だよ!？」

「……」

「やめて!! 笑って誤魔化さないで！」

片眉を上げて仁王立ちするタマ。

「私の言うことが聞けないの?」

「聞けません」

「……言うねえ」

「……いや、でもマジで無理なんだって」

「何が?」

「……だから、失礼だけど……不良とか……ギャルとか……」

そう言うと、タマは困ったような穏やかな微笑みをみせた。
なんとなく嫌な予感がする。

「じゃあ、なおさら見ておくべきだよ」

「……え?」

それ以上はもう何も言わず、タマは店へと入って行く。
その場で帰ることもできただろうに、私は後へと続くしかないと思
った。

「だいじょーぶ！ 私が守ってあげるからさ」

タマはニツコリ笑って店の人に声をかけた。
私達はすぐにVIPルームへ通される。

「タマ、VIPなの？」

「親がね」

「あそー……」

「何か飲む？」

「じゃあカルーア……あ、ごめん。ウーロン茶」

「いいよいいよ！ 私も飲むから」

「駄目！」

ええ！？ と驚いた顔をするタマ。

「駄目絶対！ 未成年の飲酒とタバコ、私の目の黒いうちは許しません！」

「クラブ来てる時点でアウトでしょ。あ、すいませーん！ カルーアとカシオレ！」

「無視かよ！ お姉さん、今のなしでウーロン茶2つ！」

「あ、ほら来たよ」

タマの指さす方を見れば、小さな人垣ができてバシバシ叩かれていた。

「…………マジで？」

真っ赤な頭と金の頭。

金の方は豹柄がチラチラ見える。

なぜ、ここにいるのだろうか。

第二章 不良II 怖い03

「見せてあげるって言ったじゃん」

「…………え？」

「あの2人が優しくないとこころ」

え、そんなの…………見たくない。

なんでわざわざそんなの見なきゃいけないんだ。
怖くて学校行けなくなるじゃないか。

…………… 本当にそれだけ？

「ヒロちゃん」

「…………ん？」

「色々考え込むより見た方が早いつて」

「……………」

「ヒロちゃんから見たら酷くないかもしれないし？」

タマは「んふっ」と笑って運ばれてきたウーロン茶を飲んだ。
VIPルームから見えるガラス張りの向こうには、仲間達と談笑する2人がいる。

2人はタバコをふかしてはしゃいでいた。

「まあ、見てなって」

そう言ってソファにふんぞり返ったタマの目は、もはや笑っていないかった。
それが余計嫌な予感を煽る。

「今日ね、『紅蓮隊』ぐれんたいがここに来る予定」

「ぐ、紅蓮隊!？」

何だそのいかにもな名前は。

「族」

「……はい!？」

「あれ!？ 知らなかったの……?」

「何が……」

「チカちゅーって族だよ……? しかも頭……あれ、言ったよね?」

……な、なんじゃそりゃ……

「え、あ、そ……それでチカくん達が……紅蓮隊？」

「いや、チカちゅー」「炎華」「えんか」

演歌？

……なわけないよね……

「なーんだ聞いてなかったの……どうりで落ち着いてると……」

「……し、知ってたらあんな仲良くしないし……！」

「じゃあ仲良くするのやめて女の子側に付くの？」

今さら女の子には付けないと思うけど、と鼻で笑うタマ。

「……どっちについたって爪弾きになるんだったら1人で良い」

「……それ、本気で言ってるの？」

「……ごめん……でも……」

「……まあ、いいよ。見て決めなよ」

……でも私、本当に不良が苦手なんだもん……
タマには悪いけど、ギャルだって苦手。
タマの性格を知らなかったら、喰わず嫌いでいつまでも避けてたと思っ。

「……………」

「……………」

それ以降、私達の間には会話は一切無かった。
私はただ下の風景を眺めながら、鼓膜が破れそうなほど大音量の音楽を聞き流す。

* * * * *

どのくらい経った頃だろうか。
にわかに店が騒がしくなってきた。

「……………」お出まし

ボソッと呟いたタマの音が、やたら大きく聞こえた。

第二章 不良≡怖い03・5 | a (前書き)

T a i z o S i d e

第二章 不良「怖い03・5」a

クラブの連中から「紅蓮隊が来るらしい」と聞いたのは昨日の夜中だった。

あいつら最近見ねえと思ったら、コソコソ何か企んでやがった。

「チカあ……そろそろ叩くか？」

「……」

相変わらず俺の言ってることが聞こえてないみたいに無視をする。

「的場ンとこの店だってよ。行くだろ？」

「……」

チラツと俺の方を見て口の端を上げる。

分かりにくいけど、行くって意味だ。

「じゃ、学校終わったらな。俺は学校行って真尋でもからかってくるぜ」

よっ「こらしょうち！　」と言って立ち上がれば、横で立ち上がる気

配がした。

「……何だよ、お前も行くのかよ」

「ヒーに会いに行く」

「……そうかよ」

実際コイツの執着具合はマジで珍しい。

一体あの女の何が良いのだろうか。

確かにそこらの女とは何か違うっつーか……ちとズレてるし面白いけどよ。

そんなハマるか？ ダセエぞ？ あの女。

チ力が相手すんのはいつも社会人のおねー様じゃねえかよ。

おいおい、まさか恋ってやつなのか……？

……まさかな。

* * * * *

あの後、学校に行ったものの、修学旅行の土産の話してすぐ帰って来た。

つーか俺ら最近全然学校行ってねえ。

行ってるけど、授業出てねえ。このままじゃ留年しちまう。

(…………げっ…………したら、真尋と同じ学年になるじゃねえか)

…………まさかチカの奴、それ狙ってんじゃねえだろうな…………

…………いや、ねえか。あいつの親、超怖えし。

つか、チカの野郎あの後何があったか知らねえけど、すげー不機嫌なんだよな。

真尋の奴なんか余計なことでも言ったのか…………？

(今までなら『女ごときで機嫌悪くならねえ』って言えるんだけどよー…………)

何となく言えねえのが怖い。

マジでどうしちまったんだ、あいつ。

「よーチカちゅー！ 久しぶりじゃねえか！」

久々に行った店には、いつもより人数がいた。
紅蓮隊のこと聞いてるからか？
つか、あいつらもよくこんなところに来るな。
誰の縄張りか分かってんだろうに。

「おー久しぶりだな、テンチョー！ 俺には挨拶ねえのかよ」

「おう、久しぶりだな金魚のフン！」

「死ね！」

「……もう来てんぞ」

ボソツと言って隅をアゴで示す。
見覚えのある顔がニタニタ笑っていた。

「んの野郎……やる気満々ってか？」

いやー……間が悪いつて言うかなんて言うか……今日のチ力は機嫌
悪いからなー。

お前ら、骨折で済むように祈っとけよ？

第二章 不良≠怖い03・5 | b (前書き)

Yasuchika Side

第二章 不良≡怖い03・5 | b

ヒーがかたくなに俺を避けようとするから、ちょっとムカついた。しかもあいつ、追いかけてくるのかと思ったたら来ねーし。

なんか俺らのことで色々いじめられてるらしいけど、そんなの気にしなけりゃいい。

……ってのは言いすぎか。

女は面倒臭えコミュニティー抱えてるからな。

でもあいつはそんなの全く気にしない女だと思ってた。

ちよっと浮世離れしてるっつーか……

まあ、なんだ。

ちよっと幻滅。

もういいや。飽きた。

と思ったのに……なんでこんなイライラすんだよ。

たいちゅんはたいちゅんで「真尋、真尋」ってうっせーし。

そんな言っつなら会いに行きゃいいじゃねえか。

そっつーや……

たいちゅんがそろそろ紅蓮隊が来るって言ってたな。

あいつら暇なんだろうな。きっと。

……まあ、偶然俺も暇だしな。
ちよつと遊んでやってもいいけど。

「チカー！ 店行くぞー」

しょうがねえな。たいちゅんは。

1人じゃ寂しいのか。

全くしょうがねえ男だよ。

俺が付いてってやるか。

第二章 不良Ⅱ怖い04

その一瞬、世界が無音になった ……。

ゆっくりチカくんに歩み寄る男。

キスできるんじゃないかってとここまで近づいて、何かを話していた。まるでその会話を周りに聞かせないようにするかのようには音楽のボリュームが上がる。

なんの音楽かなんて全然分からないけど、心臓が無理矢理鼓動させられているかのような感じがした。

スピーカーから流れる低音が体中に響く。

そして照明が落ちた瞬間。

チカくんは相手に殴りかかっていた。

それを皮切りに店の中が一気に騒がしくなる。

あちこちで殴り合いが始まり、血が飛び、嘔吐する人がいた。

それでも中央は開けていて、そこではチカくと男が殴り合っている。

……というか、男が一方的に殴られている。

それを眺めているたいちゅんは笑顔で、殴っているチカくんはもつと笑顔だった。

「……意味分かんないんだけど」

思わずつぶやいた声が部屋に響く。

怖い。

いつだったか、たいちゅんが「女でも容赦しねえ」と言っていた気

がする。

もしかして、あれは本気だったのかもしれない。

「……………え？」

目に飛び込んできたあまりに残酷な光景に吐き気がした。チカくんが相手を抑え込んで、ジワジワと腕の関節を逆方向に曲げる。

声は聞こえないが、相手の顔が歪んで何かを叫んでいた。

「やめて！」

「無駄。防音だから」

後ろから非情な声が聞こえる。

タマはどうしてこんなに落ちついていられるんだろうか。

「チっ…………カ…………チカくんってば……！」

「だから防音なんだってば……………」

「靖親……！」

ガンッと勢いよく窓を叩いた瞬間、ゆっくりとチカくんがこちらを

見上げた。

ゆっくりゆっくり顔が上がり、目が合う。

その瞬間、チカくんの切れ長の目は、驚きでこれでもかかってくらいに見開かれた。

「っ……っ！」

怖くて思わずしゃがみこみ、這いつくばってソファに近づく。
カバンから財布をつかむとお札を何枚かつかみ、テーブルの上に投げつけた。

「……ごめっ……タマ、私、先、帰る……」

タマの返事も待たずに部屋を飛び出し、一気に階段を駆け降りる。
今にでもチカ君が追いかけて来るような気がしたけど、チカくんは来なかった。

それが嬉しくもあり悲しくもあり
……。

何故か私は、酷く落ち込んでいた。

第二章 不良≡怖い04・5 | a (前書き)

T a i z o S i d e

第二章 不良「怖い04・5」a

喧嘩が始まって5分……くらいか？

チカは恐ろしく不機嫌で、恐ろしく強かった。

相手の男はピクリとも動かず、殴る度にかすかに呻く。

「チカ、今日やべーな！」

誰かが面白そうに笑う。

チカが息を切らして関節を外しにかかった時、急にピクリと動きを止めた。

「ン？ どーしたチカ」

俺の問いかけを無視して、チカはゆっくりと顔を上げる。

薄暗い2階に視線をやり、何かを見つけたのかその目は驚きに見開かれていた。

「あ？ チカ……何かいたかよ？」

視線を追っても誰もいない。

強いて言えばVIPルーム、スモークの向こうに人影があるくらいだ。

「……ヒー」

「は!?!」

ヒーってあれか!?

もしかしてあの……だっせえ真尋のことか!?! 学校の?
悲鳴じゃねえよな?

「こんなところにいるわけ……」

そう言いかけた時、VIPルームから誰かが駆けだしてきた。
遠くてよくわかんねえけど、たぶん可愛い女。

見たことねえけど誰のツレだ?

まあ、おおかたこの喧嘩を見てビビったんだろう。

大慌てで階段を駆け下りてきて、出口へと走って行く。

「おーい……どこに真尋が「ヒー」!」

チカはそう叫ぶと、目の前の男を放りだし、その女を追いかけた。
った。

第二章 不良≡怖い04・5 | b (前書き)

Yasuchika Side

第二章 不良 怖い04・5 | b

いつもと全然印象が違う恰好をしたと！。

全速力で追いかけたのに、地下から出た時にはもう見えなくなっていた。

頭の中のずっと奥で……

何かが崩れる音がする。

「……何やってんだ、俺」

ポツリと呟いた声が、自分でもびっくりするくらいに寂しそうで……
思わず苦笑がもれる。

「嫌われちゃったかなあ」

ヒーは不良が嫌いなんだと思う。

まあ、好きな奴なんていないか。

俺、乱暴だもんなあ。

でも、オトモダチには優しいんだけど？

駄目？

とかいって。

俺、超必死なんですけど。

第二章 不良≡怖い04・5 | c (前書き)

R Y U T A R O S I D E

第二章 不良 怖い04・5 | c

だいが様変わりした真尋が会社に駆け込んできたのは、深夜過ぎのことだった。

あまりの変わりように社員が騒ぐが、全て無視して社長室に駆け込み、鍵をかけた。

一瞬静まり返り、一斉に視線が俺の方を向く。

「……私は社長の保護者ではないのですが」

「保護者でしょう？」

「それは手続き上です」

「……」

無言の圧力。

いつもはすぐ従うくせに、こう言う時は誰も俺に屈しない。

「……ちっ」

あの我が儘娘……俺に手間かけさせやがって……

「社長」

ノックをするが返事はない。
ため息を吐いて予備の鍵を取り出し、勝手に開ける。

「入るぞ」

部屋を見渡せば、ソファで情けない顔をして体育座りをしている真尋を見つけた。

「……何やってんだお前……」

「……学校……行きたくない……」

……いや……
……早えだろ。

* * * * *

「いやだつてマジ怖いって……！！ 喧嘩！ 超喧嘩！」

「たかだか喧嘩だろ？」

「違つんだつて……！ 平気で関節外そうとしてたんだつて……！
！」

すっかりビビって縮みあがつた真尋。

もう何を言つても駄目に違いない。

（しょうがねえ奴……）

佐伯から「牧の先輩がいる」と聞いてここに入れたものの、失敗だつたらしい。

少しでも知り合いがいた方がと思つたが、土台こいつには合わなかつたのだ。

（秘書のくせに見誤つたな）

ハーっとため息を吐けば、真尋が息をのんでビクついた。

(こいつ人の感情深読みすぎんだよなあ)

それがプラスに働く時もある、マイナスの時もある。

きっとこういう人間は、生きるのが辛い時が多いのだろう。

しかし、こう言う時でも涙を飲んで鞭打つのが保護者の責任だ。

例え、それが嫌われることになろうとも ……。

「……真尋？」

「……」

優しく呼べば、涙で濡れた顔をゆっくり上げる。

「お前、会社の経費で学校行ってんだろ？ ……分かるよな？」

この口から吐くのは、いつも毒だ。

第二章 不良≡怖い04・5 | d (前書き)

T a i z o S i d e

第二章 不良「怖い04・5」d

マジで真尋がいたなんて全然気付かなかった。

なんでチカの野郎気付いたんだ……？

つか、あいつもまともな格好すりゃ可愛いじゃねえかよ。

何であんなダツセエ恰好してんだ？

(……………じゃなくて……………)

この困った男の機嫌がすこぶる悪い。

真尋を捕まえられなかったのか、恐ろしい形相で戻って来た。

かと思えば、残党を1発で全員押し、さっさと帰って行った。

さすがに可哀想になり、店のに救急車を呼ぶように言って後を追う。

しかし、上に出た時、チカはすでにバイクに乗って走りだしていた。

「おおーい！ 置いてけぼりかよー！？」

……………あーあ。

誰があいつの機嫌直すんだよ……………

「……………俺しかいねえかあ……………」

あいつ放っとくと警察捕まりそうだもんなあ。

ていうか……

なに女一人に熱くなってんだよ……

もしかして、お前マジであるダッセエ女に惚れてんのかよ？

いや、別にいいけどよ……一目惚れ？ そんなんぜってえしねえと
思ってた。

分かってんのか？ あんま周り見ねえとヤバイんじゃないやねえの？

今後狙われるとしたら、馬鹿みてえに強いお前じゃなくて真尋の方
なんだからよ。

「……あいつ、ぜってえ分かってねえな」

暗い未来を想像し、俺はため息をついた。

第二章 不良 怖い04・5 | e

また逃げてしまった。

この辛いことから逃げる癖。学生の頃から全く変わっていない。

『お前、会社の経費で学校行ってんだろ？ ……分かるよな？』

先程の龍の言葉が胸に引つかかる。

言われた瞬間、「逃げてんじゃねえ」って言われた気がして物凄く腹が立った。

凶星だからだろう。

(……でも、嫌な物は嫌なんだもん)

最終的に高校に行くのを決めたのは自分だ。

しかも会社の経費を使って。

いくら社長とは言え、ヤバイことくらい分かってる。

なのに快く送り出してくれた社員達。

「 ……ふえっ 」

情けない声が喉の奥から漏れる。

グツと堪えれば、喉の奥に鈍い痛みが走った。

「……………」

このままじゃ駄目だ。

頑張れ。

まだ大丈夫。

いじめもそんなきつくない。

我慢できる。

大丈夫。

大丈夫……………うん、大丈夫。

大丈夫……………。

「よし！ もう大丈夫！ 全然平気！」

私、
また強くなった。

第三章 理解を示す努力01

朝、会社で待機していると、いつも通りに龍が迎えに来る。

挨拶だけして車に乗り込むと、寝てるふりをきめこんだ。

私が我が儘言っただけで困らせてるのは分かるけど、今話をする気にはなれない。

牧が控えめに「着いたぞ」と肩をつつく。

今起きましたって言う下手糞な演技をして車から降りると、タマが仁王立ちしていた。

「……………」

「おはよう」

「……………」
「お、おはよう」

「来ないかと思った」

「……………」
「いや、さすがに……………」
「駄々こねる年齢でもないし……………」

それを聞いてムツとした表情をするタマ。

「物分かりの良いフリをするのが大人なの？」

「……………」

「そんなのが大人なら、一生大人になんてなりたくない」

「……そう」

そっけない返事が気に入らなかったらしく、タマは余計眉をしかめる。

「どっち?」

「ええ?」

「だから、どっちにつくのって言ってるの」

あ、ああ……そもそもそう言うマレであそこに連れて行って貰ったんだっけ?

色々衝撃がありすぎて、すっかり忘れていた。

『どっち』か……

「タマ」

「何よ」

「それどっちかじゃないと駄目なの?」

「……」

私は、両方がいいなあ。

「大人はどっちかを得る為に片方を諦めるんじゃないの？」

「……………え？ ……さあ……………よく分からないけど、『そんなのが大人なら、一生大人になんてなりたくない』」

何それ。そんなの嫌だ。

両方欲しいなら両方手に入ればいいじゃないか。

「私は欲しい物はどんな手を使っても手に入れる。大人の権力振りかざしてもね」

「……………」

「凄い執着するけど、それがいらなくなるのも早いの」

「……………」

「ねえ、タマ……………大人って、貴女が思ってるほど大人じゃないよ？」

「……………知ってる」

フツと笑うと「本物のやくざより性質悪いよ」と笑われた。

「両方って言うか……まあ、私の害になる女なんていらなただけどね」

「うわ、怖っ」

「それでも女友達は欲しいの」

「ヒロちゃん、性格悪いでしょ？」

「人間そんなものなんじゃないの？ 言わないだけでしょっ」

「普通黙っとくのに、サラッとこっちのことがヒロちゃんだよね」

誰にでもホイホイ言うわけじゃないじゃん。

「……でも怖い物は怖いし……」

「……」

「あんな……血が出たり吐くまで人殴ってるの初めて見た」

「……」

「あんな平気で関節外そうとするなんて、思わなかった」

「……そう」

「だから……なんか……ああ言っつの見せられると……住む世界が違
うなって気がする」

フーツとため息を吐く。

何故かまた涙が溢れそうになる。

「ですってえ」

「え？」

突然の猫なで声。

「マジかー」

と聞こえる低い声。

「…………え？」

校門の影には、チカちゅーが座り込んでいた。

「ま、俺らもダッセエの世界は理解できねえけど？」

(ンなっ…………！)

血の気が引いた。

と同時に物凄い罪悪感と羞恥心を感じる。

ギツと音がしそうなほど睨まれて、思わず足がすくむ。

時すでに遅し、とか口は災いの元、とか壁に耳ありとか…………

とにかく色んな言葉が浮かんでは消えた。

「お前、地味なくせにそんなこと思ってたんだなー」

……は？ ……じ、地味なくせに……だと！？
……ムカツク……！！
謝らなきゃと思ったけど、なんか謝りたくない……！

「陰でしか言えねえなら一生黙ってるってのな」

（そんなの分かってる）

「地味な奴ほどこうだからよお」

（でも、言えない分、心で愚痴って……でもやっぱりすっきりしなくて……）

「だいたいお前さー」うるっせえな金髪……！！」

思いつきりふりかぶったカバンは、見事なまでにたいちゅんの顔面にヒットした。

当たった瞬間、「つてえ！！」と怒ったような声が聞こえる。興奮からハアハア息が上がり、足も手もガクガク震えていた。

「……つてめえ！」

「あ、あんたっ……年下のくせに生意気だっつーの……！！」

「はあっ！？」

「あんなボロボロ殴って……！ 怖いと思わない方がおかしいですよ！？」

「お前、と……っ」

「しかもそんな変な頭の色してるし！ すぐ睨むし！ 空気読めないし……！」

「いや、お前さ……」

「なんでも殴れば解決すると思ってんじゃねえ！ 社会も知らねえガキのくせに……！」

泣きながら一気にまくしたてる。

「ばかつ！ ばかたれ……！」

「……」

「……」

「……」

沈黙が広がり、私はようやく自分の発言のまずさに気付いた。

「……」

そう言って走りだそうとした瞬間、手首をつかまれる。

「は、離してっ!」

「ピーちゃんはどっしてえんだよ」

「離してほしいっ!」

「違いだろ」

「違うくない!」

「そうじゃねえだろうが」

「そうなのっ!」

「ピー」

私を呼ぶ声は凄く優しくして……。

凄く怯えたような、傷ついたような顔をしていた ……。

「お友達やめんのかよ」

「……」

「もう口きかねえのか？」

「……」

ずるい。

私にはっかり聞いて。

あんた達は言わないの？

私にだけ吐かせる気でしよう。

「私……」

「俺はお友達のまんまがいい」

「……え？」

「ヒーちゃんが『絶交する！』 っつたら寂しいんだけど」

何それ……私の物真似……？

「ははは、チ力全然似てねえし」

「ヒー」

「……」

「おい無視かよ。つつこんだのに俺は空気か。真尋も無視すんな」

「俺は言ったぞ」

「……」

「お前は、どうしてえんだよ」

私は……私だってお友達のまんまが良いに決まってる。

でも、友達を続けるにはちよつと勇気がでないというか、怖いというか。

私が敵の立場に回った時、どうつなるんだろつって思ったたら怖い。

だから……あれ、それ……なんで……？ 怖いけど嫌われたくないつてこと……？

「ユー」

何だよ。

「しじぢゃしじぢゃ心の中で喋るくらいなら口に吐せ」

「……私、が……チ力くんとたいちゅんに嫌われたら殴られるかもしれない……」

「はあ！？ 殴らねえだろ？ 俺はクズだけど女は殴らねえよ？」

「前っ……よ、容赦しないって言ったっ」

「じょーだんに決まっつてんだろ……」

「あとっ……チ力くん達と仲良くするといじめられるっ！」

「……お、おう……それに関しては俺様の人気がおさまらねえと、どうしようもねえ」

「それにつ……不良怖い！ 何考えてるか分からないっ！」

「俺はお前らの方がわかんねーよ。何で俺、さっきカバンで殴られたんだ？」

一々合いの手を入れてくれるたいちゅん。

あまり空気が重くならないように……って……そこまで考えてないか……

「ヒー」

「ずっ……」

鼻をすすって返事をする。

「俺もたいちゅんも、お友達は殴らない。お友達から裏切らない限り、絶対に」

「……っず」

「容赦しねえのは本当だけど、それはお友達以外にだ」

「……っぶす」

「あと、いじめられたら言え。俺のお友達は俺が守る。見えてるのは言わなくても守る」

「……っすん」

「何考えてるかわかんねえのは、人種が違いからだ。俺もお前が何考えてるかわからねえ」

「……っずず」

「でも、だからお友達になるんだろ？ 分かり合っ前から拒否すんな」

「……っぐす」

「あと、たいちゅんが殴られたのは、ムカつくからだ」

「っん」

「そこ即答か！ 鼻すすって返事してるかと思ったら、そこは即答なのか！」

「俺らは頭悪いから、これしか方法が分からねえ」

そう言っつて拳を突き出す。

「これが怖えのは分かるけど……例え真尋が裏切るうと、俺は絶対お前を殴らねえ」

……こんな時にかぎって名前呼びやがって……

「他は？ 全部言え」

「……思い付かない」

「じゃあ、他は思い付いたら言え。あと、は……俺が聞いていい？」

「……うん」

ハア……と気の抜けたようなため息。

ちよっと目を泳がせて、戸惑っているような雰囲気。

「……ヒートって何歳？」

「それは俺も思った」

「だ、だよね……まあ、いずれバレるっていつか……ちっさ言っちゃったっていつか……」

「……23」

「……ンン！？」

大げさにたいちゅんが耳に手を当てる。

「……23歳」

「……マジでっ？」

「……」

「アハハハハ！ うける〜」

場違いなタマの笑い声。流石のチカくんも驚いた顔をしていた。

「お前、すつつつつつげえガキくせえのな！！ 精神的にも肉体的にも！」

私は本日二度目のカバン殴りを喰らわせた。

「つてえな〜！ 真尋お前凶暴だぞ！ 口悪いし！」

「たいちゅんがムカつくからしょうがねえよ」

「チカが言っな！」

「たいちゅんはどたーつと道路に寝転ぶと」にしても23か！」と大声で言う。

「ちょ、ちよつと……非公開だから大声出すなっ」

「お前馬鹿だから23にもなつて高校に「違っ」

舐めんな。

馬鹿だけど、そこまでじゃねえよ。

「色々理由があつて……まあ、追々……」

「そうかよ……てか……まあ、あれだよな……今さらだけど……」

凄く困った顔で私のご機嫌伺いをするたいちゅん。

「あの一……敬語とか……使った方がいいんですか……？」

「うわ、気持ち悪い」

「うぜーなお前！」

パシんつと軽く私の頭を叩きたいちゅん。
即座にチ力の容赦ないパンチが脇腹に入れられた。

「……………つづ」

たいちゅんが脇腹を押さえて丸くなる。

「……………つおまえええ……………」

「約束通り、仕返しした」

「あ、う、うん……ありがとう」

なんだ。

なんだよ。

不良って……結構優しいじゃん。

ガキは私の方だったじゃん。

第三章 理解を示す努力 01・5 (前書き)

T a i z o
S i d e

第三章 理解を示す努力01・5

何だかんだで仲直りっつーか……

なんかやたら衝撃的な事実が判明っつーか……

こいつ子供っぽいから全然23歳とは思わねえしな！

まあでもそうと言われて接してみれば、「ああ、大人だな」って思うところがチラホラ。

つってもあれだ。「頭かってえなあ」って言う方な。

へーんに大人ぶってるっつーか、融通がきかねえっつーか。

「あ、わかった、真尋頑固だよな」

「頑固……っ!？」

おいおい、「心外！」みたいな顔しやがって。

お前が頑固じゃなかったら何なんだよ。

つてえ……チ力のやつ鼻歌歌ってやがる……!

珍しいこともあったもんだぜ……

「んはああ!？」

突然奇声を上げて立ちあがる真尋。

「っせえーな」

「授業……!!」

「んなもんとつくに始まってんだろ」

そう言い終る前に、「ヤバイ」と呟くと走り去っていった。

「あ、おーい！ 今から出るのかよー！」

「あつたり前でしょー!! 授業料出してんだからね!？」

なんだそりゃ？

出してんのは当たり前だろ。

まあ、親が払ってっからどうでもいいけどよ。

俺の懐は痛くねエわけだし？

……ああ、こつ言っ所が違っのかもな。あいつはきつと自分で出してんだろっし。

ま、気持ちはこれっぽっちも分からねえけど。

つか、問題はそこじゃねえんだ。

チ力の機嫌が良すぎる。

良いことには全然問題ねえけど、それだけじゃねえっつの？

なんか……最近こいつ……

「授業出て無くね？」

「……」

「……だんまりかよ」

「……」

「そろそろヤバイんじゃないかなあ」

「……じゃあたいちゅんでれば？」

「……いや、お前いないとつまんねえし。留年する気かお前は」

まあ、なんだ。

一応、一応親にお金出してもらってるって認識はあるわけだよ。こんな金髪で喧嘩ばかりして申し訳ねえな、くらいは思ってる訳だからよー……これ以上は迷惑かけらんねえっーか。留年はねえだろう、と。

なんか、超えちゃいけない一線……じゃねえけど……

「留年はまずいだろ……」

「そつ？」

「即答かよ」

チ力がため息を吐いてゆっくり起き上がる。

「……留年したら……修学旅行2回行けんな」

「……おい」

「ヒーと同じクラスになったらどーしよ」

「……おい、まさかとは思うけどよ、まさかとは思うけどお前」

「昼寝」

こいつ……マジで言ってるのか……？ 真尋のために留年……？

嘘だろ、なあ？

ヤバイだろ、普通に考え……え、マジで？ ……なんで？

……おいおい、「冗談だろ？

第四章 不幸の兆し01

遅れて入ったせいかな、全然授業の内容が頭に入っていない。

「……………」

ポーンと外を見てみれば、チカちゃんとたいちゆんが寝っ転がって談笑していた。

(あいつら留年する気かなあ……………)

思い出するのは先程のことばかり。

チカくんの1つ1つ丁寧に答えを聞きだす話し方。

興奮すると混乱して何を言ってるか分からなくなる私としては、非常にやりやすかった。

未だにあの夜のことは怖いけど、完全に悪い人間ってわけじゃないんじゃない……………と思う。

よく警察が「悪いやぐざだけじゃないって本気で思ってるの?」「みたいに言ってる。

確かに甘い考えかもしれないけど、そう思いたくなるのが人情ではないだろうか。

(……………とか言っちゃって)

こう言う考えはやっぱり甘いんだろっなあ。

「見て見て、チ力先輩お昼寝してる！ 超可愛い！！」

うっせーな。糞ガキども。大体授業中にガタガタガタ……

……ん？

「……」

……うん、まあ、うるさいのはいつものことだよな。

そんな騒ぐことでもないか……何そんな怒ってんの、私。最近短気だよ。

「くしゃみしてるんだけどー！ 寒いのかな？ 上着持ってく！？」

「無理無理無理無理！！ そんなことしたら八子の巣でしょー！」

「でも行きたいっ！ 超可愛い！」

……ムカツ。

私ってこんな独占欲強かったっけ。

たかだか友達だけと凄いムカつくわ。

あーあれか。オモチャ盗られた子供心理。私の悪い病気だ。苦勞して手に入れたからか。いや、物じゃないんだけどね。チカくん達は。しかも手に入れてると思ってるけど、手に入れてないかもしれないしね。

「メールすればいいじゃん！」

「あ、そっか！『風邪ひきますよ』って送ろう！」

メール……

「……」

……私、メアド知らない……

「顔が凶悪になってるう」

「うるせえよ」

キャハハと可笑しそうに笑うタマの声が耳触りだ。

「メアド聞けば？ 教えてくれるよお。私、2人ともメルアド知

ってるしい」

教室ではあくまでこのキャラを貫くらしい。

「あんな沢山の女どもが知ってるようなメアドいらねえわよ」

……あ、違うか。今のだと、まるで私が嫉妬してるみたい。

「……ヒロちゃん意外と束縛系？」

「いや、違うから。調子良い女どもがムカツクだけ。芸能人にたかる阿呆どももみたい」

「……それって嫉妬じゃないの？　もしかして恋的な意味で？」

「あーのねえ……この年になるとすぐ恋に結びついたりしないの」

「……ふーん。……席戻ろーっと」

でた、『ふーん』。

なんかムカツク。

第四章 不幸の兆し 01・5 | a (前書き)

T a m a m i S i d e

第四章 不幸の兆し01・5 | a

彼女いわく、まだ恋ではないらしい。

うん、まあ私も恋ではないだろうなっつてのは分かる。

でも、友達にしては嫉妬するなっつて思う。

(付き合ったら面倒くさそ〜)

……え、もしかして彼氏いない歴〓年齢とかないよね？

「ヒロちゃん彼氏いたことある？」

「……」

「……ヒロちゃん？」

「……」

「……ヒロちゃん」

「……」

……うっそ。

そうか……そうなんだ……

……ふーん。

……チカちゅーにメールしょーつと。

「んふっ」

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

To 西條先輩 / 吉良先輩

Sub 大ニユース

- - - - -

センパイイヴ(^^)v

大ニユースですよ

内緒だけど、ヒロちゃん彼

氏いたコトないんだって！

かゝわゝいゝいゝ！！

(*、)(、)(、)

END

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

ちよつと窓の外を見れば、丁度携帯を開く吉良先輩が見える。興味なさげにポーッと眺めた後、満面の笑みで勢いよく起き上がった。

何事が興奮しながら西條先輩に話しかけている。

(ウケル……!!)

しばらく大人しく吉良先輩の話を聞いていた西條先輩。ポケットに手をつ突っ込んで自分の携帯を引っ張り出し、中を確認する。

じーっと眺めた後、こつちを見た。

「んふっ」

ニツコリ笑って手を振れば、なんと手を振り返してくれた。

「キヤー！ 今、手え振ってくれた!!」

(お前らじゃねえよ)

にしても、手を振り返すのは予想外ね。

あの綺麗な先輩、どうやら結構好意的な目でヒロちゃん見てるっぽいし。
何がどうしてそうなったか分からないけど、なかなかどうして面白い事態だ。

（友人としては応援すべきじゃない？）

まだヒロちゃんがなんで私と仲良くしてくれてるか分からないけど……
私は結構あの子が好きなんだよねえ。

チラツとヒロちゃんの方を見れば、難しい顔でノートを見つめている。
時折ハッと顔を上げては不敵に笑いノートを書き込む。

真面目に授業を受ける彼女。

一体どうしてここに入学したのかは知らないけど、不思議な女だと思う。

こうじゃないか、と予測をつけたことが馬鹿当たりする時もある逆もあり。

それは、行動にしても本人の性格にしてもそうで、接していて退屈しない。

なんというか …… あれは、いい暇つぶしになる。

第四章 不幸の兆し 01・5 | b (前書き)

T a i z o S i d e

第四章 不幸の兆し 01・5 | b

サボリを決めて中庭で寝っ転がっていると、ブブブとバイブが鳴ってメールが来た。

そう言えばこの間は着うたが鳴って真尋に怒られたっけ。あいつ頭かてえからな。

ていうか授業中にメールなんてよこすんじゃないよ。

「……」

読み終わった瞬間、短い文面に胸が熱くなる。

「っうおゝい！ チカ！！ なんか面白えことになってんぞ！」

パンつと勢いよく肩を叩いて叩き起こす。

鬱陶しそうな顔はこの際無視だ。

「見るこれ！ 見る！」

わたしたち携帯を覗き込んでメールを見るチカの目が、段々光を取り戻す。

俺を見上げて、面白そうにニヤついた。

「そうじゃねえかな」とは思ってたけどよお！ あ、お前にも来てんじゃねえ？」

携帯を取り出し、じーっと見つめるチカ。

ふっと鼻で笑うと、真尋の教室の方を見て手を振った。

てっきり真尋でもいんのかと思えば、メールの送信者の……あー……なんつったか。

まあ、アドレス交換しただけの女の名前なんて一々覚えてねえよな。真尋の友達だつて分かるだけマシか。

「これ……このこと真尋知ってんのかな？ ……いや、知らねえな」

さーて、どうやって遊んでやろう。

でもあんまちよっかい出すとチカが怒るかなあ……

「……おい、チカさあ……って帰んな！！ 俺置いて帰んな！」

あいつ、最近俺の扱い酷くねえか……？

第四章 不幸の兆し02

「信長の狙いは……ってお前ら相変わらず誰も聞いてねえし……まあ、いいや。で、」

『
』

授業中、急に着メロが流れた。

まあ、いつものことなんだけどうるさいなあ。

大体金払って授業受けに来てるんだろくに、真面目に受けようって気が……

「霧島あ……携帯くらい切っとけよな？ 頼むぜ優等生」

「……ええ！？ 私！？」

コウちゃん先生の呆れた声に慌てて携帯をみれば、確かに私のだった。

「す、すみません……！！」

あれ、おかしいな……バイブにしてたはずんだけど……

「……………」

ディスプレイには見たこともない番号。誰だこの番号。ていうか先生私だけに注意すんなよ。いつも鳴ってんじゃん。

(いや、悪いのは私だけどさ…………ま、いいや)

切るボタンを押して保留にした後、切れたタイミングでマナーモードにした。
するとすぐにブブツとくぐもったバイブが鳴っては切れ、を繰り返す。

(同じ番号…………誰だ…………?)

相手はよほど緊急事態でもあるのだろう。

一瞬会社関係かと思ったけど、それなら龍から一言あるはずだ。

『
』

「……!?」

「…………霧島ちゃん」

な、なんで！？ バイブにしてたのに……！？

先生は会社関係だと思ったのか、特別に電話に出ることを許してくれた。

一応断ったものの「授業中断して迷惑」と笑うとシッシッと追い払われた。

『
』

未だに鳴り続ける携帯を握りしめ、廊下に出る。
きっと相当重要な電話なのだろう。

「……もしもし」

『やっと出やがったな！？』

「……」

『おい、無視か！』

「……なんで」

『あ？』

なんでお前が私の携帯番号知ってんだ……！

「なんでバイブにしてんのに音鳴ったの!!?」

『そりやお前……ってシツコミどころ違くない?』

「恥かいたじゃん！ 龍かと思ったたらたいちゅんかよ!!」

『いや、「相手がマナーモードになってるけど解除するか」って携帯が言うからよー』

「バイブの意味がないでしょう!？ 何のためのマナーモードだ馬鹿!!!!」

信じらんない!

こんなことするくらいだから、相当な理由があるんだろうな!？
ないなら許さない!!

「なんの用!？」

『怒んなよ……え？ ああ、そうそう。真尋が怒ってやがる。……
は？ 違えーよ』

「何、誰、チカくんもいんの？ チカくんも共犯なの!？」

『え、チカ？ チカはいるけど共犯ってお前……あ、で、用事だけ
よ』

「……」

『お前、放課後そこいろよ。迎えに行くから。じゃ』

そう言うと電話は切れてしまった。

.....え、そんだけ？

信じられないっ！

メールで良いじゃん.....！！

『ブブツ』

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

From タマ

Sub 妬くな

- - - - -

電話教えといた(´、´)ノ

自分だけ知らないから妬い

てるんじゃないかなーって

思ったんだけど？

当たった？

可愛いやつ(^ 3 ^) = c h u

E N D

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

お前か……!!

信じらんないっ

しかも教えたのたいちゅんだけ!?

チカくんのも知らないという意味ないじゃん!!

……いや、なんでだ。

いいんだよ別に。知らなくても。

あ。いや、友達なら知りたいか。友達じゃない人も知ってるみたいだし。

……ん？

……いいんだよね、友達で？ 友達なつたよね？

……うん、いいんだよ。たぶん……友達ってどうやって作るんだっけ……

『
』

うわ、またたいちゅんだ。

なんだよ。絶対出ないからな。

『 』
『 』
『 』

「しつこいんだけどっ!？」

『ヒー?』

……なんてタイミング何だろう。

『俺』

「……誰」

『チカくん』

「……そう」

『俺にもヒーの電話番号とメールアドレス?』

「聞いたんじゃないの?」

『だって、ヒーから教えて欲しいんだもん』

……可愛いところあるじゃん。

うん、そうそう。

年下はこう言う所が可愛いんだよね。

恋愛対象ではないけど、こう言う所が……

いや、何すぐ恋愛と結び付けてんだ……

相手がイケメンだからかな。

いかんいかん。なんかつい恋愛脳になってしまつ。学生か、私は学生だよ。

向こうも好みがあるだろうに……じゃなくて……。

そもそも無駄に女慣れしてるからだ。これだから女慣れしてる奴って苦手。

「……いっよ」

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

「良い御身分」

教室戻つての第一声がこれ。女って怖えなあ。

(…………盗聴されてたか…………)

そう言えばたいちゅんとかチカくんとか叫んだ気がする……

(私って…………)

あーあ…………私ってどうしてこう間が悪いんだろう…………。

(…………何もありませんように)

大丈夫だよね？

一応やくざの娘って噂広がってるし。

いや、まあどこまで本気で信じてるか分からないけど…………

「…………」

ま、大丈夫か！

なんもないよ。うん。

「……………」

「……………」

To タマ

Sub Re: 妬くな

……………」

放課後ちよつと残つて。

END

「……………」

しょうがないじゃね……………!!
だつてなんか怖いじゃん!!

第四章 不幸の兆し03

「やだあ、ヒロちゃんビビってるっ?」

「……もうクラスの人がいないから普通でいいよ」

「あ、そ」

結局放課後、何だかんだ言いつつも残ってくれたタマ。私も特にいじめられたりはしてない。

(ふふ……小物め。群れないと何もできないのか)

「で?」

「ん?」

「電話、何だったの?」

「あゝ……なんか残っとけて」

「それだけ?」

「うん」

「それだけの為にあんなしつこく電話してきたの?」

「……うん」

ため息をつけば大爆笑するタマ。

「ウケる……っ！！ 超嫌がらせなんだけどっ」

「いや、全然笑えないから」

「うふふ、何の用だろうねえ」

「知らない。言わなかったし」

『
』

「……何その着メロ」

「シューベルトの『魔王』」

「じゃなくて。吉良先輩？」

「うん ……もしもし？」

『ついたぞー！ 降りて来いよ。1分待ってやる』

「……はいはい」

「お迎え来た？」

私はため息をついてうなずき、ゆっくり背伸びをして席を立った。

* * * * *

ゆっくり歩いて行くと、不機嫌そうな顔をしたたいちゅんがバイクにまたがっていた。

「遅え！ しかもツレ付きかよ！」

「ええ〜！先輩ひどーい！！ヒロちゃんのこと守ってたのにい
！」

「あ？ 守っただあ？」

「いや、何でもないよ。それより用事って何？」

「ああ、用事？ あー……用事な。特にねえ」

「はあ！？」

「何もない……だと！？」

何も無いのに携帯鳴らしたのかお前は。しかも授業中に。
何も無いのに ……。

「ヒーに会いたかったんだけど。駄目？」

「……………」

「うわ」

キモツと言いながらたいちゅんが上体をそらす。

チカくんは何事もなかったかのようにバイクにまたがってこちらを見ている。

「大きなワンコに好かれたねえ」

ボソツとつぶやくタマの声が、凄く楽しそうだった。

それと同時に、私の心の奥にスツと冷たい物が落ちた。

(いやー……………こついう女ったらしっぱいの嫌いなんだよね)

さて、どうしたものか。うーん、急に覚めちゃったな。私、相変わらず嫌な奴。

でも、特に用事がないなら帰りたい。

あゝ……………龍の迎え、断っちゃった……………しょうがない、ダイエットが

てら歩くか。

「じゃあ、私帰るね。また明日」

「は！？ なんだよ帰るって」

「なんだよ、って……用事ないんでしょ？」

そう言えば、なぜか困ったような顔をして「あー」とか「うー」とか言いだす。

「あるけど、別にねえんだよ」

「……うん？ ……何、煮え切らないなあ」

「だから……会いたいじゃ駄目なのかよ……」

「たいちゅん、そういうキャラじゃないじゃん。まして彼女じゃあるまいし」

「いや、彼女じゃなくても……うおっ何キレてんだよチカ！！」

ズルズル足でバイクをこいできたかと思えば、思いっきり蹴りを入れるチカくん。

蹴りを入れられたたいちゅんのバイクには、靴のゴムが溶けてくっついていた。

「あゝ！ 線が……！！ 靴の線が……！！」

「いいじゃん、ヒロちゃん。先輩達と一緒に遊べばあ？」

「ええ？ 2人と……？ 嫌だよ」

「なんでだよ！！ お前さりげなくヒデエこと言っな！」

ハツとしたようにたいちゅんが怒鳴る！

「だって女の子達に色々言われると面倒なもの」

「気にしなけりゃいいだろうが」

「そりゃ男の言い分でしょ。女はそうもいかないの」

そう言うトコが面倒なんだよな

「あと、不良も嫌だけど女ったらしっぱい人も嫌なの」

そう言った瞬間シーンと静まり返り、一拍置いてタマが爆笑しだした。

「あはっ！ ヒロっ……ちゃん……言っねえっ」

「ええ？」

「お前……俺は深く傷ついたよ……俺はそこまで尻軽じゃねえよ。チカと比べると」

実際そうじゃん。

まあ、ハッキリ言いすぎたのは認めるけど。

「……………」

うわ、なんかチカくん凄い顔してるし……

「あーあ。チカの顔！ 女ったらしの代名詞の様な男だから……っ
て痛えよ！」

今度はバイクではなく脛を蹴られるたいちゅん。

「でも！ タマは吉良先輩の噂の方が聞きますよお？」

「マジでえ？」

「毎回違う女の子連れてるって。んふっ」

「まあな。俺様モテっからよ」

そう言つとわざとらしく100%の営業スマイルを浮かべる。

「そう言つ人ってえ……ヒロちゃんみたいな子が付き合つ感じじゃないですよねえ」

再びシーンとなり、たいちゅんがチカくんの方を見て薄っすら笑った。

「まあ、だつせえのには俺らの魅力がわかんねえだろうなあ」

「だつせえって私か。私のことか？」

「他に誰がいんだよ」

「あのね！ 私だつて化粧とかすりゃそれなりに……」

「なるのかよ」

「……な、なるでしょう……」

……え、なるよね？

とりあえず見れないほどではないよね？

「大丈夫だよお！ ヒロちゃんこの前可愛かったじゃん！」

「この前？」

不思議そうな顔から「あー」と言って気まずそうな顔をするたいちゆん。

「あん時な。まあ、確かにいつもとは違う感じだったわ」

「可愛かった？」

「え！？」

「私が。可愛かった？」

あれ、会社のノリで……っていか冗談だったんだけど……なんで動揺してんだよ。

「ええ？ あ、あ……うん、まあ……うん……いいんじゃない？」

うわ、最悪。私が痛い子みたいじゃん……！

なんか年下との会話っていまいち難しい……ていうか今のは年下関

係ないか？

「……な、なんかゴメン……冗談だったんだけど……」

「いや、別にっ……！ 冗談っつか……いや、ホント可愛いは可愛いんじゃないの？」

「……」

「……」

「ぶはっ」

タマの吹き出しに救われた。

「ヒロちゃん、普段そんな冗談言わなそうな感じだから戸惑っつてえ」

「お、おう……まあ、なんか第一印象とは大幅に違うよな。お前」

ええ？ そうなのか？

……そうなのか……

急に態度変えたつもりはないけど、そもそも優等生キャラで行く予定だったんだっただけだ。

それから比べると地はかけ離れた位置にあるからなあ。

「……」

ああ、この空気……

こんなことになるなら最初から……

「まあまあ、ヒロちゃんって本性黒そうだし？」

「なに黒いって……！！」

「ええ〜？ そっじゃーん」

お前に言われたかないわ。

「でもタマ、こっちの性格の方が好きだなあ」

「……え」

「あ、照れてるう〜」

くそっ……！！

年下にいじられる私ってなんなのっ！？

ただでさえ会社で年上に色々言われてるのにっ！

年下は唯一強く出れる人種なのにっ！

「お前、年下には強く出るタイプだろ」

「だったらなんなの？」

「そんなの許さねえからな。俺に偉そうにすんじゃねえぞ」

「は？ ……すみません」

あまりの迫力に即答で謝れば、タマがヒーヒー言いながら笑った。

「……」

「何だよ、その顔」

「うるさいなっ！ あんた年上を敬うって気持ちないわけ!？」

「敬いたい年上なら自然と敬うっつの」

「……」

「あ、今『確かに』って思っただろ？ な？」

「もっいいい」

「あ？」

「……」

あいつ年下のくせに鋭いな……
なんか恥ずかしくなってきたじゃないか。
ちくしょう、こんな日は仕事にかぎる。
メールも溜まってるだろうし、一旦会社に……。

「何？」

「ヒロ、いじけるなよ」

「いじけてねえわよ！」

「いじけてんじゃねえか」

「たいちゅん」

「あ？」

「あんま、ヒーをいじめねーでくれねえかな」

「……」

うわ、たいちゅんのこの顔……！

「……お前、ほんとコイツに優しいのな……なんか好感持てるよ、俺」

「ありがとう」

「褒めてねえ。あとキモイから照れんな」

ここまで露骨だと誰だっけ分かる。

チカくんは私のことを気に入ってるんだらう。恋愛とかいう意味ではないだらうけど。

「チカはモテモテなのになあ……こんなイモみてえのじゃなくてもいいのに」

「おいイモってなんだイモって」

「俺はそこらの女じゃなくてヒーにモテたい」

「やーだ先輩ホストっぽい」

「あ、もしもし龍？ そっち行くから車回してくれないかな。センチュリー以外で」

「おーいどこ行くんだよ！ー！」

たいちゅんが慌てたように言えば、チカくんも不機嫌そうな顔で私の袖をつかむ。

「仕事だよ仕事」

「仕事？ ヒー、ここバイト禁止だけど」

「バイトじゃねえわよ」

ていうか、バイトくらいあんたらだつてやってんでしょ？
見たぞ、この間隣のクラスのケバイのがバイトしてんのを。

「ヒー、なんの仕事してるの？」

「社長」

「……へー」

たいちゅん、信じてねえな。

「ま、真尋……」

うわ、出た……真下くん！
ていうか久しぶりに見た……？

「真下……くん……」

第四章 不幸の兆し04

「あのさー……真尋って今日用事あんの？」

「え、用事？ いや、今から「俺らと遊ぶの」

そう言っつて真下くんを睨みつけるたいちゅん。
お前、何威嚇してんの……

「た、たいつ……吉良先輩達と真尋つてさー……仲良いの？」

「あたぼつよ。俺の真尋に手え出してんじゃねえぞガキ」

「だから何でたいちゅんが答えるの。私に聞いてんでしようが」

「うるせー」

「真下くん勇氣あるねえ」

嬉しそうな顔をしたタマがバシバシ真下くんの肩を叩く。

「い、いてっ……！ 美保痛え！ 何だよ！？」

「何だよはオメエだろうが。真尋になんの用だよ」

「何だっついていいじゃん！ クラスメイトなんだから」

「真尋、お前は黙ってる。俺はオモチャ盗られたよついでムカつくんだよ」

「何それ……」

何それがキじゃん。

「真下？」

今まで黙ってたチカくんが疑問形で真下くんの話しかける。すると面白いぐらい縮みあがった真下くんが、「ふぁい！」と情けない返事をした。

「ヒーに用事？」

「え！？ あ、う……ハイ」

「何の？」

「……」

「何の？」

「……何でもないです」

弱っ！

「いや、別にせめてねえよ。用があるなら言え」

「へ！？」

まぬけな声を出したのはたいちゆんだった。
そしてタマも驚き顔を隠そうともせず晒している。

「意外〜！ 西條先輩もつと拗ねるかと思ったあ」

「俺、そこまでガキじゃねえし」

そう言うとプスっとはっぺをふくらましてそっぽ向く。

「……………あー……………で、真下くん何だっけ？ 向こう行く？」

「あ、ああ、うん」

じゃあ行くこう、と言って手を引き、3人から離れた。
話が聞こえない所まで行ったところで、真下くんが歩みを止める。

「あのね」

「うん」

「気付いてないかもしれないけど」

「……うん？」

「真尋いじめられてんじゃない？」

「ええ？ うん……え？ あ、まあ、気付いてるけど……」

「マジでー!？」

「うん」

「あ、そっか……そうか……ああ、ならいいんだけど……」

「……う、うん」

なんか、「ごめんね？」

「で、さ……その、気を付けた方が良くと思って」

「え？ 何に？」

「え？」

「え？……あ、あー……そこ、までは気付いてない……何に気を付けるの？」

そう言うと、真下くんはハーと深い溜息を吐いた。

「4組の濱野って知ってる？」

「知らない」

「女。ケバイやつ」

「いっぱいいるじゃん」

「う、うん……まあそうなんだけど、あいつが真尋のこと話してた」

「そうなの」

「……なんか、ホントかわかんねえけど、痛い目見せるって」

「……はあ」

何その漫画みたいなの。

そついうのってさ、実際痛い目ってあつもの？

漫画の中だけの世界じゃないの？

「お前、信じてねえだろ」

「いや、真下くんの言ってることは分かるけど……」

「やるからな」

「え？ 何が」

「やるつつつたらホントにやんだって！ あいつはそついうヤツなんだよ」

同じ中学だから分かるとか何とかブツブツつぶやく真下くん。本気で言ってるのかしら。

「特に……濱野はチカちゅー先輩が好きだから……」

「それだけで？」

そう言えば、「はあ！？」って顔をされた。

「あのさあ……分かってねえ……？」

「……嫉妬されてるのは分かった」

「じゃあ……」

「でも、それだけで痛い目って見るの？ 陰口だけなら何も痛くないけど」

「……」

うん、まあ。真下くん達の中では痛い目見るってことなんだろうな。いまいち実感ないけども。

……まあ、大丈夫なんじゃないの？

第四章 不幸の兆し04・5（前書き）

Yasuchika Side

第四章 不幸の兆し04・5

「あいつ急に生意気になったな」

向こう側で真下と話しているヒーを睨みながら、たいちゅんが鼻を鳴らす。

「あれが地でしょ。氷山の一角だけど」

「ほおー……調子乗りやがって」

こいつはこいつで何だかんだ言っつて、ヒーのことを気に入ってるみたいだし。

弟みたいな感じで扱っつもんだから、よくヒーの反感を買っている。

「チカさー俺が真尋にちょっかい出すと怒るのに、真下はいいのか」
「よ」

「うん」

「なんで？」

「あいつは範疇外だから」

たいちゅんが「うわ」と言って苦虫を噛み潰したような顔をする。
爆笑する女……ヒーの友達だっけか？ こいつまだいたんだ。

「俺は用事あんだけどなあ」

「あ？」

さっきたいちゅんは特に用事ねえみたいな感じだったけど。
あるだろ。

遊ぶだろ。俺は遊びたい。

公園で滑り台かブランコ……まあブランコでも何でもいいんだけど、
話さないと駄目だ。

色々聞きてえことあるし。

ていうか何よりあいつが全部話してないだろうし。

きつと自分でも何が言いたいか分かってねえんだらうけど。

「ヒー」

大声で呼べば、真下がビクつきながらこちらをみる。

ヒーの野郎、相変わらず面倒臭そうな顔しやがって。

「行くぞ」

そう言えば、ヒーは見事なまでに顔を歪めた。

第四章 不幸の兆し05

「いや、龍呼んじやったし」

そんな言い訳もあつという間に一掃され、ヘルメットを放り投げられた。

「後ろ。乗って」

無理でしょ。

バイク怖いし。

「無理無理」

ポイツとヘルメットを放れば、不機嫌そうな顔で受け取るチカくん。

「なんで」

「バイク怖い」

「なんでえ！ 真尋バイク怖いのかよ」

ケケケと馬鹿にしたように笑うたいちゅんを睨み、舌打ちした。

「俺、運転上手いよ？」

「そんなん関係ねえわよ」

「うわ、お前ホント口悪いなー……本性出したとたんこれかよ」

ほっとけ。

「ヒロちゃん行ってくればあ？」

タマ……あなた……

「あのねーあなた達、龍の怖さを知らないから、そんなこと言っ
られんだったの」

そう言った瞬間、イラついたようにクラクションを鳴らされ、思わ
ずビクつく。

慌てて振り向いた先には、センチユリーから不機嫌そうな顔を見せ
る龍。

ていうか……センチユリーで来んなったのに……

「龍……あのさ」

「お嬢様早く乗って下さい」

「いや、その……」

「貴方が龍さんく？」

アホそうな声でタマがニコニコ笑いかける。

「ええ」

龍が片眉を上げて「誰だ」と意思表示をすれば、「ヒロちゃんの友達です！」と笑う。

「ヒロちゃんシャチョーさんなんでしょ？」

「……」

怖っ！

この龍の無言の圧力！

「いや、だかつ……だから好きでバレたわけじゃ……」

「社長、どこまでバレたんです」

「……取り合えずここにいる人間には……」

「ちっ……つかテメエ身内にもバラしたろ？」

「え、いやだつて……」

「俺が『言つな』つたのは身内も含めてなんだけどな？」

「で、でも……」

社長つて本当だつたんだ！ と嬉しそうに笑うタマ。

マジでか！？ と驚きたいちゅん。

チカくんは相変わらずポケっとしてる。

「……まあ、そんなわけだから。深くは聞くな」

「なんで？ 教えてよ、ヒー」

「なん、でつて……」

チカくんが本当に分からなそうな顔で首をかしげ、私の手をつかんだ。

「駄目なものは駄目なの！ 分かる？」

「……なんか大人みたい」

「大人なの」

「……」

「何その微妙な顔。全然腑に落ちてないでしょ」

「社長、早くして下さい。来るって仰るので会議を入れたのですが」

「え、何の？」

「例の件です」

わー例の件か。

「……」

「……」

「……例の件って何の件だっけ？」

ピクッと龍の米神が動き、空気の温度が1〜2度下がった。
でもさ、普通分らないでしょう!?

映画かドラマじゃあるまいし!!

「詳細は車の中で」

「はいはいよー」

「え〜ヒロちゃん本当に帰るの?」

「うん」

「西條先輩が『遊ぼー』って言ってるの?」

「うん」

「薄情者!」

「だってお仕事だもの」

「……ふーん」

「だからその『ふーん』やめてっつてよ!……!」

「……社長」

「あ、はい、すみません」

「なーんか社長なのに腰低い」

しるせいによタム。

「じゃあね、そんなわけなんで帰るよ。あたしゃ」

「しょうがないかー……また明日ねえ」

手を振るタマに笑顔で手を振った瞬間 ……。

私は西條先輩に拘束されていた。

「きゃあ〜 先輩だいたーん！」

「……西條先輩、離して頂けますかねえ」

「嫌」

うわ、ほら……龍がため息ついてる……！

「ハグ」

「は？」

「バイバイのハグ」

「……ああ、そう」

「ヒールは？」

「へ？」

「俺にハグしてくれねえの？」

「……チカくんがしてるからいいじゃん。ていつか離してよ鬱陶しい」

「ヒールもしてよ」

んもー……面倒な子だなあ。
いや、ハグくらい海外のクライアントもするけど、そう言うことじやな……。

「うぐえっ！？」

ギョツと締まる首。

あっという間に車の中に押し込められ、凄い勢いでドアを閉められた。

龍が何事かチカくんに話しかけ、運転席に回って車に乗り込んでくる。

絶対零度の空気を醸し出しつつ、車は出発した。

「これ読んどけ。あと、取り巻きは躡けとけ」

「……はい」

きつと……私は一生籠に逆らえない。

第四章 不幸の兆し05・5 (前書き)

Ryutarō Side

第四章 不幸の兆し05・5

コイツを迎えに來ただけのはずなのに何でこんな時間くつてんだ。
ダラダラくつちゃべって一向にお喋りが終わる気配がない。

「……ちっ」

チラツと見た腕時計。

会社を出てからすでに1時間半経っていた。

「ハグ」

「は？」

「バイバイのハグ」

「……ああ、そう」

「ヒーは？」

「へ？」

「俺にハグしてくれねえの？」

「……チカくんがしてるからいいじゃん。ていつか離してよ鬱陶しい」

「ヒューもしてよ」

ここまで来て、温厚な俺も我慢の限界が来た。
時は金なり。

学生には分からねえかもしれねえが、社会人は時に1分1秒を争う。
争うと言っても学生の比じゃないくらいにだ。
特に、今がそれ。

今日は海外事業拡大の大事な打ち合わせの日。
つってもこの馬鹿は忘れてるかもしれねえけど……
元々呼び出そうとしてた所に電話があつて、珍しく褒めてやろうか
と思えば……

「うぐえっ!?!」

首の後ろを掴んで車に押しこむ。
その瞬間、生意気にも目の前の赤髪が俺のことを睨みつけて来やが
った。

「悪いな。俺もこいつも遊んでる暇ねえんだ」

「遊びじゃねえよ」

暗に『近づきすぎるな』と言ったのが分かったらしい。

「そうか。じゃあ「ヒー」の意見も聞かずに行動制限すんなよ。おっさん」

「……」

……ふーん。おっさんね。

せつかくいいこと教えてやろうと思ったけど止めた。

「これが“行動制限”かどうかなんてな、ガキのうちは一生分からねえよ」

おーおー

悔しそうな顔しちゃって。

そそるじゃねえか。

まあでも、かまってる暇ねえし。

「じゃあなガキ。あ、そうだお前。まさかとは思っけど『真尋の話聞いてやんなきゃ』とか思ってたねえよな？ 中途半端なら止めとけ。こいつはお前が遊べるような女じゃねえよ。ガツチガチの鉄壁女だから無理に距離詰めると嫌われるぞ。特にコイツ、男の中でも軽そうな男が一番嫌いだから」

大人気ない挑発をしながらフンッと鼻で笑い、運転席へ乗り込む。

「これ読んどけ。あと、取り卷きは賤けとけ」

「……はい」

投げつけた書類は真尋の顔にあたり、バサリと足元に落ちた。のろのろした動作で拾い上げて眺める真尋。段々眉根が寄って、明らかに不快そうな顔をしだす。

「……業務委託？」

「ん」

「なんで？」

「備考欄」

「……」

再び書類に目を落とし、さらに眉根を寄せた。

「……あの狸親父」

チツと舌打ちしつつ、真尋は深々と椅子に身を預けた。

第四章 不幸の兆し06

狸親父こと迷プロデューサー坂木。

彼は本当に困った男だ。

今回もこの案件は自社でやると言っていたのに、いつの間にか委託している。

「個人プレイはすんなったのになー『ほづれんそう』は基本だろ
うに」

「あいつはそれ以前の話しだろうが」

きつと乗っ取ろうとしているんだ。

社長が若すぎると前々から苦言を言っては難癖つけてくるし。

どうせ今回のもパフォーマンスだろう。

あーそう言えば事業開拓とか言って勝手に会社の金使ってたの思い
出した。

くっそー腹立って来たぞ。

取引先の会長の甥じゃなかったら即首切るのに。ていうか警察に付
き出すのに。

「……首切っちゃおうかなー」

「そう簡単にいきや苦労してねえよ」

「だよねえ」

頭の痛い問題だ。
ただでさえ学生生活が大変だと ……。

「……………」

「その気持ち悪い着メロ早く止める」

(嘘、何で……………)

携帯のディスプレイには『俳通知』と表示されている。
何が面白いのか、あいつは自分でこの名前を登録して爆笑していた。
『俳通知』と『俳通知』をかけているんだと胸を張っていた気がする。

(ああ、でなきゃ怒るだろうなあ……………)

アイツとは昔からウマが合わない。目が合う度、酷い目にあっていた。
つまり、私の最大の敵ということだ。

「……………も、もしもし」

「出るの遅いんだけど」

「……どちら様でしょうか」

「ああ？」

くそっ……

なんでこいつは女なのにこんな口が悪いんだろう！

しかも年下のくせに偉そうだし……！！

「まーひろちゃん」

「……なに」

「お金かしてえ」

「……」

まあ、予想はついてたけどね。

「自分のお兄ちゃんに頼めばいいじゃん。高給取りなんだから」

「貸してくれるわけないじゃん。つか、あんたの方が高給取りでしょ？ 社長さん」

「経営者って意外と貰ってないんだからね。そんなの一部の大手企業だよ」

「ふーん。で？」

「……」

「ていうか前期は過去最高売上だったんじゃないの？」

く、くそ……腹が立つ……

「いや、だから」かせ」

そう言つて龍が携帯を取り上げ、車を路肩に止めた。

慌てて耳を押さえれば、せつかくふさいだのも意味ないぐらいの音量で怒声が飛ぶ。

「てめえはまた真尋にたかつてんのか！！」

キーン ……と耳鳴りがして、思わず肩をすくめる。

普通なら縮みあがるであろう怒声。

しかし、電話の主であり龍の妹である『俳通知』は、これくらいではへこたれない。

(ああ……また私が怒られる……)

『カナエ』って名前は『願いを叶えてもらえる』って意味なんだから』

カナエはそう言って一度も譲ったことが無かった。

正確に言うと、私が折れてたわけだけど……

カナエはお嬢様で、いつでも自分の願いが叶うんだと思っている。そして実際そうだ。

(でも嫌いになれないんだよねえ)

カナエは可哀想だと思う。

きっと世間に出たら苦労するだろうから。

もっと言えば、厚かましくも同情しているんだと思う。

「あいつはお前にだけ我が儘なんだ。あんま甘やかすんじゃないよ」

え？ ああ、なんだ。

そうだったの。

「え？ 何どう言つて？」

「そのまんまだろ。お前にしか我が儘言わねえし」

「何で!？」

「さあ。お前の欲しい物は全部欲しいんだろ？ かまってるほしいんじゃねえの？」

ええ？

何それ迷惑……

そ、それ万が一私に好きな人ができたら盗ら……

「お前は一生男なんてできねえから、そう不安がるな」

「そんなこと思ってねえわよ!!!!」

「へえ」

ムカツク!

なんか凄いムカツク!

「まあでも……お前の男になる奴は大変だろうなあ」

「……知ってるよ」

「知ってたのか」

「……」

「だって龍さんによる嫁審査通らないと駄目ですもんね」

「だわああっ!? びっくりした……!!! いつからいたの!?!」

心臓が破れそうなほど鼓動する。

大きい図体を精いっぱい縮めながら、肩を揺らして牧が助手席にいた。

「どうやったたらそんなデカイ図体隠せるの!? 全然気付かなかつたけど!?!」

「どうやったたらこんなデカイ図体見逃すんだよ」

ため息を吐く龍に腹を抱えて爆笑する牧。

「ていうか社長、それだけじゃねえし……!!」

ヒーヒー言いながらタメ口になる牧。
最近たまにしか敬語を使わない。
敬語とか上下関係とか根本的な意味で言ったら気にしないけど、な
ぜか牧はムカつく。

「恐ろしくガード固いからなあ」

「……何それ」

「分かってるくせに」

「……」

「社内の男どもの猛アピールさらっとかわしてますよね」

「職場に恋愛事はない」

「あ、ひでえ！ 俺、大恋愛の末結婚したのにい」

「私がつてこと！！」

「あんまいじめんな牧。責任の一端は俺に無いこともない」

「珍しい、龍が庇うなんて」

「ぶはは！ 龍さん、社長のお兄ちゃんっすからね。男の排除の仕方と言ったら……」

ヒィヒィ言いながら龍に殴られる牧。

ていうか排除……まさかとは思ってたけど……

……龍、私を一生独身のままにさせる気……？

「別にお前を一生独身にさせる気はねえ。ただ、お前はそこらの男じゃ駄目なんだよ」

「何それ」

「面倒くせえお前を無条件で受け止めてくれる奴じゃないと駄目ってこった」

何を知った風に……

「俺にとってお前が恋愛対象になる日は一生来ねえけどよ」

「……あっそう」

「それでも兄貴面くらいさせる。お前の青春潰したの俺のせいらしいし」

「……」

……全く……昔から龍は私に甘い。

「そしてリュウは卒業しろ」

「嫌」

即答すれば再び大爆笑する牧。

「まーだ言ってる!」

「牧は黙ってて」

「お前な、リュウに固執していると本当に一生」いいの!」

それならそれでいい。

どうせ、私を受け止めてくれる心の広い男なんて一生現れないんだから。

王子様は待ってても来ない。

そんなの、とっくに気付いてる。

でも、自分から探しに行くなんてカッコ悪い真似、出来るわけない。

だって傷つきたくないんだもの。

第四章 不幸の兆し 06・5 | a (前書き)

T a i z o S i d e

第四章 不幸の兆し 06・5 | a

「走りに行く」

珍しくチカの野郎がそう言う。

そこらにいた男に携帯であちこち連絡させて、数十分後には辺りは爆音に包まれていた。

「たいぞー」

「あ？」

「チカのヤツ、機嫌悪いの？」

「おう、近年稀に見る機嫌の悪さだ」

「マジか。お前難しい言葉知ってんなー」

「花田は女のケツばっか追いかけてっから馬鹿になっちまったもんなあ。ちったあ勉強しろ」

「うるせえよ。で？」

「あ？」

「何で機嫌悪いの？」

なんで？
なんでってそりゃー……

これ、言っいていいのか？

「女か」

「お前はアイツが女ごときで機嫌悪くするようじに見えるのか？」

「全然」

「だろ？」

「でも女だろ」

「……」

「ほーら女だ！ ででで？ 何？ どの女？ この間の金髪か？」

「……俺は口の堅い男なんだよ」

「花田」

「……ッ!？」

チカの呼びかけに面白いように飛び上がる花田。

「お前、ケツ」

「ええ!？ マジで!？ 岡田がやるんじゃないの!？」

「花田はケツ」

「俺がケツみたいな言い方すんな!」

「変わんねえよ。ケツみたいなものだろ」

「お前な……」

ブーブー言いながらもバイクにまたがり、後ろの方へ走って行った。

「なーチカ」

「……」

「お前さー……」

「……」

「……やっぱりや」

「……」

「……なあ、気になんねえの!? 『やっぱりや』って言われて気になんねえ!?」

まるで俺のことなんて見えてないみたいな……つかいつものことだけど。

そんな顔で口元だけ少し歪めてエンジンをふかした。

「俺、先頭走っちゃおうかなー」

「え、マジ……?」

またフツと笑うと、それ以上話すことは無い、と言った感じで一気に走りだす。

「おおい!! お前いつも真ん中だろー! 腰抜けの様に隠れてんじゃねえのかよー!」

あいつ何なの!?
今日どつしたの!?

「待てよチカ！ お前が先頭行くと誰も付いて来れねえっつの！！」
慌てて追いかける物の、チカの姿はすでに小さくなりつつあった。
周りも慌ただしくその背中を追いかける。

「スピード出してえなら田舎行け田舎！！」

遙か後方で大量の赤いライトが光る。

「チカ~~~~！！」

大声で呼びかければ、一瞬こちらを見た。

「お・い・て・け・ほ・り！」

後ろを指させば面白そうに笑うチカ。
徐々にスピードを落とし、ようやく一般市民に迷惑な速度になった。
まあ、元から迷惑な速度だったけどよ。

「花田は？」

「お前がケツつったべ！？」

「そうだったけ？」

何だこいつ！

しかも言ったきりだんまりだかな！
特に興味はねえんだよ、こいつは！

* * * * *

どのくらい走った頃か、急に聞きなれた声が聞こえてきた。

「チカあ」

「うおーい！ 花田！」

「あ？」

「あ？」「じゃねえだろ。」

「お前、ケツだったべ！ 何でここにインだよ！！！」

「いや、伝言伝言！」

可笑しそうに花田が笑う。

「次の角ンとこ、コンビニ。解散」

それだけ言うと、花田はスーツと後方へ下がって行った。

「あのコンビニか……店員ババアだかなー。つか、何でアイツが解散決めんだよ」

文句を垂れつつコンビニへ流れ込む。
すると、すでに連絡が行きわたっていたのか、どんどん散っていった。

「うわー花田の言うとおりにしてやがる！ チカお前には威厳はねえのか!？」

「……………」

俺を無視したままタバコを取り出して吸うチカ。
最近吸わねえなと思ったら、また吸いだしたらしい。

「いよーう!」

「花田! お前なんで勝手に解散してんだよバカ!」

「『チカが解散って言った』って言った」

「そうじゃねえよ! 言っただけし!」

「でも思ってたろ?」

「んなこたねえよ! だろ?」

睨みつけるようにチカを見れば、プスッとタバコの煙がチカの鼻から噴き出た。

「ほーらな」

「……」

なんだよ。

なんなんだよコイツら。

「拗ねんな、たいちゅん。俺はお前が一番好きだから」

「拗ねてねえよ!！」

まあまあ、とか言いながらヘラヘラ笑う花田。

チカの肩をポンポン叩きながら、バイクのエンジンを切った。

「チカは考え事してろ? な? 俺はたいぞーと話してるから」

「俺は花田となんか話すこたあなんもねえ!！」

「拗ねんな、たいぞー」

「拗ねてもねえ!！」

ハハハ、と笑う花田の音が、やたら大きく響いた。

第四章 不幸の兆し 06・5 | b (前書き)

H a n a d a S i d e

第四章 不幸の兆し 06・5 | b

「ふーん。で、その女はイケメンチカから逃げ回ってる訳か」

「チカだけ……から逃げてんのか？　なんか俺からも逃げてるけど」

「お前も逃げられてんのかよ！　ウケル！！」

そう言っただけで笑えば、顔をしかめて殴りかかってくるたいぞー。
こいつってすーぐ怒るかなー。
さっきも俺に妬いてたし？

「男嫌いなのかな」

「そりゃねえだろ」

「わかんないぞー女なんて。特にそう言う総じて『よく分からん女』
つてのは」

「はあ？」

その方がよく分からん、と言った顔のたいぞー。

「案外、病んでんじゃねえの？　関わるとめんどくさそー」

「あいつがあゝ!?!」

「ないない! と言って馬鹿にしたように鼻で笑い、タバコを取りだした。」

「でも話聞いてつとそんな気がしなくもねえんだけどな!。もちろん会ったことねえから一概に言えないけどよ。」

「俺、会いに行こうかな!」

「ええ? 誰に? ……え!?! 真尋にかよ!?!」

「そそ」

「やめとけやめとけ!」

「妬くな」

「妬いてねえ!?!」

「こいつおもしれえな。」

「げっ!?!」

俺の向こう側を見たたいぞーの顔が盛大に歪む。

「ラフレシア……」

「ラフレシア？ あゝ」

視線の先を追ってその姿を捕らえる前に、甘ったるい香水の臭いが鼻を刺激した。

「あゝ臭え！！ すげえ臭え！」

苦笑すればたいぞーがさらに嫌そうな顔になる。

こいつはチカを盗りそうな奴全てに絡むからな〜なんて思ってたが、案の定横で悪態をつき始めた。

「お前さー、その……なんだっけ？ 真尋？ その子にもそんな態度なわけ？」

「あ？ 真尋？ ンなわけねえだろ。真尋は弟の様な女だよ」

「なんだよそれ」

なんか本人が聞いたなら怒りそうな台詞だ。

てつきりチカを盗られるのが嫌で冷たく当たってるんだと思ってた。こいつはチカに群がる女にも愛想良くしてはいるけど、目は絶対笑ってない。

そのたいぞーに「弟の様な」と言わせるとは、その真尋って女、よっぽどたいぞーのお気に入らしい。

「面白そうじゃん」

「何が」

「別に」

「……あ！ 真尋だろ！！ 駄目だかな！ お前絶対え来んなよ
！！」

そう言って癪癢を起こすたいぞーを見ながら、挑発するように笑えば面白いくらいいたたいぞーが反応する。
たいぞーのこう言う所が可愛いんだよな！。

第四章 不幸の兆し 06・5 | c (前書き)

T a i z o S i d e

第四章 不幸の兆し06・5 | c

まさかこんな辺鄙なところのコンビニにラフレシアが来るとは思わなかった。

「ラフレシア？ あゝ」

俺の見てる方を見て、可笑しそうな声を出す花田。
視線の先には今時のギャル。
たぶん、可愛い方だとは思う。すげえ臭えけど。
名前はあれだ……確か濱野。

「あゝ臭え！！ すげえ臭え！」

「お前さー、その……なんだっけ？ 真尋？ その子にもそんな態度なわけ？」

「あ？ 真尋？ ンなわけねえだろ。真尋は弟の様な女だよ」

「なんだよそれ」

「面白そうじゃん」

「何が」

「別に」

「……あ！ 真尋だろ！！ 駄目だかな！ お前絶対来んなよ
！！」

「あの娘、可愛いのに香水付け過ぎなんだよな」

「臭え！ ハー！！」

「聞こえんぞ」

「聞えるように言っただよ」

あ、チカ。

そっだ忘れてた。

あいつとチカは合わせちゃだめなんだ。

「おい、チカ帰るぞ」

「チカくん、久しぶり」

……空気読めよブス。

「悪いなー。俺らもう帰るんだ。な、チカ」

「たいぞーくんも久しぶり」

シカトだよ。

マジで空気読め。

いや、読んでんのか？ 読んでの無視なのか？

「なんなんだよお前。俺ら帰るつってんだろ」

「ひどーい！ 久しぶりに会ったのに」

うるせえ。

「ね、チカくん。最近学校行ってるんだって？」

「……ん」

「偉いね」

「……」

何が言いてえんだこの女は。

この空気の下がり具合がわからねえのか。

つか、まだ付きまとしてたんだなコイツ。

何回かヤったくらいで彼女面かよ。

チカもチカだ。んな節操無しだからこんなのに付きまといられるはめになんだよ。

自業自得だ。バカ。バーカ。

「チカくん学校で何してるの?」

「勉強だよ勉強!」

「私が誘っても全然遊んでくれないんだもんなあ」

「当たり前だろ! 勉強が忙しいからな!」

「ねえ、今度ご飯食べに行かない?」

「行かねえよ! 勉強が忙し」ねえ、何でさっきからたいぞーくんが返事するの?」

ブハッと噴き出す花田。

「ごめんなー、こいつ妬いてんだよ」

「へえ? そうなの?」

「妬いてねえから!」

「ふーん……そう言えば、あれ本当?」

「あれ? ……ってどね?」

花田が興味なさそうに聞けば、ラフレシアがニヤツと笑った。

「チカくんが女の尻追いかけまわしてるって」

そう言った瞬間、花田が再び大爆笑する。

チカはチカでポーっとコンビニの中を見つめて、心ここにあらずだ。

「ああ、そうだよ。お前よかいい女だから諦め……」

その時、コンビニの中にいる真尋の姿が目に入った。

第四章 不幸の兆し07

「外、怖い人いるから、まだ中にいなさい！」

そうおばちゃんに言われて、私は雑誌を読んで待機していた。しばらく爆音を響かせていたものの、あっという間にいなくなる。さて、出るか。

と思った瞬間、私は別の意味で出れなくなってしまった。

(なぜ……)

街灯に照らされてキラキラ光る赤髪。

それは、橙色の光を浴びて、燃えるような色彩を放っている。

風でなびく髪をポーッと見ていたら、目があった気がした。

慌てて店の奥へ引っ込む。

(いつ帰るんだろう……)

なんであそこにいるんだろう。

なんでバイクなんだろう。

なんでこんな時間に……さっきのブンブンも仲間なんだろうか。

なんでブンブン……？

族ってのは本当なのかい？

ていうか……なんで……

なんで……あの女しな垂れかかっているんだろう。

ああ……あーそうか。

(彼女いたんじゃない)

だから女つたらしは嫌なんだ。
危ない危な……

いや、危ないも何も別に好きじゃないからいいんだけど。

(……)

よし、帰ろ。

「あんだ、まだ外に怖い人いるよ！」

「あ、知り合いじゃないですけど知り合いみたいな感じなので大丈夫です。ありがとうございます」

にっこり笑って外へ出る。

この時期にしては暑い空気が流れ込んできた。
ふと顔を上げれば、4対の目が私を見ている。

私は何でもないふりをして視線をそらし、歩きだした。

「ふーん、貴女が例の子なんだ」

鼻につく嫌な臭い。

甘ったるい声のせいか、臭いがいっそう増した気がする。

「ちよつと無視？」

え、私？

掴まれた腕。

女の後ろではたいちゆんが馬鹿みたいにオロオロしている。

「貴女、噂の子でしょ？」

「ええ？ 何？」

「だから」

「そいつは関係ねえよ」

低い声が空気を振動させる。

「……ふーん」

納得してなさそうな声を上げ、女は私の腕から手を離れた。

「じめんなさいね」

「……いえ」

私は再び歩き出す。

「うん、まあそうね。こんな子、チカくんが構うわけないし」

「……」

「半袖短パンノーメイク」

「……」

「で、サンダルにボサボサ頭？」

「……」

「こーんな時間に大量のスナック菓子とアイス？　もしかしてノーブラ？」

「言いたいことはそれだけか。
帰るぞ。」

「思わず足止めちゃったじゃないか。
でも大人だからスルーしてあげる。」

「ぶすっ」

よし、今笑ったのはたいちゅんか。

明日覚えてる。

しかもチカくんもたいちゅんも助けしてくれないし。いや、最初に知らないふりしたのは私だけどね？でも、今日はすごくイライラしてるんだ。

「おねーさん」

もし喧嘩売ってるつもりなら ……。

「喧嘩なら買っけど？」

そう言った瞬間、あからさまにたいちゅんの顔がゆがんだ。

「おねーさんやめときな」

誰だお前。今度は緑頭か。なんで不良は頭がカラフルなんだ。あれか？ 私も青かピンクにでもすりゃ舐められないのか。

「この娘、空手やってるから、強いよ。つっても男には敵わない
だろうけど」

何がおかしいのかニヤニヤしながら臭い女を指さす。

「おねーさん非力そうだから負けちゃうよ?」

「そんなの知らない」

この女の空手がどんだけ強いのか知らない。

緑頭の名前も知らない。

でも、ムカつくものはムカつくのよ。

大人だって何でも我慢できるわけじゃない。

特に、私はまだ大人になり切れていないんだから。

目の前で薄っすら笑う女を見つめながら、私は眉をしかめてつぶやいた。

「臭い」

その瞬間チカくんたいちゅんが大爆笑しだす。

カツと目の前の女の顔が赤くなり、バシッと頬に一発食らう。
姉妹喧嘩で叩かれ慣れてるからいいけど。

けど……

「ギャハハハハ！　　すげー叩かれてる！　　うわ、ほっぺた赤えし！
」

（たいちゅん覚えてるよ）

お腹を抱えて苦しそうに笑い転げる2人。
緑頭も困ったように笑っていた。

（なんか私が弱いのに手え出したみたいになってる……！）

よーし。

子供だからって容赦しねえ。

今度こそ大人の怖さを教えてやんよ。

「ごめんなさいね？　　でも手加減したから大丈夫……」

バシンと重い音が響き、「ウ」っという声とともに女がヨロヨロと
よろける。

辺りはシンと静まり返り、たいちゅんと緑頭の引きつった顔が街灯に照らされた。

「ごめんなさいね？ でも手加減したから大丈夫でしょう？ 一発は一発だし」

女は赤くなったり青くなったりしながら口をわなわなさせる。

やがてキツとこちらを睨んだかと思うと、思いつきり手をふりかぶった。

鈍い音がしてその女の手をチカくんが握る。

「離してよ！！」

そしてそのままその女を抱きしめ、「もうやめとけ」と可笑しそうに耳元でつぶやいた。

* * * * *

色々考えてたら、いつのまにか真っ暗な路地を歩いていた。

あの後、大泣きする女を放って、私は帰って来た。
だって、慰めるのは彼氏の役目でしょう？

ていうか、彼女いたんじゃないかねえかよ。ちゃんと躡けとけっつもの。

「まーひーろー」

……ついでにツレも躡けとけっつもの。声がデカイ。

「まーひろちゃん！」

近所迷惑だっつもの。

「まあーひいーうおっあ！？ ンだよ危ねえな！」

おもっいきり振りかぶったコンビニ袋は空を切る。

なんでかコイツは……たいちゅんはコンビニから私をストーキングしてくるのだ。

「なんで付いてくんの」

「そりやお前、俺があのお女を嫌いだからだよ。臭えしうるせえしぶりっ子だし」

「理由になつてない。だったらお家に帰りなさい」

「年上ぶんな。真尋のくせに」

「年上だし」

「チカがよー送れって言うからよー」

「言つてない」

「……目で喋るんだ。あいつは」

「知らない」

私は、何も知らない。

彼女がいたことも。

何で笑われたのかも。

私は ……。

「なーにカリカリしてんだ？ 生理前……ってうわっ！？ だから危ねえって！！」

ったく。

こいついつ黙るんだろう。

「……なあ、あいつが……チカが笑ったのはお前が意外すぎるから
だろ」

「……」

「俺らが真尋を無視したのは、あの女が面倒くせくて、巻き込まれ
たら困るからだろ」

「……」

「あと、チカがあの子抱きしめたのは……お前を守る為じゃねえの
？ ……たぶん」

「知らないし。ていうか何も聞いてないから一々説明しなくていい」

「知りたかったんじゃないのかよ」

本当に知りたいのはそれじゃない。

『彼女がいるのに、どうしてあんな馴れ馴れしくしたのか』だ。
それとも最近の子はあれが普通なの？

「なー後ろ乗らね？ バイクの方が早いぜ？ バイクあんのに引き
ずるのダセェし」

いや、私、短パンだし。
ブラしてないし。

「って無視かよ」

無視してないし。
声に出してないだけだし。

「真尋ってさー……」

「……」

なんだよ。

「……やっぱりいや」

「言えよー!!」

「ギャハハ!! だよな! やっぱ普通はそう思うよな! あゝ良
かった。あいつが無関心なだけだ」

「意味分かんないんだけどー!!」

「いや、何でもねえよ」

笑い続けるたいちゅんに蹴りをかまし、私は一気に走りだした。

* * * * *

「うーわ……真尋ってお嬢様？ さすが社長……マジなんだなー」

「そうでもないよ」

「でた、さりげに自慢」

「……してないし。ていうか声でかい。追い出すよ？」

外面だけではつかいマンションのロビーで大声を出したいちゅんをたしなめる。

「げっ、エレベーター使うのにカードキーかよ!？」

「だから声がでかい!?!」

最上階を押すと、フーツと息を吐き出した。

「真尋ってさ……何だよその目、今度はちゃんと言いつての。……
で、ノーブラ？」

「うん、ノーブラ」

「マジか。色気もへったくれもねえな」

「まあな」

「……ちったあ恥じらえよ」

「年取るとこんなもんだよ」

「……そうかよ」

「そうだよ。大体私が恥ずかしくて赤くなるとかキモイでしょう」

「そうか？」

「そうだよ。だって……」

「あーら、可愛い。処女かしら」

イライラしながら振り返ると、私はいつの間にかエレベータの隅に
追い込まれていた。

「離れてくれないかなあ」

「真っ赤になっちゃって」

「……まさか本物の処女？ え、本当に？」

「え、え？ マジなの？ 本気だったの？ うっそ〜珍しい！」

「あ……追い込むよりキスの方がよかった？」

「でもチカに怒られんな……ってこれもバレたらやべえか」

「……」

「チカには内緒な？ って言ってる傍からメールすんな！」

パツと取り上げられる携帯。

「平気でするんだね。こつこつこと」

「何を？」

「……」

「ブハハ！ あ、怒んな怒んな！」

「私、軽い人嫌い」

「あ？」

「イケメンも、ヤンキーも、馬鹿な女も、いじめる人も」

「おいおい……どうした、真尋？」

「裏切る人も、傷つける人も、上辺しか見ない人も」

「おい、まひ……」

私の涙に気付いて、たいちゅんがハツとした顔をする。

「特に男。大っ嫌いなもの」

「……………」

そんな憐れんだ目で見ろな。

「……………」
「ごめん」

「……………」

謝らないで。
ていうか、私……………」

何言ってるんだろう……………」

「……じゃ、俺帰るわ。また明日な？　ちゃんと学校来いよ」

お母さんみたいなこと言うと、たいちゅんは帰って行った。

その日、いくら待ってもチカくんからメールは来なかった。

メールするなんて言われてないけど、もし私を守ってくれたなら……
なんて甘い期待してた。

私、いつもそうだ。

いつも期待して恥かく。

(寝よ)

腫れ上がった目を冷やしながら、ヨロヨロとベッドへもぐりこむ。

いつの間にパジャマに着替えたんだ、と思って最初から着替えてたことに気付いた。

(……パジャマ……見られた……)

第四章 不幸の兆し08

「酷い顔」

「ははは……」

腫れた。

見事に腫れた。

治らなかつた。

顔のことを散々馬鹿にするくせに、タマは何があつたか聞いてこない。

それが嬉しかった。

言いたくないし、言ってもどつにもならないから。

それに言われても迷惑だろう。

「次、移動教室だよ」

「うん、美術が「霧島さん……」

控えめに声をかけてくる根暗っばい子。

「ん？ あ、はい」

「あの、呼んでます……は、濱野って子が」

誰だよ濱野。

「ええ！？ 何それ羨ましい！！」

「タマ知ってるの？」

「うん。『呼び出し＝いじめ』の子。超面白そうなことに巻き込まれてるんだねえ」

「あ、そう……」

はあ、とため息を吐いて廊下を見れば、それはどう見ても昨日の女だった。

「……ちよつと先行ってて」

「やくん！ やる気満々？ 入学早々大変な目に合ったの？」

「誤解を解くだけだって……平和的解決方法で」

「ヒロちゃん怖い！ それ絶対平和じゃない！」

タマを無視して濱野さん……濱野を睨みつける。
その瞬間、濱野はフンッと鼻で笑った。

「ほっぺ、腫れちゃった」

「そっ」

わざとらしいくらい大きいガーゼ。

誰もいない屋上に、取り巻きが5〜6人。なんでこんな群れるんだろっか。

あんなに楽しみにしてた『呼び出し』も、全然楽しくないってことを学んだ。

「チカくんの前だから手加減したの」

「そっ」

言いたいことがあるなら早く言えばいいのに。

「あんま調子のんなって言いたくて」

「そっ」

空気がビリビリする感覚におちいる。

いや、「相手の殺気が……」とかそんな面白い話ではなく。

ただ単に私の怒りが限界に来ていた。生理前なのかな。すげーイライラする。

ただでさえ昨日からイライラしてるのに。
どうしてタマみたいに放っておいてくれないんだろう。

「あんだ、ムカツク」

そう言うと、思いっきり太ももに蹴りを入れられた。

「いて」

眉をしかめれば、取り巻きが爆笑する。

人が殴られてるのを見て、何が面白いんだろうか。

ていうか、ついでに私も……とばかりに殴ってる奴らなんなんだろうか。

正当防衛していいってことだろうか。いいよね。うん。いいよいいよ。

……よし。

いいんだろうな、殴るからには殴られる覚悟があるってことだよな。

「きやつー!」

手近にいたのを思いっきりビンタ。

「……」

辺りは一瞬にして静まりかえり、誰も笑わなくなった。ていうか「きゃっ!」って。「きゃっ!」ってアంత。そんな悲鳴、作り話の中でしか聞いたことないわ。

「空手やってる割に弱いですね。さっきの貴女の蹴り」

フツと笑えば、濱野の顔が怒りで歪んだ。

「あまり自分が強いつて思いこまない方がいいんじゃない?」

わざと馬鹿にしたように言えば、面白いように顔を真っ赤にする。大体、格闘技くらい私だつてやってたし。

と言つても一時期会社でブームになって、2、3年やつただけだけ……

だからやってたことは絶対言わない。本当にやってる人に出会つたら恥ずかしいし。

その恥ずかしい濱野を見つめ、馬鹿にしたように笑つた。

「恥ずかしいことになるから」

うふふ、と笑う。

そうすれば、もういつそベタなまでにベタな展開。
キラツと光るカッターを取り出し、少女Aがゆっくりこちらに向かってくる。

「ミカちゃん、やめなよ!!」

何今さらビビってんの？

ていうか『ミカちゃん』。

なんで貴女が怒ってるの……？

濱野ならまだしも何故『ミカちゃん』？

「あんだ腹立つんだっての!!!」

「……え、何で？」

問えば、鼻息が荒いまま向かって来た。

え、何。切る気？

そう、そうなの……切りたいならどうぞ。

どこ切るの？ 顔？ それとも首？

どっちでもいいよ。

もうどこでもいい。

そんなのじゃ切れないと思うけど。

ほんつと腹立つんだから。
あんたらみたいな人種、嫌い。
大っ嫌い。

意外と切れ味がよかったカッターの刃は、肉を裂いてポキンと折れた。
何故か避けなかったことに対して酷く驚いてる『ミカちゃん』。
悲鳴を上げて逃げようとする女子。

(…………よ…………余裕こかなきゃよかった…………!!)

そして、私は今さら物凄い痛みと共に後悔をしていた。
彫刻刀で指切ったくらいだろと思って舐めてた…………傷、結構深いじゃん…………痛いじゃん…………
な、何これ、痛い痛い…………
血い、めっちゃ出てる…………え、何、ヤバイ系？

……つっそお〜……

「ちょ……ちよっと……人切っとして逃げないでよ！」

サッと移動すると、アワアワしながら逃げようとした女共より早く走り、大慌てで大きな音を立てて唯一の出入り口を封じた。

「なんか、めっちゃ痛いんだけど……！？ 仕返ししていい!？」

* * * * *

本鈴が鳴る頃、ようやく片が付いた。

と言っても泣きわめく女の子達を容赦なく退治しただけだけど。何人が逃がしちゃったけど。でも顔は覚えた。絶対しかえししてやる。

……タマが。

ていうかまだ泣いてるし。
鬱陶しいし。

「泣きたいのはアタシだつての」

これ、大丈夫だよな？

正当防衛だよな？

私の方が重傷っぽいし。あれからカッター振り回されてあちこち傷だらけだし。

……血、止まんないし……でも、あれだよな。
頭怪我した時もそうだけど、出血って派手なだけで案外流れてないパターン多いしね……！

「鼻血……鼻血、出て……ッ！」

泣くな馬鹿。私は鼻血どころの騒ぎじゃねえわよ。
ていうか病院行きづらいじゃん。
普通に刑事事件のレベルじゃん。

「あゝ……痛い……超痛い……何これ……」

風呂場でサツと血を流してラップを巻きつける。

以前何かのテレビでこうすると良いと言っていた気がする。

……たぶん。

(どうしよう……)

止血方法なんて知らないものだから、血は次から次へとあふれ出てきていた。

ラップなんて意味ないくらい血が出てくる。

フト「このままだと死ぬかもしれない」という思いが頭をよぎった。

(……ラップ効かないじゃん)

ブブブ

「……」

クラクラする頭を押さえて鳴り続けていたっばい携帯を見れば、先

程切れたようだけど着信ランプが光っている。

「……もしもし〜?」

「アンタどこにいのー!」

名前も見ずに出れば、相手は拡張期並みに声を張ったタマ。

「……タマ、声でかい」

「どこにいのー!」

「……家」

「場所は!??」

「……場所……は……だから家」

「違う! 住所言いなさいつてのー!」

「じゅう……しよ? ……は、えーと……引越したばかりで……
覚えてない……ハア……タマあ? 私、なんか……超眠い……か
ら、電話切るね? 切っていい?」

「……もう! 馬鹿ー!」

ブツン

切れた ……。

……怒られるのかしら……怪我人だから手加減してくれると嬉しいのだけど。

あー……なんか……マイナス思考におちいつてるせいか、色んなことを思い出す。

第四章 不幸の兆し08・5

中学校の時、いじめられた。

友達がいなかったわけじゃない。

それなりにいて、幸せだった。

でも、少しも笑わなかったから、私を笑わせるゲームが流行った。今思えばくだらないことだ。

彼らには、いじめだっていう自覚すらなかったのかもしれない。

でも、当時の私は、学校と家が世界の全てだった。

だから、辛くて辛くて辛くて……我慢するしかなかった。

そうしたら、そのうち何も感じなくなつた。

私の心が強くなつたから。

高校の時、いじめられた。

友達がいなかったわけじゃない。

それなりにいて、幸せだった。

でも、起業するなんて馬鹿なこと言ってるって。

龍は気にするなって言っつて、学校に行かないで家で勉強しろつて言つた。

先生も、何故かそれでいいつて言つた。

いじめ問題が面倒だったんだと思う。

自殺されるよりはいいつてことだったのかもしれない。

起業して、いじめられた。

若造がって。

友達がいなかったわけじゃない。

それなりにいて、幸せだった。

でも、あれは叱咤激励だったのかもしれない。

実際に物が売れてからは手のひら返したように近づいてきたっけ。

我慢すれば全てが丸く収まる。今までそうだった。

諦め癖と逃げ癖がついたけど、後悔はしてない。

私1人が我慢するだけですむのなら、人生ってのは案外楽だった気付いたから。

でも、なぜかたまたまに凄く辛かった。

第五章 決意01

(消毒臭い……)

生きてた。あれくらいじゃ死なないか。
一体誰が……
ていつか何で和室……

「しぎげんよう」

タマ……

「……しぎげんよう」

「しぎ、私の家なの」

「……うん」

「医者は専属を用意したの。わざわざ」

「……うん、ありがとう」

「たいちゅん先輩が家を知ってたの」

「……うん」

「鍵は……って言うかドアは壊した」

「……うん」

「胸ないのにブラするの？ 貧乳で言うか、無いレベルだよね？」

「……うん……え？」

どうしよう……私、いじめられてる？

「……私、心配したんだけど」

「……ごめん」

ていうか……輸血とか点滴とか……
なんで和室に勢ぞろい……？

「事件になると困ると思ったから、病院に行かなかったんだけど？」

「……すみません……助かります」

それっきり、タマは何も言わずに私の枕元に座っていた。
何もせずジッと私を見つめ、私もタマをジッと見つめる。

まるで恋人同士の様な甘い空間……とかそんなのは全然なくて、む

しるこの溢れる冷や汗と居心地の悪い空気をどつすねばいいのが、
ひたすら悩んでいた。

「……」

「……」

「あ、あゝそ、そうだゝ……！ た、たい、ちゅんとかにもお礼言
わないとゝ……アハハハ」

「……」

「……」

んもっ！

どつすねばいいのさ！

いや、悪いのはわた……いや、悪くねえわよ。
迷惑はかけたけども悪いことはしてねえわよ。

……え、悪いのかな……？

で、でも……！ だってさあ……。

「トロちゃんさー」

「う、うん」

「面倒臭い」

「……すみません」

「そうじゃなくて……ハ……もう絶対教えてあげない」

「……うん、ごめん」

「……」

「……」

「聞いてよ……!」

「ええ!??」

何……!??

もうホント分かんない!

「なんで大人なのにそんな人付き合い下手糞なの!」

「大人だからって上手な訳じゃないんだってば! しかも別に大人じゃないし!」

「知ってるよ！」

「ええ！？」

理不尽なことを怒鳴ると、タマは再び大きくため息をついて私を睨みつけた。

時折「どうして私が」とか「超面倒臭いんだけど」とかブツブツ言いながらずっと睨みつけている。
ずっと。

そりゃもう穴が開くくらいずっと。

「あの……」

「何」

「い………言いたいことがあるなら言ってくれてもいいんだけど……」

クワツと音がしそうなほど見開かれた目を見て、私はすぐさま「何でもない」と返した。

第五章 決意01・5 | a (前書き)

T a m a m i
S i d e

バカヒロのせいで徐々に肝が冷えた。

なんか、まあとにかく……結構ヒロちゃんのこと気に入ってたんだって気付いた。

屋上に行ったら辺り一面血の海……ってのは言いすぎだけど……
女の子は寝っ転がってるし鼻血出てるし。
なんかもう「え？ これ、ヒロちゃんやったの？」って感じ。

あの子、喧嘩できるんじゃないってのんびり思って、血の量がやたら多いことに気付いた。

馬鹿みたいに泣いてる子に無理矢理話聞けば、カッターで切ったって言うし。

切ったのに戦意喪失どころかヤル気満々で攻撃されたとか言うし。
ヤル気満々ってなによ。

なんかみょーに腹立っちゃったから、殴っというた。女の子だから一応パーで。

ていつか、ヒロちゃん携帯出ないし。

「……………」

私、何、焦ってんだろ。
携帯出ないだけなのに。

「……………」

「……………もしもし」

「アンタどこにいんのー!!」

聞こえてきた声がやたら弱々しいから、思わずこっちの声が大きくなる。
なんか、なんでそんな弱ってんの……………」

「……………タマ、声でかい」

「どうしてるのー!」

「……………家」

「場所は!?!」

「……………場所……………は……………だから家」

「違う! 住所言いなさいってのー!」

「じゅう……しょ？ ……は、えーと……引越したばかりで……
覚えてない……ハァー……タマあ？ 私、なんか……超眠い……か
ら、電話切るね？ 切っていい？」

ていつか、何言ってるか分からないし……！

「……もう！ 馬鹿……！」

ブチツと電話を切って走りだす。「家」って言った。
きつと、先輩達が籠って人が知ってる……って籠って人の連絡先知
らないじゃん！

「吉良先輩今どこ……？」

『んお？ 誰だお前？』

「あたし……！ ヒロちゃんの、と……友達……！」

『おーお前か！ つか、なんでお前タメ口なんだよ！』

友達で通じた……

はたから見たら、そう見えるのかな。

……じゃなくて。

「先輩、今ヒロちゃんどこにいるか知らない？」

『はあ？ 知らねえ。今日会ってねえ』

何不機嫌になつてんの、この男。

「もういい！ 役立たず！」

「ああ！？ お前凄く失礼だな！」

いきなり後ろから聞こえる声。

いつの間にか後ろまで来ていたらしい。しかもチカちゅー揃つて。

「てめ、言つにことかいて『役立たず』だあ？」

んもう！ 相手にしてる暇ないのに……！

「お前は先輩への態度が……つておおい！ 無視すんな……！」

「手、離して……！」

「待て待て、お前何イライラしてんだよ」

「離して……！」

「ヒーは？」

「それは私が聞いてるんでしょう!？」

思わず大声を出せば、2人は急に真面目な顔をした。

「なんだよ、何かあったのかよ」

「ヒロちゃん切られたままいなくなっちゃったの!! カッターで
! バツサリなの!! 屋上血塗れなの! 構ってる暇ないんだっ
てば!」

「真尋はどこだ」

勢いよく腕を掴まれ、痛みが走る。

「だから、それが分からないん……あ……!」

「あ？」

「家! 家って言ってた……! でも、家、分からない……!」

そう言った瞬間、勢いよく担ぎあげられる。俵担ぎで。

お腹の痛みに声を上げた瞬間、吉良先輩は走り出していった。

そしてその遙か前を赤髪が揺れる。
乱暴にバイクの後ろに座らされ、ヘルメットを渡された。

「おいおいチカ！ 先走ンな！ お前家知らねえだろ！！ 俺は知
つてるけどな！」

「え、たいちゅん先輩知ってるの!?!」

「あたぼうよ。チカ、こつち……っておい、何でお前『たいちゅん』
って呼んでんだ！」

それからはあつという間だった。

たまに「まさかチカに後ろから煽られる日が来るとは……」と悪態
をつくたいちゅん先輩。

そして大きなマンションの前まで来た時、乗り捨てるようにバイク
から飛び降りた。

「ええ!?!」

オートロックの正面玄関を無視して、高い塀を飛び越えて行く2人。
私にもあれをやれっというの!?!?

無理無理!! 忍者!?!

あの2人おかしいでしょ……!!

「なにやってんだよー!!」

「私、女の子なんですけどお……!!」

「んだよ。『女の子』は面倒くせえな」

そう言いながらも引き上げてくれるたいちゅん先輩。

「こっちだ」

迷うことなく階段を駆け上がるたいちゅん先輩。
なんで知ってるんだろう……

「あ、鍵！」

くっそ、と言いながらドアを叩く。

「真尋!! まひつ……」

西條先輩が、ドアに貼りつくたいちゅん先輩をグイッとはがした。
よろけながら尻もちをつきたいちゅん先輩。

その瞬間、物凄い音とともにドアノブが壊れた。

「……ひっ！」

「うわっ……蹴り！？ 蹴っただけで壊れるかフツー！？ ていうかお前防犯的な意味でヤバイぞ！ お前は知らねえだろうけどな、ここはエレベーターに乗るのにカードキーが必要なくらい防犯が……って無視か！」

言葉を失う私達を残し、西條先輩はさっさと部屋の中へ入って行った。

「おい！ 真尋ー！」

たいちゅん先輩が叫ぶ中、西條先輩はまるで居場所を知ってるかのように奥へ進む。

そしてピタリと動きを止めた。

「……せんば……」

床をまばらに染める赤色が、こげ茶のフローリングを濡らす。勢いよくドアを開く先輩を尻目に、私は自宅へ電話をかけた。

「真尋ー！ー！」

西條先輩の大声が響く。

「うわ、なんだよ……これ……」

覗き込んだたいちゅん先輩の震える声が、やたら大きく聞こえた。

第五章 決意01・5 | b (前書き)

T a i z o
S i d e

「……たくよー……どうかしてるぜ」

救急車を呼ぶことなんて思いつきもなかった。
チカも思い付かなかったんだと思う。

血塗れの真尋を抱えてチカが玄関を出たら、スーツ姿の男達が立っていた。

真尋を奪われそうになって暴れるチカを1発で黙らせ、真尋を抱える男達。

……ま、俺はポカンと突っ立ってたわけだけでも。

いや、普通の反応だろ。常識的に考えて。

気絶しなかったのを褒めて欲しいくらいだ。

ただでさえ動揺……ってまあ、それはいいんだけどよ。

あの男達はこの女……タマ？ タマの家の奴らしい。

こいつ、噂通りやくざの娘だったんだなあ……なんて納得しながらポーンと見つめる。

「……何で病院じゃねえんだよ」

「たいちゅん先輩は病院沙汰になりたいんですかあ？」

ふざけたもの言いなのに、顔は真っ青で笑顔が引きつってる。
さっきから白衣着たオッサンが忙しそうに部屋を出入りしながら、
何かを呟いていた。

「病院沙汰って言うか、警察沙汰だろ。普通に考えて」

「駄目ですよぉ」

「なんで」

「ヒロちゃんが望んでないでしょ？」

はあ？

「つつかよ、お前……タマは真尋の……」

言いかけた瞬間、家が震えるほどの音を立てて障子が開く。視線だけで人を殺せるんじゃないかなろうか、と言った感じの手力が、フラフラと出てきた。

「あ、よーチ力起きたか……って待て待て待て待て……!!」

殴られた腹を押さえながらフラフラと真尋の部屋へ入ろうとする手力……に殴られる俺。

「っいてー!」

「おい！ チカてめえふざけんな！！ 今お星様が見えたぞ、俺は
！」

「ちょっとちょっと、せんぱーい！ い、今は入っちゃ駄目ですか
ら！」

「ていうかお前何で何も聞いてねえのに真尋の居場所分かるんだよ
！ 犬か！？」

さっきもそうだ。

こいつは迷うことなく真っ先に真尋を見つけ出した。

「どけ」

「『どけ』じゃねえよ！ 『どけ』はお前だ。つか……落ちつけ！
！」

「うるせえ、どけ」

「いや、だからな？ 今 ……」

「よお、起きたか坊主」

ケケケと独特の笑い方をして『いかにも』な格好のオッサンが歩いてくる。

確かチカを殴った奴だ。

チカもそれを覚えてたのか、俺の肩から手を離すと迷わずオッサン

に向かっていく。

「……って待て待てバカ!!」

慌てて止めようとした時にはすでに遅し。

チカは思いつきり股間を蹴りあげられてうずくまった。

「やーん！先輩痛そお」

やたら嬉しそうなタマの声にゾツとしつつ、ケケケと笑うオッサンを見た。

「元気なのはいいけどよお、ちったあ周りを見ろって。な？」

うずくまったまま視線だけ上げて睨みつけるチカ。

やくざ相手にその根性……俺はホント涙が出るほど関心するぜ。

「ま、そのまま話聞けや」

胸ポケットから取りだしたタバコに火を付け、フーツと深く息を吐いた。

「吸うか？」

「いや、俺ら高校生だから」

思わずつつこむように言えば、オッサンは再びあの君の悪い笑い方をしながら目を細めた。

「良い子ぶんならそのラッキーストライク隠してからにしろな。つかそんなん吸ってオッサンかお前は」

タバコを銜えた口の端からフェツフェと気味の悪い声を洩らしながら笑う。

「あの嬢ちゃん、たいした怪我じゃなくて良かったなあ」

「……………」

チ力は相変わらず睨み上げたまま荒い息を吐いている。

「血は沢山出たみてえだけど。大器兄さんが『たいしたことねえ』ってさ」

「それたいしたことあるんじゃないの？」

タマのやつが聞いたこともねえような低い声でつぶやく。

「いやいや、マジで。つかお嬢が電話してきたときめビックリしやしたけどね?」

よつこらしょうち、の掛け声とともに床の上であぐらをかくオッサン。

そのオッサンにスツと近づいて、タマは思いっきり股間を踏みつけようとした。

「つつあ……つぶねえ!? ちょーっとお嬢! 不能にする気ですか!?!」

ギリギリでタマの足首をつかむオッサンの手。

よほど本気で踏みつける気だったのか、オッサンの手はプルプル震えている。

「タマがタマを……」

「先輩くだらない」

オッサンは「ふいー」っと言いながら煙を吐くと、立ちあがってチ

力の肩を軽く蹴った。

「ま、今日は帰れ。どーせ会えねえから」

「へ！？ なんでだよ！」

「お前なー。病院なら面会謝絶だろうがよお。メンタル的な意味で」

「オッサンがたいしたことねえつつただろ！」

「優しさだ。察しろ。ほら、帰れ帰れ」

シッシツと言って手を振ると、オッサンは元来た道に戻って行った。

「なんだあの汚いオッサン」

「あゝたいちゅん先輩、それあの汚いオッサンに言っちゃいますよ
お」

「なんだよ、冗談だろ？」

「あははは」

「おい、言つなよ。絶対だぞ」

ふとチ力を見れば、うずくまったまま庭の方をボーっと見ていた。

「なんだチカ？ まだ痛えか？」

横に座り込んで顔を覗き込めば、チラッとこちらを見て立ち上がった。

そのままタマを睨みつけてほとんど口を開かず喋り出す。

「病院にはいかねえのか」

「はい」

「こんなところで大丈夫なのかよ」

「はい。ほら、うちってえ、軽々しく病院行けない人いたりするじゃないですかあ」

「その言い訳は説得力ありすぎるだろ」

「いや、普通に行きますよ？ 行くんですけど……忙しくて行けないんです！」

「そっちの方が嘘くせえわ」

「本当ですよお！ だから、家に医者を呼んだ方が早いんですつてえ！」

「あ、おい！ 帰ンのかよチカ！ ……つて無視か！ また無視か

「！」

慌てて後を追いかければ、後ろから「後は任せて下さい」と間延びした声が聞こえた。

「あいつに任せていいのかよ。警察に言わなくていいのか？」

「……………」

「つか、こんなところで治療とかできるのか…………？」

「……………」

「俺はよー！ ちゃんと病院に行った方がいいと思うんだよな……………
なんか言えよ」

「たいちゅん、うるせえ」

……………「これだよ。」

第五章 決意02

起きたらタマがいて、凄く怒られた。

龍には言っていないようだけど、きつとすぐバレるだろうな……

「ほら、私がわざわざウサギちゃんリンゴにしたわよ」

「ん」

なんで何も聞かないんだろう。

いや、別に聞かれても困るけど。

「うさちゃんリンゴが可愛いのはわかるけど、握りしめないでくれない？」

「ん？ あー……ごめん」

警察に言ってもいいのかなー
でも言つと面倒だろうなあ。
だからここにいるんだろうし。

「テレビ観る？」

「うん」

あ、タモリ……今お昼なんだ。

「……」

「……」

「……」

「……」

ちよつとは聞いてくれてもいいんだけど。
あ、でも迷惑だよね……ただでさえこんな……っっていうか何で私こ
んなマイナス思考……

「あーもう大人のくせに情けない」

「……ええ？」

「別に」

「……」

「……」

い、今のはどっち……？ 言ってもいいの？
それとも別の意味？

「あの……ね……」

「なに？」

「ありがとう……色々……」

「……うん」

「……」

「……え、それだけ？」

「あ、いや……あと……傷、い、痛くない……です……」

「……薬打ったからね」

「……ええ！？ クスリ……！？」

「そっちじゃねえわよ」

ハーとため息を吐くと、タマはソファに座りなおした。

「何にビビってるの？」

「は？」

「何でもない」

「……」

「……」

き、気まずい。
なんか凄く気まずい。

「あの……」

「何？」

「……お金……治療費後で請求して」

「……」
「うん」

わー
。びびびびびび。

もうどうしよう。

な、なんだろう。

言ってもいいの？

え、何を。

愚痴？

言えはいいの？

あ、違う？ え、でも何？ この空気。

……いや……

でも……

それは無理でしょう……

だって……他人の愚痴なんて、聞いてもつままないじゃん。

そんな言われても……困るじゃん、ね。

「ヒロちゃん」

「何ッ？」

「この家、門から玄関まで凄く遠いの」

「……う、うん。そうなんだ」

「警備会社入れてるんだけど、ここは離れだから入れてないの」

「……？ うん、そう」

「夜は気を付けな」

「……………」

なんか……

あのまま死んだ方が良かったのではないだろうか……
なんでそんな笑顔なの……

* * * * *

リーリーと何の声か分からないような虫の声。
秋でもないのに虫って鳴くんだけ、と思いながら、私は痛む傷のせいで眠れずにいた。

「痛たたた……いてえ……」

ウウツとうなって脂汗をシートでぬぐう。

こんな痛いとは思わなかった。

痛みのせいでおちおち口も開けず、食欲もなかったから晩御飯は断った。

……それに何となく気まずかったし。怖いお兄さん達とご飯って……
…ねえ？

普通気を使って「じゃあ真尋ちゃんはお部屋で」ってなりません？
なるよねえ？

「はあー……あ、龍に電話し忘れた」

携帯は1m程離れた位置にある。

「取るの面倒くさい……でも電話しないとずっと面倒なことになる
うううー……」

ハアハアしながら這いつくばる。

足を伸ばしてみたり手を伸ばしてしながら、なんとか届かないかも
がく。

「ああ、駄目……遠い……疲れた……痛い……」

こんな姿、誰にも見せられない……

タマが薬届けるって言ってたし、タマが来る前にさっさと ……。

「……」

足音も何もなかった。

影すらなかったのでは？ と思えるほど……とにかく……
障子が音もなくサツと開いて、男の足が見えた。

「……ッ」

吃驚して見上げれば、不機嫌な顔をしたチカくんが立っていた。

「……うー、うー、こん……こんばんわ……」

「……」

わ、無視された……

いっそのこと「何その格好」とか「大丈夫？ 取ってあげようか？」

とか……

いや、なんかどっち言われても傷つく気がするし、言わないだろうけど……

「……」

チカくんはサッと部屋へ入り、再び音もなくスーツと障子を閉める。

「……」

「……」

そしてドカッと腰をおろして胡坐をかいた。

(さりげに携帯遠ざけてるし……)

何をしに来たんだろう。

ていうか、私、思いつきり寝巻なんだけど……

「あの、何？」

「……」

また無視……！

「よく、ここ来れたね……表に怖いお兄さん達がいたと思うんだけど」

「……」

「あ、あ〜そう言えば……私のこと助けてくれたんでしょ？」

「……」

「なんか、ありがとう……」

「……」

「……『じゃ、い、ませ……』」

「……」

き、気まず……！

「あの、さ」心配した」

「え？」

「心配した」

「……」

「表は、誰もいなかった」

「……」

「助けたのは、助けたいと思ったから」

「……」

もしかしなくてもさっきの答えだ。

いったいどういつ経路を使ったら返答に時差が出るんだろう。

「飯、食ってないのかよ」

「ん、ちょっと……お腹痛……あ、痛いって言うのは排泄物的な意味じゃなくてね!？」

「……」

チラツと冷めた料理を見ながら、チカくんがため息を吐いた。

「……」

「……」

「言えよ」

「……何を？」

「思ってること」

「……」

「言えって」

「無いよ。何も」

「ねえわけねえだろ」

「無いよ」

「嘘つくんじゃないよ」

「嘘じゃないよ」

「あんだろ」

「ないって」

「だから「少なくとも」

「貴方達に言うほど、仲良くなったつもりない」

……あ、しまった！ 言い方間違えた。

「あ、ちがっ………そういつ」とじゃなくて、ね？ あの

「わかった」

スツと立ち上がると、チカくんは「こちらを見ようともせず出て行った。

「チカ……く……！」

思わず立ち上がろうとして激痛が走る。

「……ッ」

グラツと目の前が歪み、床に手をついたまま障子を開けた。
スタスタ歩く後姿を見つけ、私は久しぶりに大後悔をしていた。

第五章 決意03

「待ってよ!!!!」

ピタッと歩くのを止めるチカくん。
でも、こちらを見ようとはしなかった。

「だ、だって……言っても……じゃなくて……あの」

ああ、どうしよう。

言いたいことは沢山ある。

でも、それを全部ぶちまけて、もし相手の反応が悪かったら……？

きつと……

きつと私は凄く後悔する。

「用がねえなら行きますよ。体調悪いみたいですからね」

フンッと鼻で笑って踵を返すチカくんを見て、私は血の気が引いた。
ズキズキと傷が痛む。

何故か、生身の傷より内側の方が痛かった。

「ば……バカ野郎!!」

思いっきり携帯を投げると、携帯はチカくんの背中に当たり、音を
立てて床に落ちる。

チカくんは振り向くと驚いたように目を見開き、私と携帯を交互に
見つめていた。

「いった……い……いたたた……くっそ……!!」

あまりの痛さに思わず床に座り込めば、涙がじんわり浮かぶ。
泣くのは何年振りだろう。

(いや、まだ泣いてないし。浮かんだただけだし)

ハアハアと肩で息をしながら、私は部屋へと戻るべく床をはった。

「……」

「……おい、バカ野郎って……言い逃げかよ」

「……」

……忘れてた。

痛みのせいですっかり言い終った気になっていた。

「……」

「携帯……背中、痛えんだけど」

「……いめん」

「そっじゃねえだろ」

「……申し訳ございませんでした」

「違えよ」

「じゃあ何て言えばいいの!？」

逆切れ。

見事な逆切れ。

なのに、チカくんはスツと視線を合わせるようにヤンキー座りをして、私を見つめる。

その目は凄く優しく、かと思えばイラついたような感じもして……ユラユラ揺れたかと思えば潤んだり、ギユツと閉じたかと思えばよそを見たり。

そして、ハーツと深い深いため息を吐いた。

「何でも言わねえの?」

「……何もって?」

「思ってること。何でも言わねえんだよ。それとも俺には言えねえっつーのかよ」

「……何でそんな知りたがるの……言っても……困るでしょ……」

「誰が」

「言われた方が」

「何で」

「……つまんないし、聞いても、内容が壮絶すぎてなんて言っていないからないだろうから」

「何でそう決めつける」

「……」

「……友達でもかよ」

「……」

「だんまりかよ」

「ハ―とまたため息。」

「……た」

「『た』?」

「ため息つかないでよバカ!! 私何も悪いことしてないじゃん!」

何も悪いことしてないのに、嫉妬っただけで切られて。

つか、私の存在なんて知りもしなかっただろ。奴もついでとばかりに殴ってるし。

あんたと仲良いっただけで意地悪言われて。

みんな変な目で見ると、先生は大人だから我慢しろって言うし。

大人だって我慢できないことだってあるのに、ていうか、我慢できないことだらけなのに。

例えば電車の中で立つのが面倒臭いからってよっかかってくるオッサンとか、ぶつかってきといて「アンタぶつかんじゃないわよ」「って言うオバサンとか。

私は、みんなが思ってるほど鉄の心でも大人でもない。

こうやって全部ぶちまけてしまえば楽だろうけど、引くでしょう？

絶対に。

だから言わないのに言えって言うし。

傷つきたくないから言わないっていうのに。

意味が分からない。

言っただうなるの。

言わせて何がしたいの。

助けてくれるの？

どうせ最後まで助けてくれないでしょう？

助けるなら最後まで助けてよ。

飽きたからって、こいつ面倒だからって、自分でやりだしといて逃げないでよ。

だから……だから人間なんて、男なんて大っ嫌い。

鼻水とか涙とか垂らしまくりながら叫んだ。
大声なんてもう出せないと思ってたのに、言い終わった時は喉が痛く
なっていた。

「見るなバカ！ あっち行ってよ!!」

チカくんは何も言わずにジッと私を見ている。
その目が責めているようで、辛かった。

な 本当は、自分も悪いって気付いてんだろ。他人のせいだけにする
な

そう言われてるみたいで、自業自得なのに傷ついた。

「お前、色々言う時は本当に信頼した時か、バイバイの時だろ」

「……は？」

「逃げんじゃねえぞ」

「……なに、」

「絶対逃げんなよ」

「……」

「俺はすげえ束縛タイプだからな」

「……はあ？　なんで『お前は俺の所有物』前提っばい感じなの？
なんの宣言？」

「嫌だつっても絶対離さねえからな」

「何、わがまま言ってるの……っていつかほんと……ははっ」

「真尋はまだ俺を信用してねえだろ」

「そっね」

「バイバイするつもりで言ったんだろ。そのくせ『助ける』って言
ってるようにしか聞こえねえし」

「……何、言ってるの」

「だから……逃がさねえつつてんだよ」

傷が痛いって言ってんのに、チカくんは思いっきり私を抱きしめた。

「考えが安直すぎんだよ」

「……」

「すげーマイナス思考だし」

「……」

「お前、病んでんの？」

「……」

「どんだけ自分に自信ねえんだよ」

「チカくんみたいに自信满满よりはいいよ。ていうか彼女いるのに
こっぴつのやめて」

「自信なんてねえよ。今だってスゲー怖い」

「は？」

何度目か分からないため息を吐いて、私の首元に顔を埋めた。

「こんなことして嫌われねえかなとか」

「……」

「無理やり聞きだしたけど嫌じゃ無かったかなとか」

「嫌だったよ。嫌いになったよ。チカくんのこと。あんたみたいな男大嫌いだもの」

「……」

「私のテリトリーに入って来ないでよ」

どうせ逃げる癖に。

「覚悟しろ」

「……は？」

「俺にかまわれる覚悟」

「嫌。もう、マジでやめてよ……」じつじつと……イライラする

「即答すんな。傷つくだろ。言われた方がどう感じるかよく考えろ」

「嫌。あんただって考えてよ。彼女いるのに浮気対象にされる女の気持ち」

「真尋」

「嫌だつてば！ 私は平穩無事に学生生活を送りたいの！」

「……」

「……」

ああ、またチカくんを傷つけた……

ゴメンはこつちなのに……チカくんは悪くないのに……いや、悪いだろ……悪いよね？

「……お前、何？ なんかよっぽど酷い目にも合ったのかよ」

「！」

とっさに。

もうホント意識もしてなかったけど、とっさに手が出た。

無意識に本気で相手を叩いてしまい、思わず目が飛び出るほど驚く。

「なんでヒーが驚いてんだよ」

「……」

「……」

やめて。

「……おい」

やめてよ。

「真尋」

私を……呼ばないで……
私は……

「はいはい先輩、今日はもう面会時間終了ですよ」

……助かった……た……

「……」

チカくんは何も言わず、私から目をそらさない。

「……近づいて欲しいくせに近づくとビビんだな。もう、いいや。面倒くせえ女」

「……」

私にしか聞こえない声でそう言うと、チカくんは私を離して帰っていった。

ひんやりとした空気が流れる。

背中を伝う汗が、酷く気持ち悪かった。

第五章 決意04

「私、こんな人付き合いがヘツタクソな人初めて見た」

「……」

何も言えず床を見つめていると、さらなる追い打ちが私を攻撃する。

「ヒロちゃん『好かれてる』ってことに安心しすぎ」

「……は？」

「どんなに好きだって言ったって、何のリアクションも返さない人に対して、いつまでも『好き』じゃないんだからね」

「……いや、あいつ彼女いるし。いるのにちよっかい出してきて……迷惑だっつの」

「じゃあそんな顔するのやめなよ」

「……」

一体、私はどんな顔をしてるといふんだ。

ていうか、あれしきで去るくらいならそれまでの人でしよう。

何だかんだ言っというて、上辺だけだったって……それだけの話だろうに。

なんで、こんな傷ついてんだろ。

(凶星すぎた)

なんで、こんな人付き合いへタクソなんだろ……
なんで、いつも人のせいにしちゃうんだろ……

ああ、しばらく誰にも会いたくない。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

「え！？ 学校行くの！？」

「うん」

「何で！？」

「だって、授業料払ってるし。遅れたくないし」

「怪我してるの？」

「うん。ジツとしてれば痛くない」

「体育は？」

「余裕で出る。マラソン以外は。マラソンは嫌い。跳び箱は好き」

「……」

タマがピクッと眉を動かす。

じんわり背中に汗が流れるのを感じつつ、目をそらした。

「……龍さんに連絡したよね？」

「……してない」

「……まあいいけど」

「え？」

「は？ 止めて欲しかったの？」

「いや、別に……」

なんか……肩すかし……まあ、いいか。

「車乗って」

「え？」

「送るから」

「ああ、ありがとう」

朝食は、今日も食べなかった。

「……」

車内はタバコの臭いがして、酔いそうだったからあまり息を吸わないようにした。

(苦しい ……)

結局夜はあまりよく眠れなくて、今さら睡魔が襲ってくる。私はゆっくり目を閉じる。

クラスに入る前、私を呼び出しといて逃げた一味がいた。

(よく来れるな)

ジツと見つめれば、「ヒツ」と小さく叫んで逃げて行く。そりゃそうだろう。あんだけ血まみれになつといて平気で来てるんだから。

私なら気持ち悪いから近づかない。頭のおかしい人みたいだもん。

(あ、龍に電話し忘れた……)

ていうか、屋上……!!

ヤバイ、片付けとか何もしてない……!!

「タマ、私「片づけはしといたから。私のお友達が」

「……た、タマあ」

ああ、なんて……ありがとうけど『お友達』って誰……？
ヒラヒラと手を振るタマ。

なんとなくその仕草が、私を拒絶しているように見えた。

チャイムが鳴って席についても、先生の声が全く聞こえてこない。
喋っているのか黙っているのか全然わからず、ただボーッと黒板を
見ていた。

「真尋」

「……」

「おい」

バシンと教科書で頭を叩かれてハッと気付く。

「顔色悪いぞ。保健室行くか？」

「……はい」

「よし、行って来い。1人で行けるか？」

「……はい、大丈夫です」

そう言うと、私はノロノロ立ちあがって教室を出る。
タマの視線を感じたけど、怖くてそっちは見れなかった。

* * * * *

(保健室遠いな〜……帰っちゃおうかな〜……)

いかんいかん。

私の授業料は社員の血と汗と涙から出てるんだ。
私が頑張らないで誰が頑張るんだ。

「……ンッ」

（『ン』?）

手をかけて開けかけた保健室の扉。
その向こうから何か音がする。

「……………やっ……………せんぱっ……………あっ……………」

ふざけんな。マジふざけんな。

保健室を何だと思ってんだ。ラブホにすんな。

いや、妬みじゃなくてマジで……………！

(こんなんじゃないじゃないかよ……………とか言いつつつつそり出
歯……………)

赤色……………と思った瞬間、中の声がひときわ大きくなる。

「チカっ……………先輩っ！」

それを聞いた瞬間、私は走り出していた。

第五章 決意05

(痛い。傷が痛い)

ハアハア肩で息をしながら視聴覚室へ逃げ込む。
心臓が早鐘の様に……とはこのことなんだろう。
なんか……なんていうか……

なんでこんな傷ついてんの、私。
小心再び、だよ。ははは。
全然笑えん。

裏切られたと思った。
私はまた調子に乗っていたんだろう。
どこかで、「それでもチカくんはかまってくれる」と思っていた。
だから傷つくんだ。

「また調子に乗ってしまった……」

「何が」

「うわぁ!?!」

「声がでけえ!」

パシんと軽く頭を叩かれる。

それでようやくたいちゅんだと気付いた。

「何してんだよこんなところで」

「……こっちの台詞だけど」

「寝てたに決まってるだろ? つか、傷は?」

「大丈夫、たいしたことない」

「そっかよ」

そう言うと再びごろんと椅子の上に横になった。

「……たいしたことあるから保健室行ったんじゃないの?」

「……見てたの?」

「いや、別に見てはねえけど」

「……!」

もしかしてカマかけられた……？

「この時間帯だと……保健室にゃチカがいるんじゃないか？」

「……」

「いつもあそこにいるからなー。女と。彼女とか……あとは彼女っぽい女とか」

「……！」

「当たり前か」

「……」

なんか、凄い意地悪なんですけど……

「意地悪だっと思ってただろ」

「……」

「仕返しだバーカ。心配させた仕返し！」

んな心にも思っていないようなことを……

「大体お前な一人を疑いすぎ！ もうちっと信頼……ってチカじゃ無理か……」

「え！？ な、なに急に……！」

グリグリ頭を撫でられながら、やめてよやめてよと手をはがそうとする。

「まー昨日は大変だったみたいだしな。お前とチカ」

「！？」

な、なんで知って……またカマか！？

「俺も一緒にいたんだよ。玄関までだけどな」

「……あ、そう……」

「で、意気揚々と入ってたのに、出てきた時には超不機嫌」

「……」

「あーあ。八つ当たりされて大変だったぜ。2発も殴られた」

「……私は悪くない」

「半分はな！ もう半分はお前も悪い！」

「……知ってる」

「……お前、さー」

「ん？」

「好きじゃない奴には素直だよなー」

「……は！？ 何、どういう……いや、たいちゅんのごことは好きだよ？」

「違う馬鹿。愛してる奴には素直じゃないっの？」

「え、意味分らないんだけど」

「まんまだろ」

「いや、だから」

「や、基本的には素直じゃねえか。ただそこに愛が加わると非常にややこしいだけで」

「いや、もうほんとたいちゅんが何を言っているのか」

「しょうがねえなー！ 俺様が一肌脱いでやるかあ！」

「意味分かんないんだけど！ 意味分かんないんだけど！ 何!？」

「あらまあ〜赤くなっちゃって」

ツンツンとほっぺを突きたいちゅんを叩きながら避ける。

「お前本当に23？ マージで可愛いね。その反応。可愛すぎてムカつく。わざと？ カマトトぶってんじゃねえよオバサン」

「バカじゃないの!？」

「でも、女は可愛いだけじゃ駄目なんだぜえ？」

「うるさいんだけど！ 別に可愛いくない!！」

「取り合えずチカがどんだけお前を愛してるか教えてやるから」

「いらないんだけど!! つか、そんなわけないし!！」

「まーいいから黙ってる。恰好良すぎるお兄さんに任せとけ」

そう言うと私を床に押し倒し、片手で口をふさいだ。
ギョツと体重をかけて乗られ、傷が痛む。

「んいッて!！」

「あ、悪い悪い。ま、ちょっと我慢しろ。な？　つか、お前色気もへったくれもねえな。そんな色気もへったくれもねえ真尋に俺様が一肌脱いでやるつってんだよ。ま、お前は黙って俺に押し倒される」

それから携帯を取り出し、どこかへかけた。

「あ、オレオレーもう終わった？」

誰だ、どこにかけ……まさか……

「ン……」

「なんだよ。声出すな真尋。外に聞こえんだろ……ってバカ舐めるな……」

「んんっ……」

「え？　あー真尋。おいおいおい……分かってると思っけど、今は来んなよ」

そう言つとグッと近づいて携帯の話口を私の方へよせる。

「あ、そう言えば。こいつ初めてなんだって。ウケるよなー23な

のに。何がつてナニがなんだけど」

そして、私の口から手をどけると、その手で傷口をグッと押した。

「いつ……たい……！ バカっ……！！」

あまりの痛さに一瞬気が遠くなる。

クスクスと笑うたいちゅんを睨みつければ、ヒューと口笛を吹かれた。

「その顔マジでいいな……ってことで俺ら忙しいから切るわ。気にすんな自慢だ自慢」

携帯を切つて机に置く。すぐさま携帯が鳴っていたけど、出るつもりはないらしい。

「た……たいぞー……テメエ」

「お前さ、前から思ってたけど口悪いよ」

「しるわいしー」

「おい」

「なに！」

「後はお前次第だからな」

「は………？」

「なんで俺がこんな面倒くせーことを………ぜってえキャラじゃねえのに………ってか悪いのはチカだよなあ」

抗議をしようと口を開いた時、視聴覚室の扉が勢いよく開いた。

「あれ、早いじゃん。まだ終わってねえのに」

開いたドアの方を見れば、逆光でも立っている人の姿が分かった。

「チカくんってばだいたーん。それとも3人でしてえとか？」

「………」

黙ってこちらに向かってくるチカくん。

それを片手で制しながら、たいちゅんが鼻で笑う。

「まー待て。お前今やってきたんだろ？俺が先だ」

そう言いながら制服を脱がせにかかるたいちゆんを慌てて制した。でもそんなのお構いなしに、チカくんから見えない位置で傷をグイグイ押す。

「ちょっと……!!」

「要領悪いよなーチカ。見られてやがンのに気付きやしねえんだからよ」

そう言った瞬間、チカくんは驚いた表情でこちらを見た……と思う。視線を感じるけど、そっちを見ることはできない。

今は、顔を見たくなかった。

「ま、別いいだろ？ お前も本気じゃなかったんだろっし」

「……」

我慢できなくてチラッとみたチカくんは、凄くイラついた顔をしていた。

なんで……なんでそんな顔してんの。
今のは私が怒るところじゃないの。」

「ま、待てお前が泣くな……！」

スツと私の耳に口を寄せたたいちゅんが、慌てたように咳く。
返事（抗議）の代わりに耳にかぶりついてやれば、たいちゅんがビクツと体を震わせる。

「痛いつてえ！！ バカ噛むな！ お前、舐めるし噛むし犬か！？
お前、ホントたまに大胆すぎるよな！ 行動が！！ 痛つてえ！
まだ痛てえ！！」

「だつてたいちゅんが……」

抗議を重ねようとした時、たいちゅんが私の上から消えた。

「痛……っ！」

横から痛がるたいちゅんの声がして、私の上に再び影が落ちる。

「！」

影の原因を見上げれば、私の上に仁王立ちするチカ……もとい阿修羅と目が合った。

「……………」

「……………」

に、仁王立ちって貴方……鼻の穴までしっかり……じゃなくて……！

「……………」

「……………」

「ヒーさあ

「……………はい

何を言われるんだろつとビクビクしていると、イライラしたようにため息を吐かれた。

スツとしゃがんで私の上でヤンキー座りする。

何故かお尻が腹にくっつくんじゃないかっていうどうでも良いことが気になって、私は慌てて腹をひっこめた。

「……………」

「……」

「言うことねえのかよ！」

沈黙に我慢できなくなったたいちゅんが叫ぶ。

「たいちゅん出てって」

「あ？ 俺に指図すんな。出てくのはオメエだろうがよ、チカ。邪魔しやがって」

「……」

「おい、何黙って」「ヒ」

「無視かよー！」

まるでたいちゅんなんていないような感じで、ほぼ睨みつけるようにして見つめられる。

「どっしたらいい？」

「……はっ」

「どっしたら俺のこと信じてくれんの？」

何それ。

それを私に聞くの……？

「……その前に何で私にちよっかい出すかハッキリしてほしいんだけど」

そう言えば、呆れたような顔。

まるで「そんなのもわかんねえの？」と言いたげな腹の立つ顔をした。

「可愛いからでしょ？ 俺の好み」

「……」

もう絶対口聞いてやんない。

「おい、無視かよ。なんか言えよどー」

「……」

「どー」

「その考えって普通のなの？ 今の若い子は」

「え？」

「そこら辺にいるような子と一緒にしないでくれる？」

そう言って睨み返せば、チカくんの整った眉毛がピクリと動いた。

「何人もの女の中の1人になるの嫌なんだけど。中途半端な「もういい」

言葉をさえぎってそう言うと、チカくんはさっさと部屋から出て行った。

第五章 決意05・5

は……恥ずかしい……

なんか、「あんた私に惚れてんなら女切りな」って言ったみたいで
恥ずかしい……

そんなつもりじゃなかったんだけど……そ、そう思った……かな……

「お前俺がせつかく……なんかスゲエ可哀想な女になってんじゃね
えか。今のはチ力の馬鹿野郎も悪かった気がするけどよ」

可笑しそうに笑うたいちゅんのスネをければ、「いって」と言っ
てさらに笑う。

「あいつが女切れるわけねーって。1人の女にとどまるなんて想像
つかねえし」

「……」

「お前は男嫌いかもしれねえけど、あいつも女嫌いだしな」

「何それ」

「人は見かけによらず複雑ってことだよ」

うわ、たいちゅんに言われるとどうしてこころも腹が立つんだろう。

的を得てるだけになんかムカツク……

「でもあれはあれでいいんじゃないの？」

「……何が」

全然良くない。

恥かいた……もう

「だってお前もう構われたりしなくてすむじゃん」

はたしてそれは良いことなのか……。

一瞬そう思ってた、「良いに決まってる」と思いなおし、思わず顔をひきつらせた。

「うん、そうね……そりゃあ良いわ」

第六章 諦めの悪い男女01

「では、社長はプロデューサーと言っことで」

「え！？ 嫌だ！」

「じゃあディレクターでもいいですけど」

「……え」

「何ちよっと迷ってるんですか」

あれからもの見事にチカくんと接触はなくなった。

たまに廊下でたいちゅんと会って話すくらいだ。

あれだけ騒いでた女の子達も特に何も言ってこない。

よくよく周りを見てみれば、キヤーキヤー言ってるのも本当に一部の女の子だつて分かった。

何をトチ狂ったか、まるで学校全体がキヤーキヤー言ってると思っただけだ……

(最初はマジで全校生徒かと思っただわ)

たいちゅんに「あんたの気もたいしたことないね！」と言ったら殴られた。

最近では大人し目の女の子達と仲良くなったりして、学生生活もそこそこ順調だ。

(学生生活が順調に行き出したと思えば……)

社内は新企画のプロデューサーとディレクターが未決ということで、もめていた。

なんか色々順序が違う気がするのだけど、持ち込み企画なので仕方がない。

本当はこういう嫌なんだけど、件の会社には以前よくしてもらったし、売り上げ見込みもそんなに悪くないから仕方なく共同開発することになった。

でも嫌なんだよねえ……

なにせ話を持ってきたのが例の狸親父だから、売り上げ見込みは悪くないはずなのに赤字ライン+すんごい大変なのが目に見えるし。

「で、でもさ。ほら、私、学生だから。昼間来れないから」

「大丈夫ですよ。この企画、全力で潰すんで」

「じゃあ誰でもいいじゃん。ていうか恩を仇で返す気が」

「仇で返す気はありませんが、仕方がないということ」

「……」

「頼みますよ、社長。ね？」

何が「ね？」だ。

牧の野郎。

狸と接するのがどれだけ大変か知ってるのか。

平気で納期ずらすし後から後から追加入れてくるしいつの間にか仕様変わってるし変更点言わないしアイツの文句言い始めたら句読点つかないくらい文句出てくるわ。

「ほーらそんな嫌そうな顔しつつ、もう頭の中で企画練ってるんでしょっ？」

「……」

「『何にしようかなー』って楽しみなんじゃないですか？」

「……」

「はい、決定と言うことで！」

ゲーム制作の醍醐味は企画書を練ってる時だと思う。

どんなコンセプトにしようかな。

どんな遊び方を考えたらより面白さを引き出せるかな。

どんな伝え方だと一番分かりやすいかな。

ふとトイレに立つとき、「お昼ですよ」「って肩を叩かれる時 ……」

そういう時によつやく「あ、もうこんな時間」「って気付くくらい集中している。

絵が書けないディレクターなんて言われたくなくて絵の勉強もした。日本語の勉強本を買ってきて勉強……ああ、あれは読まずに積んであった気がする……
一時期はシナリオの勉強もやったけど、文才が無いことに気付いてやめた。

「社長、そろそろ出発の時間です」

女性社員の声が遠くに聞こえる。

「……………うーん……………」

「社長？」

「……………ん……………」

心の中で「もうそんな時間か」と思った瞬間、後頭部に衝撃が走った。

「痛……………!?!?」

慌てて振り向けば、困ったような笑顔を浮かべる女性社員。
彼女は宮野さんと言って、凄く大人しい子だ。

「え？ い、今……宮野さんが殴ったの……？」

「加藤さんが殴れと……」

宮野さん……あたしやてつきり貴女は虫も殺せないような人かと……
龍に言われたくらいで社長を殴るなんて……

しかも加藤さんなんていきなり言われるから、一瞬誰のことかわからなかったし。

なんて考えてたら、やくざっぽい恰好の牧さんが現れた。
どうやらその設定が気に入ったらしい。

「社長ー行きますよー」

「……はいはい」

「お気を付けて」

宮野さんの気使いに笑顔で頭を下げて会社を出る。

車に乗り込むと、龍がタバコをもみ消して乗り込んできた。

「これからは会社に泊まって頂いて構いませんよ」

「え？」

「仕事は夜すればいいでしょう。となると家に帰ってる時間が惜し

いですから」

「龍……さん……私、女なのだけど」

「だから貴女の為に最上階は住めるように改装したでしょうが。いや、建築の手続きが大変だったなあ」

「……」

そう……そうだった……

自社ビルを持った記念に、と言って最上階は居住区へと改装したのだ。

普段は寝泊りをする時期になると、社員が風呂を利用できるよう解放している。

必要であればいくつかあるベッドルームを貸したりもしている。

「でも……やっぱり家が……」

家の方が落ち着く。あそこはホテルなみの緊張感があるし、何より夜が怖い。

「却下だ」

「……はい」

まあ、いいか。

仕事に集中してた方が嫌なこと忘れられるし。

たいちゅんのことと濱野のこととチカくんのこととも考えなくて

……。

って……

別にチカくんのことと悩むことなんてないんだった。

「で、例の不良坊主はどうなったんです？」

ほんと、牧って空気読めないんだから。

「……別にどうも」

「どうもって何だよ。なんかあるんじゃないの？　なんか急に不機嫌になったし」

「何でダメ口なの」

「同年だから」

「立場は私が上なんだけど」

「そう言うの気にしないじゃん」

「……」

気にしないけどさ。

そう言うのあまり気にしないけど……今は機嫌が悪いんだよ。
八つ当たりでゴメンね……！ ごめんなんて微塵も思っていないけど
ゴメンね……！

「で、実際どうなの？」

「どっつて……別に」

「付き合わないの？」

「何ですぐ恋愛に結びつけるかなー」

牧の……っていつか世間の悪い癖だ。

「だってあんなに『近寄ってきて鬱陶しい』って言ってたじゃん。
嬉しそうに」

そう言って牧は笑う。

「嬉しそうになんて言ってない」

「やめとけ牧。余計な口出すな」

え、珍しい龍が ……。

「照れずにブスツとしてるところを見ると、大方喧嘩でもしたんだろ」

「マジすか!」

「……」

ほんと憎らしい男。絶対ガキ大将だったに違いないよコイツ。

「いや……喧嘩って言うかさあ……」

ハーとため息を吐いて牧を見た瞬間、口を開いたのを後悔するほど牧はニヤついていた。

「『て言うか』?」

「………やっぱり男の人は……って言うか………なんて………言うか………」

「でた! 社長のマイナス思考!」

あーあ、と言いながら額に手をあてる牧。

「どーせまた面倒臭いこと言ったんでしょー？」

「めんど……くさいかもしれないけどさ……」

「社長は『シンデレラコンプレックス』だからね」

「何それ」

「社長みたいな人。『いつか王子様が』とか思ってるでしょ？」

「……」

「さすが二次元に本気で恋する女！」

アハハと大笑いする牧のスネを蹴る。

「ま、二次元は裏切らないですからね！ イケメンも多いし」

「イケメンは嫌い」

「嫌いなんじゃないかって好きなんですよ。ただイケメンの女慣れしてるのが嫌なの」

なんでそんな断定して物を言うんだろ。当たってるだけに悔しいじゃないか……

「まあ、いいんじゃないスカね。王子様待ってれば」

「……！」

何、なんか牧の奴、凄いム力つくんだけど……！！

「それよりお前、もう企画書の構想あんのか？」

「そんなすぐできるわけないじゃん。龍、バカじゃないの」

「お前なら今日中にはあげるだろうから、構想くらいあるんだと思っただけど」

「……」

「お前手が早えからなー。内容もまあまあだし、捨て企画には勿体ねえ」

「……今日中には終る」

私は知らなかった。龍がまんまと乗せられた私を笑っていたことを。

* * * * *

例えば實際目の前に王子様が現れたとして。

しかもしの王子様つてのがストライクゾーンど真ん中だったとして、それを逃さず手に入れようと思う人は、100%の中でどのくらいになるのだろうか。

恐らくほぼ100%の男女は手に入れようと思うはずだ。

(無理だな……)

ただ実際にそれを手に入れようと行動に移す人となると、何%か減るはずだ。

さらに、実際に手に入れられた人となると、その確率はもっと減る。

「……」

世界に存在する異性の数は半分ずつ、なんてたまに聞く。

その後には「だから別れた奴のことは忘れる」とか「良い人見つかるよ」なんて言葉が続くわけだけど。

まったく努力をしないとしたら、例え世界の半分が異性だとしても

自分が異性と結ばれる確率はほぼ0だ。
まして希望通りとなると難易度は上がる。
ただでさえ世界には一夫多妻制や同性愛があるわけで、きっかり半分ではないのだ。

(……………逃げてる)

何が言いたいのかというところ……………。

こう、無駄に哲学風にしたくなるくらい落ち込んできると言うわけで
(かと言ってそれは余裕ではない)……………

なんでこんな落ち込んでるかというところ、愛ではないけど意外とチカ
くんのことが好きだったと言うわけで……………

だって、こんな短期間の間で異性と仲良くなれるなんて珍しいから、
大人気なくもつい調子乗っちゃったっていつか……………

なんて言うか、こう、みんなの指摘が凶星すぎて申し訳ないやら恥
ずかしいやら情けないやらでイライラしてるって言うか……………

(仲直りってどうやるんだっけ……………)

つまり、酷く落ち込んでる。

あれから何日経っただろうか。

全然口をきいてない。

本当に嫌われてしまったのだろうか。

(嫌いにならないわけがない……………)

「聞いてンのかガリ勉」

パンつと良い音がして頭を教科書で殴られる。

「……………」

ジト目でにらみつければ、「な、なんだよ！」と先生は焦ったような声を出し、続いて「お前がボーっとしてるのが悪いんだぞ！ 教育委員会に訴えるとか言うなよ！！」と怒りだした。

「他の子が同じことしても怒られないのに、なぜかいつも私だけ怒られるんだよねえ。昔から。昔からそう。いつもそうだった。今もそう。お母さんもお父さんも学校の先生も上司もみんなそう。何故か私だけ。私だけいつもタイミングが悪いの。悪いことしても私だけ見つかったちゃうの。どうして？」

ちよつと……………っていうかかなりイライラしてたから、こんな自分本位の憎まれ口もうつかり出てしまう。

「なんだ疲れてんのかぁ？」

それを大人の余裕でサラツとかわそうとする先生の行動にさえムカ

ついたりして、私は思いつき教科書を机に叩きつけると、人生で
初め……二度目のサボリをすることにした。

第六章 諦めの悪い男女02

「はーサボっちゃったー龍にバレたら怒られるー学生の頃は真面目だったのにー」

怒られてもいいや、なんて思ってるものだから全然感情がこもらない。

若い時は……っていうか学生の頃はサボリなんてありえなかった。どんなに辛いことがあっても学校に行ってたし、誰にも文句なんて言わなかった。まして目上の人に逆らうなんてありえない。

(何がこんなに私を変えたんだろう)

うわ、また人のせい。

変わった気がするのも実際変わったのも全部自分のせいなのに。逃げに逃げてきた無様な根性の悪さが足かせになる。

あらゆる場面で逃げてきたものだから、『逃げ癖』がついてしまった。

あらゆる場面つてのは本当にあらゆる場面で、人付き合い……恋愛においてもそう。

傷つくのが怖くて気持ちを押しこめて誰にも悟られないようにして来た。

だって好きな人に何か嫌なことを言われたら、私はきっと立ち直れない。

友達と喧嘩したくらいでこんなになってるんだもの。

二次元とか芸能人を好きになるのは、そう言うことなんだと思う。
二次元も芸能人も、私に酷いことしたりしない。

全ては自分を守る為 ……。

「お、あの子、可愛くね？」

「え、どれ？」

「あれ」

「え〜？ めっちゃ地味じゃん」

「いーじゃん。お前、たまには真面目な子も良いんじゃない？」

「いや、地味すぎだろ」

「おーい、おねーさん！」

「俺の意見聞く気ねえなお前！」

結構な勢いで手を掴まれ、無理矢理振り向かされた。
目の前には2人の不良。

片方の髪の色なんか緑だ。
自然愛護のつもりなのだろうか。
もう片方の茶色が物凄くまともに見える。

「おねーさんサボリ？ 俺も！ 気が合うね」

「え、あ……あのっ……サボリ、じゃないんですけど……」

怖っ………！

不良怖っ………

「でも今ガツコの時間じゃね？」

「はい、そうなんですけど……その、病院に、寄ってたので………」

嘘。

見事な嘘。

でもバレないと思う。

「あゝこれからガツコ行く系？」

「……はい、行く………行きます」

「じゃあ、行く前にスタバ寄っていきーぜい！」

「ええ！？ でも、学校に……」

どうしよう、断れない……

「だーいじょうぶ大丈夫！ どうせ遅刻なら一緒だから！」

「いや、でも……あの」

しつこい、どうしよう。

「大丈夫だつて〜！ 誰も見てないからバレないよ！ 何もしないし。仲良くお話しするだけだし？」

「なか、よく……」

「そうそうー！」

したくない。

どうしよう。

なんて言えば怒らないで手を離してくれるんだろう。

どうしよう。

どうしよう。

じじじぢぢぢ……。

* * * * *

「マージでえ！？ 双子！？ じゃあ、やっぱり超似てんの？」

「いえ……そんなには……」

「え？ でも双子なんですよ？ 似てるんじゃないの？ 写メ見せてよ」

なんで、私はチカくんにさえ話してないことをコイツらに話してるんだろう。

「いや、2人とも写真嫌い……ないんです」

「じゃあ、今俺らと撮ろうー！」

「メガネはずして髪下ろしてみ？ ぜってえ可愛いから」

「え、そ、それはちょっと……」

「え〜じゃあメアド教えて?」

なんでこの人達はさっきから『線の内側』に入ってるよつとするんだろう。

初対面なのに図々しい。

「いや……ちょっと……」

「さっきからそればっか! つまんねえ」

「……………」

さっきから何なの。

この、自己紹介されたけど名前も忘れた『ノブ』って男は、何なの。もう1人の『レキ』は携帯いじって話もしないし。いや、話したくないからいいんだけど。

ていうか、つまらないなら解放すればいいのに。

「何その不機嫌そうな顔」

そう言っただけで鼻で笑う『ノブ』に、私はついに切れた。

どうやらたいちゅんの言っていた『年下には強く出るタイプ』っていうのは本当らしい。

普段の私なら絶対しないだろうに、私は目の前の男にコーヒーを浴

びせかけていた。

「……」

「……」

「……」

呆然とするノブ。

携帯から視線を上げてポカンと見つめるレキ。

周りの客も一瞬驚愕のまなざしを向け、チラチラこちらを見ている。

「テメエ……なにすんだよ!!」

なんか、ちょっと自暴自棄になつてたのかもしれない。

悲劇のヒロインを気取れば、可哀想な自分になれば落ちつく。

だって、もしかしたら誰かが「大丈夫?」って言うってくれるかもしれないから。

「　　っ!!　　っ!!」

だから、だから私は、「もう、どうにでもなれ」と思ってたんだと思う。

周りの音が聞こえない。

聞こえない中で、ひたすら怒鳴っているであろうノブを眺めていた。殴られた気もする。でも、どこか私が私じゃないような感覚におちいつていたから、全然平気だった。

痛みも恥ずかしさも何も無い。

あそこで怒鳴られているのは、私じゃない。

「あ、もしもし俺。女見つけたから、今から来ねえ？」

第六章 諦めの悪い男女03

ポーっとしてたら手を引かれていた。

ポーっとしてたら家に連れていかれた。

誰の家かは知らない。

メガネを外されて、髪をしばってたゴムを取られ、突き飛ばされて
転んだ。

「やっぱりそうするとちょっとマジじゃん」

ノブが満足げに言うのを聞きながら、「失礼な奴だな」と思いポーっ
と空中を眺める。

「なー……マジでヤんの？」

「なんで？」

「……」

それからノブとレキの会話は無くなって、2人は思い思いに携帯を
いじっている。

私はただポーっとな窓の外を眺めていた。

* * * * *

「おいっす」

「おう！ おせーよ」

「悪い悪い」

ドアを開けて入って来たのは、ガタイのいい黒髪の男。
そいつは、私を見るとニヤリと笑った。

「ほんとだ。めっちゃ真面目そう」

「だろ？ これなら何やっても言わねえよ」

「お前マジ悪人なんだけど」

そう言って笑うのを見て、私はようやく自分に何が起ころうとしているのか気付いた。

「……………」

サッと出口を見れば、ガタイの男がさりげなくドアをふさぐ。

「怖くなっちゃった？」

ニヤニヤ笑いながらノブは私のアゴを掴んで上を向かせる。
そのすぐ横で、レキは納得いかないような不満げな表情をしたまま
突っ立っていた。

「……」

ほんと、どうかしてる。

さっきまで逃げなきゃって思ってたのに、何故か、本当に何故か「
まあ、いいか」と思いはじめていた。

「ん？ 諦めた？ 大人しくする？」

顔を覗き込みながらチツチツと犬にするように舌を鳴らすノブ。
それを見て、ボンヤリ「この男は哀れだ」と思う。

「あなた ……」

アゴにかけられた手をゆっくり払って「哀れだ」言いかけた瞬間、ドアが遠慮がちに開き、スツと音も無く誰かが入って来た。

会いたかったのに会いたくない人。

その姿を見つけた瞬間、私は下を向くと絨毯の網目を数えはじめた。

「あれえ！？ チカ！？ なんでお前いんの？」

その台詞を無視して私の前に胡坐をかく。

そのままチカくんは顔を下げている私のアゴをつかみ、勢いよく上を向かせて視線を合わせてきた。

「お前はこれでいいのか」

「……は？」

ノブがまぬけな声をだす。

きつと、今誰ひとりとして質問の意図が分かっていないだろう。でも、なぜか私には分かっていた。

「いいのかって聞いてんだよ」

「……」

「答えるよ。無視すんじゃないよ」

「……」

「謝りに来るかと思えば来ねえし」

「……」

「『悪いことしたら謝りましょう』って言われなかったのかよ」

「……」

「それとも自分は1つも悪くねえとでも思ってたのかよ」

「……」

「人の親切心無下にしといて本当にそう思ってたのかよ」

「……なあ、誰？ チカここに呼んだ奴」

「俺」

「はあ！？ 何で呼んだんだよレキ……」

「お前が死にたくなるほど後悔することになるだろうから」

そんな言葉が聞こえた時、チカくんが後ろを振り向きながら低い声を出した。

「ヒーが可笑しいんだけど、こいつ殴ったの誰？」

辺りがシーンと静まり返る。

「……なんだよ、チカの知り合い？」

「お前？」

「え？ あー……まあ」

「何回殴った？」

「は？ な」

言いきる前に、ノブは地面に倒れていた。

「いつて……」

「何回？」

ノブを殴った手を開いたり閉じたりしながら再び問う。

「悪いって……知り合いだって知らなかった……ってえ！」

「何回だっつってんの」

「軽く叩いたのも合わせて4回」

「レキ！」

鈍い音がして、ノブは腹を押さえながらうずくまった。

チカくんが私の方へ寄ってきて手を引く。

座ってるのに手を引くものだから、思わずよろけた。

転ぶ前に引き上げられて、半ば引きずられながら移動する。

「チカ……ごめ……」

「あと1発はヒーがやれ。本気で殴れよ」

ノブの謝罪を無視して、チカくんが私を見つめた。

ノブを見れば、お腹を蹴られたのか未だにうずくまって唸っていた。

「……殴る？」

「蹴るでもいい」

「……………私が？」

「そう」

「本気で……………？」

「ああ」

無理だ。

無理。

できない。

ゆっくり頭を振れば、「駄目だ」と即答で返って来た。

「できない……………できるわけないじゃん……………殴るなんて……………」

「やれるだろ。たいちゅんのこと殴ってたじゃねえかよ。俺のことも殴ったし」

「無理だつてば……………だつて……………だつて……………殴る……………無理だつて……………そんな改めて……………殴られた方が痛いじゃん」

「やらねっばなしで悔しくねえのかよ」

「う、うん、大丈夫……く、悔しく、ない……」

出来ない。

虫も殺した事ないとは言わない。

初めて本気で人を殴ったのは、妹だった。

殴った瞬間の吃驚したような傷ついたような表情は、今でも忘れられない。

何故か、私も傷ついた。

「無理だつてば！ やりたくないの！」

「何でだよ、殴られたならやり返せ」

「なんでよ！ 何その根性！？ おかしくない！？」

「それこそなんでだよ」

「『人を殴っちゃいけません』って習わなかったの！？」

「いつまで『良い子ちゃん』なんだよ、ヒーは」

「無理なものは無理なの！」

殴るのは殴る。

でも本気じゃなかった。

痛くない程度に殴って、冗談のつもりだったし、相手もそう受け取ってくれていた。

たいちゅんとチカくんのは……ちよっとブチツと来ちゃっただけで

……

あの後物凄い後悔をして丁寧に謝罪した。

「なあ、なんでいつも思ってること言わねえの?」

「はあ?」

関係ない話題に思ったよりでかい声が出る。

「言わないから伝わらないんじゃない?」

「言っていないことと悪いことがあるでしょう!?! 何でもかんでもポンポン発言したら、誰かが困ることになる!」

「そうじゃねえ。言わなきゃいけないタイミングまで逃すなってことだバカ」

「そんなのちゃんと見極めて……バカ!? バカって言った!?! 今、私のことバカって言ったの!?!」

「見極めてねえから辛いんだろうが。こいつらの誘いだって断ればよかったし、周りに『助けて』って言えば誰か助けてくれただろ」

「断ったよバカ!! それに100%断言できるけど、誰も助けて

くれない！　そもそも私は辛くない！」

辛いことなんてない。

だって、23年間そうやって私は　……。

「もしかしてヒーは長女？　甘え方、わかんない？」

「ハッ……何言って……」

「我が儘の言い方は？　わかんない？」

何で泣いてんの……私……

第六章 諦めの悪い男女04

「何でそんなになるまで我慢してたんだよ」

「してない！」

「いつから我慢してたんだよ」

「してない！」

「親に『姉ちゃん』って言われるようになってからずっとか？」

「してない！」

肩で息を切らせて鼻水とか涙とか流しまくりながら叫んだ。
なんでこいつはいつも私の線の内側に入ってくるんだろう。
こつも容易く踏み込んでくるのはなんでだろう。

怖い。

心を許した瞬間、逃げられてしまいそうで怖い。
私は、傷つきたくない。

なんで……なんで私はいつもこの人の前で泣いてるんだろう
……

「分かった、もういい」

そう言ってチカくんが立ちあがった。
一度も私の方を見ずにドアへ向かう。

「……」

いなくなってしまう。

いなくなつて ……。

「あの……ひ、ヒーちゃん？ そんな顔するなら『待って』って言
えば？」

レキがそう言った瞬間、凄いいでチカくんが戻ってきてきてパーでレキを叩いた。

凄いい音がして「いてっ」と頭を庇うレキ。

「何すんだ馬鹿!!」

「馬鹿はテメエだ。気安く『ヒー』って呼んでんじゃねえよ」

「だって自己紹介したけど名前忘れたんだからしょうがねーじゃん。お前『ヒー』って呼んでただろ？」

「だから気安く呼んでんじゃねえよ。『霧島さん』だろうが」

「そんなことはどうでもいいんだよ」

「よくねえよ」

「あのな、ヒ……霧島さん。こう言う時は『待って』って言うんだよ。男は……っていうかコイツは霧島さんの我が儘聞くのが嬉しくてしょうがねえから」

レキは「コイツきつと、霧島さんが何をしてほしいか言えば何でも聞くぞ?」と言いながら笑う。

でも、普通、我が儘言ったら面倒だっと思わない?

嫌だっと思っでしょ?

妹が我が儘言った時、私はいつも嫌だっと思った。

だって私は我慢しなくちゃいけないから……

「今まで妹の前で我慢してきたんだろ？ 頑張ったな。俺、弟いるんだけど、全然我慢しなかった。でも、やっぱ我慢した時もあるから分かるんだよ。言いたいことが言えない時の方が多いって。だから弟が我が儘放題だとイラつくんだよな。『お前が我が儘言うから、俺が言えねえじゃねえか。俺も我が儘言ったら、親が困るじゃねえか。だから、言えねえじゃねえか』って」

「……………」

「でも、チカはそういう他人の気持ち察するのがメチャクチャ上手いんだよ。俺もそれで救われた。だからさ……………ちよっと頼ってみても良いんじゃないかな？」

「でも……………迷惑……………」

「迷惑だなんて思ってたねえよ」

「だって。本人がいつて言うならいいんじゃないやねえ？ コイツ、迷惑だと思ったら容赦なく言うし」

そう言ってレキは笑う。

楽しそうにクスクス笑う。

でも、気付いてしまった。

『他人の気持ち察するのが上手い』って言うのは、裏を返せばそうせざるを得ない程に臆病だということだ。

私がそうだから解る。

これは自惚れでも自慢でも何でもない。

むしろ、世界一愚かなで悲しいことだと思う。

他人からどう思われているのか、何を言ったら相手が嫌な顔をするのか、それらを見極めようと他人をよく見るようになる。

全ては自己防衛。

他人のため何かじゃない。

人というコミュニテイに入った瞬間からそうしてきたから、嫌でも上手くなったただけだ。

チカくんに「救われた」って……なら、チカくんは誰に救われるんだろうか。

「チカ……く……」

「前にも言っただろ」

校門の前での情景がブツツと浮かび、それと同時に再び私の涙もブツツと溢れた。

「泣く時くらい声出せよ」

「……………」

「まさか泣くのも我慢してたのかよ」

「……………」

「分かった。もういい」

「『もういい』って言わないでよバカ！」

「バカって言うな。『もういい』ってのは、さっきもそうだけど、分かったから言わなくていい」ってことだ」

「何が分かったっつーの！？ バカ！」

「ヒーが傷つきやすくって頑固で他人のこと気にしすぎで寂しがり屋で口悪くて……………ごめん、もういい」

レキは相変わらずニコニコしていて、ガタイのいいのとノブはポカンとしている。

何が何やらといった顔でずっと私達を交互に見つめていた。

「ま、霧島さんはこれから我が儘言う特訓するってことでいいかな？」

「問題ない」

「あるよ！勝手に決めないでよ！」

「うるせえ。俺がそうするっついたらそうするんだよ」

え、何コイツ。

「ムカツクんだけど」

「真顔でムカツクって言うな。傷つくだろ」

「涼しい顔で言ってんじゃないわよ」

やり取りを見てレキが笑う。

ヒィヒィ言いながら足でノブを蹴り、ノブは相変わらずポカンとしてた。

「あー可笑し……あのさ、ところで霧島さんが全然気付いてないみたいだから改めて言うけど、俺ら一度会ってるんだよ。だから俺がチカ呼んだってわけだ。だから、そんな余所余所しくしねえでほしいんだけど。お友達になつてよ」

「え？ ああ、友達ね……友……」

一度会ったことがある……？

「え？ どこかでお会いしましたっけ？」

「アハハ！ やっぱ覚えてねえか！ ほら、コンビニの前で、夜に」

「ええ？ コンビニ？ ……コン……」

その瞬間、サーツと血の気が引くのが分かった。

私がノーブラを暴露されて、あの馬鹿女をビンタした日だ。記憶の片隅に緑がちらつく。

「……そ、その節はどうも……」

そう言つて土下座をすれば、「何で土下座？」と爆笑された。

「へっへっへ……まいいや。これからよろしくな。ノブも……あ、こいつ信明な。で、このでかいのは祥太郎。ノブとシヨウ。出会いは最悪だったかもしれないけど、悪い奴じゃないんだ。許してやっ
てくれねえかな？」

「あ、はい……はい、大丈夫です」

「そっか、じゃ、改めてよろしく」

「よ、よろしく……」

わあ……なんか、こう、改めて友達になったの久しぶりだ。いつもいつの間にか友達になってた気がする。タマの時と言い、なんか、なんか……こういうの悪くない。

「俺の特訓は厳しいからな」

「え、本当にするの?」

「当たり前だろ」

「えー……」

「その前に俺に言うことねえのかよ」

言うこと?

なんだろう。

「あ、助けられてありがとう」

「どういたしまして。でもそっちなじゃねえ」

「ええ?」

なんだろう。

他に……なんかあったっけ？

「基本的な躰けも必要なのかよ」

呆れたように言うチカくんに、ちよつとムツとしながら睨みつけた。その瞬間、躰けと言うに相応しい絶対零度の視線を頂いた。

「『心配掛けてごめんなさい』と『酷いこと言っでごめんなさい』は？」

「は？　なんでそんなお母さんみたいな「言え」

そ、そりゃ……確かに……そうだけど……
でも、あれは私だけが悪い訳じゃ……ない……と、思う……し、それ
れに何かそう言われると……

「言えよ」

「い……」

「あ？　聞こえねえ」

「嫌だ！ 言いたくない！！」

そう叫べば、チカくんは一瞬ポカンとして、レキは大爆笑した。

「だって私だけが悪い訳じゃ」「ヒー……………」

うおー……………！

この威圧感……………！！

「覚えてろよ……………根っこから叩き直してやる」

そう言ったチカくんの顔は、やっぱり凄くイケメンで……………。

腰が抜けるほど怖かった。

第七章 小さな事件01

「仲直りしたのお？」

周りに人がいる為、ものすごく甘えた声でそう尋ねるタマ。クラスメイトもなんとなく聞き耳を立てているみたいで、お喋りがおろそかだったり教科書を眺めているだけだったりして露骨だ。

「仲直りっていうか……別に……」

「したんだ！ 良かったじゃーん！」

「別に仲直りじゃないし！ 向こうが怒ってただけだし！」

「ええ〜？ ヒロちゃん年上なのに「わー！ 今日もいい天気だなー！！！」

こ、こいつ何サラツと人の秘密を……

「ヒロちゃん気にしすぎじゃないのお？ この程度なら分かんないっつてえ」

「疑わしきは罰せよー！」

「使いどころ違っしー」

「おら、座れお前らー！ チャイム鳴ってんだろっがー！」

先生の怒声を聞きながらパラパラと生徒が席につく。

出席を取る声を聞きながら、私はボンヤリと昨日やり残した仕事のことを考えていた。

企画書のブラッシュアップをして納品したまでは良かったものの、先方がデータを上手くダウンロードできなかったようで、再度サーバーに上げて欲しいと言われたのだ。

（どーせ牧が変なことしたんだろうなあ）

「おい、霧島あ」

（やだなあ……牧ってば機械壊すのが才能みたいな男だからなあ……）

「霧島あ〜？」

（ああ……誰か呼んでる……）

「オラ、霧島！」

「はいい！？ 何でしょうか！？」

「まだ何も言ってるねえよ。お前さ、学級委員やれ。学級委員。決めてないのうちのクラスだけなんだよなー。ひっぱりひっぱりだ。先生もう限界！」

「だから嫌だつて……」

「いいからいいから。な？ 先生もその方が楽なんだよー」

えー面倒臭い……

何より仕事行かないといけない日に、学級委員の仕事がかぶったら嫌なんだけど……

「しご……予定とはかぶらないようにするから。な？」

「『な？』つて……」

「修学旅行の行き先決めていいから！」

「先生にそんな権限ないでしょうに」

「あれ、知らないのお前。学級委員の長である学級委員長になるとな、修学旅行の行き先決められるんだよ。吉良なんて自分の好きな所に行きたいが為に学級委員長やってんだぞ」

え、たいちゅん学級委員長だったの!?

世も末だなオイ……

「ま、仕事は何もやってないんだけどなあ」

「でしょうねえ……………あれ、ちょっと待て……………！ そうしたら学級委員どころか学級委員長になれってことじゃないですか！？」

「お前、一瞬タメ口になつたろ」

「そんなのはどうでもいいんですよ！ 嫌だー！！ そんな面倒臭いこと嫌だー！」

「……………じゃあ、俺やろうかなー」

「おお、真下！」

先生は目をキラキラさせながら勢いよく顔を上げた。

そのまま「お前ならやってくれるんじゃないかと思ってた」だの「それでこそ男だ！」だのと叫ぶように言っつて、真下さんの頭をガシガシ撫でつけ、照れ臭そうにしながら「やめろ！ 髪型が崩れる！」と叫ぶ真下さんを撫で続けている。

「で？」

「え？」

「お前は？」

「いや、真下くんが出たから……………」

「馬鹿だなーお前は。男女1名に決まってるんだろ」

「……」

「真下言ってやれ！ 『俺と一緒に青春しようぜ』って！」

「言わねえよ！」

「んだよノリ悪いなー。ま、いいわ。女子は霧島な。ハイ解散！」

「ちよっと！！」

「わー」とか「やっと終わったー」とか言いながら次々生徒が出て行く中、私は慌てて先生の汚いジャージを握りしめた。

「おい、どこに行く……！」

「だからお前タメ口……」

「民主主義はどうしたんですか先生！」

「民ちゅ……民……？」

「分からないフリとかいりませんから。首かしげるなー」

「うるせえなー。ある意味民主主義だったじゃないの。みんなは早く帰りたい。でも自分が学級委員になるのは嫌』で、俺は『馬鹿ガキがやるくらいなら、しっかり者の霧島さんが良い』な？」

「『な？』じゃないですよ。ヨイシヨとか私には効きませんから」

「お前なー。そんな嫌がつて……真下の気持ち考えてみるよ……」

「だからそんな脅し……」

先生がスツと指をさす方向を見れば、激しく傷ついた様な表情を浮かべた真下くんが、サツと私から視線をそらして机に突っ伏した。

「……」

「あーあ、泣かせた。年下を」

先生が「年下を」の部分だけボソツと耳元で囁く。

そしてそのまま耳元で恨めしそうにボソボソ語りだした。

「年上なのに泣かせた。いたいけな少年を。しかも自分の事情を優先して。お前つて奴はホント鬼のような」分かりましたよやりますよ」

くっそ……！！

なんか演技臭いし乗せられた気がする……

真下くんさすがに泣いちゃいないだろうけど、あの表情は多少なりとも傷つけたからに違いない。

別に真下くんが嫌とか何とかそう言うことじゃな……。

「なー？ 言つたる真下。基本的に騙されやすいんだよ、こいつは！ 良かったなあ、一緒に学級委員できて。昼休みに打ち合わせしといて良かったろ？」

そう言つて先生は私の頭をポンと叩いた。

真下くんは申し訳なさそうな表情でこちらをチラチラ見ている。

「……………」

私は、取り合えず真下くんの脳天に拳骨を落とした。

* * * * *

「静かにして下さい……………」

先程から何度書記の大人しそうな子がそう言つただらうか。
新たに1年生を加えた学級委員の集いは、早くも合コン会場と化していた。

「し、静かに……」

(あーあー……泣いちゃう……)

でもここで私がしゃしゃってもなあ……

ババアは引っ込んでるとか思われ……はしないだろうけど、地味に有名なせいであまり派手な行動は……

(フツ……ていうか単に不良たちが怖いだけなんだけどね)

怖えよ。

不良しかいねえわよ。

大人しそうな子が押しつけられるんだと思ってたけど、どうやら「修学旅行の行き先を自由に決められる」という特典に釣られたらしい生徒がゴロゴロいた。

「真下くん、ちょっと注意してくんないかな。うるさいって。黙れって」

「や、ちょっと先輩が……」

情けなっ……!!

ていうか何でそんな小っちゃくなってんの真下!!

「真下くんさ」お前らうるせえ！ 廊下までうるせえ！」

自分のことを棚に上げて、真下くんに一言物申そうと思った時だった。

聞きなれたたいちゅんの馬鹿でかい声が教室を占領する。

一瞬にしてシーンと静まり返り、そこかしこから小さく黄色い声が上がった。

「あれ！ 真尋じゃねえか！ お前、案の定押しつけられたのか！
グズでノロマでポーツとしてるから押しつけられたんだろ！ な
？」

「違っ」

「あ、お前、今なんで俺がここに来てんだろうとか思っただろ」

「……」

「分かりやすいんだよ馬鹿！ 失礼すぎるだろ！ 俺は学級委員長だからな。仕事しねーといけねえんだよ。お前とは違っんだ。特に今日は修学旅行の行くとこ決めねえといけねえから。俺はこの日の為にこんな糞面倒くせー仕事してんだ。あー面倒くせえ」

「先生から聞いたし。ていうか初めて来たんじゃないの？」

「……」

分かりやすっ………！
本当に初めて来たのか！ しかも遅刻で！
遅刻なのにあのふてぶてしさ。
さすがたいちゅん……

「いいんだよ、そんなのは」

声小さっ………！ 初めて聞いたよ………！
貴方そんな小さい声出せるんだね！
オバチャンびっくりだよ………！

「おら、テメエ！ どけ！！ そこは俺の席だ！」

理不尽なことを言いながら1年を椅子から引きずり降ろし、ふてぶ
てしい態度のままドカッと座った。
大きな音を立てて机に足を置いた瞬間、黄色い声も止み、辺りがシ
ーンとなった。

「これから会議を始める」

まるで漫画か何かの様な仕草に、オタクな私は不覚にも「ちよつとカッコイイ」と思ってしまった。
まさに帝王と言った雰囲気でニヒルにわら……

「いや、謝罪しろ謝罪……！　こちら1時間以上待たされてんだよバカ！」

「いつて！　叩くな！」

勢いよくパンツとたいちゅんの頭を叩いた瞬間、教室内の空気が一瞬凍った。

3年生がいないからって調子に乗ってるに違いないたいちゅんを躡けねば、と思っただけど、よくよく考えてみれば私は後輩だ。
しかもたいちゅんは不良で族の頭……の友達？

（私ってばなんて大胆なことを……自ら平穏な日常を手放し……あれ？）

そう言えばたいちゅんってどんなポジションなんだろう。
平だろうか。

聞いたことあるような気もするけど、覚えてない。何なんだ。

「お前くらいだぞ！　俺の頭を軽々しく叩くのは！」

「たいちゅんって平なの？」

「何の話だ！」

今聞く話題でもないかと思いなおして席に戻れば、「無視か！」と背後から聞こえてくる。

手をひらひらと振って「ハイハイ、また後でね」とアピールすれば、「覚えてろ」と怖いことを言われた。

「………つたく………じゃー始めるぞー………俺はグダグダしたくねえから発言はきつちりしろ。でも余計なこと言った奴は明日の朝日が拝めねえと思え」

なんだその脅しは。

「まず俺らの修学旅行のことな。1年は来年テメエらが行くんだからしっかり覚えろよ。あれ？ 学級委員長は決まってるのか？」

「まだです」

書記の子が申し訳なさそうな………と言うより怯えたような声を出す。その瞬間、「ああ？」とたいちゅんの低い声が響いた。

案の定、書記の子は「すみません………」と消え入りそうな声を出し、よろよろと後ろに後退しながら半泣きになっている。

「じゃあ、真尋。お前やれ」

「なああんでえ〜っ!？」

「うるせえ俺の命令だ。よし、次!」

「嫌だ! やりたくない! 私は ……」

ガン!

「やらせて頂きます」

「おう、ついでに倒れた机起こしとけ」

「やらせて頂きます」

たいちゅんによって蹴り倒された机を起こし、窓の外を見る。
夕日がやたら目に染みた。

第七章 小さな事件02

「はー終わった終わった。ハイ、解散。真尋は居残り。後はとっとと帰れ」

「あの、私は……」

「『居残り』つったのが聞えなかったのか？」

「聞えたんですけど、あの……」

「駄目だ」

「……ハイ」

仕事あるんだけど……

しかも、不良はまだ怖いとは言え、たいちゅんには慣れたと思ってたんだけど……

(怖いじゃん……普通に怖いじゃん……友達に向けるような顔じゃないじゃん……)

そもそも向こうは私のことを本当に友達だと思っているのだろうか。なんか、「どうしても暇な時にしようがなく構ってやる犬」くらいにしか思われてなさそうなのは気のせいだろうか。

扱いが雑なのは気のせいだろうか……。

「ねえ……私達って友達だよね？」

「なんだどうしたいきなり!？」

半泣きで聞けば、たいちゅんが驚いたような顔をして後ずさった。

「うわ、泣くな馬鹿……何なんだよお前……ったくよおー……」

どっから取り出したのか、というかそんなもの持っていたのか、ヨレヨレクシャクシャのハンカチを取り出して乱暴に私の涙をぬぐう。

「臭い」

「殴るぞお前」

「た、た、た、たいちゅん……」

「何だよ」

「たいちゅんはさあ……平じゃなくてさあ……私なんてゴミ以下の存在かもしれないけどさあ……普通じゃなくて怖いからさあ……私のことは怖い顔で怒らないでよあ……」

「おま……酔っ払いか!？　なんか絡みずれえからやめろ！　週末

のサラリーマンレベルだぞ！？ しかも意味わかんねえし！」

うえーんと言いながら半泣きでたいちゅんのハンカチを握りしめれば、「鼻はかむな！ 鼻だけはかむなよ！？」と必死な声を上げた。

「何やってんだよ」

「うわあ！？ お前いつからいたんだよ！！」

突然現れたチカくんに、こっちがびっくりするくらい驚くたいちゅん。

何故か慌てて私を突き飛ばし、チカくんに殴られていた。

「ヒーに気安く触んじゃねえよ」

「良いじゃん別に。友達だし」

「良くねえだろ。俺が嫌なんだよ」

「なんでよ。別に彼女じゃあるまいし」

ハハッと私が笑えば、見事に空気が……ていうかチカくんが凍った。

「は？」

「え？」

「は？」

「え？」

「……」

「え？ 何……」

「一体何を……。」

「付き合っ
てねえの？」

「誰が？」

「ヒーが」

「誰と？」

「俺と」

ええ!?! 初耳……!!!

見てよこのたいちゅんの驚いた顔……!!!
今にも目玉が落ちちゃいそうじゃん!

「ななな何!?! いいっ……いつ!?! いつそうなった!?!?」

「……」

「うわ、怒ってる……!! でもホント全然分らない! いつ!?!」

「真尋……俺はお前はズゲエ鈍い女だなと随分前から思ってたんだけどよ……」

「いやいやいやいや!! だって……ええ!?! だって別に『付き合おう』的なこと言われてないしね! 言われてないどころかそんな雰囲気微塵も感じなかったけど!?!」

「ええ!?!?」

今度はたいちゅんが驚いてチカくと私を交互に見つめた。

「ええーっ!?! 何その反応!?! 言わないものなの!?! 言わないの!?! 最近の子は!?! オバちゃんだからかちよっと分かんないんだけど!?!?」

「いや、俺は……言う派だけでも……ああ……ええ？ あー……
コイツ、は……言ったの聞いたことねえかも……うん」

「なあああにそれ！？ そんなの分かるわけないじゃん！ いつ
！？ どのタイミングでそう思った！？」

「『覚えてるよ……根っこから叩き直してやる』」

「それ！？ 分かんねえわよ！ 分かる！？ たいちゅんは分かる
の！？」

「いや、俺は背景が分からねえからなんとも……一体お前らの間で
どんな取り交わしがあつたのか俺にはサツパリだ……」

「私だつてサツパリだしね……！」

「じゃあ付き合つて」

「嫌だ」

即答した瞬間、たいちゅんが腹を抱えて大爆笑する。
机をバンバンと叩きながら漫画のような笑い方だ。

「ま、真顔で……！ しかも今までのテンションの差がパネエ！
あんだけ取り乱しておいておまつ……は、真尋、お前つて奴はふ
えっへっへっへ……！ ち力がフられんの初めて見た……！！」

苦しそつに腹を抱えながらヒューヒュー言いたいちゅんを横目に私は小さくため息を吐いた。

「だって付き合つとか。しかも『じゃあ』って」

「なんだよ」

「え、怖っ……やめて、その顔」

「……もういい」

「でた、『もういい』……！」

ツーンと顔をそむけると、チカくんは部屋を出て行った。

未だに笑っているたいちゅんに目をやれば、「大丈夫、大丈夫」と全然そつは思えない顔で笑う。

そんな微妙に気まずいまま2年生は修学旅行へ行つてしまい、結局私がチカくと話すことはなくて、それどころか顔すら合わせない日々が続いて、ある意味良かったのか何なのか……困ったものだ。でもまあ、喋らなくていいなら気まずくないし、別にそれでもいい

かと思ったり……

……なんて悠長に構えていたら、事態は私が思っていたより随分と深刻で、とんでもないことになっていた。

第七章 小さな事件03

もう、ほんとこんなこと言うのは嫌なんだけど（だって私より年上の人も私のことをそう思ってるだろうし）、本当に年下ってなんてダラシナイというか……

こう、日本の未来が心配になるといつか……

頭悪いの多いなあというか……

全員がそうじゃないとは思っけど……

こう……こうさ……あの一……

「停学はねえわよお……」

「ウケル〜！ なーんか先輩達2人とも停学だし〜！ しかも修学旅行先でとかあ」

アハハと爆笑するタマを尻目に、私は掲示板に張り出された停学通知を眺めていた。

いったい何があつたら修学旅行先で停学になれるんだろうか。

不純異性交遊か？ 男同士で？ それとも他校の女子？

もーホント……何で？

「先輩にメールしてみればいいじゃ〜ん」

「したよ。たいちゅんに」

「なんてえ？」

「電源切ってるっばい」

「ああ〜みんな似たようなメール送るだろうからねえ」

へっへっへと気味悪く笑いながら、タマが私の肩を組む。

「住所教えてあげよおかあ？」

「……なんの？」

「先輩に決まってんじゃあん」

「ダメ絶対！ あんた、ホントそれ犯罪！！」

「本人に聞いたんだってばあ」

「真顔で嘘つかないでくれるかなあ！？」

恐ろしい……！！

未恐ろしい娘だよ……！！

こいつの知らない情報なんてないんじゃないかなろうか……！！
私のスリーサイズだって知ろうと思えば分かかってしまうんじゃないかな
ろうか……！！

「霧島あー。今日委員会行けよー」

「……」

くっそ……忘れてた……

委員会は仕事優先で良いって言うたくせに、結局委員会優先になっている。

タマが「可哀想お」と間延びした声で言うのを背後に聞きながら、私は鞆を担いで教室を出た。

「霧島さん」

「はい？」

声をかけられたのは、まさに教室を出た瞬間。

「チカちゅー先輩が何で休んでるか知ってる？」

「いえ……」

誰だ。

お前誰だ。

何で私に聞くの。

「な〜んだ、霧島さんなら知ってると思ったけど、思ったより仲良くないんだ」

「……………」

仲良いわよ。

少なくともあんた達よりはね。

「先輩達が話してくれたかと思ったのに」

何よそれ。

気になるなら、本人に聞けばいいじゃん。

「まいつか〜……………もう行っていいよ」

うわ、ムカツク……………！

何その言い方……………！！

「……………」

でも言えない……………！！

ギャル怖えわよ……………！！！！

結局私はこうやって泣き寝入りするしか……。

「お、いたいた！ 真尋お！ たいちゅん先輩から！」

キラキラした笑顔で真下くんが携帯を振りながらこちらへかけてくる。

その瞬間、目の前にいた知らない女共の顔が歪んだ。

「はい！ 今、つながってる！ 真尋にかわれって！」

「……ふっ」

なんかねー

もうねー

「私、真下くんのこと好きかもしんない」

「……うええ！？ そ、それって「あたしだけど」

『「あたしだけど」じゃねえよ！ 名乗れよ！ チ力かお前は！ 真尋のくせに偉そうにするんじゃない！』

「あんたが名乗りなさいよ。誰よあんた」

『分かってんだろ馬鹿！ 泰造先輩様だよ！』

「あゝあ。修学旅行に行った先で問題起こして途中退場した挙句、1週間の停学をくらった泰造先輩様でございましたか。ごきげんよう」

へへへと笑えば、チツと電話口から舌打ちが聞こえた。

『いちいちトゲのある良い方しやがって！　なんで電話だといつも以上に態度デケェんだよテメエは！　俺が殴れないからだろ！？』

ハハハ、バレてる。

「で、用件は？　私、これから委員会があるのだけど。ていうか人のメール無視しといて真下くんなんか電話してくるなんて良い度胸してんじゃないの。私とは友達じゃないって言うの？」

『なんだ、お前。拗ねてんのか？　たまにゃ可愛いところあるじゃねえか』

「はあ？　用が無いなら切るけど！？」

『まあ待て。俺の携帯はファンが多いから電源切ってたよ。まーつたくまいるよな？　朝から鳴りっぱなしだぜ？　最初こそ対応してたけど、もー面倒くせえ面倒くせえ』

「あっそう」

『でもチ力は俺よりファンが少なえから電源切ってねえ』

「あっそう」

『それだけだ、じゃあな』

「あ、ちょっと待って！　たいちゅ……って切りやがった……！」

思いつきり携帯を地面に投げつければ、あわやという所で真っ青な顔をした真下くんがキヤツチする。

「真下くん行くよ！　今日は委員会なんだから！」

「えー？　いや、俺は……ていつかさっきの！」

「まさかサボる気なの！？」

「いや、そんなことはなくて……！　そうじゃなくてさっきの」

「じゃあ、行くよー！」

私は何か言いたげな真下くんの手を握り潰す勢いでつかむと、生徒会室へと歩いて行った。

* * * * *

「帰りてえ」

「真下くん、貴方ちよつと露骨だと思つたの。委員長会で決まつたことくらいキチンとクラスの人達に下ろさない」と

「真尋は帰りたくねえの？」

「帰りたいに決まつてるじゃん」

意見出せつつたのに誰も出さない。

挙句、「じゃあ適当に出しますから、その中で決めて下さい」とか言えば「何だその案は。つまらない」と来たもんだ。

案を出す気が無いなら口出すな。

学校は社会の縮図とは良く言つた物で、社会にも子供みたいな人間は山のようにいる。

「学生気分が抜けきれんようだ」とか大人が偉そうに言つてるけど、そう偉そうに言つてる奴こそそうだったりするしね。

「円満かつ強引に話を進めるにはどうしたらいいと思つ？」

「まずその考えを根本から変えるべきだと思つ」

的を得た返答を受け、私はため息を吐いた。
せめて私がいちゅん程恐れられていれば……
チカくん程人気があれば……

「ガチャガチャ文句とか理想ばつか言ってるんで、意見言うなら現実的な範囲で言う、言わないなら口出ししないで黙って従えっつーのよねー。ほーんと口だきやあー丁前なんだから。態度がデケエデケエ。お前らは王様かつつの。まあでもこんな低脳の集まりに言っても無駄かーハハハ。たいちゅんがいつぱいいるみたいで疲れるわあ〜……」

そう心で思った瞬間、口に出ていた。

しかもたまたま妖精さんが通った（今までの騒ぎが嘘のように部屋が一瞬静かになる現象なのだけど、分かるだろうか？）らしく、私の声は想像以上に響いて一瞬にして教室が静かになる。

おまけに窓の外を遠い目で見ながらアゴに手という女王様っぷりだ。途中で小声になりつつも最後まで言い切った私を褒めて欲しい。

「……………」

沢山の目が私に集中して、私は学生時代に大勢の大人相手にプレゼンの練習をさせられたことを思い出した。

「せんせえ」

「甘えた声出すな」

どうしよう……！

私、明日から学校行けない……！

「はあ？ ウゼエんだけど……学級委員だからって調子こいてんじやねえよ」

ごめんなさい。

私も本当にそう思う。

でも、本心なのが救われないよね！ 貴方達！

「センサーも早く帰りたいんだから。お前らと違って可愛い嫁が待ってるのー。ホント、意見ないなら勝手に決めるからなあー」

先生のその一言で、ブツブツと文句を言いながらも建設的な意見がチラホラ出てきた。

やればできるじゃん。

素直じゃん。

年下のじじい言ってるがちょっと可愛いなって思っじゃん。

ついでに、先程の件は忘れてくれないだろうか。

第七章 小さな事件04

調子のんなどか、虎の威を狩る狐だとか、あとはブスだとか蔑まれつつ、私は教室を後にした。

身から出た錆とは言え、自業自得とは言え私は激しく傷ついた。

真下くんは真下くんではポカンとしたまま私を見てるし、先生は屁が0だ。

私のお陰で打ち合わせが早く済んだというのに。

「聞いてよたいちゅん！」

『なんでオメエは俺に電話してきてんだよ！』

「だって電源切つてないじゃん！ 電話してもいいってことでしょ！？」

『そうだけど……そうじゃなくて……！ お前、俺がお前になんて言ったか忘れちゃったのかなア！？』

「ええ？ なんだっけ？ いつ？」

『おい、本気で忘れてんじゃねえか……！』

「そんなことより聞いてよー！！ あのさ、あ、待って！ ヤバイ私殺され……」

ブツン

携帯を奪われて電源ボタンを押される。

目の前には、般若のような顔をした龍が立っていた。

「殺され……?」

「何でもないです……」

「お前な、マスター時期に近いのに良い度胸してんじゃねえか」

「……」

「無駄話か? あ?」

「すみません……」

車に押し込まれる瞬間、クラスメイトの大人しい女の子が「うわああああ……!」って顔をして青くなってるのが見えた。

龍が営業スマイルで「身内なので誘拐じゃないですよ」と言って、それに対して首がもげそうな程頷く大人しい子。

ヤクザ説ってまだ生きてたんだ、と地味に実感した。

* * * * *

「ええ！？ マスター前倒し！？ 何で!?!」

「いやー他タイトルがずれちゃって」

牧がそう言って困ったように笑う。

「だからって何で私のラインが前倒しになるの」

「一番問題のラインとマスターが近くて余裕あるの社長とこだけなんですよ〜！ 頼みます!」

「嫌。私の可愛い部下が苦しむ羽目になるわ」

「良いんですか、そんなこと言っつて。その数人の犠牲を惜しむあまり、他の可愛い社員が大勢苦しむはめになるんですよ」

「……………」

「あーあ可哀想に。しかも大声で『嫌』とか言っっちゃって」

「……………」

「はい、分かってます。ご飯奢りますから」

「その言い方なんかムカツク!! 大体誰が遅れてんの! 当事者を連れて来なさい当事者を!!」

「あ、俺」

「貴様~~~~~!!!」

分かる。

牧は悪くないことも、助け合いが必要なことも、妥協が必要なことも。

でも……さあ……

「社長の気持ちも分かりますよ」

「黙ってくれるかなあ!?!」

「あ、詳細メールで送ってるんで見て下さい」

「ていうかさあ!。他のところが遅れようが関係なくない? 私のラインが圧迫されるのとは無関係じゃない? どうして私のラインが圧迫されるの?」

「そんなの……この間、狸の親父さんが提出の時にご迷惑をおかけして怒られたからに決まってるじゃないですか。3度目ですよ3度目。仏の顔もなんとやらですよ。これ以上怒られない為には随所で

調整が必要なんです」

「へえー」

アハハと笑う牧を見ながら、私はメーカーとスケジュールを開いた。ブツブツ言いながら納品期日確かめ、どのくらい早められるかを計算する。

余裕をもったスケジューリングはしているものの、それぞれのところで1週間も2週間も余裕を取っているわけではない。

おまけに牧ラインの鬼畜なまでの送れ具合……どうしてこうなった……
……
となると……

「提出10日も早まるじゃーん……」

「たいしてかわらないってえ〜」

「変わるよ馬鹿！ マスター前の10日は大きく違うよ！ マスター近くなくなつてデカイわ！〜」

不幸中の幸いは 版が異常に早く上がって来たということだ。

まだダミー素材が残ってはいるものの、画像の差し替えだけなのでそこまで時間はかからないはずだ。

それによるバグも出ない……と思う……けど何が起こるか分からないのがゲーム制作。

「しばらく学校休もうかなあ」

「休むと留年しちゃいますよ」

「もう、ほんつとムカツク。何なの？」

「もう1人のディレクターに任せれば大丈夫ですよ」

「よくもそんな軽々しく言えるね。軽蔑する」

牧は何が可笑しいのか爆笑しながら部屋を出て行った。
ため息をつきながら内線を飛ばし、私はパートナーの盛大に歪んだ
顔を想像しながら再びため息を吐いた。

* * * * *

「ん〜………?」

けたたましい電子音を止め、薄っすら目を開ければ見なれた会社の
天井……

最近はずっと会社と学校の間を行き来しているだけだ。
土日も皆フル出勤で泊まり込みだし、私も私で学校は出てるだけ出

て授業はほとんど聞いていない。
こっそり……ていうかバレてると思うけどノートパソコンを持ち込んで作業をしている。
あ、そうそう。席替えがあつて、運よく窓側の一番後ろをゲットしたのだ。
たまに一部の先生から「随分ハイテクなノートだな」と嫌味を言われるけど、この低レベルの学校だからと諦められているのか、それともこの間の小テストが学校始まって以来(?)の奇跡的な好成绩だったからか、パソコンの没収はされなかった。

「眠いー……」

本当は駄目だけど、本当は駄目なんだけど、いよいよ開発機を持ち込……いや駄目だ……!!
何を言ってるんだ私は……!!
あんな大きい物持ちこめるわけないし、お外に出しちゃ駄目……!!

(寝起きの思考、恐ろしいな……)

提出日はいよいよ明日だ。
なのに、停学組が気になつてしょうがない。
どうなつたんだろう。

確か、1週間だからもう学校には出てくるはずだ。
いったい何をしてそんなことに……

……っ ていかんいかん。

こうやって気を抜いたらすぐ考えちゃうし、そのせいで龍には怒られるし狸親父も自分のせいなのに何か私に色々と怒ってるし、牧は牧でピリピリしてるしマスター直前独特の緊張感（主にディレクターとプログラマー）が漂っていて胃が痛いし目眩が酷いし熱っぽいし……

つまり、体力のない貧弱な私はお家に帰りたいです ……。

（まあ、そんなこと言えないけどね）

* * * * *

「すごい！ タマここまで顔色悪い人初めてみたあ〜」

「ハハハ、今のうちによ〜く揉んでおくといいさ」

「だいじょーぶう？」

「そう見えるなら」あ、そう言えばあ〜」

聞いちゃいねえ。

ていうか、体調悪いからちよつと眠りたいんだけどな。

授業中仕事するから、せめて休み時間くらい放っておいてくれ。

……じゃなくて仕事じゃなくて勉強しろって……やかましいわ。

駄目だ……なんか疲れてる気がする……

「先輩達、停学終わったねえ」

「そつだねえ」

「会いに行こうよお」

「やだよお」

「なんでよお?」

「具合悪いよお」

「会えば治るつてえ」

「治らないつてえ」

「……ヒロちゃん、あんた大丈夫？」

「うん」

タマはようやく察してくれたのか、静かにその場を去っていった。私は机につっぱをしたまま惰眠を貪る。

(ああ……授業開始のチャイムが聞こえると良いのだけど……)

そう思いながら、私の思考はふかい闇の中へ沈んでいっ ……。

「ヒ」

沈んで……

「おい」

……

「無視すん」「うるっせえわよ」

突っ伏したまま声を出せば、声の主は黙った。
ようやく静寂が訪れ……ていうか、なんか教室全体静まり返ってる
気がする。

「具合悪いのかよ」

「うん」

「だから電話しなかったのか？」

「電話？」

「たいちゅんが俺の携帯は電源切ってねえつつったじゃん」

電話してほしいなら本人がそう言えば良いじゃん。
彼女じゃあるまいし、そう四六時中電話したりしねえわよ。

「俺、怒ってるんだけど」

「なんで？」

「わかんねえの？」

「うん」

「ヒーの俺に対する扱いが雑だから。男心が全然分かってねえし」

「知りたくもないってのよ」

「……マジで具合悪いの？」

いくら心配そうな気配が増し、無理矢理起こされた。

「やめてよ。具合悪いってんでしょ」

私の顔を見た瞬間、チカくんが露骨にハツとした顔をする。

「埴輪みたい」

「アンタなんなんだよ！！ 出てけ馬鹿！！！」

パーンと良い音出しながら教科書で思いっきりチカくんの頭を殴ると、私は今度こそ情眠をむさぼった。

第七章 小さな事件05

「フッフッフ……」

席替えしてタマとの席が近くなったせいで、授業妨害が増えた。今も先程からずっと忍び笑いが聞こえてくる。

「女で西條先輩叩く人初めてみたあ〜」

「……」

「クラス中シーンとして超面白かったしい〜！ ていうか、ポカンとしたあと黙って教室を去っていく先輩がマジ哀れっていうか可愛かったんだけどお〜！！ しかられた子犬みたあい！」

「うるさいんだけど!?!」

「うるさいのはお前だ霧島あ!」

先生、改めバーコードは何故か私だけに注意する。恐らく言いやすいのだろう。

ストレスのはけ口は自分より弱い立場の物だけってか。

「あたしだけか？ え？」

調子が悪い時の私は誰よりも短気だ。
睨むようにしてバーコードを見れば、ムツとすると同時に軽く動揺して私を無視した。
よもや先生にこんな態度取る日が来るなんて……と心の隅で泣きながら、私はノートを取ることに集中する。
この先生はさっさと消してしまおう為、なるべく早く写さなくてはいけないのだ。

(寝てるのを妨害されたとは言え、殴ってしまった……)

授業に集中しなくちゃいけないのに、そのことだけが頭を巡る。
最初は仕事をしていたのだけど、これじゃミスすると思って授業に切り替えた。
なんか、高校に入ってから人を叩く機会が増えた気がする。
子供っぽくなっただらうか。
なんでだろう……
駄目だと思いつつも、感情が制御できない時が多い。

(悪いことしたなあ……)

謝らないと。
私は大人なんだから、私がしっかりせねば。
それに、ディレクターだし仕事もしっかりやらねば。
授業と仕事、両方頑張っつて、友達にも先生にも社員にも迷惑かけないように……

……頑張らないと。

ああ、ぐらぐらする ……。

「授業終わったよお」

間延びしたタマの声に、思わず肩がビクつく。

「……うん」

いつの間に終わったんだろう。

「次、体育だけど休めばあ？」

「いや、運動不足だしストレス発散の為に……」

確か次は跳び箱だ。

跳び箱は学生時代唯一の得意種目で、体育はこれで点数を取っていたよなもんだ。

まさか高校になってまで跳び箱を飛ぶ高校があるとは思わなかったけど。

「跳び箱なんてたるいよねえ……タマさぼろーつと」

「出るよ」

「ええ〜！？ やだあ！」

ヒンヒン泣き真似してるけど、タマはきつと出るだろう。

なんか最近気付いたけど、タマは異常に私のことが好きだ。

いや、自惚れとかではなく『身が危ない』的な意味で。

トイレの個室の中にまでついて来られたときは何の冗談かと思った。きつと保健室で寝てるのか言った日には「タマも一緒のベッドで寝るっ〜」だろう。

「ちょっとお〜！ 行くなら早く着替えてよお〜！ じゃないとタマが脱がせるからね？」

「ごめん、すぐ着替えます」

もたもたとジャージを引っ張り出して苦笑。

芋色って。

芋色ってお前。

いや、近隣の高校と思われる学生が着ていたエメラルドグリーンよりは良いけどさ。

「何その顔お〜」

「ジャージの色に時代を感じるなと思って」

「何それえ？ おばあちゃんみた〜い。あ、でもタマはこげ茶がよかったなあ！ 華高のジャージ超可愛いよお〜！ 鷹三高は凄いカツコイイラインが入ってるしい〜……ダサイのウチだけえ」

「あのエメラルドグリーンよりかは、だいぶいいと思うのだけど」

「アハハハハ！ 確かにい〜！ ていうか、歩きながら着替えてたら危ないよお〜？」

「大丈夫だいじよ ……」

ぐひっぐひっ……。

(あ、ぐらぐら)

「真尋!」

ぐいっと力強くひっぱられて床に尻餅。

「何やってんの馬鹿!」

「……ごめん」

階段から落ちそうになった私を、タマは思いつきりひっぱって尻餅をつかせた拳句、思いつきり拳骨を喰らわせた。

(助かつ……ていうか……痛い……めちゃくちゃ痛い……)

不器用だけど優しいタマ。

そんな彼女にこれ以上気を遣わせる訳にはいかない。

幸い目眩で階段から落ちそうになったのはバレていないようだ。セーフ。

私はこのまま馬鹿を演じてればいい。

「んもー！ どこまで馬鹿なのぉー！？信じらんない！」

「あれ、一瞬言葉使いが直ったと思ったのだけど」

「ええ？ タマ分かんない。さっさと着替えれば？」

カツと音がしそうな程睨まれて、私はその場で慌てて着替えた。

* * * * *

体育館へ歩いて行くと既に跳び箱は出ているものの、学生はチラホラとしか揃っていない。

先生もやる気がないので、「ひたすら飛べ」と指示を出した後はポロっと外を眺めながらヤンキー座りをしていた。

「タマ、いきまーす！」

エへへと笑いながらへニヤへニヤ走るタマ。
飛べんのかしらあの子は……と思ったものの、8段を「まだイけるけど?」といった感じで軽々と飛ぶ。
それを見た他の子も「なんかタマ楽しそお」と言いながら徐々に参加者が増えていく。

(私は肩慣らししよう)

年寄りの冷や水。

この間のマラソンでは痛い目(筋肉痛が3日後にきた拳句、1週間も続いた)を見た為、徐々に馴らしていくのが良いのだ。
そう自分に言い聞かせ、まずは5段を飛んだ。

(うわぁ……!)

着地の時に半端ない目眩が襲い、思わずよろける。

(しかし飛べた……! フッフ昔取った杵柄だわ)

「何今の飛び方〜! キモイんだけどお」

「……………」

クラスメートからかけられた何気ない一言。

こんなにも落ち込むのは、体調が悪いせいだ。

そうに違いない。

ていうか、そもそも私の事じゃないかもしれないしね！

……だ、誰か別の人かもしれないしね！

次行くぞ次！

……いや、絶対私のことだけどさ……だけどさ、だけど一々相手にしてたら……

「おーい、喧嘩してっぞお！」

その一言でワツと体育館内が沸く。

あっという間に人が出て行き、先生は慌てて散って行った生徒を呼びとめていた。

(くだらない)

私はひたすら6段、7段と段数を増やしていき、8段をギリギリ飛べて大満足でタマの方を振り返った。

(10段飛んでるし……！)

飛び終わったタマはこちらを見て「んふっ」と笑う。

物凄い屈辱感を感じて、余計に目眩がした気がした。

(いかにいかに……血圧を下げねば……)

「ねえ！ チカ先輩血だらけなんだけどお！！」

喧嘩騒ぎを見に行かないでダルそうに体育館に座りこんでた生徒達が、その一言を聞いて次々と出ていく。
それでも体育館内にはだいぶ人がいてザワついてたけど、私には一切その音が聞こえなかった。

停学明けに喧嘩 ……。

頭の中で「いやいや、まさかそんな」と「チカくんならありうる」がグルグル回り続け、私の体調は急速に悪化した気がする。

「センセエ……」

「あ？」

件の騒ぎでイラついてた先生の刺々しい声と表情。それが私の顔を見てサツと引っ込む。

「霧島、お前大丈夫か？」

「駄目っばい………ので、ちょっと、休憩しても………いいでしょうか………」

「休憩つて言うか保健室行け、保健室！ 1人で行けるか？ 俺がおぶろうか？」

「そんなことしたら先生セクハラで捕まる………」

ぐったりしながらため息を吐いて言えば、「馬鹿！」と言って頭を軽く叩かれる。

それさえ辛くてふらつけば、「あ、悪い」と焦ったように肩を掴まれた。

「じゃあ、1人で行け。俺はちつと向ここの応援に呼ばれたから。な？」

恐らく喧嘩のことだろう。

「チカ………西條先輩がいるって言ってましたけど」

「ああ、どうなんだろうな。ま、いてもおかしくないけど」

なんとなく、そんな風に言われちゃうチカくんが、少し哀れに思えた。

見た目が悪いと、ちょっと素行の悪いことをしただけで「やっぱりなんて言われちゃうんだろうか。」

まあ、ちよつとどころじゃないから言われてるのだろうけど……
それにしても、何となく意味も無く喧嘩するようには思えなくて、
でもそれを深く考え得る程元気も無くて、私の気分は保健室へ向かいながらどんどん急降下していった。

第七章 小さな事件06

「なんで喧嘩したのかなんて聞かないし興味すらないけどねえ、アタシの手を煩わせるんじゃないわよ」

おおよそ私が学生の時に抱いていた「優しい保健の先生」の印象とはほど遠いこの人。
生徒からは「さいとー」と呼ばれてる。

「おら、動くんじゃないよ馬鹿！」

「痛えなババア！！」

「ババア！？ 傷口に塩擦り込まれたいかハゲ！」

「ハゲてんじゃねえよ剃り込みだ！ テメエ、キョウイクイインカイにチクンぞ！」

「『教育委員会』ぐらいまともに発音できるようになってから言いな。あとアタシはそつちに言っても無駄」

そのさいとーが、カーテンの向こうでギャンギャンうるさい男子学生を治療していた。

なんとか保健室に辿り着いてベッドを借りた瞬間入って来た男子学生は、わけのわからない怒声を上げながらも大人しく治療されるらしい。

「ったく。あんたと西條ときたら……入学の時からこれだね。今度は何？」

「知らねえ。向こうが勝手に殴ってきた。つか、ババアには関係……
……いってえ！」

また何かやられたらしい。

すぐに「ああ、血がつ！？」と悲痛そうな声が聞こえた。

「鼻が折れただろ！？」

「折れてないよ。ほーら」

「いてえよ馬鹿！！ ねじんな！」

(やだ、いったいどんな治療を……)

うるさくて全然眠れない。

そもそも病人がいるって気付いているんだろうか。

「ほら、病人がいるんだから静かにして」

「テメエが余計なことしなけりやな……女か？」

「野郎だよ」

「んだつまんねえ」

「ハイ完了。治療終わったんだから出てけ。終わったら西條の治療なんだから」

「あいつになんてしなくていいよ」

「何がキミみたいなこと言ってるの。早く出てってよねー？」

さいとーは面倒そうに言うと、無理矢理部屋を追いだした。それから数分して、再びドアが開く。

「あーら、いらっしやい。こっちに来な」

「……」

その入って来た人は、無言で椅子に座ったらしい。

椅子の軋む音がして消毒の準備をしていると思われる音がした。

「今度は何やらかしたの」

「……」

「あんたいつつも喧嘩してるけど、向こうが手え出さないと殴らな

「いと思ってただけだ」

「……」

「まあ、あの糞ガキが本当のこと言ってるかなんて分からないけどさー」

「……」

「ホント、無口ね。もう2年も世話してるんだから、いい加減慣れなさいな。ていうか、修学旅行のお土産は？ あ、途中退場なんだっけ？ じゅめーん」

アハハと全然悪びれた風も無く返すさいとー。

正直、不良相手にここまでたいしたもんだと思う。

さっきの男の子もそうだけど、年下とは分かってもどうも怖い。

「今回は我慢できなかった」

チカくんの声がポツリと響く。

その瞬間、「ああ、やっぱり」と落胆して、何だか酷く落ち込んでいくのが分かった。

横になっているのに激しい目眩が襲う。

声が聞こえないからチカくんじゃないかと思いきんでいたぶん、勝手に裏切られた気持ちになっていた。

「あら、ビックリ。久しぶりに口開いたと思ったら。何言われたの？ん？」

「別に」

「我慢できなかったんでしょ？何がよ」

「……」

「ま、いいんだけどね……ってコラ！！そっちは病人が……」

シャツと音を立ててカーテンが開けられ、ちよつと驚いたような顔をしたチカくんが視界に映った。

「やっぱり」

「何やってんのよ馬鹿！『やっぱり』じゃねえよ！！カーテン閉めな！」

とても女とは思えない口のききかた（私も人のこと言えないけど）でチカくんの後頭部を思いつきり殴る。

「悪いわね、今追い出すから」

さいとーはチラッと私をみると、苦笑しながらチカくんの手を引い

た。
チカくんはそれを振り払うと、私の横に椅子を引つ張ってきて腰掛ける。

「コラー！！ 西條！」

「ヒーの気配がした」

（気配って……）

さいとーも呆れたような顔で再びチカくんを殴る。

「ヒー、風邪？」

軽く頭を振ると、「じゃあコッチ」と言いながらポケットから栄養ドリンクを取り出す。

「これ、あげる」

「……」

わざわざ買って来たらしいそれは、ひんやりと冷えていて気持ち良かった。

「チカ……くん……これ……」

「何？ 知り合い？」

「彼女」違っしー！！」

勢いよく飛び起きて目眩で再びベッドへ戻る。

さいとーは「やーねー照れちゃって」「なんて言いながらカーテンをサッと閉めると出ていった。

（何で出ていくの！？）

口調も行動も先生とは思えないさいとー。

でも、じっくり話したい今は、それが少しありがたかった。

「……」

「……」

（何から話せば……）

「飲まないの？」

「えー！？ あ、ああ……頂きます」

私は貰った栄養ドリンクをありがたく頂いた。
これには日頃からお世話になってるせいか、あまり効果がなくなっているのだけど、チカくんの気持ちが凄く嬉しかった。

「あの一……さ……」

「ん？」

「何やつ……っばいいや」

聞けないだろー……！！！！
何で喧嘩したのとか聞けないってえー……！！
だって私、たたた他人だし！？
とも、だち、かもしれないけど、そこまで仲良いの！？ 聞いていいの？

「知りたい？」

「ええ！？」

「何やってたか。知りたい？」

「……」

「ヒーに殴られた後、コンビニ行った」

「……」

ぼつりぼつりと話しますチカくんは薄っすら笑っていて楽しそうだ。

「で、コンビニの前で『俺、なんで殴られたのかなあ』って考えてた」

(それについては非常に申し訳ないことをした……)

「で、きつと『埴輪』って言ったのがいけねえんじゃねえかと」

「分かったんだ。そこは分かったんだ」

「うん」

思わずつつこめば、クスクス可笑しそうに笑う。
そのついでに「こめんね」と先に言われてしまい、何となく謝る機会を失った。

「で、生理が寝不足か風邪か迷った」

「……う、うん？ イライラしてるのが？」

「そう。で、わかんねえから、取り合えずバファリンと栄養剤と……あと」え？ 待って」

何その「ン？ 何？」みたいな顔。
何でそんな「訳分からん」みたいな顔して……

「怒って出てったんじゃないの？」

「いや、怒ってはねえよ。ただ、なんで叩かれたかは結構悩んだけど」

「……あ、そう……」「ごめん」

「いや、『埴輪』が駄目だったんだろ？」

「ええ？ ええー……うん、まあ、それも……っていつか……色々……」

「あと体調悪くてイライラしてて、眠いのにしつこいなコイツとか思ってたんだろ」

「フフフ」

「だから、それ買って来たんだけど」

……うわー……

んもー……何これ……そうなの？

ええ？ ホント……なんか……ジーンときちゃっつじゃん。

やめてよ、私、年取ってから涙腺めちゃくちゃ弱いんだから……

「そっかー……ふーん……そうなのー……ふーん……ありがとう」
「おう」

ああ〜もう何これえ〜……
なんか弱ってる時の優しさに負けて、相手のこと好きになっちゃっ
漫画の主人公の気持ちが分かったわ……
いや、別に好きになったとかじゃないんだけどね!？
でもさあ……なんかこう……こう……ほら、あれよ。

「ンフフ」

「何?」

「別に」

「何? 何で笑っ「もういい!? 入るよ!? 邪魔じゃない!?!」

「いや、別に邪魔っ……! 何もしてませんから! 別に!」

突如聞こえてきたさいとーの声にビビりながら顔を真っ赤にして叫ぶ。

さいとーは「あらそーお?」なんて笑いながらシャツとカーテンを開けると、体温計を差し出した。

「風邪じゃないとは思っけど一応計つといて」

「あ、ハイ」

計った熱は平熱よりやや高く、さいとーは「まあねえ〜しようがないよねえ〜」なんて意地悪なことを言ってくるし、チカくんは我関せずと言った表情でポケットをこそごそやっていて、何をやっているのかと思えば精巧にできたゴキブリのオモチャを、まるで「あ、そう言えばコレ」みたいな感じでさりげなくポイッと投げつけてきて、慌てふためいてベッドから落ちる私を嬉しそうに眺めていた。

「俺、踊んの超上手いから今日見においで」

「ええ？ 何でいきなり踊り……っっていうか具合悪いって言うってんじゃない……しかも今、めちゃくちゃ忙しいからまた今度ね」

「分かった。待ってる」

「……待ってたって行かないんだからね？ 分かってんの？」

「うん、分かってる」

「……ねえ、ホントに分かってんの？ 分かってないでしょ。絶対」

「大丈夫」

「西野が女相手にペラペラ喋ってんの初めて見たわ〜。しかも世間話。センセーあんたが女に興味あるのか不安になってたところだっ

たのよお？ 野郎共とはつるんでるくせに、女とはくつついちゃー
離れ、くつついちゃー離れだったもんねー。おっと余計なこと言っ
たか」

「西野じゃなくて西條ですから……！！ ……え？ くつつい……」

印象通りの話に思わずチカくんを見れば、何故か私が親の敵を見る
ような目で見降ろされていた。

「信じたのかよ」

「ええ！？ いや、別に信じたとか……ていうか、マジで具合悪い
んだけど寝てていいかなあ？」

ぐらぐらする頭を押さえてベッドに沈めば、チカくんの手で頭をギ
ユウツと圧迫される。

「そんなことねえよ」

「何が？ ていうか頭……もーホント……」

「お前、勘違いしてんだろ。でも具合悪くてどうでもいいと思っ
てんだろ」

分かってるなら1人にしてほしい。

なんか一気にテンション上がってはしゃいだせいか、反動が凄い。目眩が酷くて寝ててもぐらぐらする。

「おい、聞けよ。絶対後悔するからな。今、俺の話を聞かないことを」

(うんうん、分かった分かった)

そうやって心の中で返事をして、私の意識はブラックアウトした。

まさか本当に後悔することになるとは思いもせずに。

第七章 小さな事件07

「凄い……朝日がこんなに綺麗だったなんて知らなかった……」

半笑いでポツリと漏らせば、そこかしこから「ほんとだ」と気の抜けた返事が返ってくる。

半分寝たまま返事をするものだから、皆微妙な半笑いだ。

「やっと終わりましたね……」

誰かがぼつりとつぶやき、空気は一気にしんみりモードへ突入する。

「ほら、寝てないで起きて下さい。お風呂にでも入ったらどうですか?」

「龍……お風呂入れてえ……」

「たわしで擦ってもいいのなら」

そう言いながらも栄養ドリンクやらオニギリやらを社員に配る龍。何日も寝てないはずなのに普通に業務をこなし、周囲に「お前は口ポットか」と言われながら平然と外回りまで行っていた気がする。眠気を感じさせないその姿は尊敬せざるを得ない。

「プロデューサー……あとはよろしくねえー……」

「はあい……みなさんありがとうございます……お疲れ様です
う……………」

眠さで限界が来ているせいか、男なのに随分可愛らしい声を出すプロデューサー。

そんな不思議な空間が広がっていた時だった。

私の携帯がブブブと音を立てて机から落ちたのは。

(ん…………?)

『先輩また停学だって』に続き『今度は退学かも』の文字が見える。小さな小さなディスプレイに映った小さな文字は、手の震えか眼精疲労か分からないけど、チラチラチラチラと震えていた。

* * * * *

「ぶ、ぶ、ぶ……………」

あの後寝不足のまま車に乗り、寝不足の牧に運転させて学校へと来た。
たいちゅんの教室まで走って行ってパーンとドアを開け放ち、ドアの傍に座るたいちゅんに話しかけたつもりだった。

「ああ？」

「すみません……間違えました……」

いつの間に席替えしたのだろうか。

窓側で私を指さして笑う金髪を睨みながら、ジェスチャーで「こっちへ来い」と指示する。

たいちゅんはそれをあっさり無視して「てめえが来い」と言い放つ。教室内の人に大注目を浴びながら、なるべく身を小さく小さくして拳動不審な小走りでたいちゅんの元へ行った。

「おーおー、なんか犬みてえで可愛いじゃねえか真尋お」

「犬じゃないし怖いし」

未だビクビクしてたいちゅん以外を目に入れないようにしながら小声で文句を言えば、たいちゅんがおかしそうに笑う。

「で、真尋。俺はお前が何を聞きたいのか大体分かってんだよ」

「そう」

「まあ、こっち座れ。いや、外だな。ベランダ出る」

グイッと手を引かれてベランダへ出れば、背後から「何あいつ」と聞こえて肝が冷えた。

「真尋なんか俺のファンに嫌われてイジメられればいい」

「それ本気で言ってるんなら受けて立つんだけど」

「おお？ 言ったな」

「嘘に決まってるじゃん……冗談じゃん……それで何よ話して……」

「どうせチカのこと聞いて慌てて学校来たんだろ？」

「……」

「あいつなら剃り込み殴って停学だよ」

それは知ってる。

それは知ってるんだよ。

そうじゃなくて、私はもっと……深いところでの話を……

「チカの野郎がよー」ヒーに話そうと思ったのに寝てて話せなかった』つってたぜ？」

「『寝てて』？」

寝る……？

『おい、聞けよ。絶対後悔するからな。今、俺の話听不懂なことを』

うそおー……？

ええ……？ 本当に……？

そんな重要なことをあの眠りの間に言おうと思ったわけ……？
いや、チカくんのことだから眠りの間際とか関係なかったのかもしれない……

ていうか、絶対そうだ……

「あいつ親にもめっちゃ怒られたらしくて、拳骨喰らって部屋に軟禁だつて」

たいちゅんがククっとおかしそうに笑う。

ボソツと「こえーよなあ」と呟くと、拳骨をする真似をした。

「あいつの親、テコンドー黒帯らしい」

「そうなの？ それって拳骨で済んで良かったんじゃないの……？」

「だろー！？ 俺もそう思うんだよ」

何故か「アハハ」と嬉しそうに笑うと、バシバシと私の肩を叩いた。

「あ、それよかお前の体調は大丈夫なのかよ？ 生理だろ？」

「ちげえわよ！……！」

最低！

なんで平気でこう言うことを ……！

「別に……ちょっと……締め切り間際はいつもこんな感じだし」

「はあ？ ああ、仕事？」

「うん」

「締め切りって……その締め切りってのは定期的にあるもんなんだろ？」

「うん」

「なのにもそんなへ口へ口になってんのかよ？ 体調崩すほど？」

「……うん、私は体力無いから」

そう言えば、たいちゅんはますます不思議そうな顔をした。

「じゃあ仕事変えりゃいいじゃねえか」

「駄目だよ。私は社長だし、この仕事が好きなんだもの」

「なんだそれ。身を削ってまで何が楽しいんだよ。それ、過労死つてやつ的一步手前じゃねえの？ そういう無駄に責任感を感じてる奴がコロツと死ぬんだよ」

「いや、私なんてまだまだだから……！ ていうか、一応誇り持って仕事してるんだから意地悪言わないでよね……！！」

「おいおい、『まだまだ』って……どんな謙遜だよ……そんな日本人根性捨てちまえ。真尋の命の方がよっぽど大事だろうが」

やっぱり普通の人はそう思うんだろうか。

決して命を削ってるつもりはない。

ただ、何故か結果的にそうなってしまっただけで……

「なんの会社？」

「……秘密」

「へえ」

「ちよ、ちよっと……そんな凄んでも駄目なんだからね……」

「まあ、いいや。で、チカだけど、今度の職員会議？ まあ、よくわかんねえけど、お偉いさんの会議で今後の対応が決まるらしい」

「え、そんな凄いことになってんの……？」

「おう、まあ俺らは普段の行いが悪いからな。馬鹿学校とは言え、最低限の見栄とかあるんじゃないやねえの？」

な、なんだそれ……

いや、まあそんなものか……

それが普通だよな……

だってチカくんとかさ、学校内の暴力沙汰だけで済むような人間じゃなさそうなものね。

信じたいけど信じられないって言うか……実際に見たしね……！

「で、取り合えず自宅で1週間。外出は禁止だ」

「そりゃ当たり前だよ」

「なんでだよ」

「え？ 馬鹿？」

「ああ？ いや、待て。この際、俺が馬鹿かどつかはどつでもいいんだよ。お前の会社は何会社なんだよ」

「ゲームだよ。あ……」

「……え？ もう一回」

「……」

「もう一回」

「……」

「マジで！？ うっそ……！ 何、何作ってんだよ！ 教えるよ！
水臭えな！！ なんかゲームくれよ」

「い、嫌だ……！！」

「うわ〜！ マジか！ チカの野郎に言ってやるー」

「え、ちよっ……待って！！」

「待ては聞かねえ」

そう言うと肩を抱かれ、肩に回した方の手で私の両手をつかんだ。がっちりと脇と肘の内側で私の体を固定し、手は私の手首を2本押さえている。たったそれだけの拘束なのに、私は動けなくて必死にもがいた。その間にもたいちゅんの左手は携帯を力チ力チいじっている。

「た、たいちゅん！ 待って！」

「知らねえ」

「たいちゅん！ あの、あのさ！」

「聞えねえ……あ、俺。お前さ、真尋が何の会社やってるか知ってるか？ 俺は知ってる。知りたいか？ 知りたいだろ。教えてやらねえ。おい冗談だろ……！ そう拗ねんな！ ていうかお前マジでヤバイからこっちはくんな！ ゲームだよ！ ゲーム会社！」

険呑な会話が頭上で繰り広げられ、私はそわそわしていた。何よりこの状況にそわそわだ。

たいちゅんの馬鹿みたいに大きい声が教室の中に聞こえていないと良いのだけど……

もし年齢のこととか仕事のこととかバレたら……ていうかこの体勢が……！

「たいぞおくん」

「あ？」

急に上から降って来た声に心臓が止まりそうな程驚く。
一人でビクツとなつて、たいちゅんと同じタイミングで上を見た。
たいちゅんは私の方から、私はたいちゅんの方から斜め上を見上げる。
当然たいちゅんとの顔面の距離は物凄く近くなるわけで、声の主であるクラスの女子の綺麗な眉が歪んだ。

(Oh……!)

『やだ、顔が近くて恥ずかしい』とかそんな気持より先に『ヤバイ』
が来る。

こんなにも危機感を覚えたのは……いや、結構最近だ……結構最近
にもバリバリ危機感を感じた。
なんか、こいつらに関わるとろくなことがない気がする……

「仲良いねえ？ 彼女お？」

どうして最近のこういうキラキラした女の子は間延びした話し方し
かできないんだろう。

「まあな」

「違うでしょ馬鹿！！ 大馬鹿！」

「馬鹿って言うんじゃないよ」

「……ふうーん？ 仲良いじゃん。彼女だと思ったあ」

「え！？ あ、チカ？ 馬鹿だな、冗談に決まってるー？ クラスの女だよ。そういうと面白いことになるだろ？ な？」

険呑なオーラを発する女を無視して、たいちゅんは未だつながったままの電話の向こうの相手のご機嫌取りを始める。
時折ヘラヘラ笑っては冗談をいい、私の肩をバシバシ叩いた。

「もう拘束されてないんだから逃げれば？」

「……え？」

最初、女の声が自分に掛けられたものだとは思わなかった。
だから一瞬反応が遅れ、肩を叩きたいちゅんの手が、今まで私を拘束していた手だと気付く。

「あ、う、ハイ……」

サッとどけば、たいちゅんが顔をしかめながら私の手を握る。

「逃げんな」

「いや、逃げるとか逃げないとかそつでなくて……そろそろ授業始まるし……」

「たいちゅん離してあげなよ」

アハハとおかしそうに笑う女の顔をよく見たら、口だけしか笑っていないかった。

(怖っ)

「授業〜？ 真尋、てめえいつからそんな真面目な子になっちまったんだ？」

「最初からだよ……」

「おいチカあ……真尋が授業出るらしいぞ。……ああ、そつだよ。お前の可愛い真尋ちゃんが俺と遊ぶより授業が良いんだとよ」

「可愛い……真尋ちゃん……？」

(怖っ……!!……!)

女の低い声にピクつと顔が引きつるのを感じ、私は慌てて手を振りほどくべくたいちゅんの肩をつかみ、そしてその勢いで思いつきりベランダに押し倒した。

「うわぁ！？ あ、わ、あつ……」「ごめん！ そうじゃなくて！」

「わーお。チカ、俺、今、真尋に襲われてる。押し倒されてる」

「違う……！！ 違うからね？ チカくん違うから！ あの、離して？ 授業、出たいの！ ね？」

「お前から抱きついてきたんだろ？ そういう……って嘘だよチカ……な？ 来んな。学校にだけは来んな……！ 学校終わったら俺がお前に会いに行くから！」

「離してあげなよたいちゅん。その子……真尋ちゃん？ 嫌がってるよ？」

「お前は関係ないだろ？ いーから向こう行ってる。後で遊んでやるから」

「ええ？ 本当？ 絶対だよ？」

可愛らしくそう言うと、女は私の床にしていた手の指を思いっきり踏んで去って行った。

「いったぁ……！！」

「アハハお前ほんと面白いなあ」

「ははは、本当。漫画の様なトラブルメーカーでしょう?」

「おい、いじけんよ。チカ、真尋がいじけたから慰めてやってくれ」

ほら、と渡された携帯。

もしかして、たいちゅんは話す機会をくれたのだろうか。

携帯を私に渡すと、ニヤツと笑って頭をクシャッと一撫でした後、教室へ入って行った。

「もしもし……?」

『ヒー。いじけてんのかよ』

「……別に」

『いじけてんじゃねえかよ。どうせ口尖らせてんだろ』

「そんなことしてないし」

『ヒー、いじけてる時に口が尖ってんの気付いてねえだろ』

「……え、それほんとに?」

電話の向こうでチカくんがクスクス笑う。

「……ねえ、なんで停学になったの？」

『別に。ムカついたから殴った』

「……ええ？ 何それ？ 普通ムカついたからって殴らないよ」

『ヒーだって俺のことバシバシ殴るじゃねえか』

「……」

そうだった……確かにそうだ。

『今回は』

「……ん？」

『危ないらしい』

「……何が？」

『退学』

「……」

『退学になるのがなるまいが別にいいんだけど「良いわけないじゃん」！』

馬鹿？ 全然良くないでしょ……！
中退して何がいいことあるっていうの！？
中退者を馬鹿にしてるわけじゃないけど、アンタみたいな不良で手に職も無いような世間知らず、学校で更生させないでどこで更生させるっていうの！

「『俺は何が起ころうと怖くないぜ』みたいなのをやめてよ！ ちゃんと学校来なよ馬鹿！ ただでさえ馬鹿なんだからここで頑張らないでいつ頑張るの！ 絶対来てよ！」

『それはビーの為に？』

「あんただよ！」

『ビーの為なら行く』

こっ……この馬鹿はあ~~~~~！！

「わ、私の……為に……学校来て欲しいなあ……って……」

『しょうがねえなあ』

クスクスと聞こえる笑い声にイラッとする。

「切るからね！　ちゃんと来てよ！　じゃあねー！」

『はいはい』

鼻息荒く電話を切り、窓を勢いよく開けてたいちゅんに携帯を差し出す。

「ん！」

「ああ？」

「すみません……間違えました……」

どうやら先程の人はたいちゅんと席を一時交換していただけらしい。しかめっ面でたいちゅんの携帯を差し出されたその人は、同じような表情で私を睨み、たいちゅんは入口の傍で腹を抱えて笑っていた。

第七章 小さな事件08

「で、お前は行くのか？ 行かねえのか？」

「どいじょ？」

「具合悪いのは治ったのか？」

「治ってないけど倒れる程じゃない」

「よし、じゃあ行くか」

「だからどこに！？」

放課後、帰ろうとした私はたいちゅんに引き留められていた。何故か学校……どころか昇降口にバイクで乗り込むという暴挙をおかし、奴は満面の笑みで私を見つめる。

「まさかこんな時にお前の真面目さが役に立つとはなあ」

「何、なんのこと！？ ていうか、どこ行くの！？」

「アホか。チカン家に決まってるだろ」

「え！？ 何しに行くの？」

「陣中見舞い」

「やめようよ！ やめようよ！！」

ハハハと笑っていたちゅんは無言を言わず私の頭に香水くさいヘルメットを装着する。

「どうやら自分の分を私に貸してくれるらしい。」

「メットしなきゃ駄目だし！ ああ、そうだ！！ わ、私の分は無いようだから私は行けないわ！」

「今かぶってるじゃねえか」

「これはたいちゅんのですよ！？ 私のは無い！」

「そうか。じゃあ今度お前専用のを買わねえとな。チカより早く買って悔しがらせてやるっ」

「え、いいよそんな……だってこれ結構高いんで……じゃなくて！ ていうか、今後も連れ回す気！？」

「お前、バイク無しでどう移動する気だよ」

「手段はいっぱいあるでしょう！？ ていうかそついう事じゃなく……っわー！」

「たいちゅんは「うるせえうるせえ」と言いながら私を担ぎあげ、バイクの後ろに乗せた。」

初めて乗る不安定（としか思えない）な乗り物の座り心地の悪さに、思わずもぞもぞする。

しかもどこを掴んでいいのかも分からない。

一応たいちゅんの座ってる所につかんでもよさそうなモノがあるけど……

こんな低い位置の不安定な物をつかんだ所でとてもじゃないけど安心なんてできない。

だからと言って腰に手を回すのは如何なものだろうか。

「やめようよお……」

「んだよ腰抜け。いいから腰に手え回せ」

「なんとも言えよお……嫌なんだよお……」

「うるせえ。諦めろ」

バイクが走りだした瞬間、思わずたいちゅんに抱きついたのは不可抗力だ。

* * * * *

「あ！ 止まって！！」

「うお！？」

フラつきながら大慌てでたいちゅんが止まる。

「なんだなんだあ！？ くだらねえことだったらぶっ飛ばすからな
！」

「ケーキ！ ケーキ屋さん！！」

「あ！？ ふざけんなテメエ！」

「お土産！ ……え、嘘でしょ？ 手ぶらで行く気？」

「いらねえよ。んな氣い遣うな」

「アンタにじゃねえわよ！ ていうか、たいちゅんはもうちょい氣
い使えよ」

私がそう言えば、文句を言いながらもケーキ屋さんの中まで付き合
ってくれた。

「なんだこれ食エンのか？」なんて失礼なことを言いながら、綺麗
にデコレーションされたケーキを興味深げに眺めながら眉をよせる。
年配の方も……って言ったら失礼だけど、チカくんの親も食べれそ
うなケーキをいくつか注文。

「おまたせ」

「おう」

乱暴な運転でケーキが粉々にならないよう細心の注意を払い、私は再び「ヒーヒー」言いながらバイクに乗った。

* * * * *

「……………ここが？」

「おう」

「この立派なお家が？」

「そつだよ」

「チカくんのお家なの？」

「誰ン家に来たつもりだったんだテメエは」

「ボンボンかあいつは……………」

「貧乏人かお前は。俺はお前ン家もなかなかのデカさだと思っぞ」

「わ、私は成金だからあー……ポツと出だしいー……」

「何わけわかんねえこと言ってんだテメエは。ほら、行くぞ真尋」

テレビによく映る芸能人の家みたいな感じの豪邸。

意外にもチカくんがボンボンだったことが判明し、私は物凄く萎縮していた。

玄関チャイムを鳴らしたいちゅんを見て、「ああ、そういうのはしつかりしてるのね」と感慨深い物を感じる。

「……ってコラあー……っ!!」

「チツ……なんだよ」

「舌打ちするな！そしてピンポン鳴らしたら反応があるまで家に上がるな……!!」

「いいんだよ。どうせ家ン中じゃ母しかいねんだから」

「母!? 母がいるの!? 家人がいるなら余計にでしょ! 馬鹿なの!？」

信じらんない! と憤慨しながらたいちゅんの背中を叩く。

そうこうしてるうちに、奥から「はい」と可愛い声が出た。

「おう、久しぶり」

「……ば、馬鹿野郎……っ！！！」

母と思しき女の人に向かって片手を上げてズカズカ家に入り込むた
いちゅんを、小声でしかりつけて思いつきり殴る。

小さく「いてっ」と言つて不機嫌そうな顔をしたたいちゅんを、「
ばか！」と言いながら改めて殴った。

「あらまあ……随分可愛らしい子が来たのねえ」

「あ、初めまして……！霧島と申します。すみません、突然上が
り込んでしまつて……」

「いいのよー！うちはいつもこんな感じなんだから」

「そうなんですか……いつも……」

ジト目でたいちゅんを見れば、「なんだよ」とバツが悪そうに私を
睨む。

「あ、これお口に合うか分かりませんが」

「あら！わざわざ悪いわねえ。お土産なんて初めて頂いたわ」

「初めて……」

「なんだよその目は！ どうせ俺は常識知らずだよ！ おら、行くぞ！」

「うわ、ちょっと……！」

「ゆっくりして行ってね」

「あ、ハイ！ ありがとうございます！ お邪魔します！」

私はたいちゆんにグイグイ引つ張られながら階段を駆け上がった。

螺旋階段をクルクル昇り、2階へあがる。

扉がいくつかあって、たいちゆんは迷うことなく一番奥の部屋へ向かった。

「チカー」

ノックも無しに勢いよくドアを開けるたいちゆん。

反射的に頭を叩けば、「なんだよさつきから！」と全然わかってない返答が返ってきた。

「おい、チカ。喜べ。お前の部屋に初めて女が入るぞ」

「ああ？」

ドアの影から不機嫌そうな声を聞いて、やっぱり来なければよかったと思った。

「何ボサっとしてんだよ」

「や、やめてよ！ やめて！ ぐあっ……！！！」

グイグイ押されてしばらく粘ったものの「往生際が悪い！」と勢いよく押されて、部屋の中に転がり込む。

その瞬間、上半身裸のチカくんの目が見開かれた。

「あれ、ヒー」なんで半裸なの！？ 裸族！？」

「何言っただ真尋は。暑いんだから当たり前だろ」

「違うでしょ！？ 少なくとも私は半袖短パンで妥協……ってそうじゃなくて」

そうこう揉めている間にさっさとTシャツを着こんだチカくんは、まだ驚いた顔をしながら私を見ていた。

「……お、お邪魔してます……っていうか……ご挨拶が遅れて……っていうか……」

「……」

「……無視しないでくれるかな」

「アハハハハ！」

何故かご機嫌のたいちゅんを尻目に、私はチカくんをパチンと叩いた。

「いやー俺はお前のその呆けた顔を見る為にコイツを連れて来たんだよ」

やたらご機嫌で「大成功、大成功」と大声を上げるたいちゅん。あまりの声のでかさには眉を寄せれば、チカくんも同じことを思ったのか「うるせえよ」と呟いた。

「ヒー何やってんの？」

「何……って言われても……連れてこられたって……なんていうか……」

ええ、ええ。

どうせ私は男の子の家になんか上がったことありませんよ。

「あ、あの……ええー……」

「なんだあ？ 真尋、お前まさか男ン家上がるの初めてだなんて言わねえだろっな？」

「……悪い？」

「え、マジかよ」

そういうなり下品に「ギャハハ」と大笑いするたいちゆん。きつと、私の顔は茹でダコより真っ赤になってる気がする。

「ヒー、おいで」

チカくんが口角を上げて薄っすら笑う。

薄っすらと笑いながら、ベッドに腰掛けて手招きをしていた。それを「格好良いなあ……この男は」なんて思いながらポーっと見つめ、ジリジリオドオドとにじり寄って行く。

「なーに警戒してんだオメエはよお」

面倒臭そうにたいちゆんが呟き、ため息を吐いて勝手にソファに腰掛けた。

「……ヒー、どこ座ってんの」

「ええ！？ 駄目！？ 床も駄目！？ た、た、た、立った方がいいかな！？」

「お前は本当に天然記念物か！！ チカが呼んでんだから普通にベツドに腰掛ければいいだろうが」

「普通は腰掛けないからね！？ 譲歩しての床だったんだけど！？」

カツカツと体温が上昇し、私は大慌てでたいちゅんの隣へ座った。その瞬間、チカくんのムツとした表情が視界に入る。

そしてチカくんは立ちあがると、2人掛けのソファに無理矢理座った。

「ちよつと！ 狭いんだけど！？ たいちゅんキツイ！」

「いててててて！！ おい、真尋！ お前、幅取ってんじゃねえよ！ つか、狭くしてんのは俺じゃねえ！！ お前とチカだろ！」

「あ、ごめつ……いや、違うけどね！？ 私じゃないんだけど！ チカくんが……！！」

「あらあら、仲良しのねえ」

「！！？」

声のした方を振り向けば、微笑ましそうに笑うチカ母が立っていた。

「出てけ」

「ばっ……出て行って……！」

「そうよ。霧島さんからも言ってくれる？　うちの子、口が悪くてねえ」

悪いのは口だけじゃないんじゃない……なんてことを思いながら、曖昧に笑った。

「靖親。霧島さんがケーキ持って来て下さったから、みんなで食べなさい」

無視。

反抗期の子ってこんなもの？

こっちがソワソワするくらい無視。

母は「しょうがない子ねえ」なんて言いながらケーキを置くと出ていった。

「……」

沈黙がおちる。

こんな時に限ってたいちゅんは携帯をいじってて役立たずだ。

「……ケーキ、食べれる？ 甘くないのもあるよ」

「うん」

くっそ……なんだこの気まずさ！
もしかして気まずいの私だけ！？

「……た、たいちゅん」

「……ああ？」

携帯のせいで返事が遅れて返ってくる。

「あ、あのさ……今日って……何の会？」

「……別に……なんも」

「何それ……！ スンゴイ無計画なんだけど！」

「……男ってのはなあ……特に用がなくても集まるもんなんだよ。
ていうか、女もそうだろう？」

「私をそこら辺の女と一緒にしないでくれるかな」

「ああ、そうだったな。お前は極度の男恐怖……いや、人間恐怖症だかな」

「別にそこまでじゃないしね！普通に話せるしね！」

そう息巻いた瞬間、たいちゅんがパツと携帯から顔を上げた。そして胡散臭そうな顔でフンツと笑う。

「見栄張ってんじゃねえよ。俺は見たぞ。この間お前が「お前、何しに来たんだよ」

底冷えのするようなチカくんの呟きで、部屋の温度が急降下する。なのにたいちゅんは平気そうな顔で……ていうかむしろニヤニヤしながら口答えした。

「何って……おいおい、拗ねてんじゃねえよ。話の輪に入りたかったら入りゃいいだろうに」

「……」

「気にすんな真尋。チカは拗ねてんだよ。テメェン家なのに俺らだけが楽しく会話してんのがウゼエという心の狭い野郎なんだ」

「いや、それは私も微妙な気持ちになると思うけど……ごめんね、

チカくん」

「子供扱いするんじゃないよ」

「……………」

……………難しい子。

「ほら、真尋。ケーキ食べ。冷めるぞ」

「元から冷めてるけどね」

「うるせえな。いちいち上げ足取るんじゃないよ。察しろ。苺やるから大人しくしとけ。な？」

そう言っつて自分のケーキから苺を全部抜き取ると、全て私の皿に乗せてくれた。

私が苺好きだと知ってる訳じゃないだろうけど、嬉しくて思わずにやりと笑う。

たいちゅんはメールが忙しいみたいだし、チカくんは怒ってるし、私はケーキでも食べることにしよう…………と、思った時だった。

「……………あの」

チカくんが無言で自分のケーキから果物を抜いては私の皿へ移動さ

せている。

チカくんのケーキは無残にもグツチャグチャになっているのに、「まだ入ってはいまいか」と探るようにフォークでかき混ぜていた。

「……………」

そして何もないので確認すると、満足げにグチャグチャのケーキを食べ始める。

「……………スポンジ……………に、クリームしかついてないけど……………美味しい？」

「美味しい」

私のケーキには色とりどりのほじくり返された果物が並ぶ。何故か嬉しくなって、私はにやけながらそれを食べ始めた。

「なんだあ？ 真尋のケーキすげえ汚いことになってんな」

「美味しいよ」

「くれよ。お前のせいで俺は果物が1個もねえんだ」

「何それ凄くイヤラシイんだけど！」

「ほらほら、早く」

ヒナ鳥のように口を開けるたいちゆんに、「しょうがないな」と
言いつつ果物の切れ端を手でつまんで放りこんでやった。

「なあ、お前さ。今これ何入れ……」

我が目を疑うとはこつこついうことなんだと思う。

「……………うえっ！」

たいちゆんは涙ぐみながら小さくえずくと、ゲホゲホとせき込みながらソファから転がり落ちた。

「……ええ！？ い、今……ええ！？」

あまりの衝撃に反応が遅れる。

「馬鹿かお前は！！ 馬鹿か！？ 人の口に手を突っ込む奴があるか！！！！ しかも結構奥まで！」

「チツ……欠片しか取れなかった」

「舌打ちしてんじゃねえ！ ていうか聞け！！」

何事も無かったかのようにたいちゆんの口に突っ込んだ手をたいちゆんの制服で拭うと、チカくんは再びソファに座って黙々とケーキを食べ始める。

「うわっ……汚っ……じゃなくて！ アホか！？ お前は今世紀最大のアホだろ！ 人の物を欲しがっちゃいけません！ 口に手を突っ込んだじゃいけません！ 人の服で手を拭いちゃいけません！ まだ言うか？ まだあるぞ！ 俺はお前に説教したいことが山とある！！」

「あ、あの……チカくん、果物欲しいならあげるから……」

「ほらみる！ 真尋もひいてんじゃねえかよ！ 口に手え突っ込むとかお前……！！ ああ、気色悪い！」

「ヒ」。もうちょいそっち寄って」

「あ、うん」

「おい、俺の座る場所がねえじゃねえか！ 真尋、お前も『うん』じゃねえよ！ 俺はどこに座りゃいいんだ！ ああ、言わなくていいぞ！ 床だろ!？」

たいちゅんは悪態をつきながらも床に座り、再びブツブツ文句を言いつつキーキをかじりだした。

「……………」

再び沈黙が落ちる。

私は、例のことを聞いてもいいのか迷っていた。

何故退学になったのか。

何故そんな平気そうでいられるのか。

怖くないのか。

聞きたいことは色々あるけど、どれも私が聞いて良いようなことじゃない気がした。

「……………あのー……………ね……………」

「なんだよ」

「いや、ごめん。たいちゅんじゃないんだけど……」

「……そうかよ」

「……あの……」

き……聞けない……！

「やっぱりいいや……！」

「言えよ。気になるだろ」

チカくんが若干不機嫌そうに呟く。

「はあ？ お前、前に俺が『やっぱりいいや』っていった時、聞き返さなかったよな！？ 真尋のは聞き返すのかよ！ おい、不思議そうな顔すんな！ 忘れたなんて言わせねえよ！？」

「たいちゅん、うるさい。ヒー、何？ 言ってる」

「いや……いい。別にたいしたことじゃ……」

「たいしたことだろ？ それを聞きに来たんじゃねえのかよ。わざわざケーキまで買ってよ。俺が付き合ってたって言うのに」

「え？ たいちゅんはチカくんの驚く顔が見たかったんじゃないの？」

「違えだろ！ いや、それもそうだけでも！」

深い深いため息を吐いて、たいちゅんは「便所」と言うと部屋を出ていった。

そしてすぐに戻ってくると、面倒臭そうな顔をしながら大声で怒鳴る。

「うんこだうんこ！ 腹が痛えから、当分は便所から出てこねえからな！」

なんてありがたいやらありがたいやらないやら……聞きたくもないことを叫ぶと今度こそ出ていった。

邪魔者（？）がいなくなったおかげで何でも聞ける状態だ。

……私に度胸さえあれば。

「……」

「……」

ただ、折角たいちゅんがセッティングしてくれた絶好のチャンスとやらは、どうも活かせそうにない。

「……………」

「……………」

聞きたいことは山ほどあるのに、私なんか聞いていいのかわからない。

しかも相手はイケメンで不良で男の子で……………男……………お……………

ちょっと待って。

今、密室に2人つきりなんですけど。

第七章 小さな事件09

あわわ……！

どうしよう……！

未だかつて密室でこんな追い込まれたことはあつただろうか……！

（おおお落ちつけ……別に相手も気にしちやいないつてハハハ）

「コ」

「はい……」

「ちっきの、何？」

「ちっ」

「……」

「……」

「……」

変な声を出したまま時間が止まる。

「言ってもいいのか」「聞きたい」という欲望だけが沸き上がり、同時に「怖い」と言う思いも湧いてくる。

聞いて「余計なこと聞くな」なんて言われたらどうしよう。そう思うと、聞きたくても聞けない。

「ま、前田……が、さあ。体育の教師なんだけど、分かる？」

「……おう」

「前田が……チカくんは跳び箱が飛べないに違いないって言ってチカくんは運動が得意そうだからじゃないかって話をしたんだけど、『いいや、あいつは飛べないんだ。だから俺の授業に出ないんだ』って言うてて。アハハ、おかしいよね。チカくん……跳び箱、飛べる？」

「わかんねえ。飛んだことねえから」

「……そう、なの」

……違う！

言いたいのはこれじゃない！

でも誤魔化した方が良くもしてきた。

どうしよう……こう言う時、普通の女の子は平気で聞いちゃう気がする。

チカくん「うるせえ」って言われても、ケロっとしてそんな気がする。

でも、私はそんなこと言われたら……。

「違えだろ」

「え？」

「聞きたいのは停学とか退学のことだろ」

「……」

「聞きたいんじゃないかねえのかよ」

「……」

「どつなんだよ」

「……」

「言えって」

「……聞きたい……です……」

小さな声で呟いたのに、チカくんには聞こえたらしい。
ニヤツと笑うと、私の顔を覗き込むのを止めてソファに深く腰掛けた。

「俺、やんちゃだから停学何度もくらってさ」

「だろうね」

「……」

「あ、ごめん……」

「……で、まあ、学校もとうとう我慢の限界らしい」

「俺の母親が停学食らう度に何度も学校行って、それで何度も何度も頭下げただけ、今回はもう駄目らしい」

「……退学決定なの？」

「どうだろうな」

「……嫌なだけ」

ボソツと言えば、チカくんはまたしても聞えたらしく、凄く驚いた顔をしていた。

「嫌なだけ……私、友達少ないから……友達減るの嫌なだけ……」

「……ヒーは……真尋は、俺が学校止めたら友達終わりなのかよ」

「そういうことじゃなくて……そんなことが言いたいんじゃない……」

普段恐ろしく勘が良いのに、なんでこう言う時だけ分かってくれな
いんだろ。

私が言いたいの……ていうか本当は分かってるのかもしれない。
分かってて言わせたいのかもしれない。この男は。

なんかそんな気がしてきた。

「しょうがねえなあ」

「……え？」

「俺、テスト勉強嫌いだけど、真尋の為に頑張っちゃおうかな」

「……は？」

チカくんはニヤニヤと笑いながら、さらに深くソファへ身を沈めた。

「……え？ 何、どういう……」

「ヒー」

「な、なに？」

「もし、テストで満点取ったらご褒美頂戴」

「何それ？」

「いいじゃん。」ご褒美

「いや、別に……悪くはないけど……」

状況が読めない。
何が言いたいのかさっぱりだ。

「次のテストで、全教科90点以上取ったら退学しなくていいって」

「駄目だ……！ 終わった……！！」

がつくり肩を落とす私を見て、チカくんはムツとした顔をする。

「そんな顔しても駄目なんだからね！？ 絶対無理だよ！ だってチカくん、馬鹿なんだもん！」

「決めつけてんじゃねえよ」

「決めつけるもなにも、分かるんだからしょうがないじゃん！！ 誰がどう見ても馬鹿だよ！」

「……」

馬鹿馬鹿言われてすっかり黙りこんだチカくんを尻目に、私はマジへこみしていた。

チカくんのことは嫌いじゃない。

むしろ好きだ。Likeね。Like。

数少ない高校の友達がいなくなるっていうのは、やっぱり寂しい。なのに、非常に残念なことに、先生方がつきつけた条件はあまりにも厳しかった。

「……ああ、終わった……もう駄目だ……」

「……言いたい放題じゃねえか。もし大丈夫だったらどうすんだよ」

「全裸で逆立ちして、町内一周してもいいレベルなんだけど」

「……」

「ああ……チカくんが……どうしよう……」

「じゃあデートしてよ。ご褒美に。全裸はいつかでもいいから」

「ええ？ デート……そうね。全裸よりは……って『全裸はいつか』って何だよ！ 自分で言っついてあれだけど何だよ！ まあ、でも……もし大丈夫だったらデートくらいして……嫌だよ」

断った瞬間、チカくんの眉が更に寄る。

「信じてねえならいいじゃねえか」

「それとこれとは話が別だ」

だ、だって……万が一って言葉もあるじゃない。

「いいじゃねえかよ。デートくらい。それとも行ったことねえのかよ」

「いい行ったことくらいあるわよ！」「ご飯……食べに行ったりとか……」

「何それ、すげえムカつくんだけど」

「ええ？ もー……何わけわかんない「俺も行きたい」

「で、でも……」

「今ここで襲われるのと、デートの約束をするの。どっちがいい？」

「何それ！？ その二択さ、私に不利すぎない！？」

ジリジリとチカくんと距離が縮む。

私は思わず後ずさりしながらソファに倒れ込んでいった。そして肘をつく格好のまま後ずさりを続ける。

「選べよ」

「いやっ……だからや」

「選べ」

「で……」

「で？」

「で、で……デートは嫌……！」

「……」

目の前の男はニヤリと笑うとさらに距離を縮めた。
きつと私は真っ赤だ。

「じゃあ、デートじゃなくて散歩」

「さ、散歩？」

「そう」

「……散歩……くらいなら。でもすぐ帰るからね！」

「分かった」

「本当にすぐ帰るんだからね！？」

「うん、分かってる。ついでに途中で飯食おう。絶対腹減るから」

「……途中で……まあ、店があったらね……おなか減ると困るし」

「うん……あと、ヒーが……俺が迷子になると困るから、手をつないでっ。」

「ええ！？　そ、それは……」

「俺が迷子になってもいいのかよ」

「……そう、か……じゃあしょうがないか……」

チカくんはクツクツと喉の奥で笑うと、私の上からサツとどいた。その瞬間、たいちゅんが勢いよく飛び込んでくる。

「おい、なんだよ！　そういうことならそうと見えよ！」

「ええ……？」

もう何が何だか分からなくて、ボーっとしながらたいちゅんを見れば、たいちゅんは心底うんざりという顔で私を見ていた。

「お前、パンツ丸見えなんだよ！　ふざけんな！　そういうのは俺が帰ってからにしろ！！　ていうか俺が連れて来てやったつてのに、お前いい度胸してんじゃねえか！」

「やつ……ちよっ……！！　馬鹿見ないでよ……！！　ていうか何も
ないしね！？」

「見たくて見たわけじゃねえ！　チカも睨んでんじゃねえよ……！！」

たいちゅんは「ハー！」とか「ったくよお！」とか言いながらケキを一気にかき込むと、「行くぞ！」と言って私の腕を引いた。

「え？ 帰るの？」

「話終ったんだろ？ なら帰るだろ。それともまだしたりねえってか！」

「だから何もしてないってばー！」

「アホかお前は。『話をしたりねえか』 ったんだよド変態」

「ぐうっ……！」

「ほら、行くぞ」

再び真っ赤になりながら手を引かれて部屋を出る時、チカくんが「バイバイ」と言った。

慌ててペコリと頭を下げると同時にドアが閉まる。

「ったくアイツは何が『バイバイ』だ馬鹿。停学中の身のくせに図々しくもご機嫌になってんじゃねえよ」

「たいちゅん心配なんだね」

「あたりまえだろ！」

「……………」

あまりにも男らしいたいちゅんをちよつとみなおした。
てつきりまた小言の一言でも飛んでくるのだと思ったら……

「たいちゅんって……面倒見良いよね」

「気色悪いこと言つな」

「…………いや、絶対良いよ。下に弟とか妹いるでしょう」

「どうせ俺は長男だよ。しかも貧乏のくせに妹弟合わせて6人いるよ」

「やっぱり！ ていうか6人！」

「双子の妹と男が4人。男が多いせいでうちのお姫様は相当我が儘に育ちちつまつたぜ」

「あ、双子なんだ。私も私も」

「へえ…………ええ！？ マジかよ！？ お前が2人もいるのか！？
ウゼエ！」

ギヤハハと大声で笑うたいちゅんを、思いっきり殴る。

「酷くない！？ ウザイって何！？ 酷いんだけど！！」

「いや、ウゼエだろ！ こんなのが2人も！ ギャハハ！！ 似てんのか？」

「……まあ、一卵性だからそれなりに」

「余計ウゼエ！」

それからしばらく笑いの収まらないたいちゅんを無視して、チカくん母に挨拶して家を出た。

帰りしなに「また来てね」と言われて戸惑っていたら、「来いっつってんだから、くりや良いじゃねえか。俺なんて言われたことねえけど来てるし」と言っていたいちゅんに笑われた。

* * * * *

結局あの後、家まで送ってくれるという紳士っぷりをみせつけ、「コーヒのお誘いはいらねえからな」と何度も言いながらたいちゅんは振り返り振り返り帰って行った。
携帯を見るとランプが明滅している。

「チカくんだ」

メールには、しばらく会わないと一言だけあった。

前の私なら色々考えただろうけど、きっとテスト勉強をするからだと思う。

「……………」

なんか、本気出せば何でも出来そうな男なもんだから、もしかしたら本当にデート……………じゃなくて散歩するはめになるかもしれない。

も……………もし……………

もし、本当に散歩するはめになったとしたら、私は何を着ていけばいいんだろう。

「……」

テストは1カ月後だ。

第七章 小さな事件10

「タマねえ、ヒロちゃんみたいなお友達持てて幸せえ」

「はいはい。分かったから勉強しようね。私がノート貸してあげるとかホント奇跡に近いからね？ 本当は自分でやるんだからね？」

「分かってるよお」

「分かってないよね！！絶対分かってないよ！だって全然進んでな……あーっ！コーヒーこぼれてるし！」

「アハハハ！ヒロちゃんおかしいー」

「もう！！家でまでそのキャラなの！？」

「そんなわけないじゃん。馬鹿？」

「……」

私は何故かやくざの家でテスト勉強をしていた。

最近、仕事が落ち着いているから、放課後はもっぱらテスト勉強だ。ていうか、龍に「仕事しなくていいから学校のことやってろ」って言われた。

「広報活動はどうした」と言えば「そもそも馬鹿校に行った時点で広報に使えない」なんて言われてしまって……

なるほどと納得する半面、非常に悔しい思いをしたのを覚えている。

「おい、そこ違え」

……そして、家庭教師としてやくざに面倒みて貰っている。

「え！？ あ、す、すみません……そこ……って……どこだろう……」

「ええ？ タマわかんない」

「お嬢、とお友達さん。さつきも言いましたけど、分数の足し算と掛け算じゃ分母の扱いが違うんすよ」

何言ってるんだコイツ。

「分かってねえな？」

「……え、あ……ああー……」

「もー！ タマ難しいこときらいー！ 芦野ちゃん休憩しようよー」

「さつきしたばっかじゃないスか……お友達さんも頑張ってるんすから、お嬢も頑張って下さいよ」

「さつきからそればかりい。『お友達さん』じゃなくて『真尋』
なんだけどお」

「だってさつき名前呼んだら殴ったじゃないスか」

「気安く呼ぶからだろうが」

もー……タマつてめちゃくちゃなことばっか言っただから……

「ヒロちゃんにタメ口きいてんの許してんだから、あんたも譲歩しなさいよ。まあ、『霧島さん』なら許してやるわ」

「はいはい」

「まあ、私は何でもいいんですけどね……」

「よくなーい！ 名前呼んでいいのは、タマとチカちゅー先輩だけなのー！ー！」

「もう……面倒くさいなあ。さっさと勉強しようよ」

「あれ？ ヒロちゃん、何か嬉しそうだねえ？」

「……うるさいなあ」

「あれれ？ 嬉しい？ 特別扱い嬉しい？」

タマが「ん？ ん？」と言いながら顔を覗き込んでくる。

「うるさい！ 勉強するよー！」

「照れちゃって。霧島さん可愛いー」

「黙れよ、芦野」

「はいはい」

そんなこんなで揉めながら、私達の勉強会は全く進まないまま夜が更けていった。

* * * * *

「送るっス」

「iiiiiiiiです……！ー！」

「いや、お嬢がうるせえから」

「送って貰いなよおー！ もータマが直接送れないのが残念すぎるんだけどおー！ー！」

タマは親の用事とやらでこの時間から外に出るらしく、帰りは歩いて帰るつもりだった。
なのにこれだ。

「い、いいよ……タマ、だってほら……私が人見知りするって知ってるじゃん……」

「勉強会の際は平気だったでしょ？」

「あれはタマがいたからでしょ！？ あ、いや、芦野さんが苦手という訳じゃなくてですね……」

芦野さんはクツクツと笑うと「行くぞ」と言って手を引いた。

手を握られることに動揺しつつ歩けば、後ろからタマのドスの利いた声が聞こえる。

「芦野、テメエ……万が一にでもヒロちゃんに手え出したら殺すからな。パパに言っただけで東京湾に沈めてやる」

「はいはい。ていうか、お嬢の言葉だと組長マジになっちゃいますから勘弁して下さい」

芦野さんは再び軽い返事をして、私を車の後部座席に押し込んだ。スモークの向こう側からタマの睨みが飛ぶ。

「だいたい何であんたがヒロちゃんとかメロキいてんのよ」

「だって同じ年ですから」

「私には年下だけど敬語じゃん。敬語になりきってないけど」

「だって親父さんの娘さんですから」

「何それ？」

「……ほら、親父さん呼んでますよ」

「呼んでないんだけど」

「ほら早く」

とん、とタマの背中を押すと、フツと笑って運転席に乗り込んだ。下唇を噛むタマを残し、車は軽くクラクションを鳴らして出発する。

なんとなく、タマは芦野さんが好きなんだろうなと思った。

* * * * *

「……」

そしてこの沈黙である。
どうしよう、非常に気まずい。
あと10分は乗ってなきゃいけないというのに。

「霧島さん」

「は、はい」

「やくざって怖い？」

「……いや、別に。あ、いあ……怖い人もいますけど……霸気が怖
いって言うか……あ、じゃなくて……その……」

「扱い使わなくていいよ。あと敬語も。まあ、敬語は無理しなくて
いいけど。俺ね、お嬢に友達が出来たって言われて、全然信じられ
なくてさ」

「……」

「最初は何かあるなら脅して二度と近づけねえようにしてやるつもりだったんだけど」

怖っ……！

何この人……

「霧島さん、良い子だからやめとくわ」

ミラー越しに私を見て、芦野さんは凄く柔らかい笑みをこぼす。たったそれだけなんだけど……なんとなく、この2人は両思いなんじゃないかと思った。

611

「両思いですよね？」

「何が？」

「……何でもないです」

思わず言ってしまうって、非常に後悔する。

こんなこと、会って何日もしない人に言うべき話題じゃない。案の定、芦野さんは笑ってるのに、目だけは笑ってなかった。

「霧島さんは生きるのつれえだろ？」

「……え？」

「仕返し」

「……」

暗に余計なひと言に対して怒られたと感じ、気まずい思いをした。再び沈黙が落ちる。
あれはきつと聞いちゃいけないことだったんだ。

* * * * *

オレンジの街灯がビュンビュン後ろに流れていく。
目がおかしくなってきた頃、ようやく家に到着した。

「やっぱりバレる人にはバレちゃうのかなあ」

「え？」

芦野さんは何も答えなかったけど、きつとタマのことだろうと思うた。

一瞬戸惑った物の、先程の教訓を生かして深く突っ込まないでよく取り合えず送ってくれたことに対してお礼を言つと、芦野さんは「どーいたしまして」と片手を上げた。

「……なんだかなあ」

走り去っていく車を見ながら、私は凄く切ない気持になった。

第七章 小さな事件11

「いやーん！ 超悲惨！ タマもう駄目え」

「『いやーん』ってリアルで言う人初めて見た。ちなみに私はガツツリ手ごたえあり」

「酷い！ タマだけ仲間はずれなんだけど！」

「いや、アンタ……あれだけ教えてもらっというて分からないって方が……」

そこまで言つて、「もしかして教えてほしくてわざと馬鹿やってるのかも」なんて思ってしまったもんだから大変だ。

なんとかしてこの2人をくつつけねば、というおせっかい過ぎる癖が出てきて、私は必死に落ちつこうとしていた。

（だ、駄目だ駄目だ！ 首を突っ込んでほしくなさそうだったじゃないか！ ……ふー……落ちつこう……）

「ねえ、それより芦野は何もしなかったあ？」

「え、あ、うん。別に」

もう、全てが「そう」としか思えない。

何もかもが芦野さんのことを好きすぎて気にしてるタマちゃんに見

える。

(あゝ!! 馬鹿馬鹿!! 落ちつけ!)

思わず「くうっ!」と喉の奥から声を絞り出し、ハアハアしながら
気を落ちつければ、それを見たタマが気持ち悪い物を見た、という
目で見てきた。

「何かへーんなのお」

「……大丈夫、大丈夫よ。何も無かったんだもの」

「……ふーん。それより先輩はどうだったのかなあ?」

「え? 何が?」

「テストに決まってんじゃない! デートするんで」!!」

パンと音がする程の勢いで口をふさぐ。

「痛っ」と睨みつけられるのも気にしない。

「デートじゃねえわよ。あと大声で言うな」

「いったあーい!」

「ごめんね。でも言うな馬鹿」

「早く聞いてきなよ」

「何を聞くと言うの？ 採点はまだ先よ」

「手ごたえに決まってんじゃない！ ほら、スキンシップ！」

「ええ？ いいよそんなのー……」

「超消極的なんだけど！」

「じゃあタマはどうなの」

「え？」

「あ、いや……その。だ、だから、タマは好きな人に対して消極的じゃないのかって聞こうと思っ……いや別に私はチカくんのことなんて好きでも何でもないんだけどね！！？」

「アハハハハ！」

危ない。

芦野さんで懲りたはずなのに、また言うところだった。

そしてまた自分で墓穴を掘ってへこむことになるところだった。

「先輩後ろにいるんだけどお」

「……」

「……もっかい言って」

「……」

「もう一回」

「……いや、だから……ね？ 嫌いとかそういうことでもなくて……」

「真尋、俺はお前って奴あつくづく度胸の座った女だと思ってるんだけどよ、今日のチカはちーとばかり機嫌悪いぜ？」

「……いや……だから、さ……」

「なんだって？」

「なんだって？」と言ったチカくんの目は、おおよそオトモダチを見る目ではない。

思わず生唾を飲み込んでそっと視線をそらせば、クラス中が注目してるのが見えた。

一体、私はどれだけ大声を出していたんだろう……
なんか、興奮すると声が大きくなるってのは前々から気付いていた。
ほんのりとね。
でもさあー……「ごつさあー……」

(私の寿命、今すぐ尽きないかな……)

「ヒー……おい無視すんじゃないやねえよ真尋。お前、覚えとけよ」

そんな怖すぎる一言を残して、チカくんは去っていった。

(真尋って呼び捨てにされた……)

たいちゆんが面白そうに「あーあ」と言う。
ケツケツケと気味の悪い笑い方をしながら、チカくんの後を追って
帰っていった。

「た、タマちゃん」

「帰ろつと」

「タマちゃん……」

「タマ、自己採点しないとお」

「……ま、霧島さんは合格点じゃない？ 霧島さん、見た目通りだな」

「ヒロちゃんはわざとこういうカッコしてんの！」

「お嬢、人のこととやかく言ってる場合じゃないっスよ……なんスかこの点数」

「だあってえ」

「俺が教えたところ、全然出来てないじゃないっスか」

「タマ本番に弱いんだもーん。教えてもらったけど駄目だったの！」

「……そーっスか。じゃ、もういいっス」

「……え」

困ったように呟いたのは私。

それと同時に机に教科書が叩きつけられ、芦野さんは部屋を出て行ってしまっつ。

「……」

「……」

タマは初めて見るってくらい目を見開いて ……。
そして、ポカンとしたままポロッと涙を落とした。

* * * * *

「……………」

「……………タマ、本当は分かってたんじゃないの？」

「……………」

「あのね、タマが好きだから言うんだけど、あれは菅野さんに対して酷いと思うけど……………っていうか、タマならもう気付いてると思うから追い討ちかけるみたいで申し訳ないんだけど……………」

「……………」

「……………あ、謝ったら許してくれるんじゃないの？」

「……………」

まいった……………」

私に抱きついたらますますと泣きっぱなしだ。
しかも声もあげずにブルブル震えながら。

「……ねえ、私が言うのも何だけどさ、タマって意外と不器用だねえ？」

「……」

なんで素直に慣れないんだろう。
いつの間に、こんな性格が歪んで……歪ん……

「……」

うわー……庭の向こうの方に何かいる。
ていうか、間違いなく芦野さんだ。
そして見間違い出なければ、激しく落ち込んでる。
庭にある何の用途もないデカイ石に頭打ちつけて、漫画みたいな落ち込み具合。

「……」

もしかして……「ここまできたらおせっかい焼いた方がいいんだろうか……
いや、でも……」つづするのは当人同士が……

(ああ、なんて悩ましいんだろう……)

駄目だ、取り合えずさっき飲んだジュースが早くも外に出たがってる。

タマには悪いけどトイレ借りよう。

「た、タマ、私ちょっとトイレ」

「……タマが大変なのにヒロちゃんはトイレに行くの？」

「だってシュワシュワ飲み過ぎちゃったんだもの」

「……漏らせば？」

「冗談言わないでくれるかな!? 私もう23歳なんだけど!？」

「……」

「た、タマ……!？」

もう駄目……! と思った頃、ようやくタマが離してくれた。

私は慌てて外へ出ると、小走りトイレに向かう。

「フー、危ない危ない……うぐっ!？」

よそ見をしたものだから、何かに思いっきりぶつかって尻餅をつく。
思わず漏らすかと思った。

「ご、ごめんなさい！ よそ見してて……怪我はありませんか？」

「ああ、私は大丈夫だよ。尻餅ついてないし。キミこそ大丈夫かな?」

「あ、はい。私は漏れそうなくらいで……っじゃなくて……いや、
違うないんですけど……!!」

「キミが珠美の友達？」

「え？」

そこで初めて相手を見た。

背の高いガツチリした男の人はどこかタマに似ていて、瞬時に「お
父さん」なんだと気付いた。

「あ、もしかして……」

「珠美の父です。娘共々よろしく頼むね」

「あ、どうも！ 霧島です。すみません、何度も来てるのに挨拶もせず……」

「気にしないでいいよ。私もあんまり家にいないから」

そう言って笑うタマ父は、本当にタマにそっくりだった。

「……それはそうと、トイレが済んだらちょっと話をしたいんだけど、大丈夫？」

「あ、はい！ すぐ行ってきます！」

慌てて立ちあがって小走りでトイレに向かう。
その際中、私は嫌な予感しかしていなかった。

* * * * *

「話つてのは珠美のことなんだけどね」

「はあ」

「あいつ、どうやら好きな奴がいるらしくて」

「……は、はあ」

「霧島ちゃん、それが誰か知ってるかい？」

「……」

何これ。

何このいきなりのピンチ具合。

「知ってるんだろ」

「……ああ……いや……えーと……」

「ん？」

この人も、笑ってるのに目だけ笑っていない。
怖すぎる。

「あ、う……いや……あの、直接本人に聞いたわけではなくて……
なんとなくっていうか……き、気付きませんか？」

「芦野だろ」

知ってんじゃないか。

思わず口にしそうになって、曖昧に笑った。

「やっぱりか」

「いや、私もなんとなく思っただけで……ホント勘違いかもしれなくって」

「大体当たってははずだよ。珠美は隠し事が上手いけど、親には分かるもんだ。芦野もべらぼうに隠し事が上手くてな。こっちはちょっと迷ったんだが、両思いだろうなあ」

「え、そこまで察してるんですか」

「いや、別に。適当に言った」

とんでもねえ曲者だ……！

とんでもねえ曲者だよこの人！

「で、でもほら……ハハハ……わ、私もホント勘なので」

「分かるんだよ。親だから。芦野も俺のガキみたいなものだからな」

まさか、芦野さんが我慢してるのは、タマ父に遠慮してるからだろうか。

さっき息子みたいなものだと言っていた。

……まあ、立場上というか関係上というか……広い意味で『息子』なんだと思う。

そしてタマはタマで意外と恥ずかしがり(?)だから、自分から言えないのかもしれない。

もしそうだとしたら……この目の前にいる険呑な親父様は、いったい私に何を言いたいんだろう……

「なあ、霧島ちゃん」

もしかしたら……もしかしたらこの人は……

「芦野と珠美がくつつかないように手伝ってくれないか？」

ドクンと心臓が大きく鼓動する。

「あ、あの……」

なんと答えるが最善かわからない。

「わた」なーんてびっくりしたろ？
アハハハハ！！
悪い悪い！！」

「は？」

「いや、悪い……ハハツ……いや、ホント……フフツ……いや……世の父は娘に彼氏が出来ると嫌がるって言うだろ？俺も例外じゃない。でも俺は芦野だったらいいと思う訳だ」

「……は、はあ」

……本当にとんでもない曲者だ。

「しかしアイツ等じれったくてなあ」

「確かに」

「だから父として一肌脱ぎたいところではあるんだけど、珠美の奴、母親に似て怒ると怖いんだよ。余計なことしたら怒られそうだ」

「芦野さんが押せばいいじゃないですか。芦野さんに言って下さいよ」

「芦野はなーんか俺に遠慮しててな。今日だって『珠美に見合いをさせる』って発破かけたのに『そうですか』って言ってたし」

あんたか。

あんたのせいで今、あの2人は危機を迎えているよ。

「あれ？　なんか駄目だった？」

「ええ」

「あ〜……そうか……どうしよう」

「……喧嘩してごじねてましたけど」

「ええ？　それは困ったな」

頼むよ父……！

「うーん……そうか……ああ、そうだ。末ちゃん使おう」

「ええ！？　これ以上ややこしくしないで下さい！」

「いや、末ちゃんは大丈夫だろ」

「何を根拠に……ていうか末ちゃんって誰ですか」

「ライバルみたいなもんだ。芦野の」

「意味が分からな……ちょっとまさか取り合いなんてさせる気じゃないでしょうね！？　そんな一昔前のドラマみたいな展開許しませんよ私は！」

「駄目か」

「下手したら余計こじれますから……！ もう、こじりつのお互いに任せた方が良くもしますけど……」

「手を出した方がいいパターンもあるんだよ。特にうちのに関してはな。お互い頑固だから、誰かが手入れてやらないとこじれたまままだ」

「……」

なる程、という気がした。

タマは変なところで我慢……というか頑固だから。

きっとジワジワと匂わすことはしても、思いつきり特攻するタイプではなさそうな気がする。

「なあ、頼むよ霧島ちゃん。俺の娘の為に一肌脱いでくれないか？」

「……」

「霧島ちゃんだけなんだ。珠美が家に連れてきた友達って」

そういったタマ父の顔は、困ったような顔をしていた。

(……あれ、この人)

ふと違和感を感じて考える。
この人はタマのお父さん。
タマはやくざの娘。
やくざの娘の父はやくざ。

(この人は誰?)

……だから、タマのお父さん……で……タマはやくざの……やく……

「組長!？」

「ん？」

「すすすすみません……ずいぶん無礼な態度を……東京湾は勘弁して下さい……」

「アハハ! 気にしないで。つか、その方が失礼だ。しないしね、実際。東京湾に沈めてもすぐ浮かび上がってバレちゃうし」

何これ会話が剣呑すぎるんだけど……!

「すみません……あの、ぜひ協力させて下さい」

「……それは俺がやくざだから？」

「滅相もない！　だって、タマは友達ですから。芦野さんにもお世話になったし」

「ふーん」

でた！　親子そろって「ふーん」だよ！
人が真剣に答えたのに！

「霧島ちゃんの良い子だなあ。困ったことがあったらおじちゃんに言えな？　正義の味方がサツと現れて万事解決するから」

「ハハハ」

一児の父とは思えない程の色気を吐きだしながら、タマ父はニヤリと笑った。

もし困ったことがあると言ったら、一体何が起こるんだろう……

「ま、とにかく私がプランを考えておくから、霧島ちゃんはそれまで待機してくれないかな」

「はい、分かりました」

「じゃあ、連絡用にメアドを交換しよう。珠美には内緒な。あいつ、俺が『真尋元気か？』って言ったら『その汚え口からヒロちゃんの名前を出すな』って怒るから。メアド交換したついたら殺されるだ

ろくなあ

「ええ……!?!」

タマ父は凄く嬉しそうに正座しながらにじり寄ってくると、「赤外線ってヤツを使ってみたかったんだ」と言って満面の笑みで笑った。

「タマ……パパ……?」

「私の登録名可愛いだろう? 珠美が付けてくれたんだ」

「そうなんですか!」

世の父というのは本当に娘に甘い。

やくざが、それも親分レベルの人の携帯が「タマパパ」。

そう言えば我が家の父も、私が意地悪で付けたお花のストラップを紐が切れるまで付けていた気がする。

「霧島ちゃんも『タマパパ』って呼んでいいぞ。特別に」

「フフ……ありがとうございます」

「よし、できた。さあ、そろそろ珠美のところに戻っていいよ。だいぶ時間をくってしまった。このままじゃ霧島ちゃんがトイレで格闘していることになっちゃっからな」

「やつ……ちよつ……それは困るんですけど……!」

「アハハ! 申し訳ない」

全然そう思っていない笑顔を浮かべるタマパパに軽く挨拶して、私は
タマの所へと戻った。

チケット代等はこちらで持ちますので、楽しんで来て下さいー！

END

|||||

こんなメールが来たのはアドレスを交換した翌日のことだった。

(何が (*><) b だ)

可愛すぎる絵文字にイラストとしつつ昼食を取っていると、チカくんがニヤニヤ笑いながらテスト用紙でできた紙飛行機を飛ばしてきた。頭に刺さって床に落ちたそれを広げれば、見事な満点。

「……………」

「『お散歩』、行くつぜ」

「……………」

きつと、タマはタマパパに私のことを話しまくってるに違いない。

チカくんのこととか、たいちゅんのこととかも……
じやなきゃ、こんなタイミングよくメールが来るとは思えないんだ
けど。

「……………あ、あのさあ」

「今さら嫌とか言っ気かよ」

「違っよー！… そっじゃなくて……………」

い……………

言えねえ！

どっどっどっやって誘えばいいの！…？

ていつか断られたらめっちゃくちや恥ずかしくない！…？

「なんだよ」

「いや、だから……………」

「あ、センパイー！」

知らない女……じゃなくてクラスの人にドンと押される。
ムツとした瞬間。ぶあーっと香水のくっさい臭いが充満して、私は余計イライラするはめになった。

「今週の土曜日なんですけどお。一緒にお出かけしませんかあ？」

イラッ

「友達が映画のチケット4枚くれてえ。ユキナとユキナの彼氏とダブルデートなんですけどお」

どっから声出してんだテメエは。

「……」

「どうですかセンパイ」

「……いや、いいや俺。用事ある」

「ええ？ じゃあ日曜日はどうですかあ？」

「日曜日も用事ある」

「何それえ」

女はおかしそうに笑い、チカくんの二の腕を軽く叩いた。

「じゃあ先輩いつなら予定開いてますかあ？ あたし、予定あけま
す」

「あいてない。あいてる日は走りに行く」

「ええ？ ひどーい！ じゃあ、あたしも走りに連れてって下さい
よお」

「俺、女は乗せねえ主義」

「嘘だあ」

「しつげえ奴だな！ 嘘ついてどうすんだよ。ていうかテメエも嫌
がられてんの察しろー!!」

突然湧いて出たたいちゅんに、女のテンションがわずかに上がる。

「ああ〜！ たいちゅん先輩だあ」

「ついでに言っと俺も女は乗せねえからな！ 俺に言っても無駄だ
ぞ」

「まだ何も言っていないのにー!!」

「言つつもりだっただろ！俺と行きたいんじゃないんで、あわよくば一緒についてくるかもしれないコイツの後ろに乗るつもりだったんだろ！！」

「そんなことないですよ。でもあたし、たいちゅん先輩が女の人乗っけてるの見たことあるんですけどお」

「知らねえな。女装した花田だろ？とにかく俺もコイツも女は乗せねえんだよ。女は」

そこで私の方を見てニヤリと笑うたいちゅん。
そうか……私は女じゃないってか。

「どつでもいいわ」

ボソツと言えば、たいちゅんが大爆笑する。
女は不思議そうな顔をして私とたいちゅんを交互に見て、何かを察したように私を睨みつけた。

（なに睨みつけてんの）

あーイラッとする。

年下と関わってるせいで私の心まで年下に……ってこれは責任転嫁か。

まあいいや。

あれだよな。こうさ……もう、私は何を遠慮してるのかと。いじめが何だと。

ある程度大人だから言えるけど、ガキのいじめって全然怖くない……と、思う……。

と、とにかく！

私が勇気を出す時は、今なんじゃないかと思う訳よ。

タマの為に！ タマパパの為に！ そして芦野さんの為にも！

「ねえ、チカくん。今週の土曜日、デートしたいんだけど」

そういつた瞬間、3人が全く同じ顔で驚いて、たいちゅんもチカくんもニヤニヤしだす。

女は「はあ!？」って顔で私を見ていて……。

私は酷く後悔していた。

(……大人だったら……この女を上手くまいて、落ちついてから誘えば良かった……)

「お前ってホント売られてねえ喧嘩買うの好きだよなー」

(言わないで……)

「ユー」

「……はい」

「行きたい場所決めとけ」

「……はい……え？」

……タマパパ、上手にチカくんを誘えました。

そう言えば、先日『何かあったら言え』と言ってくれましたね。

頼みますよ、タマパパ。

第七章 小さな事件13

「チカくん遅いんだけど」

「いめん」

のんびり社長出勤のチカくんは、30分遅れで駅前にやってきた。私がどれだけ気まずい思いをしたか。

喧嘩してから仲直りしてなかったタマと芦野さん。

その2人と30分も一緒だったんだからね。

タマは芦野さんとは目も合わせずにずっと私と話してるし、芦野さんは「頼む」って顔しながら苦笑いしてるし。

（おかしいな……この2人を仲直りさせてくつつけるのが目的だっと思っただけ……）

チカくんには事前に事情を説明していた。

送った長文メールに返答は来なかったけど、朝起きたら「おう」「っ」一言返事が来ていたから、たぶん了承してくれたんだと思う。

珍しいこともあるものだ。

てっきり断られると思ったんだけど……

「よ、よし……じゃあ行くつか！」

「ピー、手」

「え？」

「手」

「何」

「デートだろ？ つなげよ」

「……ば、馬鹿じゃないの！ 散歩って言ったでしょう！？」

「霧島さん、散歩で夢の国まで行くのか」

「ぐっ……！」

芦野さんがそう言った瞬間、チカくんが剣呑すぎる視線をスッと芦野さんへやった。

（ちよ、ちよっと……喧嘩しないでよ！？）

「……あんたらもつなげよ。こいつが照れて手えつないでくれねえから」

「ええ〜？ タマ嫌なんですけどお」

「手つなげ。俺に合わせる。俺がヒーと手えつなぎてえんだよ」

出た俺様……！
信じらんない！
何で平気でこんなこと言えるんだろう……！

「……お嬢……じゃなくて珠美、ちゃん、手つないでいい？」

「珠美ちゃん？」

お嬢じゃないんだろうか。

「ああ、外で呼ぶとアレだからって親父さんが」

そう言いながら困ったように笑う芦野さんを見て、タマパパが意外と強引でやり手な男だと知った。

タマは嫌そうな顔をしている。

心底嫌そうな顔をしているけど、きつと意地を張ってるだけに違いない。

だって、その証拠に手をつなぎやすいように鞆を肩にかけてるもの。

「つなぐよ？」

芦野さんはご機嫌をうかがうようにそろっとつないで、何も反応しないタマを見て小さくため息を吐いた。
その瞬間、タマの顔が一瞬だけ歪む。

(あれ……？ タマ……)

「ほら」

「え？」

「手え、出せ」

「……」

「誰の為にお膳立てしてやったと思ってんだよ」

「……頼んでないけ痛たたたたた！？」

ギユウツと音がしそうな程、タマが私の頬を掴む。

「ヒロちゃん？」

「っ、っなぎます」

小さく言えば、チカくんが満足げに私の手を取った。タマは満足げに頷くと、「行くよ」と言って改札をくぐった。

* * * * *

「……」

「……」

「……」

「……」

私 チカくんを意識しすぎて無言になってしまっ。しかも自分から話題提供するタイプではない。

チカくん 元々喋るタイプではない。論外。

タマ 芦野さんと喧嘩中の為、無言。

芦野さん タマが一方的に怒っているせいでしょげていて無言。

かつてこれ程までに辛いダブルデートがあっただろうか。

いや、この際ダブルデートなんてしたことないとか言うのはおいてだ。

電車が目的地に着くまでに、何度「誰か喋ってくれ」と思ったたる

うか。

誰か喋ったら波に乗れる自信はあった。

そもそも人のふんどしで相撲をとるのが得意な女だからね！

せめて席が空けば、「タマ座りな」って言えた。

それをきっかけに、話が広がったかもしれない。

でも生憎、土曜のこの路線は込み具合が凄い。

席なんてあく訳もなく、地獄のような時間が過ぎ去って行った。

* * * * *

「うわー。俺すげえ久しぶり。こんなトコだったっけ？ 霧島さん
いつぶり？ 俺は覚えてない」

「私は1年ぶり……くらい？ 楽しみだねえ！ 何から乗ろうか？」

ゲートをくぐって音楽が聞こえてきた頃、ようやくみんなの（と言
つてもチカくん以外）テンションが上がりはじめ。

その頃には私もだいぶチカくんを意識しなくなって、あの溢れるよ
うな手汗もそこまで出なくなっただし。

途中何度か汗を拭きたくて「手、一旦離して」って言ったのに、そ
れらは全て無視される。

たまに手にギョッと力を込めてボソッと「絞れねえか」と呟くもの
だから、その度に「だから手を離してくれたら拭くから！」と怒る

はめになった。

「チカくんはたぶん『何でも良い』って言うから、タマ好きなの選
びだよ」

「ええ？ タマはあれ乗りたあい」

「……………」

あれ……………」

あれは確か……………」絶叫マシンだよね……………」

おばちゃん……………」絶叫系はちょっとな……………」

「ええ？ もしかしてヒロちゃん怖いのお？」

「怖かねえわよ」

ああ……………」見栄を張ってしまった……………」

* * * * *

「ふふふ……」

「ヒロちゃんさっきからずっと笑ってるっ」

「霧島さん、怖いなら出ようか？」

「いや、大丈夫です……」

暗い通路を行列がノロノロ進む。

このノロノロ具合が逆に恐怖心をあおったりして、私は再び手汗をかきまくっていた。

チ力くんはあれから一言も喋らないし、ボーっとどっか見てるし。

(ていつか会話が……)

全て私を通して会話している。

タマも芦野さんも、お互い手をつないでるくせに私にしか話さないのだ。

(タマパパごめんなさい……私、経験不足過ぎて役に立たないや……)

何より今は自分の身に降りかかる不幸をどうやって回避しようか、なんてことしか考えてない。
どうやって楽しめばいいんだろう。
どうやれば怖くないんだろう。
どうやれば……。……。

「コー」

「！」

呼ばれてハッと顔を上げれば、もうコースターが目の前にあった。

(いつの間に……)

狭い椅子に恐る恐る腰掛け、安全バーを下げる。
不安すぎるバーと自分の体の隙間。

(本当にはずれない？ 大丈夫コレ？)

とその時、手がスーッとチカくんが手を離したのに気付いた。

(何でこのタイミング!?)

脳内で「今こそつないでほしい時なんだけど……!?!」なんてパニくりながらオロオロすれば、チカくんはそんな私なんて全然見えてないような顔しながらボーッと前方を眺めていた。前ではタマと芦野さんがそっぽ向いている。手をつないでいるかは分からない。

（もしかして……2人の為にあんな我が儘言っただのかな？ 本当は別に私とつなぎたくないけど、2人が手をつなぐ為に……？）

そう気付いた瞬間、コースターはゆっくりと走りだした。

「っ！」

横から時折小さく「おお」とか「すげえ」とか聞えて来て、一応チカくんのテンションが上がってるらしいことに気付いたものの、私はそんな珍しい光景なんて気にならないくらいパニックになっていた。

（ひいつ……!!）

ガクガク揺れるコースター。

今にも脱線して、あの遙か下まで落ちてしまっんじゃないかと思

……。

「……………っ!?!?」

急に明るくなってフワツとした浮遊感。

一気に落ちていく感じが……………。

「痛つつつたああああ!?!?」

「ああ、悪い」

強い衝撃を感じて横を見れば、チ力くんがかつてない程の満面の笑みで私の頭に拳骨を落としていた。その瞬間、再び暗闇に戻る。

「何今の!?!? ねえ、何今の!?!?」

「アハハ!」

「何でそんなにテンション高いの!?!?」とか「どうして殴ったの!?!?」とか聞きたいことは色々あった。

でもコースターがゴールに到着した瞬間に手を握って引つ張られ、フラフラしながらさっさと退路へ進んだものだから聞くに聞けない。出口に近付いた時に一言文句を言ってやろうと口を開いた時、チ力くんがスツとモニターを指さした。

「あ」

そこには私の頭に拳骨をくれるチカくんがいて、目を見開いて痛がっている私がついて。

その前の席では、頭を抱えるタマを片腕で抱きしめながら、困ったように、でもちょっと嬉しそうに笑う芦野さんが写っていた。

「……………」

タマの方を見れば、未だ耳まで赤くしている。でも、2人の手はしっかりと握られていた。

第七章 小さな事件14

「……………」

お昼御飯の時も夕御飯の時もそんなに会話は無かったけど、何故か
気まずい空気は感じなかった。
帰りの電車で夕方はずつと薄つすら笑っていて、窓に映った芦野さ
んも薄つすら笑っていた。
きつと私も笑ってるんだと思う。

「ねえ、プリクラ取りに行こうよお」

「ええ！？ 今から？」

「今から！ 新宿で降りよう！ ヒロちゃんの初デート記念に！」

「別に初めてじゃないしね！？」

焦ってそう言ったら、芦野さんが「あーあ」という顔をする。

「え？」と思って窓に映ったチカくんを見れば、先程のハイテンシ
ヨンはどこへやら。

ブスっとした表情に戻っていた。

「……………」

なんとなく気まずい空気が戻り、その気まずい空気のまま新宿で降りてゲームセンターへ向かう。
ゲームセンターは階が丸ごとプリクラ専用になっていて、普段こんな所に来ない私は度肝を抜かれていた。

「何これ凄い！ 最近のプリクラって随分進化したんだね……ええ！？ 目って自動的に大きくしてくれるの……！」

「アハハおばさんくさーい」

「いや、もうオバサンでいいよ……描くのとか良く分からないから、タマ描いてね。できればポーズも指定してくれ」

「何それ超ウケルんですけどお！」

不安げにそう言えば、タマは爆笑しながらも世話を焼いてくれた。意外なのは芦野さんだ。

同じ年のくせにプリクラ慣れしているのが腹立たしい。
タマが「こういうのはあ、直感でササツと描くんだよ」とか言いながら楽しそうに描いているのを、後ろから嬉しそうに眺めている。かたや不機嫌な王子様は一応撮ったものの、さっさと壁際で携帯をいじりながら待機をしていた。

（まったくあの王子様は……ていうかあの携帯、私のじゃん！！
いつの間に……）

その時、不意に芦野さんが私の方を振り向くと、耳元に口を寄せて嬉しそうに呟いた。

「ありがとな。親父さんと協力してくれたんだろ？」

「え？」

「今度は俺が頑張るから」

「え？ どういう……」

「もう内緒話終わったあ？」

「！」

不機嫌な声にサツと振り向けば、タマが初めて会った時と同じ笑顔でこつちを見ていた。

「……」

こ、これは……

何か凄い勘違いをされてるのでは……

「タマ、さあ……」

「もう行」じよお

「……うん」

芦野さんは「あちゃー」という顔をしている。

正直、「あちゃー」で済む感じでは無さそうな気がした。

* * * * *

1人すったか歩くタマ。
もう手はつないでいない。

「タマ……タマちょっと待って……！」

「何」

急に立ち止まって振り返るタマ。
ぶつかりそうになって慌てて立ち止まった。

「あのさ……どこ行くの」

「……じゃあ別行動にしようか？」

「……ええ！？ 何、どういじ……」

「タマ、もう帰るから、みんな遊んでて」

「いや、タマそれは「帰る」。タマもついい」

勘違いから追い詰められているであろうタマは、もう愛想笑いすらしていなかった。

「いい加減にしろ」

なのに……追いつめられてるって分かってるだろうに、きっかけはタマのせいじゃないって分かっているだろうに、芦野さんはタマを怒る。

芦野さんはまあ正しいと思う。

でも、きっと今のタマはそれを受け入れられない。

「……あんだ誰に向かって口きいてんの」

「……お前だよ、珠美」

2人とも縮みあがるくらい怖い顔をしている。
どうすればいいのかわからなくて、思わずチカくんを見た。
なのにチカくんはポーっとどこかを見ていて、我関せずと言った感
じで……

「……ってえ」

パンという乾いた音とともに、芦野さんは頬を殴られていた。

「タマ！」

そしてそのままタマは走り去ってしまふ。

「……タマ！ 待って！ タマ！！」

慌てて後を追おうとすれば、芦野さんが困ったように笑いながら阻止した。

「俺が行くよ。悪いな」

そう言って、芦野さんはタマの後を追って行った。

「……」

「どこ行くんだよ」

走りだそうとした瞬間、チカくんが手を引っ張る。

ここに来て口出ししてきたチカくんにはイラッとしつつも、早口で返答した。

「追い掛けるんだよ」

「お前が行くな」

「何で!?!」

「いいんだよ、任せときゃ」

「何でそんなこと言っの!」

「お前には言ってもわからねえよ」

ぶっん ……。

私はタマと同じようにチカくんを叩くと、タマの後を追いつけた。

* * * * *

(また殴ってしまった……)

走りながら凄く後悔していて、次に会ったら土下座しようと考えている時、タマらしき女が路地裏に入っていくのが見えた。

慌てて後を追えば、案の定タマは誰かに手を引っ張られている。

てっきり芦野さんが追いついたと思ったのに、考えうる限り最悪な展開になっていた。

「離してっ……よ!!」

「っせえ！ テメエが遊びに誘ったんだろっが」

「こんなことするなんて言っただけだ!!」

ベタ過ぎる展開に思わず目眩がする。

慌てて芦野さんに連絡を取ろうと思っただけでポケットを探り、絶望した。

(携帯……チカくんにすられたままだ……)

深いため息とともに辺りを見回す。

土曜の夜、近くには酔っ払いが客引きしかいない。

酔ってない人も助けしてくれそうな奇特な人間はいないに違いないだ
ろっし……

(わ……私だってやればできるんだから……！)

私は自分を叱咤して、大切なタマを守る為にタマの元へ駆け寄った。

「タマ〜！ こんな所にいたあ！」

「え……」

「この人達知り合いなのお？」

「……し、知らない……けど……」

タマのギャルっぽい話し方を真似る。
凄く恥ずかしくて、上手くいくか不安で、心臓はドキドキを通り越してバクバクしていた。

「そうなんだぁ……」

へラへラしながら近寄って行けば、男はわずかに顔を歪めたものの、私の意図が分からずに睨むだけにとどまった。

「お兄さんこれからタマと遊ぶのお？」

「あ？」

「ヒロも一緒に入れてほしい」

出せる限りの愛想を絞り出して微笑めば、男はピクッと片眉を上げた。

「……へえ？ いいけど」

（きた！）

「ヒロちゃん！ ……この子は駄目！ タマだけでいいでしょ！？」

「うるせえ」

そんなに力を入れてないと思う。

だけど、頭を殴られたタマはよろけて地面に転がった。

その瞬間、心臓がギュツと掴まれたような感覚になり、心に決めた作戦とかなんとかをすっぱ抜かして、目の前に立っている男にド下手糞な一本背負いをしていた。

「ヒ……ヒロ……ちゃん？」

ドツと男が地面に転がるのを確認する間もなく、私は身をひるがえしてタマの腕をつかむ。

無理矢理引っ張り上げると「走って」と叫んでタマを先に行かせた。

「まてコラッ！！」

路地を抜ければ大丈夫。

あの人ゴミに紛れれば逃げ切れる。

「…………ツ！？」

「ヒロちゃん！！」

腕を掴んで無理矢理振り向かされ、そのまま盛大なビンタを頂いた。視界にタマがうつつて「来るな」と言おうとしたら、タマの目が見開いて顔が泣きそうに歪む。

「しゃがんで!!」

「ええ!？」

訳も分からずしゃがんだ瞬間、男が私の上を吹っ飛んで行った。地面に転がる男をヒールで踏み越えてタマが私の元へ駆け寄る。

「え? 何!? え?」

「遅くなって悪かったなあ」

「ええっ!？」

キョドキョドしながら声の方を振り向けば、肩足を上げたままの芦野さんが煙草を吸いながら息を切らしていた。その足をゆっくり下ろして、私の方を見る。

(……王子様みたい)

「ほっぺた大丈夫?」

「…………え、あ…………ハイ」

「珠美のこと守ってくれてありがとうな」

芦野さんは煙草を道に捨てながら苦笑いすると、男の襟首を掴んで壁に押し付けた。

「何すんだテメェ！」

「そらこっちの台詞だハゲ」

相手の喉に腕を押し付けて窒息させながら、芦野さんは男にしか聞こえない声で何かを呟いた。
男はどんだん顔色を変えて、チラチラとこちらを見る。

「どう謝るんだろうなあ？」

「わ…………悪かったって…………知らなかったから…………」

「あ？」

「…………っ」

男は完璧に圧されていた。

「……は？」

その時だった。

ウサギの気ぐるみを着た変なのが登場したのは。

「おう。遅かったなウサちゃん」

「……」

ウサギは答えない。

「おい、兄ちゃん。俺は今日、機嫌が良いからこれくらいにしといてやるよ。でも、このウサちゃんは相当機嫌悪いぜ？」

そういうと、芦野さんは喉の奥で笑ってタマの方へ歩いて来た。

男はその瞬間走りだし、ウサギの横をすり抜けようとする。

「うあっ！…！」

そして、男はウサギの横をすり抜けようとして、腹にひざ蹴りをくらって路地裏に舞い戻って来た。

「珠美、お友達に心配かけんな。お友達を巻き込むな。霧島ちゃん
は、大事なお友達なんだろ？」

「……………」

「……………あと、俺に心配させんな」

「……………つく……………」

泣いてる珠美を見てため息を吐きながら、芦野さんは嬉しそうな困
ったような顔でタマを抱き寄せた。

「しょうがねえ奴」

「……………」

凄く良いシーンなんだと思う。
凄く良いシーンなんだと思うんだけど、後ろでウサギが男にまたが
ってフルボッコになっている。

「……………あの、あれ……………」

「退学になりたくねえらしい。けど、殴りたくてしかたねえっーか
ら、借りてきてやった」

やっぱり……。

「チカク……ウサギさんもついいよ……」

「駄目に決まってるんだろ」

「いって」

「……」

無視だよ。

「ねえ……ねえってば……ねえ!!」

ようやくウサギさんがこっちを向いた。

振り向いたウサギさんの顔には血が飛んでいて、思わず某ゲームのマスコットを思い出してしまう。

「もう良かって……その、死んじゃうから」

「……」

恐らく着ぐるみの下で不満タラタラな顔をしているであろう男を思
い浮かべながら、私は思わず笑った。

「なんで笑ってんだよ」

「いや、別に」

「言えよ」

「何も無いよ」

「……」

「ねえ」

「……」

「馬鹿じゃないの？ 人殴ったりして」

「……」

「……ありがとう」

絶対聞こえないと思ったのに、小さくつぶやいた「ありがとう」「に
対してウサギさんは」おう「と短く返答した。

第八章 暗雲01

『何！？ デートだあ？』

「こ、声大きい！！」

『で、どこ行っただよ』

「……夢の国」

『ああ！？ お前はまたそんな所に……スタートしたばかりの勇者がラスボスに挑むたぁいい度胸じゃねえか！』

「だってえ……タマパパが行けって言っから」

『タマパパ？』

「タマだよ。タマのパパ。タマ知ってるでしょ？ あの子とダブルデートだったの」

『はあ！？ あの協調性のない男がダブルデート！？』

「でしょ！？ 私もそこは凄くびっくりしたんだけどさ」

電話から聞こえてくる声にアハハと笑えば、向こう側で何度も「ありえねえ！」と聞こえてくる。

時折「お兄ちゃんうるさい！」と怒鳴り声が聞え、やっぱり家族でもうるさいって思うんだ、って妙に納得した。

『ありえねえ！ マジか！ ……お前愛されてんなあ』

「は！？ なんでそうなるの！？」

『それ以外ねえだろ』

「いや……別に私は……」

『んな殺生なこと言つな。お前、最後までやったんだろつな？』

「え？ 何を」

『……ちょっと待て。デートプランを言え』

「え？ いや……別に普通……っていつか……夢の国行ってえ…

…

『おっ』

「それで、新宿でゲーセン行ってえー……」

『おっ。……何？ ゲーセン？ しけてんなあ』

「うるさいな。で、プリクラ撮ってえー……」

『ちょっと待てー！！ プリクラなんぞ撮ったのか！？ アイツが！

？』

「そつだよ！ そうなんだよ！…！ それもびつくりだよね！…！」

『びつくりなんて簡単な一言で片づけんな！ お前、マジ愛されてんぞー！！ 後で1枚よこせ！ ネタにするから。それで！…？』

「え？ 何が」

『続きだよ！ その後は？』

「ああ、その後は……えーと、色々あってタマが襲われかけて、助けようと思ったら私も襲ってきた人に殴られて、チカくんがプツツンして喧嘩して解散」

『……』

「……」

『……』

「……」

たいちゅんの言いたいことは分かる。

『お前……なあ……』

「言わないで」

『いや、言つ。お前……馬鹿だなあ』

「……」

こんな感じで、最近私はよくたいちゅんと電話してる。というか、履歴が龍と牧とたいちゅんとタマしかない。前までチカくんが入っていたけど、それがあつという間に流れるくらい電話している。

電話の無料通話分が無くなったのは初めてのことだった。

「……ねえ。私、高校入ってよかった。っていうか……たいちゅんが友達になってくれて良かった」

『……な、なんだよ！ 何も出ねえぞ！』

「いや、本気で。ありがとう」

『ふざけんな！ なんだよ！？ 真尋、お前、明日死ぬのか！？』

「死なないよ」

慌てふためきたいちゅんを笑えば、ホツとしたような雰囲気伝わってきた。

『ふざけんな。変なこと言っんじゃねえ』

「本気だつてば」

『……お前、それチ力にも言っつてやっつてくんねえかな』

「それとこれとは話が別だ」

『そんなんだから一生独り身なんだよお前は！』

「う、うるさいんだけど!？」

『もう寝ろ！ 腹出して寝ろ！ 風邪引け!』

「何そ……あ、もうこんな時間！ 遅くまでごめんね?」

『気にしてねえよ馬鹿！ じゃあな、おやすみ』

「おやすみ」

ピツと通話を切つて深いため息を吐く。

……いや、ほんと……なんか彼氏かっつてくらい連絡取つてる気がする……

「たいちゅんと電話するのは楽しいんだけどさあ……」

私が電話したいのは……。

「……くっそ……」

わかったよ。

ええ、ええ。
認めますとも。

私は、あの赤い髪でイケメンで不良で……もっとも嫌いなはずの人

種
の
男
が
好
き
で
す
よ。

第八章 暗雲02

「……ふっ」

「なに？ 最近ヒロ、アンニユイじゃん」

「タマ、あんた変わったねえ」

そう、結局この2人……タマと芦野さんは付き合うことになったらしい。

急展開すぎてびっくりしたけど、どうやら芦野さんがタマ家にやって来た3年前からタマは好きだったらしくて、見事3年間の片思いを実らせたわけだ。

しかも、タマがギャルっぽくてトローン tron した話し方をしたのは、だいぶ前に芦野さんが「俺、ちょっと馬鹿っぽいギャルが好きっス」って話してたのを真に受けたいらしい。

「まあね」

最近になって「本当は清楚な感じの子が好きだ。あれはAVの好みの話だ」と言われ、あれだけ盛ってた金髪はサラサラストレートになっている。

化粧も薄いし私並みに清楚……っていうかダツサイ恰好をしてて、この間たいちゆんと会った時は「誰だお前!？」って何度も言われていた。

付き合う友達も変わってきて、今ではほとんどギャル達とつるむ

ことはない。

「男に合わせて変わる女だったのね。タマは」

「嫌じゃないから楽しいよ?」

「……そう」

もう、ほんとその幸せを分けて欲しい。

「で?」

「え?」

「ヒロは?」

そうそう。

呼び名も「ヒロちゃん」から「ヒロ」になった。

自分のことも「あたし」というようになって、タマパパがちょっとだけ寂しがってたけど。

陰で芦野に蹴りを入れていたのはタマに内緒だ。

タマパパの名誉の為に。

「……ふっ」

「その様子じゃようやく認めたか」

「……ふっ」

「どう動くの？」

「どう動けばいいの？」

「大人なんだから自分で考えなよ」

「小説とか雑誌に載ってるような対応しかできないよ」

「……ヒロって可哀想」

「やめて」

ああ、でも本当にどうすればいいんだろう。

私はぶっさいく……とまでは行かなくても普通の顔だ。

……でいいんだよね？

たぶんそこまでぶっさいくではないはず。

でもよ？

そんな普通の女がイケメンを好きになったわけですよ。

一応向こうも好きってことにはなってるけども、なんか……なんか
本当に好きか分かんないじゃんね……

「まあた小難しいこと考えてるんでしょ」

「……だって」

「いいじゃん。向いづも口のどすきなんだから。告白すれば100%OKじゃん」

「……でも」

「『だって』とか『でも』やめない？」

「タマさ。あんた自分が上手くいったからって……」

「エへへ」

「やめて」

「放課後デートにでも誘えばいいのに。天気いいよ？」

（できたら苦勞しないっての）

こっそりため息を吐いて窓の外を見る。

台風が過ぎ去ったような天気。

きっとピクニックでもしたら楽しいだろう。

ピクニックでもしたら……ね。

* * * * *

ふっ……

(天气がいいから放課後アイスでも食べに行こうと言えはいいだけ)

そう、簡単なことだ。

「……………」

簡単なんだけど……さっきから何度もメールを打っては消してを繰り返している。

日本語がおかしい気がしたり、断られたらどうしようか思ったりして。

「フッフ……日本語がおかしいなんて今さらじゃないの。私、しっかりするのよ！」

そんな叱咤の咳きもむなしく、送信した後に激しく後悔するはめになった。

* * * * *

「暗っ」

「八八八」

「断られたの？」

「え？ 何が？」

「放課後デート誘ったんじゃないの？」

「……」

「『なんで分かったの？』って？ 顔見りゃ分かるし」

「そっですか……」

「で？」

「……断られては無い」

「よかったじゃん！」

「……良いとも言われてない」

「……つまり、無視されてるわけね」

「言っな」

きつとまだメールに気付いてないだけなんだ。
そう、きつと……。

)

「！」

先輩だ。

「超笑顔」

「うっさいなあ」

エへへと笑いながらメールを開いて、期待に膨らんだ私の気持ちは
風船が破裂するより早くしぼんでしまった。

「もういい〜……」

「ちよっ……諦めるの早っ」

私の弱り切った声を聞いて再び爆笑するタマ。
くっそ……こいつ人ごとだと思って……

「しょうがないなあ。タマがデートしてあげる」

「いい」

「八つ当たりすんな！ 奢ってあげるから」

「年下に奢られたくない」

「……あのねえ」

タマはふかーいたため息を吐いて私の前の席に座った。

誰の席か分からないけど、ここ最近誰も座ってない席だ。

本当にずっと来てないから、たぶんリタイアしたんだと思う。

「今まで同じことをしてたのは誰？」

「……」

そうだった。

「たった1回断られたからってアンタ。そりゃ随分むしのいい話だわよ」

「……うん」

分かってる。

悪かったのは私だ。

「でも、なんか……こんな嫌な思いをするならもっかい「甘い!」!」

大声に思わずビクリと肩が震える。

「甘い! あたしがどれだけ苦労したと思ってんの! その逃げ根性どうにかしなさい!」

「……最後助けられまくってたじゃん」

「覚えてない」

この女……

「まあ、聞きなさいな。このあたしが、ヒロのお手伝いをしてあげる」

わあ、どうしよう。

もう嫌な予感しかしない。

「この間の仕返しよ」

「せめてお返しと言って……」

「今日は作戦会議だからね！」

「ええ！？ いいよぉー……芦野さんどブーッすじゃいじゃん」

「ひがむな。それと芦野は最近忙しいのよ」

「……ふーん」

再び深いため息を吐いて、私は放課後までの時間をどんよりした気分で過ごした。

* * * * *

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

美味しい。

31は安い割に美味しい。
味もいっぱいあるし。

「で」

「ん？ あー……そうね。はい」

「は？」

突然差し出した小さな包みに、タマは目を見開いた。

「……何これ」

「オトモダチになった記念と、芦野さんと付き合えてよかったねプレゼント」

「……」

「……あの、気に入るかは分からな「い、いいのに！ 別にいいのに！！」」

見たことも無いくらい真っ赤になって拳動不審になるタマ。
それが凄く可愛くて、思わず笑ってしまう。

「前、服買ってもらったし」

「……いいのにいー……え〜？ いいのにいー……あ、開けていい？」

「ぶっぞ」

真っ赤な顔のまま「わぁ」とか「ええ？」とか気の抜けた声を出しながら、包みを開いて動きが止まった。

「……これ」

「そのメーカー好きでしょう？」

「でも、これ……」

「前に欲しいって言ってた」

「……でも」

箱の中にはピンクゴールドの時計。

学生にこういうのは重いかなとも思ったし、何よりこういうのは彼氏が送るんだろうなとも思ったけど、タマが私にしてくれたことを考えれば……と想ったり思わなかったり。

自己満足の押しつけかもしれないけど、少なくとも喜んでないわけではなさそうだ。

「……これ……凄く高い……のに……」

「私は社会人だから。それにプレゼントに値段は関係ないと思ったんだけど、やっぱり気遣わせちゃったねえ……ごめん」

困ったように笑えば、勢いよく頭を左右に振って、とろけそうな頬笑みを浮かべる。

「今まで貰ったプレゼントの中で一番嬉しい……」

「フフフ」

タマはうつとりしながら時計を手首にはめてしばらく眺め、ゆっくりこつちを向いて真っ黒な頬笑みを浮かべた。

(あ……あれ?)

「先輩とアンタのことは任せてね」

「……」

もしかして、波乱の幕開け……？

第八章 暗雲02・5a (前書き)

T a m a m i
S i d e

社会人だからって馬鹿だよねえ。

時計なんかくれちゃってさ。

これ、いくらするか知ってるのかな。

知らないんだろうなあ……ていうか、値段を見てないんだろうな。

あの子、他人へのプレゼントの値段ってホント気にしないみたい。

この間も「これ、たいちゅんに似合いそう」とかいつて何万もする

アクセサリー買おうとしてたし。

止めたけどね。

ナイス判断だと思わない？

そういうのは彼氏にしるっつの。

いや、でも普通こんな高い物あげないけどね。

悪い人につかまったら大変そー！

絶対貢ぐタイプじゃない？

まあ、これでもヒロには結構感謝してるわけ。

だからさ、あの子が悪い男につかまらないように芦野と協力してく
つつけてあげることにしたのよ。

我ながらナイス判断だと思わない？

第八章 暗雲02・5b(前書き)

Ashino Side

第八章 暗雲02・5b

「おう、こつちだ」

不機嫌そうな……なんだっけ、コイツ。

ああ、西條。

まあ、その西條が不機嫌そうな顔を隠そうともせず珠美の家に来た。

「そう怒んな」

話しかけてんのに無視。

やくざ相手にこの態度だからな。

「お前と霧島さんくつつけるためだろ。まあ、俺は下手に手え出さない方がいいとは言ったんだけど」

珠美がなあ。

やれっつてうるさいから。

さっそく尻に敷かれてる気はするけど……ま、それは昔からか。親父の娘だから何言われてもハイハイ言ってたし。

「お前、ちゃんと誘い断ったのか？」

そう言うと西條は生意気にも鼻で「フン」と返事をした。

「珠美もドSだよなあ。霧島さんに『先輩誘いなよ』って言うついでお前に『誘われたら絶対断れ』って言うつんだから。霧島さん可哀想」

へへつと笑えば、思いつきり睨まれる。

こいつ、こんな顔するなら珠美の提案、断ればよかったのになあ。

「押して駄目なら引いてみる作戦……ねえ……」

人によっちゃマジで駄目になる気もするけど。

「ま、あとはお前次第だな。せつかく親父が居場所提供してんだから、頑張れよ」

小憎たらしい西條はもう何も反応しない。

こいつ、本当に何でもこの話に乗ったんだろっ……？

第八章 暗雲02・5c (前書き)

Y a s u c h i k a
S i d e

第八章 暗雲02・5c

「先輩、ヒロを確実に落とす方法知りたくないですか？」

ヒーの連れ……何か猫みてえな名前の女がそう声をかけてきたのは、ヒーとデートに行った数日後だった。

「タマ、良い方法思い付いたんですけど」

ああ、そうだ。

タマ。

「先輩は、ヒロが嫉妬するところ見たいですよね？」

嫉妬？

「タマと芦野に任せてくれれば、つまりい具合にやりませうけど？」

ふーん。

あいつが嫉妬ね。

俺に。

……ふーん。

「俺、そういうのいらね」

「やっぱり」

そう言っただまは笑った。

「先輩ならそういうと思いました。自分で攻略したがるだろうなって。でもこれ聞いたらくいつきますよ」

そう言っ得意地悪そうに笑うタマを見て、少しイラツとした。

「『リュウ』って知ってます？ あ、あの迎えに来てる男じゃない方の」

リュウ……？

……ああ、あれか。

確か初めてヒーと会った時に電話で話してた気がする。

「最近ね、ヒロってばリュウの話ばかりしてるんです」

やっすい挑発。

馬鹿かコイツ。

「あと泰造先輩。あの子、泰造先輩とかともすっごい電話してるみたいだし……ちょっとお仕置が必要だと思いませんか？」

……ふーん。

たいちゅんね。

「情報集め、パパ達とーっても得意なんです。気になったら芦野に電話して下さいね」

そう言っつて無理矢理握らされた紙。

紙切れには、その芦野って奴のものらしき携帯番号が書いてあった。

あの電話から数時間。

知らないアドレスからメールが届く。

メールには『珠美から聞いた』とだけ書いてあり、添付に真っ青な顔で何かから逃げたいちゅんが写っていた。

第八章 暗雲03

「ましもん」

「え！？ な、なんだよ」

「同じ学級委員として放課後デートしよう」

「…………ええ！？」

真下くんは真っ赤になって椅子から立ち上がったり座ったりを繰り返した。

「今日、委員長会じゃん。帰りにアイス食べて帰ろうよ」

「い…………いや…………あの…………」

「嫌なの？」

「え！？ 嫌、じゃないけど…………西條先輩怒るんじゃないかな？」

「……………」

「……………」

* * * * *

「美味しいねえ！」

挙動不審な真下くんを尻目に、私はトリプルアイスにかじりつく。

「食べないの？」

「た、食べる」

真下くんは誘えた。

タマも誘えた。

たいちゅんも誘えた。

たいちゅんなんかは、学生の味方のファミレスで何時間も粘って話し込んだくらいだ。

（おかしい……）

なのに何故かチカくんは誘えない。

いや、何故かなんて分かり切ってるけど……

「あの……さ……」

「ん？」

「俺……」

「……」

「……俺……真尋のこと……好きって知ってた？」

「……うん」

かーっと赤くなる真下くん。

「……そっか……なんで……いや、分かりやすかったか……」

「……」

「あの……さ……」

「……うん」

「言っというて何なんだけど……なんか真尋とずっと委員長会やって思ったんだけど……なんか……姉ちゃんみたいっていつか……」

「……プスッ」

「笑うなよ!」

「あ、ごめん」

「……つまり、だから……」

「『好き』じゃなくて『憧れ』だったっばかった？」

「……」

真下くんは困った顔をしながら「あー」とか「うー」とか言いだす。

「……なんか」

「うん」

「最近、可愛いなって思う子がいて……それが……その……」

「私より好きかもって？」

「……」

無言で頷く真下くん。

その顔は怒られている犬のような、困った顔になっていた。

「なんか、真尋は姉ちゃんポジションにスライドしたっていうか……」

…じ、自分でも……！ 何、勝手なこと言ってるだろうなって分かってんだ！ でも……さ……なんか……こんなの真尋にしか言えねエシ……俺……さ……俺……」

「はっはあ〜」

「なんだよ……」

「いや、いいよいいよ。それで、相手は誰かな？」

フツフツと笑えば、真下くんは赤くなりながらも「うわぁ」って顔をした。

恐らく「厄介な奴に言っちゃった」ってところだろう。

「水野さん……っていう子なんだけど……」

「水野さん？ 誰だろう……」

「あの、書記の子で……」

「ああー！ あの子！」

確かにあの子は可愛い。

真面目で素朴な感じの子だ。

「マッシーはそういう系統が好きなのね。自分はやんちゃなのに」

「いいだろ、別に……!」

「悪かないわよ」

「……なんか、真尋マジで姉ちゃんみたいだな」

「当たり前じゃん。年上……」

「ん？」

「年……年上だから……ホラ、何カ月かくらい……私、妹居るし」

「何だそれ？ まあ、妹居るならそんな感じなのか。俺、末っ子だしな」

へへっと照れたように笑い、真下くんは溶けかけのアイスを食べ始めた。

「うめえ」

「今度誘えばいいじゃん」

「え!？」

「水野さんを」

「無理無理無理!」

……ふっ。

「マツシ―て私に似てるのねえ」

「ええ？」

もういつそのこと慰め会でも作ろうかしら。
ほんと……最近全然チカくと連絡取ってないしね。
いや、別に元々連絡なんてほとんど取ってなかったけどさ。

「……お前さ、西條先輩好きなんだろ？」

「……」

「な、何赤くなってんだよ……！」

「……うっさいなあ。私は別に……」

「おっおっ！ 昼間っからデェトですか！ 羨ましいねえ」

2人揃ってハツと顔を上げれば、肩を組んだチカくとたいちゅんがいた。

私の体温……いや、きつと真下くんの体温もだけど、それが急激に下がる。

「……………」

「……………」

「なんだ？ マジデートか。そりゃ邪魔して悪かったな」

やたら楽しそうなたいちゅんは、全然興味なさげな顔をして携帯をいじくってるチカくんを連れて出ていった。

「……………マジびびった……………何しに来たんだ……………」

ほんと、何も興味なんてないみたいだった。

「ええ！？ おいつ……………真尋？」

「……………何」

「……………泣くのかよ？」

「泣いてない」

まだ泣いてない。

泣きそうになっただけだし。

何も言われてないし、何もされてないから、泣く必要なんてないもの。

* * * * *

「……」

「……………」

To チカくん

Sub (no title)

お話ししたいのですが、時間ありませんか？

END

「……………」

なんか、凄いみじめだ。
タマが言っていた「『好かれてる』ってことに安心しすぎ」という言葉がよみがえってきた。

「でも、さあ……ちょっと急すぎない……？ そんなことない……？」

デート行ってくれたじゃん。
その後すぐこれ？
本当は嫌々ついてきたの？
そう言えば言葉数少なかった気がしてきた……

「……」

ああ、なんか……
私はまたやらかしてしまった……

「た、タマに連絡……」

やめよう……迷惑だよね……

だってあんなに忠告してくれたのに聞かなかったの私だし。

私、大人だから……こういうのって自分で解決しないと駄目だよね。

第八章 暗雲04

「最近どう？ 悩んでることない？」

「え？ 何が？」

「だから、悩み。無いの？」

「悩み……？ いや、全然」

そう言えば、タマは「ふーん。そう」と不満げだった。

協力してくれると言っていたから、私がいかにチカくんと連絡取らないのを気にしてるのだろう。

「あのさー」

「ん？」

「大人から見たら子供なの？」

「何が？」

「だから、20代から見た10代って、やっぱりガキなの？ ガキは嫌？ すぐに熱が冷めて、飽きちゃうとか？」

「ああ、芦野さんのこと？ まあ、子供っちゃ子供だけど……それはお互い様な部分もあるしなあ。逆に大人だなと思うことも多いし」

「……そう」

本当はチカくんのことなんでしょう？

大丈夫。

もうタマに迷惑かけたりしないから。

「こないだ先輩がギャルと一緒にいたよ」

ズキ

「へえ？ そうなんだ。相手の子可愛かった？」

「うん、凄く」

ズキ

「マジか！ 羨ましい〜！ 私も可愛い嫁が欲しいなあ」

「何それ意味分かんない」

「え？ だから……」

言いかけたのを最後まで聞かず、タマは教室を出ていった。

「……………」

タマまで怒らせてしまった……………」

ほんと、大人なのに全然人付き合い上手にできないんだから。

* * * * *

「一人飯、一人飯。便所飯じゃなくてよかったあ」

屋上が開いててよかった。

空の機嫌が良くてよかった。

屋上に……………誰もいなくてよかった。

「1人飯かよ！ 味気ねえ奴。お前ってホント友達いねえんだな」

「た、た、た、たいちゅ〜ん……！」

「うわっ！ なに泣いてんだ！」

「あんたが丁度良いタイミングで来るからじゃ〜ん……！ 我慢っ……してたのにい〜……」

「なんだよ！ 全然わかんねえよ……！」

ご飯を食べながらわんわん泣いた。

馬鹿かっつくらい。

頭が痛くなって、それでも涙は止まらなかった。

「たいちゅんは必死に横で「飯食ってねえで早く泣きやめよ！」とか「俺が泣かせてるみたいだろ！」とか言っつて慰めてくれている。

私は鼻水垂らしてわんわん泣きながら、「どうしてたいちゅんの前にいる時ほど、チカくんの前で素直になれないんだろっ」ということを考えていた。

* * * * *

「……っはあ」

「……泣きやんだかよ」

「……ごめん」

「気にすんな」

「……」

「ま、何があつたかは聞かねえよ。だいたい分かるしな」

「……ありがと……たいちゅん好きな人いないの？」

「はあ？」

「いたら協力する。なんか……ホントお世話になりっぱなしで……
今度菓子折り持つてくる」

「気にすんな馬鹿。お前は俺の妹みてえな女だからいいんだよ。俺
が世話を焼きてえただけだ。だいたい、俺はお前と違って好きな女く
らい簡単に落とせんだ。それをしないのは、特定の女ができたら世
界中の女が泣くはめになるからだよ」

「ふーん」

「興味ねえだろ？」

不機嫌そうな顔をしながら、私のお弁当からサクラランボを盗み取る

たいちゅん。
ついでにオレンジのくし切りも差し出せば、何も言わずに受け取った。

「ま、もう少しの我慢じゃねえの？」

「？」

「お前、散々振り回したからなあ。ちったあ懲りろ」

「何が？」

「何でもねえよ。早く飯食え」

「……うん」

たいちゅんは、それからずっと食べ終わるまで黙って空を見ていた。食べ終わったら何でもない会話をして、時折黙ってはまた口を開く。

「お前さー」

「ん？」

「チカのどことが好きなの？」

「……」

ど」……？

「……まさか分からんわけじゃねえだろうな」

「……」

「……マジかよ」

「……そんな言い方しないでよ」

あれ……何……何で……？

私……チカくんの何が好きなんだろう……

私……本当に好きなんだろうか。

「私……さ……」

）

「あ、ごめ……龍だ……」

「……おう」

「……もしもし？」

『真尋か。俺だ。お前、週明けから出張行け』

「え？ 出張？」

『ああ、1週間』

「どこに」

『韓国だ。例のオンラインゲームの案件がまとまりそうだな』

まだ悶々と悩んでるさなか、私は龍から出張を言い渡された。

「でも学校が……」

『1週間くらいだったら平気だろ。お前んとこの高校、馬鹿だから勉強範囲もそうそう進まないさ』

「……わかった」

こうして私は、モヤモヤとしたまま出張へ行く羽目になった。

第八章 暗雲05

「えー!? 出張!？」

「らしいぜ」

「……」

「なあ、タマよ」

「……なんですか」

「俺はやっぱ『ドキッ 押して駄目なら引いてみる作戦』は駄目
だと思っただけだな」

「……」

「あいつ、モロ『去る者追わず』タイプだろ? このままフェード
アウトする気がするんだけどよ」

「あー……」

芦屋の気の抜けたような「あー」。

この男、最近知り合ったけど、何でもこのヘンテコリンなプロジェ
クトに関わってるらしい。

「まあ、今日はチカも真尋もいねえから言っけども、チカの演技が

上手すぎて……っというか素なんだけど……そのせいでお前の想像以上に真尋がダメージくらってんだよ。この間もワンワン泣いてたし。のくせに、あいつ誰にも相談しねえだろ？ こっちが聞かねえと言わねえし、下手したら聞いても言わねえからな」

「……何で先輩の方が詳しいの」

「あ？」

「あたしの方が仲良しなのに、何で先輩の方がヒロのこと知ってるの？ 何でヒロは私に何も言ってくれな「俺に嫉妬すんな」

こいつら、きつとお互い不器用なんだろうな。

「あー面倒くせ。お前ら不器用すぎるんだよ。もっと俺のようにスマートに生きる！ とにかく、この作戦は無しだ！ 無し！ チカには俺から言っとく。つか、今一番ヤベエのは、この悶々とした雰囲気のまま、真弘が韓国に行くことだろ」

仕事なら連絡をとる機会はグンと減るだろうしな。
まして、今でさえ連絡を取ってないくらいだ。

「あいつ、週明けには行くって言ってたから、その前に何とか……
って何泣いてんだ！？」

「……あたし……ヒロに酷いことした」

「……」

分かってんならいいんだよ。

真尋もそれくらいじゃ怒らねえだろうし。

つか、あいつ自分の方が悪いとか思ってたそつだな。

でもま、それを俺から言つと拗ねるだろうから、芦野が言ってくれ
ると助かるんだけどよお。

「……」

「……」

コクリと頷く芦野。

アイコンタクトが通じるつてすげえな。

チカにや全然伝わらねえからな。

「ま、チカの方は任せとけ。お前は真尋頼んだぞ」

「でもっ……私……」

「細けえこたあいいんだよ。学校にあいつの女友達はお前しかいね
えんだから。寂しいことに。あいつホント友達いねえんだ。だから、
頼んだぞ。俺だってチカだってあいつとは仲良いけど、やっぱり女同
士がいに決まってるんだろ」

「……」

小さく頷くタマを確認し、俺はタマ家を去った。

* * * * *

「さて、問題はチカの野郎だ」

あいつ、変なところで影響されやすいからなあ。

どうせ変な丸めこまれ方したんだろうけど。

しょうがねえか。あいつ馬鹿だし。

電話でもかけてやるか。

あいつ、ホント馬鹿だから、発破かけるのはまったく問題なく上手
くいくだろうな。

「あ、チカ？ 俺。お前さ、今、禁真尋期間だろ？ ちょうどいい
から、俺貰うな？」

『あっ。』

うわー……
怒ってる怒ってる。

「いや、お前さ、タマから聞いてねえか？ 最近俺と真弘がよく連絡取ってるって。聞いているだろ。悪いなー。愛をはぐくんじゃって。まだ真尋にや言ってねえけど。別にいいよな。お前、どの女もいつもそこまで本気じゃねえだろ？」

『テメ×自分が何言ってるかわかってんだろうな。わかっててこの俺に喧嘩売ってんのか』

……おいおい……長年連れ添った連れ相手にそこまで怒るか？
ていうか、何で俺はこんな世話焼いてんだろ……

「っせーな。俺の勝手だろ。お前だっぴいまままで随分勝手にやってきたじゃねえか。それより、リュウって知ってるか？ あいつよお……」

『犬の話なんか今はどうでもいいんだよ』

「え？ 犬！？ あ……ああ……知ってたのな」

なんだ、リュウが犬つてのは知ってたのか……誰から聞いたんだよ……
俺でさえ最近真尋に聞いて腰抜かしたつてのに。

最初聞いた時にやどこのライバル登場かと思ってたら、何のことは

無い。

散々俺の心を乱した相手は、実家の犬だったってオチだ。

あまりにもあっけなさ過ぎて、思わず「リユウもつと粘れよ！」と
心中で怒鳴った。

「ま、いいや。とにかく『そこにいる』」

「は？ そこにいろって……お前俺がどこにいるか……切りやがっ
た」

まさか、ここまで来る気じゃねえよな。

あいつ、俺がどこにいるか知ってんのか……？

いや、そんなわけはねえよ。

そんなわけは ……。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

「……っあ……はあっ……はっ……なんでこんなことになってんだ
！？ またか！？ また俺はハメられたのか！」

街中を適当に歩いていればチカに会うだろう、と思ってブラブラして
いたはずだ。
後ろから黒塗りの車にクラクションを鳴らされた時から、嫌な予感
はしていた。

「よお、坊主」

その声をかけてきたのは、数日前に散々俺を追いまわして嬉しそう
に写メを取ったオヤジだった。

「げえっ！」

ダッシュで逃げれば「待てコラ！」と楽しそうな声が追い掛けてく
る。

周りの通行人は興味しんしんといった顔をしているものの、決して
助けようとしなない。

あの時と一緒だ。

ちくしょう、同情するなら助けろってんだよ！！

「まあ、落ちつけや」

「……はあっ……はあっ……」

せまい通路で黒服に前後を挟まれながら、俺はその後ろから颯爽と歩いてくるチカをボンヤリ眺めた。

「チ……ってえ！」

話しかけようとした瞬間、チカのグーが頬に入る。

「待て！ 馬鹿、落ちつけ！！ アホか！？ 口切れたぞ馬鹿！」

「おい、俺ら帰るぞ。ガキの乳くせえ遊びにや付き合ってらんねえんだよ。オヤジの言いつけじゃなかったら無視するよとこだけだよ」

「……」

「無視かよガキ！ 誰の為に動いたと思ってんだ！！ 礼ぐらい言うのが常識じゃねえのか！？」

シカトするチカにブチ切れながら常識を説くやくぞ。

その瞬間、あれ程いたギャラリーがあっという間に散って行った。

「うるせえ。さっさと帰れ糞が」

「おま……お前はホント命知らずだな馬鹿!!」

パンツと平手でチカの頭を思いつきり叩けば、やくざ共は何がおかしかったのか爆笑しながら「次はねえぞ」と帰って行った。

「……」

「……」

未だかつてこんなにキツイ沈黙があっただろうか。

なにゆえ俺がここまで苦勞を……って……面倒見がいいからなあ、俺。

まいったなあ。

「……お前、ヒーのこと好きなのかよ」

「え？ 俺？ あー……まあな。好きっちゃ好きかもな」

そついうと、何事か考え込みだす。

チカは本当に馬鹿だ。

最近、こいつが何も言わない時は情報を処理してる時なんだと気付いた。

いや、遅えだろ！　どんだけ遅えんだよ！
ようやくだ！　何年も連れ添ってるけど、ようやくだぞ！？
今まで相当シカトされてたじゃねえか、俺！
あれも全部情報処理してたのかよ！！
……い、いや、そりゃねえだろ。ねえよ。さすがに。
ねえよな……？

「たいちゅん、大福好きだよな」

「……あ？」

無言で差し出すぺちゃんこの大福。

「なんだよこれ」

「大福」

「漬れてんじゃねえかよ！　アンコ出過ぎだろ！　あ、温かい！！
お前これケツに敷いてただろ！？」

「ん」

「『ん』じゃねえよ！ 差し出すな！…！ 貰うけどよ！…」

何なんだこいつは。

美味しいな。潰れてるけど。

「食ったな」

「は？」

「食ったならヒーは諦める」

「え？ もう1回」

何？ 馬鹿？

「お前、大福で……それも潰れた大福でチャラにしようとしてんのかよ」

「駄目なのかよ」

「駄目だろ！？ アホか！ お前にとって真尋は大福レベルか！」

「……………」

だんまりだよ！

そこ考えるとこじゃねえだろ……………！？

）

鳴り響く携帯。

ディスプレイには「真尋」。

嫌な予感がしてメールを開けば、俺をストレスで禿げさせたいとは思えない文面が目飛び込んできた。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||

To たいちゅん

Sub (no title)

チカくんのどこが好きか分
かないんだけど。

END

|||||

おいおい……
どうすんだよ……
まずった。

あいつに「どこが好きなんだ」って聞いたのは俺だけ……

「頼むぜチカあ……揉めてる場合じゃねえよ……」

「俺だって揉めたくねえ」

「ああ、そうだよな。お前は俺が大好きだもんな」

「おう」

「ありがとう、でもそうじゃねえ。俺は真尋が好きだけど、妹と同じレベルだ。でもお前は違う。そうだろう？」

「……」

「だからなんで無言なんだよ!!!」

なんだよ……どうしたんだよ!?

あの時のあの情熱はどうした!

お前ら付き合ってもないのに倦怠期か!?

「……よし、分かった。お前、今日うち泊まれ。今から来い」

駄目だコイツ。

もう俺が躑け直すしかねえ。

第八章 暗雲06 (前書き)

T a i z o
S i d e

第八章 暗雲06

「「あー！ 赤髪のお兄ちゃんだあ！！」」

「ハモるな双子。気持ち悪い」

「「キヤハハ！ お兄ちゃん声でかい！ ウザイ！」」

「うるせえな！！ 悪口までハモるな！！ 散れ！ おい、ババア！ 今日、チカ泊まるからな！！」

奥に向かって怒鳴れば、肥えた女がドスドス足音を立てて出てきた。

「誰がババアだ糞ガキ！ あらチカくんいらっしやい。何も無いけどゆっくりして行きなさいね」

「っス」

こいつ普段挨拶なんてしないのに、初めて来た時に挨拶しなかったチカを拳骨でおもいつきり殴ったババアに対してビビってるらしい。やくざをアゴで使ったり喧嘩では鬼神のような振る舞いをするくせに、変なところでビビりだ。

「チカ！？ チカ来たの！？」

その声とともに奥から弟共がわらわらと出てくる。
チカはあつという間に囲まれて「お土産！ お土産！」とたかられていた。
チカは嬉しそうにニヤニヤしながら、カバンから飴玉を取り出して弟達に配る。

「お前、コンビニ寄ったと思ったらそんなの買ってやがったのか。ていうかお前ら、チカにたかるんじゃねえ！ いいか、お前ら。兄ちゃん達は今から大事な話をするから、2階に上がってくるんじゃねえぞ。……上がってきたらベランダから吊るす。マジだからな！」

「キヤー！ あはははは！ 吊るされるー！！」

「吊るされる！ 吊るされうるせえな！ 俺は別になんも面白えこと言ってるねえよ！！」

つとに騒がしいったらありやしねえ。

この家で一番静かなのは俺だな！

「行くぞチカ。こいつらに構ってたら日が暮れる」

舌打ちしながら2階に上がれば、チビ達は一応気を使ってついでにようとはしなかった。

つっても、2階には俺の部屋しかねえんだけどよ。

「ま、座れや」

ババア……部屋が片付いてる所を見ると、また勝手に入りやがったな。

「お前さ……何で真尋のこと追っかけまわしてた？ 俺らから……まあ、『俺ら』って言うのは花田なんだけどよ。俺らから見りゃお前の執着具合は、近年稀に見る珍しさだったわけだ。なのに、すぐどこが好きって言えないってのは不思議だなあ？」

「すぐ好きなところが思い浮かばないと好きじゃねえのかよ」

「あ？」

「どこが好きなんてわかんねえよ。全部好きなんだから」

「……おまっ」

「今までの女は好きだなんて思ったこともねえよ。そもそも付き合っただつもりもねえし。でも、ヒーは全部好きだから、どうしていいかわかんねえ。今までの女と同じように扱おうとすれば逃げるし、かと言ってほっとくとと拗ねるし」

「……」

「なんで好きかなんてわかんねえよ。公園で初めて会った時、良い

女だなんて思ったから興味持っただけだ」

「……………何で俺が照れてんだよ!!」

自分でも分かるくらい顔が熱い。

何で他人の告白を……………それも野郎の告白を聞いて照れにやならんだ!

「人間何人いるか知らねえけど、その数だけ色んな『好き』があるはずだろ。だから、どこが好きかなんて具体的に言えねえけど、一緒にいると『ああ、コイツのこういうトコが好きだな』って思うことがいっぱいあるんだよ。改めて聞かれてもパツと出ねえけど、しよっちゆうそんな気持ちになるのはアイツだけだ。だから、俺はあいつが好きなんだよ」

「……………それ……………本人に言ったか？」

「言っつてねえ」

「言えよ! 言っつてやれよ!」

「何でだよ」

「アホか! お前は類稀なるアホか! アホの坂田もビツクリするぐらいのアホか! 女はそういう言葉を欲しがるともんだろ! ！
そもそも言わなくて伝わるようなら言葉なんて発達しねえ!」

「……………」

チ力は「そう言うもんか？」って納得いかなそうな顔をしながら、首をかしげた。

「じゃあ、聞くけどよ。お前は真尋に『好きって言え』って言うって言わなくてもわかるでしょ」って言われたと思うんだよ」

「言えよ」

「お前がそれをやってんだよ！　そういうことだよ俺が言いたいの
は！...」

分かった。

もう分かった。

こいつらのすれ違いの原因は似た者同士だからだ。
絶対そうに違いない。

「たいぞー」

間延びした声に振り向けば、花田が立っていた。

その隣には目をキラキラさせたチビが立っていて鼻息荒くつつ立っている。

「兄ちゃん！　緑の兄ちゃん連れてきた！...」

「何でお前がここにいるんだよ」

「いや、お前の母ちゃんからメール来てさ。作戦会議っぽいから遊びに来てって」

「何でババアとテメエがメールしてんだよ!？」

「お前が母ちゃんを心配させるからだろ。チカもアドレス知ってるぞ」

「マジか!？」

「おう。たまにお前ン家の猫の写メが来る」

「マジかよ……!! なんだよそれ……!! めちゃくちゃ恥ずかしいじゃねえかよ……!!」

ふざけんなあのババア……!!

もしかして他にもメル友がいるんじゃないやねえだろうな!?

真尋!?! あいつも知ってるのか……!?!

いや、あいつはうちに来たことはないから……

「で、何の作戦会議?」

「え? ああ……こいつに女心を分かって貰おうとだな」

「あー……」

「まで、その前にそのチビ助！ お前は下に行け」

「えー！」

「『えー』じゃねえ。吊るすぞ」

そうやって睨めば、「ギャハハ」と笑って出ていった。
それをおかしそうに花田が眺める。

「分かるかなあ……靖親くんに」

「そこなんだよ。この男はそこんところが全然駄目なんだ。しかも真尋とコイツは似た者同士すぎて大変なんだ」

「『来るもの拒まず去る物追わず』？」

「そうそう。自分からも行かねえから進展無し、みたいな。まあ、今まではコイツが頑張ってたけど、ヘンテコリンな作戦で接触を絶つたもんだからこじれちまってな。今、どうやってそれを元に戻すかを考えてたところだ……ってこれ本当はお前が説明しなきゃならねえところだからな！？ 寝てんじゃねえよ！」

こいつ、暇になるとすーぐこれだ！

ほんと喧嘩するか寝るか走りか女と……まあいいか。

「なあ、吉良くん」

「……なんだよ」

「こいつが俺の苗字呼ぶ時はたいがい悪いことを思い付いた時だ。」

「イイ作戦を思い付いたんだ」

「……」

「ここは僕に任せてくれねえかな」

僕……って……マジで嫌な予感しかしねえんだけど……

第八章 暗雲06・5（前書き）

R e k i S i d e

第八章 暗雲06・5

普通そうな女の子。

第一印象はそんな感じ。

その普通そうな女の子はたいちゅんから話を聞く限り面倒くせえ女の子だった。

実際会ったら普通じゃないって分かったし。

俺だったら面倒だから必要以上に関わらない。

でもまあ、あのチカが惚れたってんだ。

こりゃ手を貸さない訳にはいかねえよなあ？

「あー楽しい」

霧島さん。

俺はたいちゅんやチカほど優しかねえぜ？

「ぜってえ優しくしてやんねえ」

携帯をいじりながら、あの普通そうで普通じゃない女の子が泣きわめく姿を思い浮かべる。

「あ、俺。なあ、最近害虫が入ってきてるって話どうなった？ あれ、俺に引き受けさせて欲しいんだけど。え？ ああ、まあ、ちよつと遊んでやるうかなと思ってさ。平気平気。捕まらない程度に動くから。……ああ、じゃあな」

通話を切って思わず笑みがこぼれる。

「あー楽しい」

韓国にいるらしい霧島さんが帰国するのは1週間後。それまでに全てを整えてお出迎えしてやる必要がある。

「おて、どこから手をつけようかなあ」

やっぱり今日は帰るって言って正解だった。これから忙しくなるなあ。

第八章 暗雲07

「『お土産は？』って言わないの？」

「……………ん？」

「タマなら『お土産は？』って聞くと思っただけけど」

「ああ……………」

「なんだ……………？」

「私が韓国行ってる間に何かあったんだろう……………
なんかめっちゃくちゃ覇気が無いんですけど……………」

「……………何かあった？」

「別に」

「お土産……………持って来たんだけど……………いる？」

「うん」

「……………はい」

「ありがとう」

「……………うん」

き、きつと……今日はむしの居所が悪いんだよね！
ははは……

「……あ、授業、始まるから行くわ」

「うん」

「……」

……はは。

* * * * *

「テメエこら真尋！！ お前はお世話になった先輩に土産の1つも
ねえのか……！」

「あるよ」

「ありがとうはいはいです」

「食べ物と……あと何かよく分からないキーホルダー。お菓子の方はいっぱいあるから、家族で食べて」

「悪いな、家族の分まで……って気持ち悪っ！なんだこのマスク
ツトは！俺がこんなのつけるとでも思ったのかよ!？」

放課後にやってきて言いたい放題のたいちゅん。
私は病欠ってことになってたから、あんま大声を出さないで欲しいのだけど……

「つけてるし」

「しょうがなくだよ！ つけないとお前泣くだろ」

「泣かないしね！」

「で？」

「え？」

「チカには？」

「……」

「お前なあ……分かりやすすぎんだよ！」

「そんなの初めて言われたよ」

「一応買っては来たけどさあ……
なんかさあ……」

「……お前来い！ タマも連れて一緒に来い！ 屋上だ」

「え、え……でも……今タマは「いいから」

タマ機嫌悪いんだけどなあ……」

「タマー……」

呼べば案の定無言でこつちを見る。

「あの……ちょっといい？」

「……いい？」

「じぶー……気まずい。」

「はあ……お前は……」

たいちゅんも何かを察したのか、呆れたようなため息を吐いた。

* * * * *

「話を始める前に、まずお前らの問題を解決しなきゃなんねえみた
いだな」

「……………」

「お前らなんでもめてんだよ」

「もめてる……………っていつか……………」

私、何もしてないと思うのだけど……………」

チラチラとタマを見るけどタマは絶対私の方を見ようとしない。

「タマ」

「……………」

「おい、無視すんじゃない。こっち向け」

「あたし……さあ……」

「……う、うん」

涙声でタマが話します。

「ヒロがあたしのことどう思ってるか知らないけど……あたしはヒロが大好きでさあ……」

「私だって好きだよ。私の好きなんていくら伝えたって、タマには全部伝わってないだろうなって思うけど」

「そんなのあたしだって一緒だよ……!」

「い、ごめん……」

「……つく……それで……チカっ……チカ先輩も好きでさあ……ヒロと一緒にいるチカ先輩が好きで……」

「……う、うん?」

「なのに2人はじれったいし……」

「い、ごめん……」

「あ、あたしっ……達のこと手伝ってくれたから……あたしも……手伝ってあげようと思って……うっ……くっ……」

「？」

な、なんだ……？

なんかよく分からないけど、嫌な予感が……

「『押して駄目なら引いてみる』って先輩に……言っ……てえ……ふう……つ……そしたら……せ、先輩……想像以上に演技上手いし……ヒロは腰ぬけだし……っ……」

「演技！？ ま、待って何のこと？」

「要するにだ」

ふかーいたため息を吐きながらたいちゅんが煙草に火をつける。
私は思いつきり頭をパーで叩いて煙草の箱ごと奪い、屋上のフェンスの向こう側へ投げた。

「あー！？ 馬鹿野郎！！ 買ったばかりだったんだぞ！！？」

「それで？」

「チツ……てめえろくな死に方しねえからな！！」

「いいから！ 何なの！？ 全然分からないんだけど！」

「……だから、最近チカがそっけなかったのは、お前を振り向かせ
る手段だったわけだ。タマが気を回して……つか、気を回し過ぎて
こんなことになってるわけだけど。それでお前はタマの想像以上に
傷つくし、腰抜けなもんだからノーリアクションどころか遠ざかる
うとするし、チカはチカで女心が分かってねえから何していいか分
かってねえし……って……なんで俺こんなお前らの世話焼いて
んだよ！」

じゃ……じゃあさ……つまりさ……タマは……その……

「なんで赤くなってるんだよ！」

「……だ、だって……！」

それって……つまり……私のことを思って……

「……た、タマ……？」

「じめんなさいい……」

タマはヒーンと情けない声を上げながら顔を隠そうともせず泣きだ
した。

たいちゅんは「ハーツ面倒くせつ」って言いながらクシャクシャに
なった出会い系のポケットティッシュを投げつけ、タマはそれを拾
って「セクハラあ」と文句を言いながらも鼻をかむ。

その時だった。

暴走族のような……っていつか本当にそれとしか思えない……って
いつかそんなバイクの爆音が響く。

「なんだあ？」

たいちゅんが不機嫌そうな顔で校庭を見降ろし、カッと目を見開い
た。

「花田の野郎……！ あいつ何一人で楽しそうなことしてんだ！！」

そう言うなりたいちゅんはダッシュで屋上を出て行く。
フェンス越しに校庭を見れば、ブレザーを着た緑頭がバイクで校庭
をブンブン走りまわっていた。

「花田くんって学校別だったんだ……」

地味に驚いていると、携帯に電話がかかってくる。
ディスプレイには「花田レキ」と書かれていた。

「…………は？」

登録した覚えがない花田くんの電話番号が表示されている。

「…………もしもし？」

『あ、俺。今、下にいるんだけど』

「ああ、う、ん…………屋上から見てる。今たいちゅんがそっち行った」

『マジか。あのさ、霧島さんも来てくれないかな？ ていうか霧島さんに会いに来たんだよね』

「え？ 何で？」

『いや、ちょっと用事…………あ、やべ。センサー来た。早くね！』

そう言っとブツツと電話を切ってしまった。

(とは言っても泣いてるタマを放って行くわけには…………)

タマはもうワンワン泣いてる訳ではないけれど、スンスン言いながら鼻をすすっている。

チラチラ見ているのに気付いたのか、タマが真っ赤な目をしたまま

拗ねたように「行ってくれば」と言った。
それが無性に可愛くて、私は思わず笑ってしまう。

「タマ」

「……」

「タマ、ありがとう。チキンの私がちょっと勇気出た。なんか、今までになく活発に動いてるもん。……タマ。ねえ、タマ。こっち向いて？」

そう言えば、観念したように私の方を向いて、ズズツと鼻をすすった。

「タマに会えてよかった。タマが優しくよかった。いつも一緒にいてくれてありがとう。タマのこと、大好きだからね？ また、アイス一緒に食べに行こう。じゃあ、申し訳ないけど、ちょっと行ってくる」

恥ずかしいからさっさと屋上を出た。

後ろから「ひーん」と聞こえてきて、不覚にも涙目になりながら階段を下りる羽目になった。

第八章 暗雲08

「ねえ！」

「ん？」

「『用事』ってヤツがすぐ済むと思って鞆置いて来ちゃったんだけどー！」

「マジか！ どんまい！」

私は花田くんのバイクの後ろに座っていた。

花田くんは「可哀想に」と同情しながらも、全然学校に戻る気はないようだ。

「どこ行くの！？」

「内緒」

さっきからこればかりだ。

しかもたいちゅんも来るのかと思ったら追いつちゃっし。

しかも「もういいんだ！ お前は手を出すな！ もういいんだ！！」とか訳わかんないこと叫んでたし。

(……………ていつか)

周りのブンブン友達が怖すぎるんですけど……
なんか自惚れとかではなく、確実に私のこと見てニヤニヤしてる……
絶対「ひゅ〜 カワイ子ちゃん」的な視線ではない。

(……嫌な予感しかしねえわよ……帰りたい……)

フツと涙目で笑って明後日の方向を見れば、その先にノブがいた。
あまりに懐かしすぎて忘れ……思いたすのに時間がかかり、ジツと
見つめていたらしい。
ニツと笑って手を振られ、ようやくそれがノブだと気付いた。

「あ！ ノブくん！」

「気付くの遅え」

そう言いながら爆笑し、スーッとすぐ横に来た。
何気なく後ろに乗ってる人を見れば、なんと後ろはシヨウだった。

「おお！ シヨウくんまで……！！！」

「おっせー！」

2人はフハツと笑いながら、「元気か？」とか「まだ真面目なのか？」とか訳のわからないことを言っていた。本名はどう考えても思いだせないけど、あだ名を忘れなかっただけまだましだろう。何より、知り合いが増えてちよつとだけ安心した。

「何してるの？ ていうか、何しに行くの？」

「聞えねえ！ もっと大きい声で！」

「何しにどこ行くのー！」

なんだこれ。

自分らがコミュニケーションもとれないくらいの爆音なら止めちまえ。

隣の家のおばあちゃんを思い出すわ。

「遊び！ お前も行くんだよ！ あ、霧島さん！」

「いいよ、お前でも！ 霧島でも真尋でも真尋ちゃんでも何でもいい！」

「いや、チカが怒るから！」

ええ？

あの人そこまでの権力者なわけ……？

「まあいいや。それでどこ行くのー!?!」

「……………」

2人はニヤツと笑うとスーツと離れながら、唇に人差し指をあてて「シーツ」と言う。

それつきり2人でボソボソと話してたまに笑い、二度とこちらには近寄って来なかった。

* * * * *

「……………」

ついたのは見覚えのあるクラブ。
前にタマと一緒に来て、酷く怖い思いをしたところだ。

「あの……………私こういう所はちょっと……………」

「大丈夫大丈夫。知り合いの店だから怖くないよ」

全然大丈夫じゃないんだけど……

「……あれ？ 他のブンブン友達は？」

さっきまで大量にいたブンブンはいつの間にかいなくなっていて、花田さんとシヨウとノブだけになっていた。

「ブンブン？ ああ、他のは走りに来ただけだから」

「へ？」

「今日は俺らの親交を深めようと思って。ホラ、こいつら霧島さんに酷いことしたでしょ？ 一応反省してんだよ。悪いけど付き合ってくれねえかな？」

「……わかった」

渋々そう言えば、花田くんはにっこり笑って「ありがとう」と言った。

(……って言うか全然良くないしね！ 何一つ良いことなんてないしね！)

「これ着て」

「なん……ああ、制服がね……」

「そそ。見つかるやバイから。俺のジャケットだからでかいだろ
うけど」

そう言つて花田くんは笑い、「霧島さん悪い子だなあ」と楽しそう
に言う。

店の中は、相変わらず薄暗くて音楽がうるさかった。

今日はタマがないからカウンターに座る。

野郎共は口々に「レッドアイ」だの「コークハイ」だのと言って、
お陰で私は物凄くソワソワするはめになった。

「……」

そもそも私、絶対こういう場所向いてないっしょ……

だって早くも浮いてる……

他の2人も絶対「霧島さん、あの時はごめんね」なんて思つてない
よ……

だって向こうで踊ってるし。

花田くんは花田くんでバーテンのお兄さんと喋つてて私なんて眼中
にないし。

私、ポツチじゃん。

「……」

やっぱり帰ろうかな……
仕事……じゃなくてバイトがとか言えば帰れるかな。
よし、帰ろう。
こんなところ、向いてないって。

「あのさ」

「あー!!」

突如大声を出す花田くん。

音楽の方が大きいのに、思わずびくりと震えた。

「な、何!？」

「財布忘れた……」

情けない顔でズボンをパンパン叩く花田くん。

その瞬間、バーテンのお兄さんが物凄い怖い顔になって「アア？」
と花田くんを睨む。

花田くんは困ったように笑いながら「大丈夫、払うよ」と言つと私
の方を見て首をかしげた。

「ごめん、ちょっと金取って来るから待っててくれねえかな？」

「ええ！？ いいよ！ 私出す！」

こんな所においてけぼりになるくらいなら、私が払った方がよっぽどマシだ。

それに飲み代なんて微々たる物だし。

問題は相手が未成年で飲酒してるってところなんだけど……
飲み代でしたらいいよヤバイ気がしてきた……

「いや、これ以上恥ずかしい真似出来ないし」

そう言って照れたように笑い「すぐ戻るから」と言って財布を掴むと小走りで店を出ていった。

「ああ……」

サツと店内を見渡せばシヨウとノブは丁度トイレに入っていく所で、私は完璧に1人になってしまった。

「……」

「キミ……霧島ちゃんって言うんだっけ？」

「えー！？ あ、ハイ……」

バーテンのお兄さんが人のよさそうな笑みを浮かべながら、私の方をジッと見つめる。

「……あ、やっぱり。前、来てたよな？」

「え？」

「見覚えある気がしてたんだ。珠美と一緒に来てなかったか？」

「あ……ハイ……よく覚えてますね……」

「客の顔覚えるのも仕事だから」

そう言っておかしそうに笑うと「学生だったんだなあ」とか「最近のガキは悪い子だ」と言っただけで、忍び笑いを洩らす。

「霧島ちゃんは真面目そうだけど、なんであいつらとつるんどの？」

「……それが私にもよく分からなくて……チカくん達と一緒にいらいつの間にか仲良くなってたっていうか……」

「チカくん？ あゝ霧島ちゃんって『ヒー』か！」

「は？」

「靖親の野郎がいつも泰造と話してんだよ。珍しく女の話してると思ったら、キミのことだったのね」

バーテンのお兄さんは「そうかそうか」と人のよさそうな笑みを浮かべながら何かのスイッチをいじった。

その瞬間、店の中央のライトを残して全てのライトが消え、あれだけうるさかった音楽もなり止んだ。

店中の視線がバーテンの方へ向く。

「……」

「おい。ユキ」

店の端っ子に座っていた男が睨むようにこちらを見た。

「こいつ、靖親の女だって」

何が起こってるか分からない割に、私の本能が危機を感じとったの

かサツと血の気が引く。

「あ…… ああ…… 八八…… 女じゃないんですけど…… 友達っていつか……」

私は素早く財布からお金を取り出すと、カウンターに置いて営業スマイルで小さく呟いた。

「帰ります。申し訳ないんですけど、花田くん達来たら伝えてもらえませんか？」

「いや、その必要はないよ。もう今日は来ないから」

そう言ってガッツリ手を掴まれた瞬間、馬鹿な私はようやくハメラれたんだと気付いた。

第八章 暗雲09

「てつきりチカくんのお友達なんだと思ってたんですけど」

「俺は誰がオトモダチとかないんだ。だって客を差別するわけにも
いかないしな。今日はたまたまユキ達 came 来たから、ユキ達の相手
してやってるだけ」

「私の相手はしなくていいんですか。無事に帰らせてくれるとか」

「アンタとユキじゃ『常連度』が違うよ」

バーテンはアハハと笑いながら「もうちょい通ってくれるなら考える」と言った。

「二度と来ませんよ」

「だろうなあ」

落ちついていられるのは誰も見えないから。

というのも、店の中央におかれた椅子にしばらくつけられ、ライトを私に向かって照らされているものだから逆光で何も見えないのだ。

(花田くん……私のこと嫌いだったんだろっか……)

と言っても、別に嫌われる程のことをした覚えはないけど。だってそんな会ったことないし。

(……………なんでこんなことになってるんだろう……………)

あまり深く考えると、恐怖がこみ上げてくる。だから考えないようにしないと……………

「霧島ちゃん。携帯」

「……………え？」

「片手、自由にしてやるから、靖親に『助けて』って言うていいよ。常連さんも大事だけど、新たな顧客も逃したくないしな。俺からのサービス」

そう言っただけで憎らしい程すがすがしい頬笑みを浮かべ、宣言通り片手をほどくと携帯を握らせてくれた。

「辛くなったらいつでもチカくん呼びな」

そのままフツと笑うと、バーテンはカウンターの向こう側でグラス拭きを始め、こちらには無関心といった顔で1人音楽を聞き始めた。

「……」

バーテンを睨みつけていると目の前に影が落ちる。

慌ててそちらを見れば、「ユキ」と呼ばれた男が目の前に立っていた。

「あんたがバカチカの女だって？」

「違います」

「あいつも趣味変わったなあ」

そう言いながら私の眼鏡とヘアゴムを取り「お、マシになったじゃん」と呟いた。

「なんか貧乳だし、あんま楽しめそうにねえなあ？」

そう言って心底残念そうな顔をした瞬間、今度こそ本気で血の気が引いた。

予想してなかった訳ではない。

ただ、あまりにも非現実的すぎて、身の周りが安全過ぎて「まさかこんなことは起こらないだろう」とたかをくくっていた。

だって私の最大の事件は「カッターで切りつけられる」だもん。

いや、それも結構な事件だけど、まさかこんなふうな身の危険を感じるなんて……

「……」

無意識に携帯を握りしめ、ハッと気付いた。

ちらりと見たバーテンは相変わらずこちらに興味がないようだ。

「……呼べば？」

ユキはニヤニヤ笑いながら言う。

こいつらの狙いは、チカくんということか。

混乱して回らなくなった頭がようやく動き出す。

私をダシにしてこんな事態になっているらしいこと、花田くんが裏切ったこと、この大人数ではいくら強いチカくんでも無理かもしれないこと。

そして私は、チカくんが傷つくところは見たくない。

今まで散々逃げてきたけど、今は逃げてはいけけない時なんじゃないだろうか。

こういうやり方を間違ってるって思う人もいるかもしれないけど、私はまともに恋愛をした経験がないから、大切な人を守るときに何をするのが最善なのかわからない。

だから、私は自分が相手にしてあげたいことをしたい。
それは自分本位のこと、もしかしたら相手は迷惑かもしれない。
それでも、私は私の大切な人を傷つけない。

だから、私がすべきことは一つだ。

「サービスなんていらぬ」

私は思いっきりバーテンに向かって携帯を投げる。
携帯はカウンターの奥にあるシンクの中に飛び込み、大きな音をたてた。

バーテンが驚いたように携帯と私を交互に見て、ニヤリと笑う。

「今日はもう閉店だな。ユキ。シャッター下ろしてくるから、後は好きにやれ」

そう言って出口の方へ向かう。

ユキは私を見てニヤニヤしたまま、片手を上げた。

「気の強え女」

そう言つてこの状況が嘘みたいに優しく私の頭を撫でる。

「お前の顔がパンパンに腫れた写メを送つたらどうなると思つ？」

「……」

顔にガツンと衝撃が走り、一瞬遅れて激痛が走る。

パーではなくグーで。

しかも指輪をつけたまま殴られた。

「手加減しすぎた」

ユキは困つたように私のアゴを掴んで殴つた所の様子を見ている。
お望み通りの傷が出来なかつたらしい。

「女はあんま殴りたくないんだけどなあ……誰かやりたい奴いる？」

私は「じゃあ、俺やる」なんて言葉が飛ぶんだと思つていた。
でも、周りをよく見ればみんな微妙そうな表情を浮かべている。

「ユキ、やりすぎ」

「あ？」

その一言で話は終わったらしい。

このユキとやらが一番偉いんだということはなんとなく分かった。ただ殴られるだけならまだ我慢できる。

最近のやんちゃな高校生はもっと酷いことするんだと思ってたけど、意外とそうじゃないのかもしれない。

大人の方がもっと酷いことを平気でやるもの。

「まいったな。ビビリが多くないか？」

そう言いながら私をビンタする。

ジワツと涙が浮かび、それがこぼれないよう必死に我慢した。何度も何度も叩かれ、だんだん耳鳴りがしてくる。

相変わらず周りは困ったような顔をする奴と、面白そうに見てる奴と半々くらいだ。

「……あんだ……霧島ちゃんだっけ？ マジで我慢強いね？」

「そりゃどうも」

「アハハ」

ユキは嬉しそうに笑いながら腕を組み、携帯を取り出してどこかに電話をかけ始めた。

「いいなあ。それで自分の男守る為にこんなんやってんだろ？ 我慢強くて献身的で……ヤマトナデシコ？ いいなあ……靖親の野郎はいつも美味しいとこ持ってくんだからよ。ずりいなあ」

ハーツとため息を吐きながら顔をしかめ、「出ねえし」と言って携帯を切る。

「なあ、霧島ちゃん俺の女にならねえ？」

「ならない」

「即答しないで、ちよつとは考えてよ。ま、こんだけ殴つといてあれだけどき。俺、犬みたいに尽くす女好きなんだ。霧島ちゃんみたいな子だったら、ぜってえ可愛がるんだけどな」

「ならない」

「フフフ……燃えるねえ」

ユキは再びどこかに携帯をかける。

今度は相手がすぐに出たのか、「おっ」と小さく声を上げた。

「あれ？ 誰だお前。これお前の番号じゃないだろ。俺？ 俺が誰かなんてどうでもいいんだよ。持ち主に変われ」

電話の相手はこの返答が気に入らなかつたらしく（私だつて気に入らないけど）、声が漏れるほど怒鳴っていた。

「……あんま俺のこと怒らすと、後悔するハメになると思うよ？
……いやいや、マジで。絶対後悔するから」

こちらを見ながらユキはニヤツと笑う。

「まあ、ちょっと待ってって。ていうかマジでバカチカに変われ。お前タイゾーだろ？」

聞きなれた名前が出てきて、私は一瞬にして頭が真っ白になった。迷惑をかけまいと思っていたのに、こいつらが電話番号を知っているなんて思いもしなかった……ていうか、普通敵同士（？）だったら知らないもんじゃないの……！？

「ほら、霧島ちゃん。かけてやったから助け求めな？」

意地悪そうな笑みを浮かべながらわざと電話口でそう言つと、ユキ

は私に携帯を差し出す。

私があつた一言でも声を発すれば、電話の向こうにいる男達はユキが嘘を言っていないと知ることになるだろう。

『テメエどこでその名前を知ったか知らねえけどな、そんな安い挑発に俺がひっかかるわけねえだろ！ 馬鹿か！！』

たいちゅんのいつも通りの声が聞こえ、こんな時なのにおかしくて笑いそうになった。

(ていうか……何でたいちゅんってばチカくんの電話取ってんの)

秘書かお前は。

確かこの間は代弁もしてた気が……もしかしてチカくんが人付き合い苦手なのってたいちゅんのせいじゃあるまいな。

「ほら、早く言えって」

ユキがパチパチと携帯で私の頬を軽く叩く。

私は視線だけ上にやってユキを見上げると、薄っすら笑って舌を出した。

「……上等」

笑みを濃くしてユキが私の座ってる椅子を思いつき蹴る。
私は椅子ごと転び、なんだか凄く恰好悪いことになっていたけど、
カウンターパンチをくれてやったかのようなスツキリ具合に、声を
押し殺して笑うハメになった。
ユキが未だに喋り続けるたいちゅんを無視して携帯を切ったのを見
計らい、鼻歌を歌う。

「
」

「何歌ってんの」

「
」

無視して歌い続けると、ヤンキー座りのまま私に近づいた。

「……お前、ホント良い女だなあ」

浮かれていたんだと思う。

ていうか、絶対浮かれていた。

憎い相手に一発くれてやったと思ってたけど、向こうからすりゃ蚊
が刺したくらいどうでもいいことだったに違いない。

「……！」

私は床に転がって動けないまま、ゆっくり近づいてきたユキにキスされていた。

第八章 暗雲10

「俺と付き合えって。可愛がってやるから」

「……」

き……き……き……

「……おい。聞いている？」

え？ 今……私……

「聞いてねえだろ？ 無視すんな」

私……もしかしてコイツに……

「……なんでそこで泣くんだよ。何か罪悪感がすげえからやめろ」

呆れたように言うユキ。

これは絶対悪いなんて思っていない顔だ。

これっぽっちも思っていないに違いない笑顔のまま、「ん？」「ん？」と言いつつ私を見降ろしている。

「……………」

私だって一応女ですもの。

やっぱり初めては好きな人……………っていうかチカさんと……………とか思っ
……………思っ……………

「つぶ……………つぶ！」

「ええ？ マジ泣き？ 何で？」

馬鹿じゃないの!?

ほんと馬鹿じゃないの!?

お前は私の小さな野望を一瞬にして奪ったんだぞ……………!……!
許さない……………! 絶対に許さない!!

「あれ、もしかして初めて？ うっそだあ……………靖親の女でしょ？
普段これより凄いのやってんじゃねえの？ これくらいで泣くなよ。
それともバカチ力だけとか夢見てるわけ？」

「ふえっ……………っうう……………」

「……………マジで？ まさか別人？」

最悪！
マジ最悪！！ 信じらんない！！
声を出して泣くのは悔しい……………！ でも止まらない……………！！

「あれえ……………？ ねえナオ。こいつでいいんだよね？」

ナオと呼ばれた男は「え？ わ、わかんねえ」と挙動不審にどもる。
にわかにザワザワとしたし、微妙な空気になってきた丁度その時だった。

「！？」

爆音とともに店の入り口が砂煙を上げ、「ンだこらあ！！」と怒声が飛ぶ。
なんとか体をひねって入口の方を見れば、階段から漫画のように人がバラバラ転げ落ちていくところだった。

「……………え？」

もうもつと立ち上る砂煙。
店の入口からはひしゃげたシャッターと車のバンパーらしき物が見える。

(車が突っ込んだ？ 事故……？)

それにしてはさっきの「んだこらぁー！」がひっかか……。

「うそ……」

階段から男達を突き落とした犯人は、砂煙にむせることなくゆっくり階段を下りてきた。

「ったく。何やってんだお前は」

「……なんで、ここに……」

ユキがジッと砂煙の向こう側を睨みつけ、時折イラついたようにピクリと顔を引きつらせる。

「……………龍」

龍は一言も発さずにユキの前に立ち、胸倉をつかんで引き寄せると同時に頭突きした。

「つて……………！」

「やんちゃ過ぎねえか？ 糞ガキ。お転婆も程ほどにしとけ？」

「え？ ちょっと……………ホント何でここにいるの？」

龍は答えない。

それどころか私の方を見ようともしない。

ひたすらユキをにらみつけ、にらまれているユキは「うつつ」「と唸って顔をしかめている。

「てめえ……………」

反撃に出ようとユキが動いたまさにその瞬間だった。

龍は真顔のまま「八工を追い払った」ぐらいのノリでユキのアゴに拳を叩きこみ、ユキをあつという間に床に沈めてしまう。それを見てにわかに周りが騒ぎだしたものの、不思議とこちらに近づいてこようとはしなかった。

「……………」

「ひっ……………！」

私は被害者のはずなのに、龍に射殺されそうなくらい睨まれ、今にもちびりそうな程縮みあがる。

「り……………龍、これは……………その……………私のせいじゃなくって……………ていうかそれは見れば分かると思うんだけどわあ!？」

グイッと椅子を持ち上げられて元の位置に。どこから取り出したのかナイフを取り出すと拘束を解いてくれた。

「……………ありがとう……………あの「行くぞ」

有無を言わず腕を引っ張られる。

「龍っ……………痛い……………!?!」

「……………」

不機嫌そうな顔で振り向いた龍を見た瞬間、数秒前の龍に対して抗議した自分をポッコボコに殴りたいくらい後悔した。

「なんでもウウツ……………!？」

俵担ぎにされて余計に別の場所が痛くなる。
でも、もはや抗議できる雰囲気ではなかった。
周りもサーツと道をあけ、誰も近寄ろうとしない。

店の入り口を出ようとした瞬間、確かに男が「龍さん？」と呟いた。

* * * * *
* * * * *
* * * * *

「……………」

「……………」

車内は痛いくらいの沈黙。

いつまでこの気まずい沈黙が続くのだろうと思われた時、龍の携帯が鳴った。

「……………」

普段携帯を使う時は路肩に車を止めるのに、今日の龍は止めないまま使っている。

(出たのに名乗らないし……………)

「次はねえからな」

不機嫌そうな声。

たった一言呟いて、龍は電源を落とした。

「……………」

「……………」

再び沈黙が落ちる。

(どっしりよづ……なんか……)

「真尋」

「はい」

「お前、あのガキのこと好きなのか？」

「……え？」

「……」

あの……ガキ……？

というのは……ち、チカくんのこと？

「どうなんだ」

「……」

……好きっていうか。

丁度それが分からなくて悩んでるといっか。

「チッ」

舌打ちにビクリと震え、会話が終了した。

(触らぬ神に祟りなし……)

もう駄目だ。

辛すぎる。

なんか体も痛くなってきたし。

寝よう。寝たふりをしよう。

「真尋」

「はい」

「俺はお前の学生時代を潰して申し訳なく思ってる」

「……え？ そんなこと」「いいから聞け」

龍はイラついた雰囲気隠そうともせず、煙草を取り出して火をつけた。

「お前見てると『俺のしたことは本当に良かったのか』とか『そこらの女が10代の時に経験するであろう楽しみをほとんど味わせずに来ちまったな』とか色々後悔することもある。だから、せめてまともな大人になるように調教してきたつもりだ」

(調教って……)

「お前の親御さんからも頼まれてるし、お前のことは俺の妹より大事にしてる。別に頼まれたからってわけじゃねえけど」

それは思った。

龍は実の妹が私に害をなそうものなら、全力ビンタもいとわないう程良くしてくれている。

怖いけど、本当にいい兄貴だ。

「……でも……大事にしすぎたかもな……」

弱々しい声に思わず顔を上げれば、今にも泣き出しそうな顔の龍。びっくりしすぎて、思わず言葉を失った。

「お前が無事でよかった ……」

声を大に「全然無事じゃないよ!」「顔面ボコボコだよ!」とか言いたいことは沢山あったのに、口をわなわたと震わせる龍から目が離せなくて何も言えない。

「……なんで私を大事にしてくれるの?」

怖くてずっと聞けなかった質問。

「……」

今なら応えてくれる気がして、聞いてみる。
返答が返ってきたのは、あまりに沈黙が長引いて、聞いたのを後悔し始めた頃だった。

「俺がお前の実の兄貴で、お前のが好きだからに決まってんだろ」

「……………え？　ちょっと待「あ、そっだ」

爆弾発言をした自覚がないのか、龍はさっきのウルウルは何だったのかという程あっけなく話題を切り替える。

「お前、事の顛末が知らされねエの嫌いだよな。何で俺があそこにいたかだろ？」

「え？ いや、それも気になるんだけど、今は別の部分が気になっ
「あいつがな、珍しく電話してきたんだ。あいつってのはあの店の
オーナーな」

電話？

ていつか無視？

「俺がガキの頃、お転婆だったのは知ってるだろ？」

「家族ぐるみの付き合いだから知ってるどころの騒ぎじゃないし、
お転婆で済むレベルでもないけどね。でも今はそんなことじゃなく
て「でな」

無視を貫き通す気らしい。

「その頃の連れに妙なのがいてな。それがあの店のオーナーなんだ
が」

「え！？ そうなの！？ 店に突っ込んだまま放置してきたからど
うしようかと……いや、でも知り合いだからって店壊して良いって
わけじゃないと思うけど……」

「あいつが電話してきた時はさすがに肝が冷えた……つか、心臓が
止まるかと思った」

「龍がそんな繊細な心臓を持つてたなんて……」

「でよ、『ガキに頼まれて女の子店に閉じ込めたけど、龍の知り合いに似てる』っつーんだよ。あの糞野郎」

「頼まれた……？ 花田くんのこと？」

「花田？ 花田っつーのか。あのガキは」

「ち、違うよ！ あれはユキだって……！ 花田は別の人で、あそこに来てくれた人なんだけど……」

「……なるほどな。そういうことが」

底冷えのするような声で説明されたのは、やっぱり花田くんの裏切りとしか思えない話だった。

第八章 暗雲11 (前書き)

T a i z o
S i d e

第八章 暗雲 1 1

「で？」

「いや……だから霧島ちゃんのピンチに颯爽と現れるチカみたいなの」

「で？」

「丁度あいつらも叩かなきゃいけないって話だったし、丁度いいかなと」

「ほお？」

名前も忘れたけどユキとか言う馬鹿野郎から電話がかかってきたのは、チカとのんびり話していた時だった。

非通知で何度も何度もかけてくるから誰かと思えば、いつもシマ荒らしばつかしてくる糞憎たらしい男。

何でチカの番号知ってんだとか、電話してくるたあ良い度胸だとか色々言った気がする。

チカの野郎がスーツと寄ってきて携帯に耳をつける。

やたら可愛らしいしぐさにイラツとしつつ「そんなことやっても聞こえるのは俺だけだろうに」と思った時だった。

糞憎たらしい男の声で「霧島ちゃん」という単語が聞こえた。

「お前ら、真尋が危ないとは思わなかったのかよ」

「いや？ 思ったけど。危ない目にあえば良いじゃん。あんな面倒

くせえ女。丁度いいお灸になつたる」

「……なるほどな」

阿呆の花田の言い訳を聞きつつ、ため息を吐いた。

ユキは真尋に会ったことがない。だから嘘だつて思った。

まあ、名前はどっかからか入手したんだろうよ。チカが腑抜けになつてるのは有名な話しだしな。

分かつてたのに、チカは俺の携帯を取ると誰かに電話をしはじめた。短く「俺」とか「聞きてえことがあんだけど」とか言つてたかと思つと、今まで聞いたことも無いくらいでかい声で「ブツ殺すぞコラ！」と怒鳴り、そのままポカンとしてる俺を放つてパツと外に飛び出して行く。

何事かと思つて地面に叩きつけられた携帯を見れば、携帯の着信履歴から花田にかけたことが分かつた。

大慌てで花田に電話をかけ直し、言われたとおりいつもの店に行つたらシャッターがひしゃげていて、店の中に入ろうとした瞬間凄い勢いで飛び出してきたチカに弾き飛ばされて尻餅をつく。

そして俺らの到着からしばらく送られてやってきた花田に殴りかかつて現在……といった感じだ。

俺が止めるまでひたすら殴られた花田達は、最初こそ抵抗していたものの次第に動かなくなつて、ヤバイと思つた俺が後ろからチカを殴り飛ばして縛り上げた。

「花田よお……お前の顔面がそれ以上変形しねえうちに言うことがあるんじゃないか？ チカの馬鹿野郎は縛つたとはいえ、すぐ抜け出せるレベルだからな？」

「言つこと？ あるだろ。山盛りだよ」

「聞いてやるよ」

「靖親も霧島も大馬鹿野郎」

「……ほお？ 否定はしねえ。馬鹿だもんな」

「だろ？」

「でもな……やっていいことと悪いことがあんだよ」

「お前いつからそんなイイ子ちゃんになったんだ？」

「いつからだろうな。真尋と会つてからじゃねえか？」

「……ふーん。ま、別に俺は霧島さんが嫌いじゃないんだよ。そこは勘違いしないでほしいんだけど、ただそれ以上にチカが好きなかっけ。2人を見ているとスゲエまどろっこしい訳だ。で、イラつくとなりゃ、チカよりは好き度が低い霧島ちゃんにちよつと痛い目みてもらう方がいいだろ？」

「真尋はそういう女じゃねえんだよ。見て分かるだろ」

「……なんか、お前も靖親も『真尋』ばっかでムカつく」

「あ？」

何言つてんだコイツ。

やきもちか。
やきもちやきの女か。

「お前、『任せる』みたいなこと言ったよな？ それでこれか？
真尋は今どこにいるんだよ」

「しらね」

「テメエあんま調子乗って……」

その時、ポッケの中の携帯が震えた。
ディスプレイを見れば「真尋」の2文字。

「あ、真尋だ」

あいつ！

この俺様がありえないくらい電話かけたのに、ちっとも出ねえとか
思ってたら！

テメエのタイミングでかけてくるたあ、イイ度胸してんじゃねえか。

「なんでたいちゅんにかけてくるんだよ」

今まで地面に転がって黙ってたチ力が、物凄く不機嫌そうな声を出す。

ゆるく縛って大人しくしてるところを見ると、花田達のことはいよいよだ。

恐らく、実行犯 …… もといユキ達の行方でも考えてるんだろう。

「知るか ……おい真尋か？」

『たいちゅん』

「『たいちゅん』じゃねえよ。お前今どこにいるんだ？」

『チカくんの携帯にかけたのに出なかった』

「あ？ チカの携帯？ かかってきてねえぞ」

『かけたもん』

チカの方ををチラッと見れば、一瞬何かを考えるそぶりをして縛られた手で器用にポッケをあさる。

人差し指と親指つままれて出てきた携帯は、見事に粉碎していた。

「……………あー携帯コナゴナになってるわ」

『は！？ なんで？』

「お前が心配させるからだろ」

『え？ よく分かん……………』

「……」

『……』

沈黙が落ちる。

まあ、わかっているようだな。

「あのよー」

『……うん』

「お前……大丈夫だったか？」

『……うん』

「ごめんな……？　なんか、俺らの連れがやったみたいで……」

『あ、うん……えっと……大丈夫。別に怒ってないし。怖かったけど、何も無かったし。あのね、龍に聞いた。なんか、バーテンの人が龍の知り合いだったみたいで。あの……龍が助けにきてくれて……』

「あー……そうだったのか」

足に軽い衝撃を感じて足元を見れば、チ力が「変われ」と一言呟いた。

「あ、ちょっと待て」

『ん？』

「いや、今ちょっと……」

『チカくんいるの？』

「おう」

『……代われる？』

「……おう」

スツと寝っ転がってるチカの耳の下に携帯を差し込み、花田達を連れて店の端へ移動した。

チカは何事かボソボソ話して、時折「おう」とか「ああ」とか言っている。

そのうち見たことないくらい優しい目になって「そうか」と言いながら携帯にすり寄るようにしてため息を吐いた。

「……花田よ」

「ん？」

「あれ見てもお前は真尋をイジメようと思っのか？」

「あれ見たら余計にだろ。なんだよあのだらしない顔。霧島さんも意地張つてねえで早く「そうじゃねえんだ。そんなんじゃないよ真尋は」

花田が花田なりに2人をくつつけようとしたのは理解した。でも、あいつは……真尋は人類史上、最も臆病な人間と言っても過言ではないくらい臆病だ。

大人の癖にすっかりしてねえし。いや、してるけど全然駄目なんだ。誰かが助けてやんねえと全然駄目なくせに、必死に自分で頑張ろうとしてるような女だ。

しかも、それがうまく言ってるかどうかは別って言うのがまた悲しいとこで。

きつとあまりにビビリすぎて、今まで自分を脅かす全てのものから逃げて逃げて逃げまくってたに違いない。

実のところ、野良猫の方がよっぽど早く懐くだろう。

懐いたと見せかけて噛みついてくるような女だから、ここはいつちよ周围が手を貸してチ力が頑張らないと落ちない。

つってもチカもチカで自分から動くような奴じゃないからこんなもめてるわけで……

「……まあ、確かにスゲー面倒くせえ女だわ」

「だろ？」

「でもなあ……なんでか手を出しちまうんだよなあ、これが」

「……よく分かん」

「分かったらお終いだ。最後まで巻き込まれるぞ。糞面倒臭えぞ。あいつの放っておけなさは、例え母性本能とやらが全くない奴でも何故か手を貸したくなるくらいだからな。ある種、才能だよアレは」

「だろっな」

幸せそうなチカを見つつ、「そっぴやアイツがこんな風に笑うの久しぶりに見たな」なんてボンヤリ考えていた。

第九章 臆病者と影01

「チカくん……あのさ、今回のことで気付いたんだけど……ていうか、ホントはだいぶ前から気付いてたんだけど、その……途中でよく分からなくなったり……でも、あの……なんか、さあ……あの……い、今時間大丈夫？」

『ああ』

「あのー……えー……こ、こんな時に言うのもホント空気読めないんだけど……」

『おっ』

「私……チカくんのこと……好き、なんだけど……」

『そうか』

電話の向こうで、チカくんが笑ったのが分かった。
小さくため息が聞こえる。

『じゃあ、付き合ってくれねえかな』

「……………」

第九章 臆病者と影02

「はあ！？ 付き合ってるだあ！？ いつだよ！ いつの間にそんなことになってたんだお前は！！」

「酷い……！ あたしそんなの知らなかった！！」

「だ、だから……あの時、電話代わってって言ったじゃん……？ その、時にね……」

私は今、タマとたいちゅんに詰め寄られている。
隣に座るチカくんはボーッと窓の外を眺めて、我関せずだ。

「じゃあお前から言ったのか！ ビビリのお前が！？ ていうか、タイミングおかしくねえか！？ ていうかお前、顔が凄いことになっつてんぞ……いや、赤くなってるのかもんだけど、主にアザ的な意味で」

「……」

なんとなく「顔、赤くなってるだろうなあ」とは思ってたけど、案の定らしい。

アザはいい。だけど赤いのは見逃してくれないだろうか。

「え？ コラ。言えよ。理由と経緯を言え！ 今、ここで！」

「あたしも聞きたい」

タマが珍しくたいちゅん側に立って腕組みをしている。
まるで女帝のようだ。

「だ、だってさあ……みんなに協力してもらって気付いて……それで勇気も貰ったって言うか……なんか……それで私が頑張らないのは失礼と言うかさあ……私も大人だから、頼ってばかりじゃなくて勇気出すところは出さないと……あの、今まで好きになっただ人は……」

「お前、人を好きになったことがあったのか……!!」

「ちょっと聞いて!!!!」

「……わ、わかったよ」

「……そ、それで、ね？ その……今までの人は『あー好きだなあ』って思うだけで幸せで……でも、チカくんは違って……絶対他の女に持って行かれないというか……一緒にいたいというか……とにかく、恥をかき捨てでも自分が頑張らなくちゃって思ったって言うか……その……」

「真尋ちゃん」

タマが「真尋ちゃん」なんて意地悪そうに言いながら、ニヤニヤし

て私の頭を撫でる。

「そういうのが『本気の好き』なんじゃないの？」

「……かなあ」

「くっそ……！ ムカつくんだよお前ら！ タマも彼氏いて真尋もいて……俺はどーすりゃいいんだよ！！」

「あ、真下くんも彼女いる」

「うっそー！ 真下が！？ あたし聞いてない！！」

「誰だ真下って」

そうそう。

あの日、車の中でひたすら龍に「恋とはなんぞや」と説かれ続け、今まで協力してくれた人に失礼にならないよう、また私が決して後悔しないよう動くべきだと言われた。

本当にそうだと思う。

なんで龍がそんな事情まで事細かに把握してるのかは物凄く疑問なのだけど……

（あ、そう言えば『実の兄』ってなんだっただらう……色々衝撃的すぎて忘れてた……）

まあ、そんなこんなでモヤモヤモヤしてる最中、真下くんからデコメで「彼女できたよーう！」となんと脱力系のムカツクデコメールが来たのだ。

きつと人生で初めて作ったに違いないデコメールはいびつで、ハートの代わりにリボンをつけた骸骨がニコツとして、取り合えず浮かれてるんだなというのは全力で伝わってくる異常さ。

頭ぶつけたのかなこの子は、と置いていたら本当にできたらしくて（例の書記の子だ）直後にかかってきた電話ではテンション高く鼻息も荒くマシンガンのように自分がどうやって告白して、相手がどういう反応をしたのかを事細かに語っていた。

（思えば、真下くんの後押しされたのかもしれない……）

やるじゃん。真下。

「で？」

「え？」

「人生初彼氏はどんな感じ？」

「ええ〜？」

「やめる！！！！ 幸せそうな顔すんな！ 独り身の俺が辛すぎる！
！ チ力！ テメエも笑ってんじゃねえ！！！」

「俺はゆっくりヒーに歩み寄ることにしたから」

「……え？」

「猫可愛がりって知ってるか？」

「おい、チカ。それは真尋が懐いたと思ったら離れてく野良猫みたいな女だから、焦らずゆっくり歩み寄って俺色に染めてやるって宣言か？」

「……」

2人の発言に「2人とも、なんか色々違うんでないかい？」と思っただら、チカくんが言いたかったことはたいちゆんの指摘通りと
言うか……まあ、あながち外れていなかったよう……

(チカくんもたいちゆん基本は馬鹿なんだなあ……)

フツと生暖かい視線を送りながら、私は屋上に吹く心地よい風を全身で堪能した。

遠くで雀の声がして、近くに好きな人がいて、友達もいて、私は今、間違いなく世界で一番幸せな女だろうと思う。

なーんて。

この先に起こる出来事を知っていたら、私は呑気過ぎる自分をブン殴っていたに違いない。

物語ってのはさ、もうここまでできたらハッピーエンドでいいと思わない？

なんか、私ってばホント可哀想……

第九章 臆病者と影03

「ふっふっふ」

私とチカくんが付き合い始めたことなんてあっという間に広まった。と言ってもチカくんの熱狂的なファンの間でだけだ。

「私のさあ……やくざの娘って設定は生きてるんだよね？」

「たぶんね」

「それでこのイジメって凄くない？」

机にポンドが塗り広げられ、その上にチヨークの粉。草とか土がついてる所を見ると、わざわざ外から拾って来たらしい。

「乾いたら全部はがせばいいよね」

「超呑気……授業どうすんの」

「このまま受ければいいじゃない」

「先生に何か言われるんじゃない？」

「そしたら『イジメられています』って言うわ」

さすがに高校になってまで「みんな、目を閉じて下さい。犯人は手を上げるように。犯人が名乗り出るまでホームルームは終わりません」なんてことはないと思うし。

「あのねえ……彼氏できて浮かれるのは分かるけど、ちょっと調子乗りすぎ。自分を守るためにも、相手を刺激しないためにも気を付けないと。ただでさえ噂広がってたから……」

タマも浮かれてたくせに。

へいきへいき。

酷いことなんてそうそう起こんないって。

「ヒロ聞いてないでしょ」

「聞いている聞いている」

「……いじめられても助けてあげないから」

ほんと、調子乗るのは悪い癖だと思う。
いい加減懲りればいいのに、私は23歳にもなってまだ同じ過ちを
繰り返していた。

* * * * *

「霧島さん」

呼ばれて振り向けば真面目そうな男の子。

「はい？」

「突然ごめんね！ ミカコって知ってる？」

「いえ……」

「あ、そっか。ミカコって子がさ、話があるんだって。あ、別に怪
しくないからね！？ 吉良先輩を狙ってるらしくてさあ。一番距離
が近い西條先輩に聞けたらいいんだけど、そういう訳にはいかない
だろ？」

「あー……」

え、面倒臭い。私に間を取り持てと。
ていうか、たいちゅんはそういうの嫌がると思うけど……

「な？ 頼むよ。霧島さんって2人とよく一緒にいるだろ？」

「いる……んですけど……そういうのは……」

「頼むって！ 放課後、技術室で待ってるらしいから」

「技術室？ 待ってるって言われても……」

「もう約束しちゃったから！ な！ 顔見せて断ってもいいし。じや、あとよろしく！」

「あ、ちよっ……！」

何あれ。

超失礼じゃない？

しかも自分のことなのに代理立てて私に接触するんだ。

ミカコ、お前が来い。

私は絶対行かないからね。

……いや、私も散々色んな人にお世話になったけどさ……
なんていうか……

「どうも私の勘が行くなと言っているのだけど……」

* * * * *

「……………」

つつても…………結局行っちゃうんだよなあ…………
だって本当にたいちゅんのが好きだったら可哀想だし。

「いないしね」

そっちがお願いする立場なんだから、先に来てるっつもの。
私がどれほど苦労してチカくとタマをまいたことか。

「いないんなら帰りますよーっと」「遅れちゃってごめんなさいね！」

大声に思わずびくりと震える。
振り向けば、息を切らした正統派美少女が立っていた。

「先生につかまっちゃって……ごめんなさい！ あ、私、花井ミカ
コです」

「……いえ、大丈夫です……私は、霧島真尋です」

同じ地面に立ってるのが罪だとさえ思えるほどの美少女具合。
ゆるいウェーブのかかった髪は背中まであり、スカートは短めだけ
どいやらしくない長さ。
目も大きいし鼻筋も通ってるし睫毛長いし。

「待った？」

「……いえ、それほどでは……」

そりや声も小さくなるってものだ。
久々に人見知り発動。

初対面でタメ口きかれてるけど、指摘できない。

「座って」

「あ、ハイ」

「あのね、緑川君から……あ、伝言を伝えた子なんだけど。彼から聞いていると思うけど……」

「あ、たいちゅん……吉良君のことですよ。取り持ってほしいって言う」

「え？」

「え？」

……ん？

「あれ……あー信じたんだ。アレ、嘘」

「え？ ど、どういう……」

「そのままの意味。嘘。女が呼び出すと警戒すると思って」

照れ臭そうに笑うミカコは、とろける程可愛い笑顔。

えくぼが可愛くて、ほんのり赤く染まったほっぺたが噛みつきたいほど愛くるしくて……。

「靖親と別れてよ。ブスのくせに図々しいんだけど」

こんな暴言吐くなんて思えないほどだった。
ギョツと心臓が縮み、血の気が引く。

(ぶ……ブス……?)

「私……まあ、今は違っただけど、靖親の彼女で。ほら」

取りだした手帳からは写真やプリクラが大量に出てくる。
抱きついたり抱きつかれたりするそれは、まさに美男美女カップル
というのがピッタリなもので、中にはかなりきわどいちゅープリと
かあったりして ……。

何より、どれもチカくんが満面の笑みだった。

第九章 臆病者と影04

「……………ぐすっ」

恋に障害がある場合、相手に相談しないから悪化するパターンがある……………って本で読んだ。

実際、勘違いですれ違いってのはよくある……………と、思う。

少なくとも本の中では。

どうせ情報源は全て本なんですけどね。

「……………ふぐっ……………こ、こ、これぐらいじゃ動揺しないしねっ！ わ、わたっ……………私が今の彼女だしね……………！！」

でも実際自分が体験して思ったけど、言えない、全然言えない。いや、言える人は言えるんだと思う。

でも、私は無理だった。

言えたらこんな陰でこっさり泣いたりしないわ！

「……………ずずっ……………はぁ」

みつともなくて誰にも言えない。

ミカコは「1週間猶予をあげるから、それまでに分かれといてね」って言ってた。

でも、別れたくない。

あたりまえだ。

ようやく自分の気持ちを伝えただけだし、何より人生で初めて頑張った結果だもん。

「……………くっそ……………負けるか……………！ 美少女が何さ！ 不細工でも良いじゃないか！！」

いったい私は……………私達はいつラブラブになれるんだろうか……………

* * * * *

昇降口に来たら、見なれた赤がいた。

「……………あ、あれ？」

私を見るなりスツと立ち上がって近寄ってくる。

表情に変化がないから泣いてたのはバレてないようだ。

目を冷やして赤みを取ったのは大正解だった。

「帰るぞ」

「……待っててくれたの？」

「おう」

「遅くなるかもしれないから帰って良いって言ったのに」

「俺がお前と帰りたかったんだよ。男心が分かってねえな」

「……そう」

「嬉しそうだな？ 真尋ちゃん」

「別に」

ニヤニヤしながら言えば、頭を撫でられた。

さっきのミカコ事件なんてどっかいったくらいスッキリ。

数日ぶりに便通が良くなった気分だ。

「乗れ」

校門の前にはバイク。

私専用のメットを用意してたらしく、丁寧に付けてくれた。

「……この、見える？」

チカくんが私にメットを付けた後で、サイドミラーを動かしながら私のメットを指さす。

首を振じったりして見てみれば、『Princess MAHIR O』なんて恥ずかしい単語が見えた。

「何これ!？」

「たいちゆんがやってくれた。器用なんだよ。あいつは」

「……きつ……いや、確かに器用だけど……シールじゃなくて塗装されてるし……」

「色もオリジナル。模様も全部あいつがやった。プレゼントだって」

「……ありがたい……けど……」

は、恥ずかしい……!

他人のメットなんて誰も見てないだろうけど恥ずかしすぎる……

いや、見てるのかな……見てないって思わないと恥ずかしくて死にそうだから、見てないってことにしよう……

「……あ、そう言えばどこ行くの?」

その問いにチカくんは見下したようにニヤリと笑う。

「俺ン家」

「……え！？ いや、待って」

「待たない。もういっぱい待ったから飽きた」

「いや、でも……！ 待とうか！ ちょっと待とうか……！」

チカくんは聞こえないふりをしてバイクにまたがる。

さりげなくキャバクラのポケットティッシュを差し出され、泣いてるのなんてお見通しだったんだと気づいた。

そして、聞かれたくないっていうのを分かってくれているんだと気づいて、思わずにやける。

(ていうか、たいちゅんと同レベルだしね……！)

照れくさくてギャーギャー叫ぶ私。

なのに全然聞いてくれなくて、逆にエンジンをふかして爆音で私の声をかき消した。

ボソッと「今日、親いねえんだよなあ」なんて呟きは気のせいであってほしい。

* * * * *

「お、おじゃましまー……す……」

「こっち」

螺旋階段をくるくるのぼる。

一番奥の部屋に近づくとつれ、心臓がバクバクしてきた。

「……」

ふと思い出す。

たいちゅんは、この部屋に初めて入る女は私だと言ってた。

「……ふっ」

ミカコ、残念だったわね。

「どづした？」

「なんでもなーい」

ミカコ、あんた、そんなでもなかったよ。
全然だよ。可愛いけど、全然だ。
全く私の敵じゃなかった。
私の方が愛されてる。

「座って」

ソファを勧められて、さっきの意気消沈っぷりはどこへやら。遠慮なく座る。
どこから取り出したのかベリージューズなんてハイカラな物を出してくれた。

「……………何これ美味しい……………!!」

「ッフ」

チカくんは無言で「だろ?」と言って、最近よくするドヤ顔微笑みをみせる。
ちよっと小首をかしげた見下したような表情がたまらないのは、ここだけの秘密だ。

「……………」

そしていきなり隣に座られてドキドキしてるのも、ここだけの秘密

……

「DVD観る？」

「みたい！ 何があるの？」

「……AVしかない」

「駄目じゃん……！！ みねえわよ！！」

アハハと馬鹿みたいに笑いながら、チカくんは私を抱き寄せた。
そのままポンポンと肩を叩くチカくん。

なんとなく、いつもよりテンションが高くて「もしかして私が出来たのが嬉しいんだろうか」なんて思ったなら、「ミカコさまあああ」と叫びたくなるくらい嬉しくなった。

「ゲームしようぜ」

「ゲーム！？ ゲームなんて持ってたの？」

「最近買った」

取りだしたそれは私が初めて手掛けたゲームで……

「うっそ……なんでそれ……」

「たいちゅんに聞いた。ヒーが作ったって」

凄く苦勞して、終わった時は泣くほど感動した仕事だった。

「……やったの？」

「うん」

「……ど、どう、だった？」

「面白え。特に戦闘が」

「ほんと？ そこ私が担当したの」

「マジか。あとはね……」

あまり表情を変えない中にも「驚いた」とか「面白い」って空気がにじみ出ていて嬉しくなる。

ニコニコしながら「ここがどうだ」「あれはこうだった」なんて話を聞きながら、私は顔が引きつって痛くなるくらいニコニコしていた。

「対戦やるっぜ」

「いいよ。私、デバッグやってるから超強いけどね。社内で一番強かったけどね」

「望む所」

私はミカコのことなんてすっかり忘れてた。それくらい楽しくて、嬉しかったから。

この時間がずっと続けばいい……なんて思いながら、コントローラーを握りしめて1人笑った。

* * * * *

「張り合いがないな少年」

「……」

まあ、大人気なくも34連勝中なわけで。

「罰ゲームする？ 次負けたら罰ゲームにしようか？」

「……………」

チカくんは口をへの字にしてすっかり拗ねていた。
それがまた可愛くて……

「何でも言うつこと聞くことにしようよ。負けた方が」

「……………」

「チカくん半裸で顔書いて腹踊りね」

「なんで俺が負けること前提なんだよ」

「だって勝てないじゃん」

「今はちよつと調子が悪いだけだろ」

「ふーん」

「早くコンティニューしろよ」

「はいはい」

チカくんがぶすつとしたままうら戦目が始まる。
今回も私が勝つはずだった。

……いや、勝たなければいけなかった。

なのに……

「うっ……………そお……………」

「フッ」

まるで「あの勢いはどうした？」なんて言いたげな顔で、チカくんは私を見降ろす。
いや、見下す。

「俺はな、勝負事に強いんだよ。覚えとけ」

「……………」

そんなの知らなかった。
知ってたら言わなかった。
まさか開始1分もしないうちに撃墜されるとは思わなかった……………
もしかして得意げな顔をしてた私に気を使ったんだらうか……………

「何がいいかなあ」

「やめない？ そっいつの、よくない」

「知らねえよ」

だよね……

怖っ……何言われるんだろっ……

どうせチカくんのことだからとんでもないことを言っつに違いない。

「じゃあ目つぶって」

ほらね、んな訳のわからないことを……

「……え？」

「目、つぶれ」

……いや……いやいやいや……ハハハそれは……

「な、なに……なんで？」

「罰ゲームだからだろ。早くしろ」

「ち、近くない!？」

「早くしろ。俺は気が短えんだよ」

「自慢げな顔で『気が短え』とか言うのやめてくれるかな!? 全然自慢になってないしね!」

「早く」

じっ……ど、どっ……どっすねば……

「いや、近いつて……!! 何するの!?!」

「ナニするから田っぶるんだろっが」

どんどんにじり寄り寄ってくるチカくん。

「や、やだ! いやらしい……!! なんかチカくんが言うといやラシイ……!! 近いつて……!! 絶対近いつてば!」

「観念しなさい」

そう言っておかしそうに笑うと、チカくんは私をソファに押し倒して噛みつくようにキスしてきた。

「……っ」

「目え閉じるよ馬鹿」

クスクス笑いながら手で私の目をふさぎ、片方の手では逃げられないように手首を押さえる。

足は私の足の間にあって、これまた逃げられないように……っ……

「プハッ……ま、待って!!」

「待たない」

角度を変え、角度を変え、段々深くなる。
今まで体験したことも無いことがいつ気に起こり、私の頭はショート寸前だった。

「……っ……ち、か……靖親っ……」

「……もっと呼んで?」

ああ、駄目……流されてしまう……

このままじゃ……

「……待つて！　お願い」

「……」

「……ちょっと……だけでいいから……」

肩で息をしながら懇願する。

涙目（別に策略ではない）で訴えれば、わずかにチカくんが動揺した。

「……悪い………そうだよな。真尋ちゃんは処女だもんな」

「やめて。その言い方はやめて」

真つ 赤だ。

絶対真つ 赤だ私。

「しょうがねえ奴」

……なんて言ってくれたけど、ミカコだったら上手く立ちまわったんだろうなって思ったらへこんだ。

それに、ユキとのことをまだ言えてなかった。

へこんだまま戻って来れなくて、結局その日はそのまま帰ることになる。

情けなさ過ぎてどんよりした気分のまま、私は家まで送ってもらった。

第九章 臆病者と影05

「ましもん」

「な、なんだよ」

「ましもんはさあ……上手くいってるの?」

「何が?」

「書記の子と」

「えだっ……えっ……!？」

以外にも真っ赤な顔でオタオタする真下くんを見つつ、私はなんとなく「上手くいってんだろっなあ」と思った。

「彼女はさあ」

「う、うん……」

「ちゅーしてくれるの?」

「ええ!？」

「どっちなのおめ」

「え……あ……ま、まあ……」

「……」

するんだ。

やっぱりするんだ。

今時の子、侮りがたし。

「お前は……真尋はしねえのかよ」

「……昨日した」

「へえ？」

「けど……なんか……」

「ん？」

「……」

なんか、真下くんの「ほら、話してごらん」って顔がムカつく。申し訳ないけど、なんかムカつく。

「……やっぱり言わない」

「なんだよ!」

「だって絶対馬鹿にするもん!!」

「しねえよめんどく……」

「面倒くさいって言おうとしたあゝ!!!!」

「違うよ!!! 違う……!!」

真下くんを殴りながら「もういい!」と言えば、困ったように笑いながら「真尋って意外と不器用なんだなあ」なんて言うか物だから、向こうから彼女が歩いてきてるのに気付いたというのに殴ってしまった。

「いって!!」

「ちくしょー! 絶対謝らないからな!! 絶対だ!!」

「謝れよ!!」

彼女さんに「すみません」と頭を下げて2人にサヨウナラをする。チカくんの所に行こうと思ったけど、向こう側にミカコが見えてへコミMAXになったので1人ポツンと帰ることにした。

「久々に仕事行こうかな……」

チカくんにメールでその旨を伝えれば「おう」と一言だけ返事があって、普段なら気にしないのにその淡白さに再びへこむ。

* * * * *

「別れた？」

「……………」

さっき上にいなかったっけ？

ハアハア肩で息してるけど、もしかして追いかけてきたの？
ねえ、ミカコ。

私、あなたのせいでありえないくらいへこんでるんだけど。
どうでもいいことまで私を落ち込ませるくらいへこんでるんだけど。

「……………なに、まだなの？」

「……………まだ1週間経ってない」

別れること前提みたいな言い方になってしまい、またへこむ。

どうしてはつきり言えないんだろう。

……ああ、いや、そうか。

何を迷ってたんだろう。

言えればいいじゃん。

いつもポツと言って後悔するように、今回もポツと言えればいいじゃん。

まあ、後悔したくはないから言葉を選ぶ必要があるけど。

「……あのさ、この際、ハッキリ言うけど「靖親と寝た？ 彼、終わったあとにすぐお風呂入るでしょ？ で、一緒に入ろうとすると凄く怒るのよね。無理矢理入った時なんか不貞腐れちゃって大変だったんだから。照れちゃって可愛いと思わない？」

駄目だ。

勝てそうにない。

もう駄目だよ、チカくん。

第九章 臆病者と影06

「聞いてほしいことがある」

そう言って呼び出して、家に帰ってたらしいチカくんを再び学校にこさせた。

文句ひとつ言わないチカくんは、真面目な顔の私から何かを察したらしく、黙ってメットをつけてバイクの後ろに乗せてくれた。

その後も家につくまでずっと無言で、家の中には誰もいないらしく、無言がより強調されているようで居心地が悪い。

「……」

「……」

ソファに座らされて横並びになって……なかなか言い出せないのに聞こえず、それがありがたくもあり、辛くもあった。

「……あのさあ……ミカ」って覚えてる？」

「知らない」

「その子が……え？」

「？」

え、何その「何？」みたいな顔。

「ミカコだよ？」

「知らねえ」

「嘘……ミカコだってば」

「知らないってば」

「……」

どどどどどということだろう。

待って待って。

えーと……

「……ミカコ、だよ？」

「知らねえって」

どどどしよじ。

別れる気はないから勇気出して相談するつもりだったのに……
知らないって……知らないってあんな……

「誰？」

「えー！？　だ、誰……って言われると……」

「いや、マジでどうなってんの。」

「なんだよ」

「……」

「言えよ」

「……」

「言わねえのかよ」

「……」

「呼び出しといて言わないつもりかよ」

「……」

「だって……ねえ？」

「……って待って。なんか近くない？」

「したいけど恥ずかしくて言えねえから、遠回しに誘ったんじゃないのかよ」

「どーしたらそういつ幸せな思考になるの……？」

あわわ、ヤバイ。

貞操の危機が……ってそうじゃなくて……

言っても言わなくてもピンチなこの状態……！

うわー……！！ どうすれば……！！！！

「言え」

「……あい……」

私はぼそぼそと元カノ・ミカコに会ったこと、言われたことを話した。

途中何度も眉がしかまり、その度にビクビクしながら話す。

話してる途中で泣きそうになり、頭を撫でられながら頑張って状況説明をした。

「……………」

「……………」

長い沈黙がおちる。

それを破ったのは、チカくんだった。

「まあ……………言われてみればそんな奴がいたような気がしなくもない」

「……………」

「言われて思いだすくらいだから、そんなだけの奴だったんだろ」

「でも！ その子めちやくちゃ可愛くて……………！ 私より可愛いし、細かいし、ち、ちゅープリとか写真も、チカくん凄い笑ってるし、それに……………お、お風呂だって……………っ!？」

「ゴロっん

「……ッ！！？」

「ん

いつの間にかすり盗っていた私の携帯を差し出すチカくん。
渡された携帯には、これでもかかってくらい目を見開いた私が、チカ
くんにキスされていた。

「ななななんっ……なんっ……なっ！？」

「よく見る。そして思い出せ。真尋と撮ったその写メと、ミワコっ
て奴が持ってたプリクラと。俺の笑顔はどっちが嬉しそうなんだよ

「……そ、そういつ……ッさあ！ そういつことをおっ！！ てい
つか……！」「うるせえ」

どう見ても私の方です、なんて思うのは、やっぱり好きだからなのだろうか。

ていうかまたさりげなくキスしてる……！

「お前のその顔、可愛いな。俺にも送れ」

「やだよこんなヘンテコリンな顔！！ もっと上手に撮ってよ！」

「じゃあもう1回」

「あ、や、それは……」

「なあ、真尋」

「……なに」

「何拗ねてんだよ。ミワコのこととはもういいだろ」

「拗ねてねえわよ」

「じゃあ、こっちこい」

「……」

「全部上塗りじゃ駄目なのかよ。過ぎたことはもうどうにもならねえじゃん。これから、ヒーとの思い出をつくっていけばいいじゃないか。他の女が目に入らないくらいに、俺を夢中にさせるよ」

そんなの解ってる。
解ってるけど……

「嫉妬してんのは可愛いけど」

「……」

嫉妬……？

え……嫉妬？ 私か？

「……おい、まさか嫉妬してねえなんて言う気じゃねえだろうな。
あんなにミワコミワコ連呼しといて」

「いや、ちがつ……え？ 嫉妬？」

はあ、とため息を吐くチカくんは、何故か非常に申し訳ない気持ちになる。

「ヒーさ。さっき、他の女なんて目に入らないくらい夢中にさせて言ったけど」「あ、それはわかってる。最初から私しか目に入っていないでしょ」

「わかってんじゃない」

恥ずかしいから冗談で言ったのにあっさり肯定されて、余計に恥ずかしくなる。

「俺が今抱きしめたいと思うのも、キスしてえって思うのも、ヤリてえって思うのも、一緒にいてえなって思うのも、全部お前だ。ミワコじゃねえ」

「なんか途中でいやらしい」「いいから聞け」

「はい」

「俺はこんなだから、ヒーを不安にさせることはこれからもあると思う。でも、俺だって不安だ」

「そうなの……？」

「何が……？」

「ヒーは俺より年上で、大人で、もしかしたらもっといい大人の男がかっさらって行くかもしれないねえって、毎日思ってる。あの籠って奴も、お前のことを見る目が異常だ。なんかイヤラシイ目してる。だから「待って」

途中で言葉を止められて不満げなチカくんを制して、私はちょっと興奮気味に口走った。

「なんかさ、よく分かんないんだけど、龍は兄だった。実の」

「……」

さすがのチカくんも驚いたようで、ポカンと口を開けて「へっ？」と漏らす。

「いや、未だに混乱してて……取り合えずこっちの話は後日ってことで落ち着いてる」

「……」

「あ、ごめん……話、ぶったぎっちゃって」

妙な空気が流れ、すっかり雰囲気をぶち壊したことに気付いた私は、一応申し訳なさそうな顔をした。

「……」

「……」

段々距離が近づいてきて、なんでこのタイミング!? とか何が琴線に触れたの!? とか聞きたいことは沢山あったし、「何か近くない!?!」って言おうとしたけど、今度はそれをグツと堪えて口を

開くのをやめる。

うつすら目元が赤くなってるチカくんを見て、「ああ、なんか愛さ
れてるな」と思った。

* * * * *

「……………ぐうっ」

「別に普通に入るだろ？ 風呂」

身をもって証明するはめになるとは思わなかった。

というか、どこからどうやってこういうことになったのか全然分
からないんだけど、流れに流されて朝ちゅん……………っていうか……………両親
はそろって海外出張中で、オマケにあんなラブリーな雰囲気になっ
てしまつて……………

しかもチカくんがエロイ声で「したい」なんて言つから……………

「……………信じらんない」

チカくんはフンッと鼻で笑う。

それを見て「私はなんて流されやすい女だったんだろっ」と自分の

新たな一面に軽くへこみながらため息を吐いた。

別に嫌って訳じゃないけど……ねえ？

23にもなって節操がないとか思われてたらどうしよう……

「まあ、そのミワコって奴が「ミカコだから。ちょっと前から思ってたけど、ミワコじゃなくてミカコだから」

「細げえことはいいんだよ。俺がやった後すぐ風呂に入るのは汚えと思うからで。その女もそうだったんだろ。覚えてねえけど。ずっと寝っ転がりながら愛をささやくのはヒーが初めてだから拗ねんな」

「愛をささや……っ……馬鹿じゃないの……？」

うん、もう……ね……宣言通り馬鹿かっつくらい猫可愛がりだった。それはいつそ恥ずかしいくらいで。

ずっと抱きしめたまま何事かを耳元でささやきながら、私がウトウトする度に「寝るな。俺はまだ眠くない」って鼻をつまむ。

いい加減鬱陶しくなってきた頃、思い出したように「痛くないか」とか「消毒しなくていいのか」「化膿しないのか」とか私でも分からないようなことを沢山聞いてきて、「そんなの知らない。たぶん大丈夫じゃないの？」って返したら「自分の体のことなのに適当すぎる」って言いながら舐めて治そうと……な、舐め……

「何考えてんだよ」

「……別に」

やめよう。
落ちつこう。
なんなんだ、私。
落ちつけ。

「……………ねえ」

無言で「ん？」と聞いてくるチカくん。
かっこいいんだけどさ。かっこいいんだけど返事くらいしてよ。

「上がりたい。暑い」

「上がりやいいじゃねえか」

「……………」

ほら、今はお湯につかってるじゃん。
しかもこれでもかっつけてくらいバスボムを投げ込んだ不透明のお湯じ
ゃん。
あがったら、見えてしまうじゃん。色々。
まあ、主に貧弱な体なんだけど。

「チカくんはさあ……………恥ずかしくないわけ？」

「全然」

そうだね。

あんたに聞いた私が間違ってたよね。

だって裸族だもの。

「……暑い」

「だから出りゃいいじゃねえか。のぼせても知らないからな」

「……」

手元にタオルがないので、サツと体洗いタオルに手を伸ばせば、その手をサツと掴まれた。

「離してよ」

「何やってんだよ」

「こっちの台詞だよ」

「さつき体洗ったじゃねえか。俺が入る前に。さつさと。一人で。俺が入った時にはすでにつかってたじゃねえか」

恨んでたのか……

「……恥ずかしいんだけど」

「俺は恥ずかしくねえ」

「チカくんはね……!!」

なんで分かってくれないんだろう。

ていうか抱きつかないで欲しい……こんな明るい所で、しかも風呂
で抱きつくなんて……

「は、離れない？ そもそもチカくんすぐキス ……」

やばい、思い出した。

なんで私はこんな肝心なことを忘れていたんだろうか。

「どっした」

「え!?!? やっ……あのー……」

その後ひたすら「言えよ」「言わない」の押し問答を繰り返し、私が完璧にのぼせてぐったりするまで続けられた。

いつもの癖でお湯の温度を43度にしたのは失敗だった。

ぐったりする中でユキにキスされたことをボソツともらした瞬間、チ力くんの機嫌は急降下。

鬼を射殺するような視線のまま「俺が初めてじゃねえのかよ」と言いながら、唇が真っ赤になるぐらい舐められ続けた。

「上書きすれば良いって言ったけどな、それとこれとは別だ。絶対え許さねえからな」

なんて、怖すぎることを言われながら、不謹慎にも幸せなだと思っていた。

そして、ちょっとした事件が起こったのは、この日の昼過ぎだった。

第九章 臆病者と影07

「学校サボるとかありえないしね……！」

起きたのは朝だった。

でも隣にチカくんがなくて、家中探したのに見つからず、昼過ぎになぜかご機嫌で戻ってきて「よお、おはよう。プリンセス真尋」とか言うから殴ってやった。

そして今、嫌がるチカくんを無理矢理引きずって社長出勤と言う訳だ。

「マンションに戻る暇も無かったしね……！ パンツ乾かないかと思っただけ……！ しかも朝起きたらチカくんいないし……！」

「帰ってきたじゃねえか」

「昼過ぎにね……！ 家を出たかったのに鍵がないから困ったんだけど……！！ 凄い遅刻なんだけど……！！！！」

「ガタガタ言うな」

「うるさいんだけど！ さっさと歩いてよ……！」

「お前ら随分イイ御身分だな。あ？」

校門の前で待ち構えていたたいちゅんは、不機嫌マックスの顔。

「へえ〜？ ほお〜？」

「やめてよ……」

放課後、私はタマに捕まっけていて、そのタマは何故か全てを知っていた。

全てと言つのはつまり、遅刻の原因というか……私が昨日……「ゴニヨゴニヨ」……

「なんで知ってるの……？」

「やくざの情報収集能力なめんなよ」

「犯罪だから……！！！！」

「フェアじゃないから一応言っておくけど、私も昨日したよー！」

「別に知りたくなかったしね……！！ 親指立てて自慢げに言わないで……！！」

「それで？」

「え？」

急に降られて狼狽する。

まさか掘り下げて聞く気じゃあるまいな……

「そつちじゃないから」

「……わかってるよ」

「ミカコはどうなったの」

「え？ ミカコ？」

誰だっけ？

「やだ、あんた……」

「あー！ み、ミカコ……ね」

「やめてよ……幸せすぎて頭湧いてんじゃないの……？」

「それはそれで……」

「やめろ」

パンつと頭を叩かれる。

それと同時に校舎の外にいる存在に気付く。

あんな離れてるのに分かるなんて、私はよっぽどあのミカコって女の顔が好きらしい。

「たいちゅん先輩だよ」

「何が？」

「ダブルの意味で。1つ目は、朝に西條先輩が会ってた人。なんか、喧嘩してたらしいよ」

「はあ！？」

な、何それ……退学になりたくないからってウサちゃん着てくれたじゃん……いったい何のために……

「可愛い彼女の初キッス奪った男にやき入れに行ったんだって」

え！？

う、嘘……私が寝てる間に……？

「彼女が喧嘩するなって言うから、寝てる時にこっそり出て行ったらしいよ。愛されてるねえ……ま、最初っから喧嘩するなって話ではあるけど、今回は愛だね」

「……」

「そしてもう1つは情報源という意味で」

「なんの？」

「昨日、ヒロと王子がやって「わー！！！！！！！！！！」

信じられないあの豹柄男……！！

ていうか何で知って……靖親か……！！ 靖親が豹柄にもらしたのか！

あいつら2人でサボってたもんな……！！

「ぐっ……！！」

「校門のところに行ったから拳骨してくれば？」

「拳骨だけで済むと思ってるわけ……？」

早口でそういうと、私は鼻息荒く教室を出た。

* * * * *

「あ！ いた！ ちょっとたいちゅ……！！」

ミカコ……！

あんた、なに私のチカくんに迫ってんのよ！！

「ヒロ、文句は声に出しなよ」

後ろから私を追い掛けてきたタマが、呆れた口調で私をたしなめる。目の前のミカコはいつの間にか校門に来ていたらしく、たまたまそこにいたチカくんといちゆんに迫っていた。主に、チカくんにだけ。

「は、離れて」

「声小さっ」

たいちゆんが大爆笑するのを尻目に、私はミカコを睨みつけた。ミカコはいつもの可愛らしい笑顔をひっこめ、鬼のような形相で私を睨みつける。

「付け合わせ女が偉そうなと言わないでくれる?」

「っ、付け合わせ……?」

「メインディッシュは私なの。あんたは、箸休めで気まぐれに手を付けられるような付け合わせでしょう?」

「付け合わせ……! アハハハ! ぴったりじゃねえか!!」

く、悔しい……

あながち外れてないだけに何とも言えない……っというか、たいぢゅんはまずその爆笑を止める。

「ち、チカくんが好きなのはあんたじゃないでしょう。あんたがメインだかなんだか知らないけど、手を付けられないメインディッシュより、手を付けられる箸休めの方がマシよ……!」

「ブハツ……!! 真尋っ……おまつ……アハハハ!!」

「しかも……チカくん喜んでお風呂入ってくれたしね……!! お風呂の中でもずっと離さないからのばせちゃったくらいだしね……!」

「なんの話をしてんだお前は……!」

ひたすら爆笑しながら「やめろ、これ以上俺を苦しめるな」と涙目

のたいちゅん。

タマもとうとう笑いだし、あたりは異様な空気に包まれていた。

「……………」

なんか、勝ってるけど負けてるような………というか最初から勝負にすらなっていないような微妙な気持ちになって泣きそうになる。

すると珍しく空気を讀んだチカくんがポンと私の後頭部に手を置き、そのまま強引に引き寄せてキスをした。

「先輩やらし〜」

タマは嬉しそうにそう笑い、たいちゅんは「やめろ！ 俺が惨めだ！」と怒鳴る。

ミワ……ミカコは啞然とした表情で私達を見つめ、赤くなったり青くなったりと大忙しだ。

チカくんは私を抱きしめて首元に鼻面を押し付けてスーハー深呼吸しながら「前から思ってたんだけど、真尋って凄い良い匂いするよな」なんて甘い顔して言うものだから、こんな時なのに「そ、そうかな」なんて照れたりして……

「お前、好きな奴の為なら平気で外でするような男だったんだなあ……俺はお前のそんなところを初めて見たよ。今までの女とは誰ともそんなことしてなかったもんなあ」

たいちゅんはミカコを面白そうに見てる。
きつと、事情を察して私の代わりにいじめてくれてるんだ。
案の定ミカコは悔しそうな顔をして、目にもとまらぬ速さで私をビ
ンタした。

「！」

あまりのことにみんなが静まりかえる。

ミカコは肩で息をしながら泣き始め、でも必死に耐えようとしてグ
チャグチャの顔になっていた。

なんか……この子はこの子で必死なんだろうなって思った。
思ったからつい、口からポツと余計な一言が出る。

「大丈夫？」

真顔でそう言えば、たいちゅんが「怖い女」と言って笑う。

いつの間にか近づいてきた黒塗りの車がスーツと私達の間横で止ま
り、窓が開いた。

「よお、霧島ちゃん。揉め事か？」

「げえっ！ タマパパ……！！！」

「おいおい、ひでーな。俺がチカくんとくつつくの手助けしてやっ

たよつなもんなのに！」

苦笑するのはタマパパ。

何故ここに、と思つたら、案の定タマの暴言が飛んだ。

「娘のストーカーとかキモイ」

「え？ ストーカー？」

「俺は娘ちゃんが心配なんだ。あと霧島ちゃんの私生活が」

「やめて下さい……！ 私は関係ないですから……！！」

「へっへっへ……で？ 揉め事かい？ 助けはいるかな？」

ミカコはタマの家のことを知っているらしい。

ついでに言つと、私に流れた嘘の噂も知ってるらしく、「あの噂は本当に……」とか「でも私は……」とかブツブツ何かをつぶやいている。

「揉め事……ですけど、子供同士の揉め事ですので」

「そうか。助けが必要ならいつでも言えよ」

「ありがとうございます」

そう言つて苦笑しながら頭を下げれば、ミカコがひとときわ大きい声で叫んだ。

「あんななんかより私の方が好きなの！！ あんたがやくざの娘だろうがなんだろうが、関係ないわよ！！！」

言うだけ言つて走りさる。

ポカンとしながらそれを見送つて、野次を飛ばす周りを睨みつけた。前なら盛大にへこんでたと思う。

でも、今はただ「それでもチカくんは私以外を好きになつたりしないわ」って思いの方が強くて、前よりは軽やかにかわせるようになった気がする。

「大人になつたねえ」

「タマ、私は元々大人なのよ」

ふとチカくんを見たら、物凄く柔らかい目で私を見つめていた。

いつから見ていたのか知らないけど、最近気が付いたら見つめられていることが多い。

なんか犬みたいで可愛い……

「……………」

嬉しいからニツコリ微笑めば、クツとチカくんの口角が上がった。周りから見たら笑顔に見えないくらいこの角度。

それがまた嬉しくて、「へへへ」と気味悪い笑顔を浮かべる。

ここまで来るのに色んなことがあった。

最初のころに比べたら、まさか自分が不良と仲良くなるなんて思いもしなかったし、まして付き合うようになるなんてありえないと思っただ。

「今日、ヒーの家行きたい」

「駄目」

温かな日差しに包まれながら、手をつないで歩きだす。

これからも色んなことがあるけど、なんとなく全て乗り越えて行ける気がする。

きつと、私達は一生一緒にいるんだと思う。

チカくんは、一緒にいるだけでそんな根拠のない自信がどこからともなく湧いてくる、とても不思議な男だった。

聞いてほしい。

今回、改めて色んなことが分かった。

無理だと思ってたけど、本当に好きな人のためなら、どんなチキン

野郎でも勇気が出せること。

大抵ビビリの奴ってのは、もめ事起こしたくないから深く傷つく前にそっと引く。

変な我慢をして、諦めが早い。

でも、好きな人の為なら、例えば自分が恥をかこうが傷つこうが何かをしたいと思う。

あと、分かってほしくないのに分かってほしい人。

沢山いると思う。私もそうだ。正直面倒くさいと思う。

そんなの改めて言われなくても気づいてるけど……

こういう人は自分を理解して分析してくれる人が好き。

だってその方が何も言わなくて楽チンだしね。

いちいち説明するって惨めなこともしなくていいし。

でも、そんな聖人君子みたいな人、待つてるだけじゃ駄目なんだって改めて思った。

私の場合、全ての原動力は『恋』だった。

愚かだと思う人もいるかもしれない。

でも、23年間も続いた忌むべき悪癖を一瞬で改善させたことを考えると、きっかけが何だろうと成長したことはプラスだったと言えるだろう。

そしてそんな大切なことを気づかせてくれた愛する男を、私は二度と手放したくない。

私は、間違いなく世界で一番幸福な女だと思う。

陳腐なセリフではあるけども、磁石のS極とN極。凸と凹。

まるで生まれる前からの運命のような人と出会えたのは、本当に奇跡と言っても過言ではないと思う。

「愛してる」

本人に聞こえないよう、こっそり背中に言おうと思った台詞。
急に振り向いて、先に言われてしまった。

遠くで雀の声がして、近くに好きな人がいて、友達もいて、私はこの大切なものを守るためにもっと強くなりたい。
そう思いながら、幸せいっぱいのため息を吐いた ……。

第一部 END

第一部 あとがき

なんか中途半端というか、まだまだ書きたいことはいっぱいありますが、

あまりにも長くなったので第一部はひとまずこれで終わりです。

みなさまお付き合い頂きありがとうございます。

じれったすぎる真尋の恋がようやくスタートしました。

文章力不足でまだ回収しきれていない伏線や疑問は、需要があれば第二部として回収して行く予定です。

疑問点や気になる点などありましたら、リクエストという形で受けますので、是非お声掛け下さい！

いつの間にか90話を超えてました。

もっとコンパクトに伝えたいことをまとめられるようになりたいです。

次回作の構想は既に立てていますので、公開し始めた際はよろしくお願ひします。

(次回はトイレから異世界へトリップした女の話です)

第二部予定

たぶん回収するのはこれくらいだと思いますが……
気づいてないだけだったらどうしよう。

【自主回収】

- ・靖親の一目惚れ
- ・真尋の一目惚れ
- ・真下の一目惚れ？
- ・珠美の一目惚れ
- ・芦野の一目惚れ
- ・チカのライバル『リュウ』
- ・龍太郎の本音、真尋の本音
- ・例の飲み代
- ・たいちゅんの優しさの秘密
- ・韓国出張の時に
- ・ユキのキス
- ・若かりし頃のやんちゃな龍太郎
- ・花田たちとの和解
- ・元カノの真相

【詳細希望（ご依頼）】

- ・じ、実の兄……？

しまった最低200文字必要なのか……
困ったことにすっかり『この話で完結します』ボタンを押し損ねて
しまったせいでまったく文字数が足りないという文字埋め文章。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6070t/>

23歳女子高生（本編）

2011年6月28日00時03分発行